日本霊異記(にほんりいき) ❶ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❷ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❸ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❹ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❺ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❻ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❼ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❽ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❾ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❿ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓫ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓬ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓭ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓮ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓯ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓰ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓱ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓲ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓳ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓴ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉑ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉒ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉓ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉔ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉕ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉖ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉗ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉘ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉙ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉚ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉛ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉜ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉝ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉞ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉟ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊱ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊲ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊳ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊴ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊵ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊶ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊷ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊸ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊹ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊺ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊻ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊼ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊽ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊾ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊿ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (51) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (52) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (53) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (54) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (55) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (56) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (57) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (58) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (59) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (60) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (61) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (62) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (63) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (64) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (65) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (66) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (67) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (68) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (69) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (70) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (71) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (72) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (73) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (74) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (75) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (76) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (77) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (78) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (79) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (80) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (81) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (82) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (83) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (84) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (85) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (86) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (87) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (88) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (89) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (90) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (91) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (92) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (93) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (94) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (95) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (96) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (97) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (98) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (99) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (100) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❶ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❷ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❸ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❹ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❺ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❻ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❼ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❽ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❾ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ❿ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓫ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓬ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓭ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓮ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓯ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓰ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓱ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓲ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓳ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ⓴ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉑ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉒ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉓ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉔ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉕ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉖ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉗ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉘ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉙ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉚ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉛ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉜ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉝ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉞ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㉟ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊱ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊲ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊳ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊴ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊵ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊶ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊷ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊸ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊹ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊺ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊻ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊼ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊽ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊾ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) ㊿ 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (51) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (52) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (53) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (54) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (55) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (56) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (57) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (58) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (59) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (60) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (61) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (62) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (63) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (64) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (65) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (66) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (67) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (68) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (69) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (70) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (71) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (72) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (73) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (74) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (75) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (76) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (77) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (78) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (79) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (80) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (81) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (82) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (83) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (84) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (85) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (86) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (87) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (88) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二)成立。僧景戒の作。仏教説話を中心に、説話の成立・伝播・変容の過程を考察する。

日本霊異記(にほんりいき) (89) 説話集。三巻。弘仁一三頃(八二二

一No. 2218″ 日本大藏經第經部卷上二 ❹寺社(寺院元一建武二)三 A. D. 1345—1416)日記 ❺大日經疏抄の下を見よ。

大日經疏 ❶(日) Dai-nichi-kyō-kwa. (支)Ta-jih-ching-k'o. ❷五卷 ❸覺源(一建暦頃 A. D. 1068—1077—)

大日經疏文 ❶(日)Dai-nichi-kyō-kwa-mon. ❷一卷 ❸同書(弘仁五—貞元三 A. D. 814—891)作 ❹〔參考〕本朝古逸經籍考證卷目」山家三藏教觀義疏目錄卷上

大日經疏文 ❶(日)Dai-nichi-kyō-kwa-mon. ❷十卷 ❸寺詳(一嘉元頃A. D. 1303—1305—) ❹〔參考〕倉庫錄

大日經疏傳記 ❶(日) Dai-nichi-kyō-kwai-dō-ki. ❷十卷 ❸存 ❹林信快(寶暦元—文化七 A. D. 1751—1810)著 ❺文化元頃 ❻(唐大)評(參)

大日經義釋 ❶(日) Dai-nichi-kyō-kem-mou. ❷十二卷 ❸存″日本大藏經第經部卷上一 ❹同書(弘仁二—弘安三A. D. 1202—1280)記 ❺文永九(A. D. 1272)十月

❹天台宗は大日經及び疏・義釋の當文の要義を同宗教に よつて記述し″釋々「弘法」として奉戴者の私見を記してゐる。同宗の書籍は主要な經及疏の文のみに就いてこれを明示し″經及疏の文の一々に就いて當どしてゐるない。信敬の方針は同樣口伝によらず同者宗の說教的に記述せんとしてゐる。故つて宗派なる意義に國語同樣の說言說に關して相傳せらる 說明に基づいて全く古の學者に從へは經說せず″多分に獨自の參證に基いた說を立てゐる。結果の說も從來の相傳北宗の其意とは 說明″三密觀行の參照″因果本末の分別等に 說明″三密觀行の參照″因果本末の分別等に 分に獨自の參證に基いた說を立てゐる。結果の說も從來の相傳北宗の其意とは 說明″三密觀行の參照″因果本末の分別等に 說明″三密觀行の參照″因果本末の分別等に 說明″三密觀行の參照″因果本末の分別等に

（参考）

四番目は、ご覧の通り、ずいぶん目新しい名前ですね。ちょうどこの頃、日本の文化の中心が、京都から江戸へ移ってきたのです。

日本經濟史年表

日本經濟史年表

日本經濟史年表

大日經住心品疏私記 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-shi-ki. 大日經疏私記 ❷二十卷 ❸存、大正六〇・三五九No. 2219 ❹曇寂(延寶二—寶保二 A. D. 1674—1742)述

❺曇寂は延寶二年(A. D. 2334—2402)備後福山に生れ、寛保二年に至る六十九歲の一生涯に於て顯密事教二相悉曇等八十二部四百十五卷の著作を成すと云ふ、現存するもの亦頗る多し。此の大日經住心品疏私記二十卷は其の隨一にして、大日經住心品疏の文々句々を註釋するに一家の識見を以てす、たとへば本地說、加持說に對して各據一義とし、自ら本加和融說を主張したるが如きこれである。此の住心品疏私記は其の第十卷の奧書に「享保八年歲次癸卯夏五月二十六日沙門曇寂、元文二年星宿丁巳春三月初六日重正治圓筆」とし、第二十卷の奧書に「享保九年歲次甲辰二月初七日圓筆、同十四年己酉夏再閱校治、元文二年歲次丁巳夏四月初十日重正治寫」と云ふを以て師は五十歲前後に執筆し、六十有四歲に至る再三校正した名著である。 (高井觀海)

大日經住心品疏私記 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-shi-ki. ❷一卷 ❸存 ❹元瑜(寶曆六—文政九 A. D. 1756—1826)述 ❺天明八(A. D. 1788)五月 ❻寫本(智積院常盤藏)

大日經住心品疏試講 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-shi-kō. ❷二十五卷 ❸存 ❹良恭(享保五—寛政一一 A. D. 1720—1799)述 ❺寫本(谷大、長保・一八四)

大日經住心品疏拾義鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-shū-gi-shō. 住心品疏拾義鈔、大日經疏拾義鈔 ❷十卷 ❸存 ❹曇眼(寛永二〇—享保一〇 A. D. 1643—1735)述

大日經住心品疏鈔 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-shō. 口疏宥快鈔、大日經疏鈔、大日經疏記、大疏鈔 ❷八十五卷 ❸存、大正六〇・一 No. 2218 ❹宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)述 ❺大日經疏鈔の下を見よ。 ❻永應四刊 ❼(高大、寄・一・三四)

大日經住心品疏隨聞記 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-zui-mon-ki. ❷卷一、二 ❸存 ❹宗龍述 ❺寫本(谷大、長保・一八六)

大日經住心品疏專心鈔 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-sen-jin-shō. 住心品疏專心鈔、大疏專心鈔、大日經疏專心鈔、大日經專心鈔 ❷七卷或十卷或十一卷 ❸存 ❹富春如寶(一寶曆頃A. D. 1751—1763—)述 ❺大日經疏專心鈔の下を見よ。 ❻寫本(谷大、餘大・一四五九)

大日經住心品疏續紱祕曲 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-soku-gen-hi-kyoku. ❷五卷 ❸存 ❹權田雷斧(弘化三—昭和九 A. D. 1846—1934)述 ❺大正一〇刊 ❻東京國譯密教刊行會

大日經住心品疏附玄談 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-fuketari-gen-dan. 冠註大日經住心品疏附玄談 ❷九卷 ❸存 ❹曇眼(寛永二〇—享保一〇 A. D. 1643—1725)述 ❺享保五刊 ❻(龍大、二四一八、四三)

大日經住心品疏標條 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-hyō-jō. ❷一卷 ❸存 ❹元瑜(寶曆六—文政九 A. D. 1756—1826)述 ❺天明八(A. D. 1788) 五月 ❻寫本(智積院常盤藏)

大日經住心品疏問題 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-mon-dai. 大疏問題、大日經疏問題 ❷十卷 ❸存 ❹快全(一應永三一 A. D. 1424)、成雄(永德元—寶德三 A. D. 1381—1451)共述、釋城校 ❺住心品疏の要文につき疑義を問答快擇したるもの。快全の口說に大疏一本及び二本に各三卷。成雄の口說に一本に五卷、二本及三に各三卷。計十七卷、夫々大日經疏第一末問題第二末問題等といふ。東密古義派に依用される。 ❻明治一九刊 ❼(高大、寄・一・三四)(密國八・一三三)(京專)

大日經住心品疏開持記 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-mon-jiki. ❷四卷 ❸存 ❹法住(享保八—寛政一二 A. D. 1723—1800)

大日經住心品疏略解 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-ryaku-ge. 住心品疏疏鈔、冠註大日經住心品疏略解、大昆盧遮那住心品疏冠註略解、大日經住心品疏冠解 ❷八卷 ❸存 ❹淨嚴(寛永一六—元祿一五 A. D. 1639—1702)述 ❺大日經住心品疏略解並玄談の下を見よ。 ❻元祿一五刊 ❼(谷大、餘大・二一九)

大日經住心品疏略解講述 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-ryaku-ge-kō-jutsu. ❷八卷 ❸存 ❹雄光(寛文六—享保一九 A. D. 1665—1734)述

大日經住心品疏略解助講 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-ryaku-ge-jo-kō. ❷三卷 ❸存 ❹照空述 ❺寫本(龍大、二四一八・四七)

大日經住心品疏略解聽講記 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-ryaku-ge-chō-kō-ki. ❷八卷 ❸存 ❹寶敬述

大日經住心品疏略解並玄談 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-sho-ryaku-ge-narabini-gen-dan. 冠註住心品疏略解並玄談、大日經疏略解並玄談、住心品疏冠註玄談、大日經疏冠註玄談 ❷九卷 ❸存 ❹淨嚴(寛永一六—元祿一五 A. D. 1639—1702)述、應證(寛文三—享保一一 A. D. 1663—1726)補 ❺元祿一三(A. D. 1700)

❻大日經住心品疏の末書である。叙述簡にして要を得てゐる。卷一玄談に教主、時處、機根、藏攝、宗趣、結集、流傳、翻譯、題名、釋文の十門を分け、卷二以下正しく疏文に分科を施し、且つ冠註、傳註を以て文々句々の要點を釋してゐる。著者大疏を講ずること五回、博く古來の註書を參考して經疏の深旨を研究し、元祿十三年本書を撰した。その釋は衆說を折衷すると雖も、呆寶の說に負ふ所が多い樣である。晩年の述作である。

❼元祿一五刊 ❽(京大、一・二三カ・一三)(正大、一一六二・一四、七四)(京專)

大日經住心品隨意錄 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-zui-i-roku. ❷十卷 ❸存 ❹淨嚴(德治二—明德三 A. D. 1307—1392)撰

大日經住心品題釋 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-dai-shaku. ❷一卷 ❸存 ❹姬宮大圓(天保一一—明治三二 A. D. 1840—1899) ❺明治三〇刊 ❻(龍大、二四一八・四九)

大日經住心品中淨菩提心門採摘 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-chū-jō-bo-dai-shim-mon-sai-teki. ❷一卷 ❸存 ❹昨夢子 ❺寛政五刊 ❻(正大、一一六二・一三三)(龍大、二四一八・四八)

大日經住心品要解 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-yō-ge. 科註大日經住心品要解 ❷七卷 ❸存 ❹惠照(一延寶天和頃 A. D. 1673—1683—) ❺天和三刊 ❻(龍大、研佛)

大日經住心品略解 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-ryaku-ge. 大日經住心品疏略解並玄談、冠註住心品疏略解並玄談、大日經疏略解並玄談、住心品疏冠註玄談、大昆盧遮那經住心品疏冠註略解 ❷九卷 ❸存 ❹淨嚴(寛永一六—元祿一五 A. D. 1639—1702)述、應證(寛文三—享保一一 A. D. 1663—1726)補 ❺大日經住心品疏略解並玄談の下を見よ。 ❻刊本(京專)

大日經住心品略解助注 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jū-shim-bon-ryaku-ge-jo-chū. ❷一帖 ❸存 ❹德川時代寫 ❺(寶龜院)

大日經初學大要鈔 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-gaku-tai-yō-shō. ❷一卷 ❸存、大疏略記集卷上 ❹尙祚(一寛元三 A. D. 1245)述

大日經初心鈔 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-shin-shō. ❷印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)述

大日經所明三十種外道事 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-myō-san-jū-shu-ge-dō-no-koto. ❸存 ❹寫本(龍大、研史)

大日經疏 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. (支) Ta-jih-ching-su. 大昆盧遮那成佛經疏、大疏 ❷二十卷 ❸存、大正三九・五七九No. 1796、鎌倉七—八、卍續一・三六・一—三、佛教大系第四〇 ❹唐一行(弘道元—開元一五 A. D. 683—727)記 ❺大昆盧遮那成佛經疏の下を見よ。 ❻平安朝時代寫、弘安二刊(高大、寄・一・三四)寛治四寫(寶書提院)享保九刊(立大、A二〇・一一)(高大、一・三四)刊本(京大、藏・一六タ・六)(谷大、餘大・一四五二)(京專)(龍大、二四一八・一〇)七卷本(正大、一一六二・四)

大日經疏 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. 大日經疏鈔、口筆鈔、大疏呆寶鈔 ❷二十卷或二十九卷 ❸存 ❹呆寶(德治元—貞治元 A. D. 1305—1362)述 ❺大日經疏鈔の下を見よ。 ❻刊本(京專)寛文元刊(正大、一一六二・六)

大日經疏 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. 大日經疏、大疏 ❷二十卷 ❸存 ❹聖寶(天長九—延喜九 A. D. 832—909)述

大日經疏一本下半抄 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-ip-pon-ge-han-shō. 大疏一本下半鈔 ❷一帖 ❸存 ❹永正六寫 ❺(寶壽院)

大日經疏一本上半下第六日私記 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-ip-pon-jō-han-ge-dai-roku-nichi-shi-ki. ❷一冊 ❸存 ❹嘉吉三寫 ❺(寶壽院)

大日經疏印義鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-in-gi-shō. 大疏印義鈔 ❷二十卷 ❸存 ❹慧光(寛文六—享保一九 A. D. 1656—1734)述

大日經疏演奧抄 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-en-o-shō. 演奧抄、大疏演奧鈔、大日經大疏演奧鈔 ❷五十六卷(六十冊) ❸存、大正五九・一 No. 2216 ❹呆寶(德治元—貞治元 A. D. 1306—1362)述 ❺演奧抄の下を見よ。 ❻(參考) 請宗章疏錄第三 ❼元祿一五刊(正大、一一六二・八)寶永五刊(谷大、長保・一七八)德川時代寫(寶書提院)安永九刊(高大、寄・一・三四)刊本(哲、お・四・中・一八、お・四・左・一)(京專)

大日經疏演奧鈔今案 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-en-o-shō-kon-an. ❷一卷 ❸慧光(寛文六—享保一九 A. D. 1666—1734)

大日經疏緣起 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-en-gi. 大疏緣起 ❷一卷 ❸存、大疏記集卷上 ❹恒瑜(寛永二—寛元二 A. D. 1236—1304)述 ❼(參考) 請宗章疏錄第三、章疏錄 ❽刊本(谷大、餘大・一〇七四)(龍大、二六六八・一〇)寫本(京大、日大未・六一)(正大、一一六二・七)

大日經疏緣起 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-en-gi. ❷一卷 ❸存、大疏記集卷上 ❹榮秋述

大日經疏奧卷聞書 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-oku-no-maki-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❹不二宥祥(一寛元頃A. D. 1303—1305—)記 ❺寫本(龍大二四一八・一一)正德三、明和五寫(高大、寄・一・三四)

大日經疏奧卷爛脫 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-oku-no-maki-ran-datsu. 大日經奧疏爛脫、大日經疏奧卷聞書、大日經奧卷聞書爛脫、大昆盧遮那成佛經疏爛脫、大日經疏奧疏爛脫、大日經奧卷爛脫 ❷一卷 ❸存 ❹元文六寫(高大、一・三四)德川時代寫(寶龜院)

大日經疏開雲鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-kai-un-shō. 大日經住心品疏開雲鈔 ❷十六卷 ❸存 ❹恒豪(弘安五—元德二後A. D. 1282—1330—)述 ❺大日經住心品疏開雲抄の下を見よ。 ❻寫本(長谷寺)(智山專門學校)

大日經疏開敷覺華鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-kai-fu-kaku-ke-shō. 覺華鈔、開敷覺華鈔、大日經覺華鈔、大日經造那覺華鈔、大昆盧遮那覺華鈔、大疏覺華鈔、大日經疏覺華鈔 ❷五卷(刊本ノミ) ❸存 ❹妙瑞(元祿九—明和元 A. D. 1696—

大日經疏私記 (Dai-nichi-kyō-sho-shi-ki.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、安然が、大日經疏の研究のために、唐・開元寺の僧、智周の著した大日經疏の注釋書である。『大日經疏義釋』の別名。

大日經疏義釋 (Dai-nichi-kyō-sho-gi-jutsu-shi-ki.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、安然が、大日經疏の研究のために、唐・開元寺の僧、智周の著した大日經疏の注釋書である。『大日經疏私記』の別名。

大日經疏鈔 (Dai-nichi-kyō-sho-shō.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏の研究のために、唐・開元寺の僧、智周の著した大日經疏の注釋書である。『大日經疏私記』の別名。

大日經疏鈔目 (Dai-nichi-kyō-sho-shō-moku.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏鈔の目次。

大日經疏鈔目錄 (Dai-nichi-kyō-sho-shō-moku-roku.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏鈔の目次。

大日經疏鈔演義 (Dai-nichi-kyō-sho-shō-en-shi-ki.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏鈔の注釋書。『大日經疏鈔目錄』の別名。

大日經疏鈔目錄 (Dai-nichi-kyō-sho-shō-moku-roku.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏鈔の目次。『大日經疏鈔目』の別名。

大日經疏鈔演義 (Dai-nichi-kyō-sho-shō-en-shi-ki.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏鈔の注釋書。『大日經疏鈔』の別名。

大日經疏鈔目錄 (Dai-nichi-kyō-sho-shō-moku-roku.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏鈔の目次。『大日經疏鈔目』の別名。

大日經疏鈔目 (Dai-nichi-kyō-sho-shō-moku.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏鈔の目次。『大日經疏鈔目錄』の別名。

大日經疏鈔 (Dai-nichi-kyō-sho-shō.) ❶ 仏教書。天台宗の僧、遍照が、大日經疏の研究のために、唐・開元寺の僧、智周の著した大日經疏の注釋書である。『大日經疏私記

大日經疏 ❶大日經疏(Dai-nichi-kyō-sho-sho) ❷大日經疏 ❸大日經疏 ❹大日經疏 ❺大日經疏 ❻大日經疏 ❼大日經疏 ❽大日經疏 ❾大日經疏 ❿大日經疏 ⓫大日經疏 ⓬大日經疏 ⓭大日經疏 ⓮大日經疏 ⓯大日經疏 ⓰大日經疏 ⓱大日經疏 ⓲大日經疏 ⓳大日經疏 ⓴大日經疏 ㉑大日經疏 ㉒大日經疏 ㉓大日經疏 ㉔大日經疏 ㉕大日經疏 ㉖大日經疏 ㉗大日經疏 ㉘大日經疏 ㉙大日經疏 ㉚大日經疏 ㉛大日經疏 ㉜大日經疏 ㉝大日經疏 ㉞大日經疏 ㉟大日經疏 ㊱大日經疏 ㊲大日經疏 ㊳大日經疏 ㊴大日經疏 ㊵大日經疏 ㊶大日經疏 ㊷大日經疏 ㊸大日經疏 ㊹大日經疏 ㊺大日經疏 ㊻大日經疏 ㊼大日經疏 ㊽大日經疏 ㊾大日經疏 ㊿大日經疏 (1)大日經疏 (2)大日經疏 (3)大日經疏 (4)大日經疏 (5)大日經疏 (6)大日經疏 (7)大日經疏 (8)大日經疏 (9)大日經疏 (10)大日經疏 (11)大日經疏 (12)大日經疏 (13)大日經疏 (14)大日經疏 (15)大日經疏 (16)大日經疏 (17)大日經疏 (18)大日經疏 (19)大日經疏 (20)大日經疏 (21)大日經疏 (22)大日經疏 (23)大日經疏 (24)大日經疏 (25)大日經疏 (26)大日經疏 (27)大日經疏 (28)大日經疏 (29)大日經疏 (30)大日經疏 (31)大日經疏 (32)大日經疏 (33)大日經疏 (34)大日經疏 (35)大日經疏 (36)大日經疏 (37)大日經疏 (38)大日經疏 (39)大日經疏 (40)大日經疏

kyō-sho-dai-ran-datsu. ❷1卷 ❸存 ❹寫本(正大)1・1・大1・十三)

大日經疏第一本勸定第十

❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-dai-ip-pon-kan-chū-dai-jū. ❷1卷 ❸存 ❹鎌倉(一正和頃A. D. 1312—1316—) ❺文明五寫 ❻(寫本奥定)

大日經疏第三劫段第解

❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-dai-san-gō-dan-yō-ge. ❷1卷 ❸存 ❹鎌倉 ❺(寫本)

大日經疏第三重知恩藏

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-dai-san-jū-nyo-i-zō. 大疏第三重知恩藏 ❷十1卷 ❸存 ❹寫本(鎌大)11四1八・11大)

大日經疏第二本指示

❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-dai-ni-hon-shi-ji. ❷11卷 ❸存 ❹坐禪(一永享五 A. D. 1433)ロ ❺慶正三寫 ❻(寫本奥定)

大日經疏第二本內打集

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-dai-ni-hon-nai-da-shū. ❷1帖 ❸存 ❹藤川時代寫 ❺(寫本奥定)

大日經疏第二本問題

❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-dai-ni-hom-mon-dai. ❷1帖 ❸存 ❹鎌倉ロ ❺寫本(寫本奥定)

大日經疏第二本分別會

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-dai-ni-mas-shō-kiki-gaki. ❷1帖 ❸存 ❹文安三寫 ❺(寫本奥定)

大日經疏第二大十心鈔

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-dai-ni-roku-jis-shin-kō-yō. ❷5冊 ❸存 ❹鎌倉(元亨元—書永四 A. D. 1184—1252)1 宮錄(寫永四〃年十五寫) ❺寫本(寫大〃)・1・三四)

大日經疏續額

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-dai-gak-i. 大疏續額 ❷1卷 ❸存〃 大疏論記續卷上 ❹宮寫(寫永11九—明德11後A. D. 1422—1493—)寫

大日經疏探題錄

❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-tan-i-roku. ❷十人卷 ❸存 ❹(一明和元A. D. 1764)

大日經疏談義

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-dan-gi. 大疏談義〃 大疏百條談義 ❷十卷 ❸存〃 大正十九・十七大 No. 2540 ❹寫錄(寫永1九—元禄大 A. D. 1614—1693)寫 ❺大疏談義の下を見よ。 ❻貞享元刊 ❼(寫大〃)11四1八・11大)

大日經疏追記

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-tsui-ki. 大日經疏記 ❷十八卷 ❸存 ❹寫錄(寫永11—寫永11 A. D. 1674 1742)寫 ❺大日經疏私記の下を見よ。 ❻(參考) 寫書奥定本刊行集定日錄

大日經疏傳授記

❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-den-ju-ki. 大日經傳授記〃 傳授記 ❷1卷 ❸存 ❹好生(貞和元—書永11三 A. D. 1345—1416)ロ〃 光全(一書永三1 A. D. 1424)記 ❺大日經疏傳授鈔の下を見よ ❻(參考) 寫疏錄 ❼寫本(寫大〃)・1・三四)(寫書奥定)

大日經疏傳授聞書

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-den-ju-kiki-gaki. 大疏傳授聞書 ❷11十1卷 ❸存 ❹寫本(寫文大—享保1九 A. D. 1666—1734)ロ〃 書聞(寫寫七—享保六後A. D. 1679—1721—)記

大日經疏傳授雜記

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-den-ju-zak-ki. ❷1卷 ❸寫本(寫文大—享保1九 A. D. 1655—1734)記

大日經疏傳授私記

❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-den-ju-shi-ki. 大疏傳授私記〃 大日經疏傳授傳授私記 ❷1卷 ❸存〃 聞聞和尚全集第1〃 大疏論記傳之內 ❹寫錄(寫寫文中—寫享四 A. D. 1679—1747)寫〃 金剛寺聞〃 聞聞(文政11—明治四〇A.D. 1828—1907)相傳 ❺寫享元寫(寫大〃)・1・三四)寫寫四寫(寫大〃)・1・三四)(寫大〃)・1・三四)(寫大〃)・1・三四)

大日經疏密印品諸印祕訣、大日經密印品諸印祕訣、大疏密印品諸印祕訣 ❷一卷或二卷 ❸存 ❹淨厳(寛永一六—元祿一五 A. D. 1639—1702)記 ❹寫本(龍大、二四一八・三一)

大日經疏妙印鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-myō-in-shō. 大疏妙印鈔、大日經妙印鈔、妙印鈔 ❷八十卷 ❸存、大正五八・二五No. 2213 ❹阿闍宥範(文永七—文和元A. D. 1270—1352)記 ❺元德二(A. D. 1330)

❻大日經疏二十卷の註書。卷第一に大意緣起分と題して玄談を記し、卷第二以下に疏文を註釋してゐる。玄談中初に大意の下で大日經の大意を述べ、緣起分の下で經の緣起分と疏の緣起分とを分ち、經緣起分に於て、南天鉄塔本、北天鉄塔本のことを述べ、更に支那日本への傳來を說き、轉じて疏家宗家判教の相違を論じ、大日經本の種類を說き、經の譯者等無長、筆受者一行のことを述べてゐる。次に疏緣起分に於ては、疏の說者記者を示し、大日經義釋との相違優劣を論じ、疏の字義を述べてゐる。

宥範は讃岐善通寺の僧で、大日經受傳のため、高野京都に明師を求め、遂に下野衣寺に妙淨上人宥祥を訪ひ、其言に從つて更に奥州妙法寺道性を尋ね、幾多の困苦を重ねた。妙淨その求法の熱誠に動かされて、遂に一ケ年を費して大日經疏を講じ、宥範、覺恒等に教えた。宥範は妙淨に師事すること多年遂に三回大日經疏の講傳を受けた。第一回は奥州より衣寺に歸つた時で、永仁二三年の頃である。第二回は正安元年武州廣田寺、第三回は同三年豆州走湯山に於て開莚せられたのである。妙印鈔は後に述ぶる如く、此等數度の講莚に列して妙淨上人より聽受した所を筆錄したものである。妙淨上人は當代に於て大日經疏の講傳の第一人者として尊重せられる人で、南北朝から室町期へかけて、東寺高野に於ける大日經疏の講莚はその源を妙淨上人に發するものであり。大日經疏弘布の功勞者である、隨つて本書の價値も想像し得らるゝことである。

宥範(初名宥覺)は諸種の書籍目錄を檢するに、大日經疏について本書の外に妙印鈔口傳十卷、祕記十卷、羊竹二卷、科文十卷、阿闍法樂鈔三十五卷、供養法疏私記八卷等を著してゐる。但し祕記と口傳とは同本異名と思はれる。妙印鈔口傳第十の奥に大日經の皮肉骨髓の問答がある。その答說に十住心淺深の差別を皮とし、擇地造壇の曼荼羅を肉とし、自心の祕密曼荼羅を骨とし、內心の法界圓明を髓とす、復淺略を皮とし、深祕を肉とし、悉中を骨とし、祕々を髓とす、復第三重を皮とし、第二重を肉とし、第一重を骨とし、八葉院を髓とす等と述べ、更に皮分五七、肉八十、骨二、髓十、及料同、都合一百三十七、大日經王已體全と記してゐる。此の文宣を案ずるに阿闍法樂鈔三十五卷は皮分を說き、妙印鈔八十卷は肉分を說き、羊竹二卷は骨分を說き、口傳十卷は髓分を說くと云ふ義である。又及料同の句につきては料簡十卷の註がある。これは多分科文十卷を指すのであらう。又妙印鈔八十の奥に右予荷從ニ先師傳ニ得此經之皮肉骨髓ニ奏ト書き出して、次の如きことを記してゐる。仍ち永仁年中衣寺に於て初度の講讀を聞きて皮分を得、正安元年武州廣田寺に於て第二講讀を聞き肉分を得、同三年豆州走湯山に於て第三法輪を聞き、骨髓兩分を得たこと。更に先師妙淨上人の切なる勸說に從ひ、正安元年己亥十一月八日より同二年七月二十一日に至つて皮分三十五卷を記し、阿闍法樂鈔と名づけたこと。先師これを通覽して印可を與へ妙印鈔と名を改め淸座の者に語つて、自今以後此を以て指南とせよと仰せられたこと。後に延慶元年戊申より筆を起して元德二年庚午卯月二壬申功を終へて本書八十卷となし肉分を記したことを述べてゐる。古來の一說に宥覺が同學覺鼇と共に見金問答鈔三十卷を作る、(見は覺、金は覺の片字である)。妙淨これを印可せし故に妙印鈔と名づく、宥覺讃岐歸國後これを廣じて八十卷とすと云つてゐる。此の說は前記の說と多少相違してゐるが、察するに見金問答鈔とは阿闍法樂鈔を指すもので、多少覺鼇の協力を得たものであらう。又羊竹二卷は印信口傳等を記した書と云ふことが、快全の由來記に見えてゐる。

❼文龜二寫(仁和寺)古寫本(讃岐高松市無量壽院)寫本(京專) (小田慈舟)

大日經疏妙印鈔口傳 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-myō-in-shō-ku-den. ❷十卷 ❸存、大正五八・六三九 No. 2214 ❹宥範(文永七—文和元 A. D. 1270—1352)撰 ❺元德三(A. D. 1331)五月

❻大日經六卷并に疏二十卷の要文について著者が妙淨上人宥祥から相傳した印明大事を記した書。百十三條を摘示して經疏の文を擧げ、これに附隨する印明や大事を示し、その意趣を說き、多くの問答を設けて疑義を明にしてゐる。本書著作の由來等については大日經疏妙印鈔の項參照。 ❼(參考) 章疏錄 ❽明應二寫(寶壽院)文化一一寫(正大) (小田慈舟)

大日經疏文次第 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-mon-shi-dai. 大毘盧遮那成佛經疏文次第、大疏文次第 ❷一卷 ❸存、弘法大師全集第三教相部、日本大藏經密經部章疏卷上一 ❹空海(寶龜五—承和二A. D. 774—835)

❺大日經疏二十卷の要文を標示した箇條書である。疏每卷順を逐うて記し、四百八十餘條を出してゐる。彼の妙瑞の大日經疏條箇一卷は本書を基礎として更に增補したものである。

❻(參考) 八家秘錄、諸宗章疏錄第三 ❽刊本(龍大、二四一八・三三)(哲、き・中・一七)(正大、一四三一・二六六)(京專) (小田慈舟)

大日經疏文前要義 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-mon-zen-yō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹櫻田雷斧(弘化三—昭和九 A. D. 1845—1934)述 ❺明治三一刊 ❽(高大、一・三四)(帝國、八一・五六)

大日經疏問題 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-mon-dai. 大日經住心品疏問題、大疏問題 ❷十七卷 ❸存 ❹快全(—應永三一 A. D. 1431)、成堆(永德元—寶德三 A. D. 1381—1451)ロ、譯城校 ❺大日經住心品疏問題の下を見よ。 ❽文安二、文明一三寫(寶壽院)

大日經疏聞記 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-mon-ki. ❷十五帖 ❸存 ❹德川時代寫 ❽(寶龜院)

大日經疏由來 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-yu-rai. ❷二卷 ❹宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416) ❼(參考) 章疏錄

大日經疏由來 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-yu-rai. 大日經奥疏由來記 ❷一卷 ❸存 ❹快全(—應永三一 A. D. 1424)ロ、永遍記 ❽延享三寫(高大、寄・一・三四)應永二五寫(南葵藏)

大日經疏羊竹 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-yō-chiku. ❷二卷 ❹宥範(文永七—文和元 A. D. 1270—1352)撰

大日經疏要文記 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-yō-mon-ki. ❷一卷 ❸存、弘法大師全集第三教相部 ❹空海(寶龜五—承和二A. D. 774—835)記

❺大日經疏中の要文を摘記した書。而も卷を逐うて記したものでなく、亂雜な抜書に過ぎない。大疏拔讀の折々に備忘のために抜出したものであらう。三寶院所藏の弘法大師眞蹟は六紙ほどで細字行書體であり、行間の記入も深山ある。 (小田慈舟)

❽草本(醍醐三寶院)

大日經疏讀口傳多多證據 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-yomi-ku-den-ta-ta-shō-ko. 大疏讀口傳多々證據 ❷一卷 ❸存

大日經疏亂引鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-ran-in-shō. 大疏亂印鈔 ❷十一卷 ❹玄海(文永四—貞和三 A. D. 1267—1347) ❼(參考) 章疏錄

大日經疏爛脫 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-ran-datsu. ❷殘缺一卷 ❸存、大日本佛敎全書第二八 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891)撰

大日經疏爛脫 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-ran-datsu. 大日經疏爛脫松橋方 ❷一卷 ❸存 ❽刊本(谷大、餘大・一七四九)

大日經疏爛脫聞書 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-ran-datsu-kiki-gaki. ❷一卷 ❸存 ❽寫本(龍大、研佛)德川時代寫(寶龜院)

大日經疏爛脫辨 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho-ran-datsu-ben. 大疏爛脫辨 ❷一卷 ❸存 ❹亮元(寛永八—寶永三A. D. 1631—1706)

大日經疏略抄 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-ryaku-shō. ❷一帖 ❸存 ❺嘉應元寫 ❽(寶善提院)

大日經疏六大義鈔 ❶(日) Dai-nichi-kyō-sho-roku-dai-gi-shō. ❷一卷 ❸存 ❹佛通 ❺明暦二二刊 ❽(龍大、研佛)

大日經序 ❶Dai-nichi-kyō-jo. (支) Ta-jih-ching-hsu. ❷一卷 ❸存 ❹祖牧撰 ❺唐開元一六(A. D. 728) ❼(參考) 章疏錄 ❽高治三寫(龍大、研佛)寶永四刊(龍大、二四一八・九)(高大、寄・一・三四)

大日經序分義 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jo-bun-gi. 四種法身說法相事 ❷一卷 ❸存、日本大藏經密經部章疏卷上二 光房實範(—天養元 A. D. 1144)

❺內題に四種法身說法相事と題して、四種法身につき、東密台密の說を述べ、大日經、金剛頂經の敎主を論じ、大疏と十住心論、二敎論等の說との關係等を述べてゐる。大經要義鈔と相俟ちて、大日經住心品についての實範の見解を知ることが出來る。 (小田慈舟)

大日經除暗鈔 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jo-an-shō. 大日經疏除暗鈔、除暗鈔 ❷七卷 ❸存 ❹道範(治承二—建長四A. D. 1178—1253)述 ❺除暗鈔の下を見よ。 ❻寶暦二刊 ❽(龍大、二四一八・三二)(京專)

大日經除未傳法人 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jo-mi-den-bō-nin. ❷一卷 ❸存 ❹慧光(寛文六—享保一九 A. D. 1666—1734)

大日經抄 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. ❹圓仁(延暦一三—貞觀六 A. D. 794—864)述 ❼(參考) 山家組德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄

大日經抄 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. 大日經疏抄 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考) 山家組德撰述篇目集卷上

大日經抄 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. ❹實範(—天養元 A. D. 1144)述

大日經抄 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. ❹親心(—嘉應元 A. D. 1169—)述

大日經鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-sho. 大日經疏鈔、大日經住心品疏鈔、大日經疏記、口疏、口疏宥快鈔 ❷八十五卷 ❸存、大正六○・一No. 2218、佛敎大系第四○—第四一大日經疏之內 ❹宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416) ❺大日經疏鈔の下を見よ。

大日經淨不二鈔 ❶(日)Dai-nichi-kyō-jō-fu-ni-shō. 大日經疏義述、大疏義述、淨不二鈔、大日經疏淨不二鈔 ❷三十一卷 ❸存 ❹宥祥(—嘉元頃 A. D. 1303—1305—)述 ❺大日經疏義述の下を見よ。 ❼(參考) 章疏錄

大日經淨菩提心門 ❶(日) Dai-nichi-kyō-jō-bo-dai-shim-mon. ❷一卷 ❸存 ❹隆山(—享和元A. D. 1801)

大日經心地法門 ❶(日)Dai-nichi-kyō-shin-ji-hō-mon. ❷四十五卷 ❸存 ❹淨空(元祿六—安永四A. D. 1693—1775)

大日經心地法門 ❶(日)Dai-nichi-kyō-shin-ji-hō-mon. ❷三十卷 ❸甲山鳳城作 ❼(參考) 章疏錄

大日經心目 ❶(日)Dai-nichi-kyō-shim-mokn. 大毘盧遮那成道經心目、大日經略釋 ❷一卷 ❸存、大正五八・二一No. 2212、大日本佛敎全書第二六智證大師全集第二 ❹圓珍(弘仁五—寛平三 A. D. 814—891)述

大日本

大日本

大日本

大和国法隆寺（日）❶ 聖徳太子の創建。

大和国法隆寺（日）❶ 聖徳太子の創建。

大和国法隆寺（日）❶ 聖徳太子の創建。

日本

大日本佛教全書

大日本佛教全書

**大日本佛教全書

の種の説明と見て、大日如来の三身の説を無縁仏に説明したものと見るべきである。
❹〔参考〕 新訳華厳経巻第三 （宮田義郎）

大毘盧遮那成仏神変加持経

❶(ロ)Dai-nyo-i-hō-ju-rin-go-ō-shu-go-jin-ju-kyō. (支)Ta-ju-i-pao-chu-luo-niu-wang-shou-hu-shên-chou-ching. ❷1巻 ❸存、密教部所収之内 ❹宋本(宋大、宋・1、六三・1)

大乗三部経目

❶(ロ) Dai-ninn-ō-e-hyō-byaku. ❷1帖 ❸存 ❹宋本(宋大、宋・1・六三)

大般若経

❶(ロ)Dai-nin-niku-kyō. (支)Ta-jên-ju-ching. ❷十巻 ❸欠 ❹北宋代写本 ❺〔参考〕 田三種記巻三、出三蔵記巻一、三賢記巻六、仁王護国巻五、法華巻巻五、内典巻巻三、武周巻巻一一、開元巻巻四、貞元巻巻六

大乗縁起圓通分

❶(ロ) Dai-ne-han-gyō-en-ji-shō. (支) Ta-nieh-p'an-ching-yüan-chih-ch'ao. 涅槃経経記圓通分 ❷十四巻内五巻 ❸存 ❹宋本巻巻 ❺〔参考〕 新訳華厳経経巻巻巻

大乗縁起義記

❶(ロ)Dai-ne-han-gyō-gi-ki. (支)Ta-nieh-p'an-ching-i-chi. 大般涅槃経義記、涅槃経義記、涅槃経義記 ❷二十巻内十巻 ❸存、大正三七・六一三 No. 1764、卍続一・五五・四一五六・一 ❹隋吉蔵(天平勝宝一開皇一二年 A. D. 523—592)撰 ❺大般涅槃経義記の下を見よ。 ❻〔参考〕 新訳華厳経経巻巻巻巻

大乗縁起義記巻第四

❶(ロ)Dai-ne-han-gyō-gi-ki-kwan-dai-shi. (支)Ta-nieh-p'an-ching-i-chi-chüan-ti-ssŭ. ❷1巻 ❸存、大正人五・二九四 No. 2764B ❹本書記1巻は、敦煌出土本にしてP山本巻二反氏の所蔵に係る。首題に「大般涅槃経義巻第四」とあり、本疏の中間に「法華経玄論巻第四」とあり、末題及び後記に「大般涅槃経義記巻第四」「大業五年六月十三日寫記竟用天代」とあるに依れば、大業五年は西暦の西の紀元三九年に当り、他の義疏、講疏、章安の涅槃経疏」等と比すると共通点に於合するものなし。現存疏巻は本書巻巻の義疏巻巻十二三之三の1巻以下を欠巻しているが、要之本巻は、大部の未完疏巻巻と推測しうべきである。何等か参照所説巻巻1巻1一一一二百参照せよ。
❹〔参考〕 新訳華厳経巻巻巻巻

岡、八二一・一〇四)

大梅山夜話 ❶(日)Dai-bai-zan-ya-wa. 大梅夜話。❷一卷 ❸存、禪門法語集卷中、成貴堂叢書 ❹一絲文守(慶長一三—正保三 A. D. 1608—1646)話 ❺寛永二〇(A. D. 1643)

❻文守は工部尚書源具堯の子、初め萬年山雪岑妥公に見え、澤菴、愚堂等に參じて大事了畢し、後水尾帝の詔に應じて丹州大梅山法常寺に住す、住山の地名に因みて大梅山夜話といふ。抑も宗門に夜話ある所以は先匠の言行を錄して賢者をして先匠に齊しからんことを寓ひ奮志せしめ、又た因果應報業因感果を說いて下根劣機をして其の愆を勉めしむるに在り、著者禪林の衰替を慨して此の一書を著す、書中多く輪廻轉生の例話を引き、或は阿育王傳、觀音靈驗記、碧巖錄、傳燈錄、大慧武庫、五燈會元、山菴雜錄等より幾多の佳話を引用して學人修道の指針に供せんとしたものである。

本書は始め會下の徒をして諸典籍中の事跡を語らしめ、綱格成るに及んで、後水尾上皇に奏聞し奉るや、上皇近臣十餘人の爲めに講ぜしめらる、次いで、皇后及び諸宮妃、官女等の爲めに假名文を以て初學も何ぼ讀み易き樣書かれたものが即ち本書である、卷頭に自序を揭げ本書製作の緣由を述ぶ。

❼東京光融館 (林信雲)

大梅禪師開堂錄 ❶(日) Dai-bai-zen-ji-kai-do-roku. ❷一卷 ❸存 ❹浙江 ❺(參考) 禪籍目錄

大梅禪師語錄 ❶(日)Dai-bai-zen-ji-go-roku. 寶壽大梅禪師語錄 ❷二卷 ❸存 ❹法瑫圭立語、大雲編 ❺(參考) 禪籍目錄

大梅夜話 ❶(日)Dai-bai-ya-wa. 大梅山夜話 ❷一卷 ❸存、禪門法話集卷中、成貴堂叢書 ❹文守一絲(慶長一三—正保三 A. D. 1608—1646) ❺寶曆四刊 ❻(高大、密・一・二四)

大博乾禪師語錄 ❶(日) Dai-haku-kan-zen-ji-go-roku. (支) Ta-po-kan-ch'an-shih-yü-lu. ❷一卷 ❸存 ❹清代大博乾語、超宗編 ❺康熙六刊 ❻(駒大)

大般泥洹經 ❶(日)Dai-hatsu-nai-on-gyō. (支)Ta-pan-ni-yüan-ching. ❷二卷 ❸缺 ❹吳支謙譯 ❺第三譯。❻(參考) 開元錄第一四

大般泥洹經 ❶(日)Dai-hatsu-nai-on-gyō. (支)Ta-pan-ni-yüan-ching. ❷二卷 ❸缺 ❹北凉代智猛譯 ❺第六譯。❻(參考) 貞元錄第二四

大般泥洹經 ❶(日)Dai-hatsu-nai-on-gyō. (支)Ta-pan-ni-yüan-ching. 方等般泥洹經、方等泥洹經 ❷二卷 ❸存、大正一二・九一二No. 378、縮盈九、卍八・九、北110葉、南111葉、元106葉、明北112白、清112白、麗109資、天111葉、楷101資、法107資、至187草、明南109駒、Nj. 116 ❹竺法護譯 ❺西晉太始二—建興元(A. D. 265—313) ❻方等般泥洹經の下を見よ。

大般泥洹經 ❶(日)Dai-hatsu-nai-on-gyō. (支)Ta-pan-ni-yüan-ching. 方等大般泥洹經、泥洹經 ❷六卷 ❸存、大正一二・八五三No. 376、縮盈九、卍八・一〇、北108資、南109資、元105資、明北116食、清116食、麗107率、天108資、楷98率、法106率、至186被、明南107白、Nj. 120 ❹法顯譯 ❺東晉義熙一二—一四(A. D. 416—418) ❻大般涅槃經の下參照。❼(參考) 出三藏記第二、三寶紀第七、內典錄第三、譯經圖紀第二、開元錄第三、貞元錄第五

大般泥洹經 ❶(日)Dai-hatsu-nai-on-gyō. (支)Ta-pan-ni-yüan-ching. 般泥洹經、泥洹經、方等泥洹經 ❷二卷 ❸存、大正一・一七六 No. 6、縮昃一〇、卍八・一〇、北657沒、南671沒、元653歲、明北548鳳、清548鳳、麗651淵、天654淵、楷621淵、法646淵、至394無、明南541納、Nj. 119 ❺東晉代(A. D. 317—420)失譯 ❻般泥洹經の下を見よ。

大般涅槃經 ❶(日)Dai-hatsu-nei-han-gyō. (支)Ta-pan-nieh-p'an-ching. ❷二卷 ❸缺 ❹曹魏代安法賢譯 ❺第二譯。❻(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大般涅槃經 ❶(日) Dai-hatsu-nei-han-gyō. (支) Ta-pan-nieh-p'an-ching. 涅槃經、北本涅槃經 ❷四十卷 ❸存、大正一二・三六五No. 374、縮盈五—六、卍八・五—六、北107邇至率、南107邇至率、元104邇至率、明北109資至鳴、清109資至鳴、麗106迎至體、天105邇至率、楷96迎至體、法104迎至體、至184駒至化、明南105歸至王、Nj. 113、禪學大系經論部第一 ❹曇無讖(太元一〇—元嘉一〇 A. D. 395—433)譯 ❺北凉玄始三—一〇(A. D. 415—423) ❻(概論) イ、思想內容一般

大乘「涅槃經」四十卷は、如何なる思想內容を有するか、又如何にして成立し、佛教史上如何なる地位を占むるものであるか。順序として、先づその思想內容一般に就いて概說する。本經の述ぶる所は大體三種にまとめる事が出來る。第一は佛身の常住である。第二は涅槃の常樂我淨である。最後は、一切衆生悉有佛性であつて、斷善根の聖即ち所謂一闡提と雖も、成佛し得ると說くものである。

一、佛身常住

有爲轉變は現世の相であると、如何に承知して見ても、愛別離苦は悲しい現實である。生者必滅は、生ある者に取つて避く可からざる運命とは言ひながら、餘りにも痛ましい當相である。生死の境を別にすとは知りながら、親の死屍の前に泣き伏して、その再生を祈らざるを得ない處に、遺る瀨ない人の子の氣持がある。而かも生前の恩義が厚ければ厚い程、吾々の慕ふ心は深いのみならず、遂には確かに何れにかいまして、吾を見ると思はざるを得ざるに至る。

今我が大聖釋尊は、四十餘年の說法を終つて、拘尸那揭羅城外、沙羅雙樹林の下に寂滅の相を示し給うた。區々たる吾々の凡情は、親にさへ無限の生命を冷ひ、未だ死せずとさへ思ふのに、況んや大聖牟尼世尊の、あの偉大な人格が、忽然として消失したと、誰が考へ得られようか。唯大なる教法が、無限の調育を萬世に垂れ給ふ樣に、

佛陀の聖命は、不滅でなければならぬ。否不滅である事を信じて疑はぬ。佛陀が迦毗羅衛城に誕生し給うたといふも、凡眼の見る所、沙羅林に示寂し給うたと考へるも、痴者の綺言のみ。非生に生を現じ、非滅に滅を示すこそ、佛陀の生涯である。これ實に大涅槃經に說く、佛身常住の思想一般である。

佛身常住の思想は、餘りに屢々本經中に說かれて居る。從つて今之を引用するに耐へないが、一二の例を擧げて見る。第二卷壽命品一の二の中に、佛は純陀に告げて、

善男子、如來は、已に無量無邊阿僧祇劫に於て、食身、煩惱の身有ること無し。後邊身なく、常身、法身、金剛の身なり。

と言ひ、第三卷金剛身品には、迦葉に向つて、

善男子、汝今當に知るべし。如來の身は、無量億劫、堅牢にして壞し難し。人天身に非ず。恐怖身に非ず、難食身に非ず。如來の身は、非身是身、不生不滅、不習不修、無量無邊、足跡有ること無し。云々

とあるのを以て、知る可きである。然し斯の如き法身は、只單に空想的に言はれるのではない。この娑婆世界に現はれ給うた、生身の佛陀そのものゝ上に見るのである。故に本經は、右の如く記し來つて、次の樣に說いてゐる。

善男子、汝今當に知る可し、如來の身は、卽ち金剛身なり。汝今日より當に當に專心に此義を思惟すべし。食身を念ずることなかれ。亦當に人の爲に如來身は卽是法身と說く可し。

生身を離れて法身はない。法身を生身の委の中に見る時、無限の慈悲を感ずる。救濟の本體は、此處に嚴然として存する。衆生無邊誓願度の大悲の宣題は、大涅槃經四十卷の中に、說き去り說き來つて盡きない。

「遊行經」には、不放逸を勸め、法に依れ律に依れと敎へ給うた。夫は實に合理的ではあるが、如何せん、吾々は餘りに淋しい。百千由旬と雖も、往きて訊ねたいのが、至情である(羅一阿含、大正二・五九五下)。こゝに如來法身常に在つて滅せざるなりといふ思想が起らざるを得ぬ(遺敎經、大正一二・一一一二・中)。この法身は敎法を意味するか、敎法以上のものを含むか、まだ明了で無い。こゝに大衆部一派より、佛陀の色身を無邊と觀ずる思想が起らねばならなかつた理由がある。ひいては本經の强い主張が出現するに至つたものである。本經の佛身觀が、「般若」のそれを受けて、法身生身の二身思想であるといふ事は、注意して置かねばならぬ。

二、涅槃常樂我淨

佛敎の根本義を標本するものとして、古來人口に膾炙するものに、三法印といふがある。卽ち諸行無常印・諸法無我印・涅槃寂靜印これである。之あるものを佛敎と言ひ、之なきものを非佛敎と稱する。苟しくも佛敎徒ならば、如何に是等を觀ず可きであるか。之を經めたものが、四念處である。卽ち身は不淨なり、受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりと觀ずるのである。こゝに於て、不淨・苦・無常・無我は、正義であると斷ぜざるを得ず、常樂我淨の見解は、顚倒と言はざるを得なかつたのである。是が從來の佛敎の立て前であつた。然るに今「大涅槃經」は、法身常住不滅の標識を高く揭げた。既に常を許せば、我も認めなければならなくなる。卽ち內在の佛性は、眞我とも大我とも謂ふ可きものだからである。常にして我なるものの所有の法は、不淨に非ずして、淨だと考へざるを得ない。その住する境地は、苦に非ずして樂なりとするも、決して無理ではない。かくして「大涅槃經」の常樂我淨說は、過去の無常苦無我不淨の消極說に反對して、明かなる積極說として出現したものである。

此の常樂我淨說は、佛敎の正統思想に對比すれば、殆ど外道說なるかに考へられるけれども、決して解く簡單に片づける事は出來ない。何となれば、眞實の常樂我淨は、無常苦無我不淨の觀念の後に、之を一言に要すれば、空の觀念の後に、更に換言すれば「般若」の洗練を經た後に出現しなければならない。而して本經の所說は、正しく是だからである。單なる有ならば外道的であるが、空に基礎づけられたる有なるが故に、撞着しないのである。「涅槃經」は、この點を明にする爲に、大いに努力を拂つてゐる。外道が最後の原理とする所の我(ātman)・自性(prakṛti)・人(puruṣa)・時(kāla)・自在天(īśvara)・勝德(paramātma)等に對して、如何に本經の佛性や佛が異つてゐるかを、隱處に說いてゐる。又本經第三十九卷には

善男子、我亦內外六入及び六識意は、常樂我淨なりと說かず。我乃ち內外入所生六識を滅するを、之を名づけて常と爲すと宣說す。是の常を以ての故に、之を名づけて我と爲す。常我あるが故に、之を名づけて樂となす。常我樂の故に、之を名づけて淨となす。

とある。無常の世界を踏み越えた所に、常の世界がある。夫は同時に樂我淨を屬性とする。常を離れた樂我淨もなければ、樂を離れた常我淨もない。要するに表現を絕した一理想境に外ならぬ。此點まで遡ぬ、大涅槃は佛の入滅を宣揚するものではなく、大我又は如來の代名である。佛を取れば佛に敎まり。涅槃を取れば涅槃に入る。同時に、凡ては凡ての中にある。この境地を、暫く常樂我淨と說く。之あるを大涅槃と名づけ、之なきを涅槃と言ふ。第二十三卷には之を說いて、

二乘の所得は、大涅槃に非ず。何を以ての故に、常樂我淨無きが故に。常樂我淨を、乃ち名づけて大涅槃と爲すことを得るなり。

といふ。吾々の理想の境涯は、こゝになければならぬ。

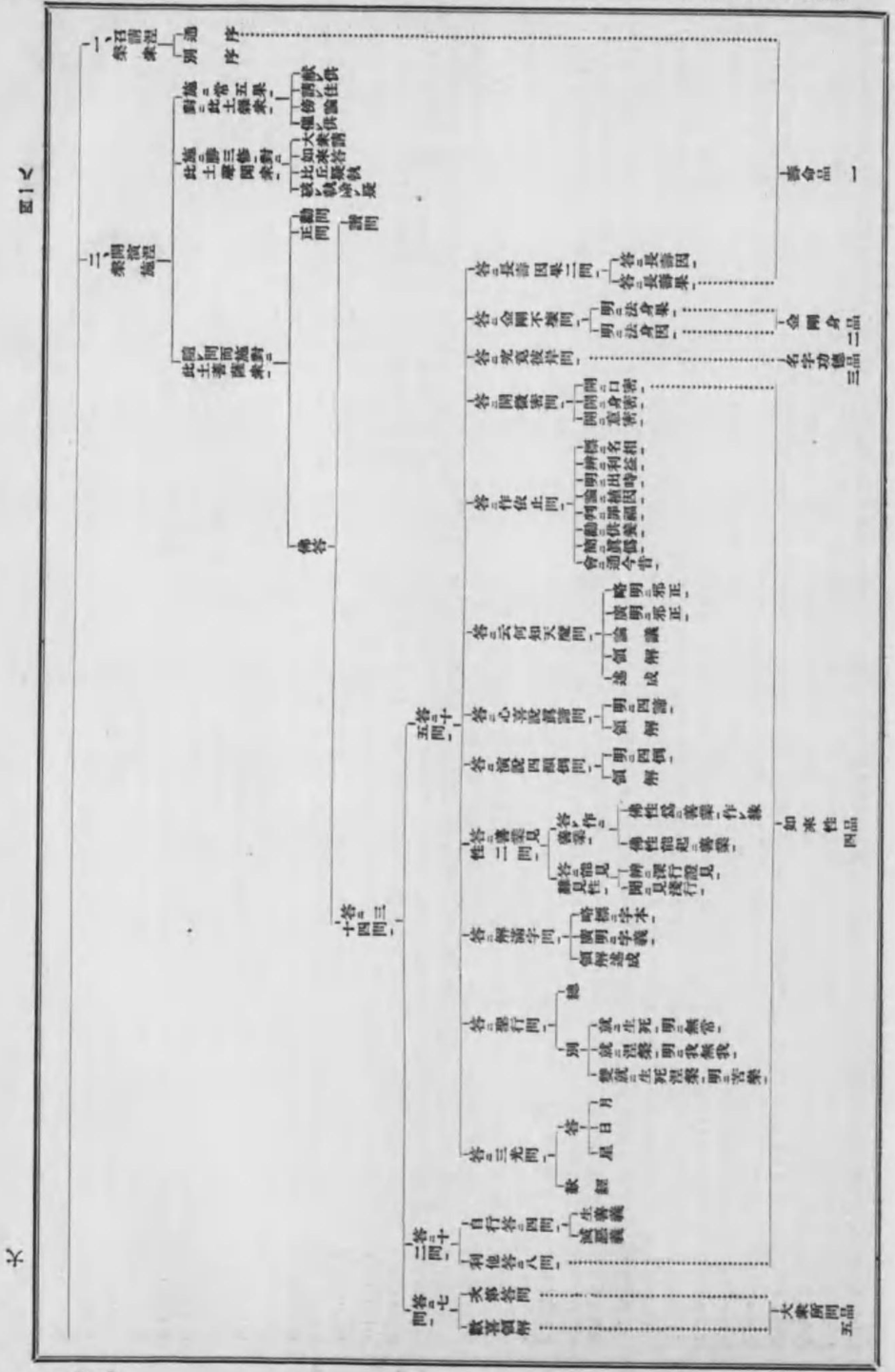
三、一切衆生悉有佛性(附、一闡提成佛)

元來佛性なるものは、佛陀の說かれない事である。佛性と言へば、何となしに固定的な我を思ひ起させる。況や佛性卽大我と言ふに於てをや。かゝる傾向を有する敎義

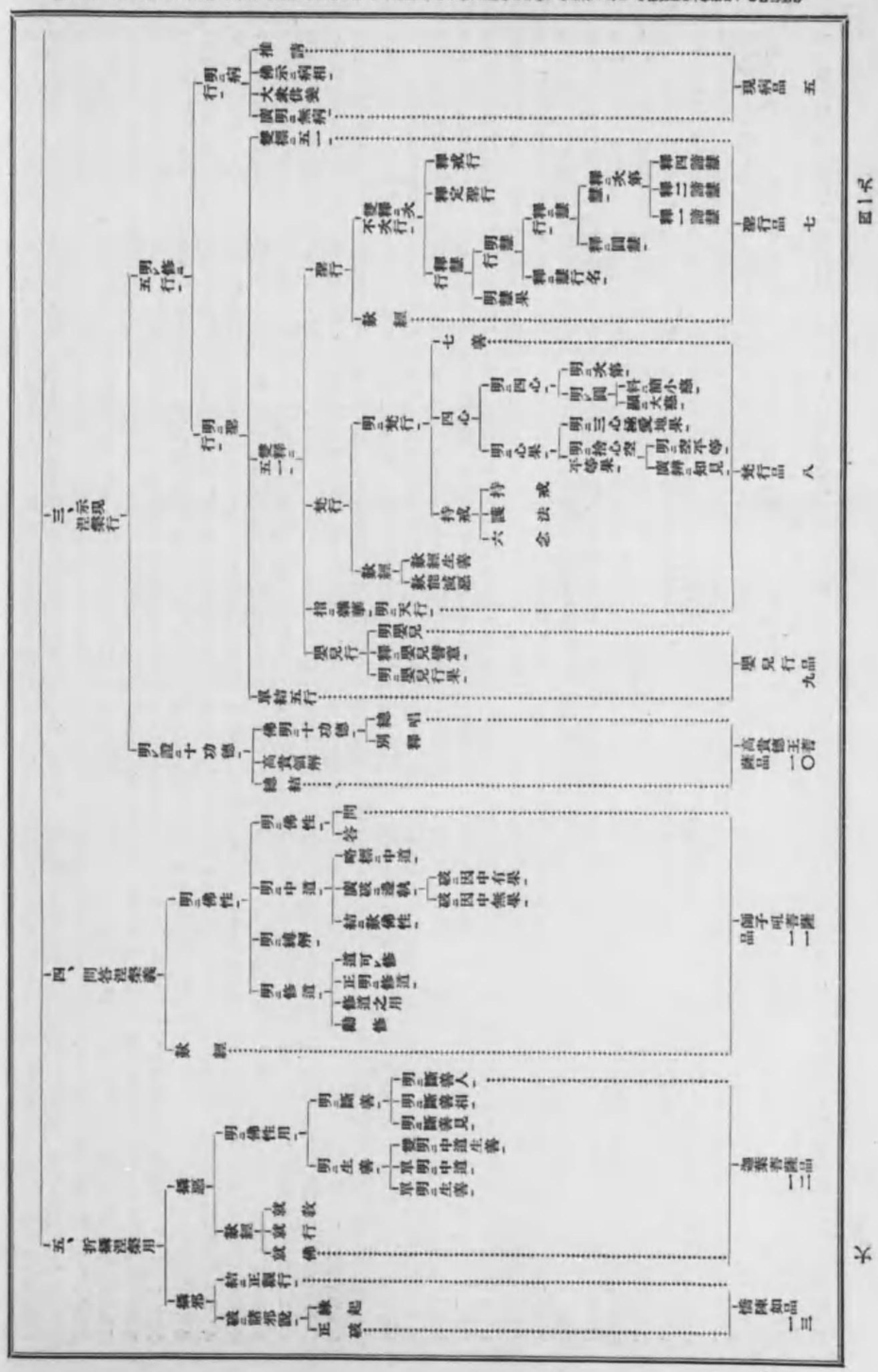
名所行脚◎（名庫書）酒類酔処◎月中の竹林◎（春木多吉郎著）寄主◎浪速竹内◎（宮本清）装丁◎（名音）名画◎（名音）第四章

住の法身に喪失し得ずして、故郷に帰りたるに変りなき。一国の三千世界、一人の心、一家、一人、一国、一郡、一村、一人、一家、一人、一国、一郡、一村、一人、一家、一人、一国、一郡、一村、一人

名所行脚◎（名古屋）鶴舞公園◎月中の円周（愛知学芸師範）路上◎浅野谷内◎竹内清香◎宗教◎鼎谷◎鼎谷（名古屋）名古屋◎鼎谷学院



名所行脚◎（名古屋）鶴舞公園◎月中の円周（愛知学芸師範）路上◎浅野谷内◎竹内清香◎宗教◎鼎谷◎鼎谷（名古屋）名古屋◎鼎谷学院



〜『南子礼考選』中の象官篇の象官篇は、「象厨」十四「象官」十大は出りの厨、『南子礼考選』の三十の「象官」の「象官」の「象官」

ろ考へられる。

次に、人口の点に於いては、大体に於て、人口の増減は、土地の生産力と、人口の増減との関係を比較して、人口の増減は、土地の生産力に、人口の増減は、土地の生産力に、人口の増減は、土地の生産力に

図二百

（慶長三年刊）

（三ハ・一巻・大型）（国文学研究資料館蔵）

（三ハ・一巻・大型）（国文学研究資料館蔵）

擬漢詩文

擬漢詩文

han-gyō. (Jap) ❶ Dai-hatsu-ne-

擬漢詩文

擬漢詩文

大般涅槃経会疏解 ❶(日) Dai-hatsu-ne-han-gyō-e-shō-ge. (支) Ta-pan-nieh-p'an-ching-hui-su-chieh. 涅槃経会疏解 ❷三十六巻(巻一「二」欠) ❸存「卍続」一・五九・一 ❹天保正分刊 国書総合目録 ❺涅槃経疏会疏解の下を見よ。 ❻明治三刊(谷大「谷大・一七一四」)(比叡山横川書写)(正大「一一七六・一二」)

大般涅槃経会疏修懺 ❶(日)Dai-hatsu-ne-han-gyō-e-shō-jō-ka. ❷三巻 ❸存「卍続」一・五六・四 ❹涅槃経会疏修懺の下を見よ。

大般涅槃経音 ❶(日) Dai-hatsu-ne-han-gyō-on. (支) Ta-pan-nieh-p'an-ching-yin. ❷一巻 ❸〔参考〕 華厳大師 法華会所聴

大般涅槃経音義 ❶(日) Dai-hatsu-ne-han-gyō-on-gi. (支) Ta-pan-nieh-p'an-ching-yin-i. ❷一巻 ❸法宝蔵 ❹〔参考〕華厳大師 法華会所聴

大般涅槃経義記 ❶(日)Dai-hatsu-ne-han-gyō-gi-ki. (支)Ta-pan-nieh-p'an-ching-i-chi. ❷十巻 ❸存「大正三七・六一三 No. 1764」「卍続」一・五五・四一五六・一 ❹隋 嘉祥寺 (吉蔵四一—開皇一二 A. D. 523—592) ❺隋の嘉祥寺が『涅槃経疏』を講じたときの。先づ題経篇を立てて題目篇・教興篇・教体篇・教相篇・教宗篇・教用篇・教摂篇・教摂分・教摂分・教摂分

大内氏

大内氏遺跡

大内氏遺跡

**大内氏遺跡

(二)大鏡は『かがみ』と読む。歴史物語。藤原道長の栄華を中心に、宇多天皇から後一条天皇までの約一百五十年間を、老翁と老女の対話という形式で語る。作者は不詳。『今鏡』『水鏡』『増鏡』とともに四鏡と呼ばれる。

大鏡

大鏡

大鏡

初出ではない。般若部經の成立發達過程を略述すれば道行小品初出にして大品之に次ぎ、金剛般若も亦た此等と伯仲すべく、大本十萬頌等次に成立し、諸部般若續出せるものと認めらる。卽ち此の大般若は大乘經成立の中期に於ける集成作と云ふべきである。（椎尾著佛教經典概說第二章四節第三章一部參照）

（三）譯者玄奘は大小經論の新正譯を出せる支那譯人の權威者たるは絮說を待たぬも、殊に本經は渡天求法の本願に酬いたものとして、懿命の誓願によりて顯慶四年十月に其の居を玉華宮に移して準備し、同五年（A. D. 660）正月一日より龍朔三年（A. D. 663）十月二十日に至るまで、沙門大乘光、大乘欽、嘉尙等を筆受として譯出せるものである。始め衆徒もその重複繁冗せるを厭ひ刪略を請へるにより、玄奘もその意ありしが、夢告ありしため遂に一句を略せず全譯したと傳へられて居る。玄奘は將來せる三種の梵本を校合して原本とし、慣重努力して其の功を完了した。譯中屢々奇瑞あり、譯了するや玄奘は歡喜して云ふ。此の經は漢地に緣あり、玄奘玉華に來たれるも此經の力である。今その譯出を完成し得たことは並に是れ諸佛の冥加、龍天の擁祐に據る、全く此れ佩國の妙典、人天の大寶と云はねばならぬ、徒衆各々踊躍欣慶すべきであると、實にその喜びの樣が察せられる。この事は慈恩三藏法師傳（305、第五十卷二七五左）に詳かである。

（四）佩國の妙典、人天の大寶と云はれる所から、禳災儀護の爲に受持頂載され安置供奉され轉讀讀誦重されたものであるが、之を眞に眞面解說することは稀である。西明寺玄則は十六會各別に序を作る。開元錄に至りて大經の首に配し、十六會の大綱を示せるも未だ詳かにするに至らず、指要錄で稍と委しく、（昭和法寶總目錄第二卷五七一—六〇〇頁に十六會六百卷の要目あり、參照せよ）智旭の閱藏知津に及びてこれが大綱を細叙するに勉めた。蓋し講學行はれざるが爲である。本經を研究せるものには宋の雪月大隱が嘉祐八年（A. D. 1063）に初會通關の法を作り、四明の演忠重ねてこれを編定し清の葛臂般若綱要十卷を作る、いづれも省略提綱に過ぎない。

（五）從來般若を依用するもの多くは大品によるは本經餘りに廣長なると、大品には その註釋として有名なる龍樹作、羅什譯に係る大智度論一百卷あるがためである。若し基礎であり要約である點からは小品も亦其だ貴い。故に國譯大藏經には大品のみを譯出し、大正藏經には二二三、大品。二三五、金剛。二四五、仁王のみ調點を施した。國譯一切經に始めて此の大般若を全譯し般若の全貌を世に明らかにする事となつた。

（六）大般若は四處十六會に區分せらる、大體次の如くである。

會	頌	卷數	卷次
一、十 萬 頌	四〇〇	一	一—四〇〇
二、二萬五千頌	六〇	四〇一	四〇一—四七八
三、一萬八千頌	五九	四七九	四七九—五三七
四、八 千 頌	一八	五三八	五三八—五五五
五、八千の分（四品缺）	一〇	五五六	五五六—五六二
六、蓉 缺	八	五六三	五六三—五七一
七、七 百 頌	二	五七二	五七二—五七五
八、蓉 缺	一	五七六	五七六—五七七
九、三 百 頌	一	五七七	五七七
一〇、百五十頌	一	五七八	五七八—五七九
一一、以下五品十四卷 一千八百頌	五	五七九	五七九—五八二
一二、	五	五八三	五八三—五八八
一三、	一	五八九	五八九
一四、	一	五九〇	五九〇
一五、	二	五九一	五九一—五九二
一六、二千一百頌	八	五九三	五九三—六〇〇
計 十六會 西蕃本合 萬四千五十頌	十六		六百卷

品	數	關藏	大正藏	同本異譯（大正）
一、王舍城鷲峰山 Gṛdhrkūṭa	七九	洪一、一…	二二〇第五、一……	
二、舍衛城給孤獨園 Śrāvasti	八五	日一、一…	二二〇第七、一……大品	放光、月一—二二二、第八二一a—二四六c）光讚、月五—（二二二、第八二四a—二六六c）大品、月三四—二二三、第八二七a—二四四a）
三、他化自在天王宮 Paranirmitavaśavartin	一〇			
四、王舍城竹林精舍 Veḷuvana	一六			
十六會六轉				
一、王舍城鷲峰山	一—六、一五	日四、八五…	二二〇第七、四三七…	道行、月六（二二四、第八二四a—二四七b）小品、月六（二二七、第八二五a—二五八b）大明、月八（二二八、第八二五b—二五六c）鈔
二、舍衛城給孤獨園	七—九、一一—一四	日七、八〇…	二二〇第七、七三五…	
三、他化自在天王宮	一〇	二九	二二〇第七、八八五	
四、王舍城竹林精舍	一六	二二	二二〇第七、八八五	
一七		日九、三三…	二二〇第七、九二一…	勝 天 王、月八（二二一、第八二六a—七二六a）曼殊室利分
同	七七	同 七七…	二二〇第七、九四四…	文殊 曼陀譯、月九（二二三、第八二六a—七二二c）菩薩譯、月九（二二五、第八二七c—七二九c）那伽室利分
同	六八…	同 七三…	同 九四〇…	濡首、月九、稍廣（二二四、第八二四a—七二八c）金剛（六本）月九、第八二八—七二九）能斷金剛分
同	七七…	同 七七…	同 九六六…	實相（四本）成三問八（第八二七a—）般若理趣分
同	八一…	同 八一…	同 九七一…	布施波羅蜜多分
日、一〇、一四…		同 一〇一…	同 一〇一九…	戒波羅蜜多分
同 一四…		同 一〇四…	同 一〇四四…	忍波羅蜜多分
同 三九…		同 一〇五…	同 一〇五〇…	勤波羅蜜多分
同 四四…		同 四四…	同 一〇五…	靜慮波羅蜜多分
同 五…		同 一〇五…	同 一〇五五…	般若波羅蜜多分
洪 三七 日三帙 全格 全格				

（七）本經六百卷十六會二百七十五分の內容は開元錄、指要錄開藏知津等に概說する所に就て知るべし。

今只綱要を摘記すれば般若はこれ諸佛の母にして、三世諸佛皆般若より生ずとせらる。分別の假識を離れて總合進動の緣起實相の儘に認識し覺了するがために、正解正行樹立し自覺覺他成就す。故に又初得道より涅槃に至るまで中間常に般若を說くとも云はれ、一切の佛法、般若の流出ならざるなく、般若の統攝ならざるなし。而も初成道の頓說は華嚴と稱し漸く鈍根を誘ふを阿含と名づけ、對半明滿を方等に屬し開權顯實を法華に扶律諸常を涅槃に讓るに於て、二空を顯示し破情立法の一路を般若とす。その六百卷中、初分第一會七十九品あり、四百卷具さに般若觀の開說と習行と菩薩の願行進趣と般若の甚深殊勝とを說く、中に諸大弟子諸天釋梵の供養、讚歎因緣を示し、その一句の受持功德廣大なるを說き、常啼、法涌の因緣によりて般若波羅蜜を聞くの容易ならざるを明し、この廣大經の受持難得の殊勝さを喜ばしむる大文學である。第二分八十五品あり七十八卷、初分に比すれば品に開合あり、文略にして義同じ、但常啼法涌二品なし。初分を通關によれば著るしく省略せらるゝことも國譯一切經に示すが如し。通關の法は宋譯の序に「その法、十二門を雲し十三法二十九界八十四科を用ひて之が都を爲す、凡そ諸門列ぬる所、或は齊行、或は各行、或は單位、或は雜位、或は間位、或は加法、或は鈞鎭連環、或は廣略、一千言の間を過ぎず、總て初分雜信解品一百三卷を攝して一字も違ふことあることなし」と云へる通りであつて、初分四百卷中、六卷の關法の攝するもの二百五十卷の多きに達して居る。通關によりて省略さるゝもの尙此の外にもある。若し具さに重言增語を省略すれば初會は第二會と多く異るものでない。既に葛臂の綱要には第二分乃至第五分は初分と上略の異に過ぎないと說いて居る。

第三分は三十一品、五十九卷あり第二分と同合同じからず、亦た常啼法涌二品を缺く。この第二分第三分に於て元と常啼法涌二品を具ふること別出弘通せる大品の如くなるべきも、第一會に廣說せるが故に集大成に當りて省略せられたるものと考へらる。第四分は二十九品一十八卷ありて隨順品第二十九にありて集文初二三分と同じくない。第五分は二十四品十卷にして第四分よりも略せらる。別途の小品の類である。而して小品は道行等の初出經には文約にして義豐、初會二會三會等はその增語敷衍廣釋たることは文相によるも通關によるも明らかである。

第六分からは前五分の廣略具約の差とは異りて、般若觀空の教理に立つも別樣の文義對機を以てする。第六會十七品八卷は至元法寶勘同錄には蕃缺とするもので、正藏になきも、丹珠藏（續藏）に之を見るを得、勝天王問般若義を述ぶるものである。第七分は文殊問般若で、智慧を表する文殊を別出するは、須菩提解空の小品般若に對して、大品に大迦葉、舍利弗、迦旃延等の大慧羅漢の般若觀を出すと異曲同巧である。第八分は濡首分衞に就て般若を示す。第九分は早く道行小品と並行せる古般若にして數本の別譯あり、色聲を以て佛を見聞せず、空に道、法、般若を觀る、增一阿含の解空と一味相通ずるものがある。第十分は理趣分般若で密敎と相通ずるもの、第十一分より第十六分に至る六人會は次第して六度を廣說せるもの、殊に施戒般若に於て詳かである。此等の諸會諸部般若の比較と內容とは指要錄（惟白）知津（智旭）佛敎經典概說（拙著、第二章、第一節乃至第三節に廣說せり參照）等にて詳かにするを得。

❼（參考） 內典錄第五、記經圖紀第四、開元錄第八、貞元錄第一一 （椎尾辨匡）

大般若波羅蜜多經 ❶（日）Dai-han-nya-ha-ra-mit-ta-kyō. ❷二册 ❸存 ❹玉山隆蓮著 ❺大正五刊 ❻（高大、一・二六） ❼大阪勝尾寺

大般若波羅蜜多經關法 ❶（日）Dai-han-nya-ha-ra-mit-ta-kyō-kwan-ji-fa. （支）Ta-pan-jo-po-lo-mi-to-ching-kuan-fa. 大般若經關法 ❷六卷 ❸存、卍續一・三七・四 ❹宋代大隱排定 ❺大般若經關法の下の下を見よ。 ❼寫本（京大、藏・一六タ・九—一〇）

大般若波羅蜜多經第七曼殊子利分之二科 ❶（日）Dai-han-nya-ha-ra-mit-ta-kyō-dai-shichi-man-jo-shi-ri-bun-no-ni-kwa. ❷一卷 ❸存 ❹梁道 ❼寫本（正大、一一二三・二）

大般若波羅蜜多經第十般若理趣分 ❶（日）Dai-han-nya-ha-ra-mit-ta-kyō-dai-jū-han-nya-ri-shu-bun. 國譯大般若波羅蜜多經第十般若理趣分 ❸存、國譯大藏經經部第三 ❹椎尾辨匡譯

大般若波羅蜜多經般若理趣分述讚 ❶（日）Dai-han-nya-ha-ra-mit-ta-kyō-han-nya-ri-shu-bun-jut-san. （支）Ta-pan-jo-po-lo-mi-to-ching-pan-jo-li-chisi-fen-shu-tsan. 大般若經理趣分述讚、般若理趣分疏 ❷三卷 ❸存、大正三三・二五 No. 1699、卍續一・三八・二 ❹唐窺基（貞觀六—永淳元 A. D. 632—682）撰

❻此の書は三卷からで成り立つてゐる。其の第一卷には、先づ二首の偈文を以て佛を讚美し、次に此の經を讚說するに、『（一）經の宗旨を叙ぶ、（二）經の體性を顯はす、（三）經の勝德を彰はす、（四）經の本文を釋す』の四門を以てすることを述べて、前三門を詳解し、次に第四門たる經の本文を釋するに當り、先づ普通の經釋に隨つて、序文正宗分流通文の三分を明かにしてある。卽ち『如是我聞より、乃至圓滿淸白梵行なり』までを序文とし、爾の時世尊、諸の菩薩のために、甚深微妙云云より乃至略して是の如くの少分を略說す』までを正宗文とし、『時に薄伽梵云々より乃至信受奉行せり』までを流通分としてある。而して『如是我聞以下、般若金剛等諸如來無動無壞』までの本文を詳釋してある。

第二卷には『是薄伽梵住欲界頂他化自在天王宮中』より、『當經十六大菩薩定得

相傳宗と同本異譯」と云へるも、この書は『後魏實叉難陀譯』までを譯出してある。

第三卷には、『華嚴宗本末論』『華嚴宗綱要』『華嚴宗入法界品』『華嚴宗五教章』『華嚴宗五教章問答』『華嚴宗五教章問答』『華嚴宗五教章問答

法住寺(ほうじゅうじ) (漢語) Dai-hi-sen-gi. (中) Ta-pei-ch'an-i. (韓) Dai-hi-sen-gi. (ベ) Ta-pei-chi-ching. (梵) Hevajra-tantra (チベット) ヒ ケ ル ト ラ タ ン ト ラ 密教の経典。『金剛頂経』の三種の本尊の一。『大悲経』ともいう。

法華経(ほけきょう) (漢語) Dai-hi-sen-pō. (中) Ta-pei-ch'an-fa. (韓) Dai-hi-sen-pō. (ベ) Ta-pei-chi-ching. (梵) Saddharma-puṇḍarīka-sūtra. (チベット) ダ ム ペ ル ガ ル ム ド ゥ ル ワ ス ド ゥ ル ワ 仏教の教典。

法華経寺(ほけきょうじ) (漢語) Dai-hi-sen-pō-ji. (中) Ta-pei-ch'an-ho-chi-gi-gas-setsu. (韓) Ta-pei-ch'an-i. (ベ) Ta-pei-chi-ching. (梵) Saddharma-puṇḍarīka-sūtra. 日蓮宗の本山。

法隆寺(ほうりゅうじ) (漢語) Dai-hi-sen-pō. (中) Ta-pei-hsin-ch'an-ssu. (韓) Dai-hi-sen-pō. (ベ) Ta-pei-chi-ching. (梵) Saddharma-puṇḍarīka-sūtra. 聖徳太子の建立。

法隆寺伽藍縁起並流造化財帳(ほうりゅうじがらんえんぎならびにるぞうかざいちょう) (漢語) Dai-hi-sen-pō-ji-gas-setsu. (韓) Ta-pei-ch'an-i-ho-chi-gi-gas-setsu. (ベ) Ta-pei-chi-ching. 法隆寺の来歴を記した書。

法隆寺金堂釈迦如来像(ほうりゅうじこんどうしゃかにょらいぞう) (漢語) Dai-hi-sen-pō-kon-dō-shaka-nyo-rai-zō. (韓) Dai-hi-sen-pō-kon-dō-shaka-nyo-rai-zō. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching. 法隆寺の本尊。

法隆寺五重塔(ほうりゅうじごじゅうのとう) (漢語) Dai-hi-sen-pō-go-jū-no-tō. (韓) Dai-hi-sen-pō-go-jū-no-tō. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching. 法隆寺の塔。

法隆寺西院伽藍(ほうりゅうじさいいんがらん) (漢語) Dai-hi-sen-pō-sai-in-gara-n. (韓) Dai-hi-sen-pō-sai-in-gara-n. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching. 法隆寺の伽藍。

法隆寺伝来(ほうりゅうじでんらい) (漢語) Dai-hi-sen-pō-den-rai. (韓) Dai-hi-sen-pō-den-rai. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching. 法隆寺の来歴。

法隆寺東院伽藍(ほうりゅうじとういんがらん) (漢語) Dai-hi-sen-pō-tō-in-gara-n. (韓) Dai-hi-sen-pō-tō-in-gara-n. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching. 法隆寺の伽藍。

法隆寺東院伽藍縁起並流造化財帳(ほうりゅうじとういんがらんえんぎならびにるぞうかざいちょう) (漢語) Dai-hi-sen-pō-tō-in-gara-n-en-gi-narabini-ru-zō-kazai-chō. (韓) Dai-hi-sen-pō-tō-in-gara-n-en-gi-narabini-ru-zō-kazai-chō. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching-en-gi-narabini-ru-zō-kazai-chō. 法隆寺の来歴を記した書。

法隆寺伽藍縁起(ほうりゅうじがらんえんぎ) (漢語) Dai-hi-sen-pō-gara-n-en-gi. (韓) Dai-hi-sen-pō-gara-n-en-gi. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching-en-gi. 法隆寺の来歴。

法隆寺縁起(ほうりゅうじえんぎ) (漢語) Dai-hi-sen-pō-en-gi. (韓) Dai-hi-sen-pō-en-gi. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching-en-gi. 法隆寺の来歴。

法隆寺縁起並流造化財帳(ほうりゅうじえんぎならびにるぞうかざいちょう) (漢語) Dai-hi-sen-pō-en-gi-narabini-ru-zō-kazai-chō. (韓) Dai-hi-sen-pō-en-gi-narabini-ru-zō-kazai-chō. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching-en-gi-narabini-ru-zō-kazai-chō. 法隆寺の来歴を記した書。

法隆寺縁起流造化財帳(ほうりゅうじえんぎるぞうかざいちょう) (漢語) Dai-hi-sen-pō-en-gi-ru-zō-kazai-chō. (韓) Dai-hi-sen-pō-en-gi-ru-zō-kazai-chō. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching-en-gi-ru-zō-kazai-chō. 法隆寺の来歴を記した書。

法隆寺流造化財帳(ほうりゅうじるぞうかざいちょう) (漢語) Dai-hi-sen-pō-ru-zō-kazai-chō. (韓) Dai-hi-sen-pō-ru-zō-kazai-chō. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching-ru-zō-kazai-chō. 法隆寺の来歴を記した書。

法隆寺流造化財帳並伝来記(ほうりゅうじるぞうかざいちょうならびにでんらいき) (漢語) Dai-hi-sen-pō-ru-zō-kazai-chō-narabini-den-rai-ki. (韓) Dai-hi-sen-pō-ru-zō-kazai-chō-narabini-den-rai-ki. (ベ) Ta-pei-chi-ching-o-ni-ching-ru-zō-kazai-chō-narabini-den-rai-ki

大悲胎藏護摩支分鈔 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-go-ma-shi-bun-shō. ❷三卷 ❸存 ❹眞寂(仁和二—延長五 A. D. 886—927)撰

大悲胎藏三昧耶曼荼羅 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sam-ma-ya-man-da-ra. ❷一卷 ❸存

大悲胎藏三昧耶曼荼羅圖
❶(日)Dai-hi-tai-zō-sam-ma-ya-man-da-ra-zu. (支)Ta-pei-t'ai-tsang-san-mei-ya-man-t'u-lo-t'u. ❷一卷 ❸存、大正圖像第二 ❹唐寧無長出、圓仁請來
❺本書は寧無長三藏が大日經を翻傳するに當り、經の謚密曼荼羅品に來つき諸尊の三昧耶形を圖出したもの、崔牧の大日經序に謂ゆる起聖衆樣圖、海雲の大日經傳法次第記に謂ゆる標幟壇儀法に相當する、胎藏圖像と併せて寧無長三藏嫡承の胎藏教を傳ふるものである。
❾寛仁三寫(醍醐寺)永萬元寫(石山寺)

大悲胎藏三昧耶略曼荼羅圖
❶(日)Dai-hi-tai-zō-san-ma-yi-ryaku-man-da-ra-zu. (支)Ta-pei-t'ai-tsang-san-mei-ya-lüe-man-t'u-lo-t'u. ❷一紙 ❸存、大正圖像第一 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)請來 ❾古寫(石山寺藏本)

大悲胎藏持誦不同記 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-ji-ju-fu-dō-ki. 大日經供養持誦不同、大日經持誦不同 ❷七卷 ❸存、大正七五・二九九 No. 2394、日本大藏經天台宗密教章疏第二 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—)撰 ❺大日經供養持誦不同の下を見よ。

大悲胎藏持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-ji-nen-shi-dai-hō. ❷二帖 ❸存 ❹圓城寺作 ❺平安朝時代寫 ❾、高大、寄・一・六二)

大悲胎藏手契 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-shu-kei. (支)Ta-pei-t'ai-tsang-shou-chi'. ❷一卷 ❼(參考)入唐新求聖教目錄

大悲胎藏諸說不同 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sho-setsu-fu-dō. 大悲胎藏普通大曼荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸說不同記、胎藏諸說不同記、諸說不同記 ❷十卷 ❸存、大正圖像第一、大日本佛教全書第四四 ❹眞寂(仁和二—延長五 A. D. 886—927)撰 ❺大悲胎藏普通大曼荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸說不同記の下を見よ。
❾寫本(立大、日大未・三三二)

大悲胎藏生大曼荼羅王嘉會壇中普通念誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sho-man-da-ra-ō-kai-dan-chū-fu-tsū-nen-ju-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—)
❺本朝台祖撰述密部書目に曰く「釋玄靜書中出之」云々。
❼(參考)諸宗章疏錄第二、密乘撰述目錄、山家祖德撰述篇目集卷上

大悲胎藏生曼荼羅王嘉會壇中普通念誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sho-man-da-ra-ō-kai-dan-chū-fu-tsū-nen-jū-shi-dai. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—)
❺諸宗章疏錄第三に曰く「按出=安然製作中?。同異更詳」云々。

大悲胎藏生曼荼羅王私記 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-shō-man-da-ra-ō-shi-ki. 悲生曼荼羅私記 ❷二卷 ❸存 ❹賢寶(正慶二—應永五 A. D. 1333—1398)撰
❺胎藏曼荼羅に關する書にして、卷一に大意、得名、最初圖畫、唐朝圖畫、本朝請來、本朝圖畫、圖畫品類、三部分別付五部分別、重位分別付三句相配、四身配屬、諸會分別付四大護院在處、現圖尊數の諸項を明し、卷二に中胎八葉院及遍知院の諸會圖につきて述べ、而も餘院に及ばず、未完成の本か、卷三以下散佚せしか。
❺眞治四寫 ❾(觀智院)

大悲胎藏大漫荼羅圖 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-dai-man-da-ra-zu. ❷一枚 ❸存 ❹尊空圖 ❺文化四刊 ❾(金剛三昧院)

大悲胎藏祕密阿闍梨持會要略 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-a-ja-ri-jū-e-yō-ryaku. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密阿闍梨持念要集 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-a-ja-ri-jū-nen-yō-shū. ❷三卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密壇金剛部持誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-dan-kon-gō-bu-ji-ju-shi-dai. ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三、本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄

大悲胎藏祕密壇都會天神供次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-dan-to-e-ten-shin-ku-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第二、本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄

大悲胎藏祕密壇金剛部持誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-kyō-kon-gō-bu-ji-ju-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第二

大悲胎藏祕密曼荼羅金剛部持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-kon-gō-bu-ji-nen-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第二、本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄

大悲胎藏祕密曼荼羅經金剛部持誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-kyō-kon-gō-bu-ji-ju-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第二

大悲胎藏祕密曼荼羅金剛部持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-kon-gō-bu-ji-nen-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密曼荼羅勝三世明王持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-shō-san-se-myō-ō-ji-nen-shi-dai-hō. ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密曼荼羅不動明王念誦略次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-fu-dō-myō-ō-nen-ju-ryaku-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密曼荼羅佛部持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-butsu-bu-ji-nen-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼

大悲胎藏護摩支分鈔 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-go-ma-shi-bun-shō. ❷三卷 ❸存 ❹眞寂(仁和二—延長五 A. D. 886—927)撰

大悲胎藏三昧耶曼荼羅 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sam-ma-ya-man-da-ra. ❷一卷 ❸存

大悲胎藏三昧耶曼荼羅圖
❶(日)Dai-hi-tai-zō-sam-ma-ya-man-da-ra-zu. (支)Ta-pei-t'ai-tsang-san-mei-ya-man-t'u-lo-t'u. ❷一卷 ❸存、大正圖像第二 ❹唐寧無長出、圓仁請來
❺本書は寧無長三藏が大日經を翻傳するに當り、經の謚密曼荼羅品に來つき諸尊の三昧耶形を圖出したもの、崔牧の大日經序に謂ゆる起聖衆樣圖、海雲の大日經傳法次第記に謂ゆる標幟壇儀法に相當する、胎藏圖像と併せて寧無長三藏嫡承の胎藏教を傳ふるものである。
❾寛仁三寫(醍醐寺)永萬元寫(石山寺)

大悲胎藏三昧耶略曼荼羅圖
❶(日)Dai-hi-tai-zō-san-ma-yi-ryaku-man-da-ra-zu. (支)Ta-pei-t'ai-tsang-san-mei-ya-lüe-man-t'u-lo-t'u. ❷一紙 ❸存、大正圖像第一 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)請來 ❾古寫(石山寺藏本)

大悲胎藏持誦不同記 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-ji-ju-fu-dō-ki. 大日經供養持誦不同、大日經持誦不同 ❷七卷 ❸存、大正七五・二九九 No. 2394、日本大藏經天台宗密教章疏第二 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—)撰 ❺大日經供養持誦不同の下を見よ。

大悲胎藏手契 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-shu-kei. (支)Ta-pei-t'ai-tsang-shou-chi'. ❷一卷 ❼(參考)入唐新求聖教目錄

大悲胎藏諸說不同 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sho-setsu-fu-dō. 大悲胎藏普通大曼荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸說不同記、胎藏諸說不同記、諸說不同記 ❷十卷 ❸存、大正圖像第一、大日本佛教全書第四四 ❹眞寂(仁和二—延長五 A. D. 886—927)撰 ❺大悲胎藏普通大曼荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸說不同記の下を見よ。
❾寫本(立大、日大未・三三二)

大悲胎藏生大曼荼羅王嘉會壇中普通念誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sho-man-da-ra-ō-kai-dan-chū-fu-tsū-nen-jū-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—)
❺本朝台祖撰述密部書目に曰く「釋玄靜書中出之」云々。
❼(參考)諸宗章疏錄第二、密乘撰述目錄、山家祖德撰述篇目集卷上

大悲胎藏生曼荼羅王嘉會壇中普通念誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-sho-man-da-ra-ō-kai-dan-chū-fu-tsū-nen-jū-shi-dai. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—)
❺諸宗章疏錄第三に曰く「按出=安然製作中?。同異更詳」云々。

大悲胎藏生曼荼羅王私記 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-shō-man-da-ra-ō-shi-ki. 悲生曼荼羅私記 ❷二卷 ❸存
❹賢寶(正慶二—應永五 A. D. 1333—1398)撰
❺胎藏曼荼羅に關する書にして、卷一に大意、得名、最初圖畫、唐朝圖畫、本朝請來、本朝圖畫、圖畫品類、三部分別付五部分別、重位分別付三句相配、四身配屬、諸會分別付四大護院在處、現圖尊數の諸項を明し、卷二に中胎八葉院及遍知院の諸會圖につきて述べ、而も餘院に及ばず、未完成の本か、卷三以下散佚せしか。
❺眞治四寫 ❾(觀智院)

大悲胎藏大漫荼羅圖 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-dai-man-da-ra-zu. ❷一枚 ❸存 ❹尊空圖 ❺文化四刊 ❾(金剛三昧院)

大悲胎藏祕密阿闍梨持會要略 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-a-ja-ri-jū-e-yō-ryaku. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密阿闍梨持念要集 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-a-ja-ri-jū-nen-yō-shū. ❷三卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密壇金剛部持誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-dan-kon-gō-bu-ji-ju-shi-dai. ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三、本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄

大悲胎藏祕密壇都會天神供次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-dan-to-e-ten-shin-ku-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第二、本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述目錄

大悲胎藏祕密壇金剛部持誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-kyō-kon-gō-bu-ji-ju-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第二

大悲胎藏祕密曼荼羅金剛部持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-kon-gō-bu-ji-nen-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密曼荼羅勝三世明王持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-shō-san-se-myō-ō-ji-nen-shi-dai-hō. ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密曼荼羅不動明王念誦略次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-fu-dō-myō-ō-nen-ju-ryaku-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密曼荼羅佛部持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-butsu-bu-ji-nen-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼

〔參考〕諸宗章疏錄第三

大悲胎藏祕密曼荼羅蓮華部持念次第法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-hi-mitsu-man-da-ra-ren-ge-bu-ji-nen-shi-dai-hō. ❷一卷 ❹玄靜(—延喜元 A. D. 901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第三

大悲胎藏悲生曼荼羅第三重釋迦眷屬及諸天印明種子梵號名位不同 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-man-da-ra-dai-san-jū-sha-ka-ken-zoku-yōbi-sho-ten-in-myō-shū-ji-bon-gō-myō-i-fu-dō. 釋迦會不同、胎藏界釋迦會不同 ❷二卷 ❸存、大正圖像第二、日本大藏經天台宗密教部章疏 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❺胎藏界釋迦會不同の下を見よ。 ❾(京都青蓮院藏)

大悲胎藏普通大曼荼羅中諸尊種子標幟形相聖位諸說不同記 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-fu-tsū-dai-man-da-ra-chū-sho-son-shu-ji-hyō-shi-gyō-zō-sho-i-sho-setsu-fu-dō-ki. 諸說不同記 ❷十卷 ❸存、大正圖像第一、大日本佛教全書第四四 ❹眞寂(仁和二—延長五 A. D. 886—927)撰
❺胎藏現圖曼荼羅の各院につき、大日經及び同疏、義釋の文を引いて、各院の旨趣及び經疏と現圖との差異などを示し、又一々の尊の漢名、梵號、密號、種子、三摩耶形を列記し、三摩耶形の圖を挿入し、次に尊形を說明して山圖(圓仁請來圖)或圖(宗叡請來圖)等との同異を比較してある。玆に現圖と稱せるは空海請來の曼荼羅を指すのである。その目次は卷第一に內胎八葉院、卷第二に內胎八葉院の餘、九尊座位、諸座衆像、四隅寶瓶、院々界道、卷第三に如來部壇、蓮花部壇、卷第四に金剛部壇、持明使者壇、卷第五に文殊壇、除蓋障壇、卷第六に虛空藏壇、地藏壇、卷第七に第三重釋迦壇、卷第八に釋迦壇南方諸天、卷第九に釋迦壇西方諸天、卷第十に釋迦壇北東二方諸天。
❺寛文六年寫 ❾(京都觀智院)(吉祥眞雄)

大悲胎藏曼荼羅經說現圖所傳決明鈔 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-man-da-ra-kyō-setsu-gen-zu-sho-den-ketsu-myō-shō. ❷未完 ❸存、大正圖像第一
❹隆譽撰
❺本書は大悲胎藏曼荼羅につき經說と現圖との所傳の相異を解明せんと試みたもの、著者隆譽阿闍梨につきては、其の傳歷を詳にせざるも、其の書本が既に藤原末期のものであり、或は著主の原本と見られ得ないでもない、且つ其の署名に奉教旨集とあるに依れば、是れ或は御室法親王の御命に由つて纂集したものかも知れぬ。蓋し胎藏曼荼羅につきては、經說の中、大悲胎藏曼荼羅、白檀曼荼羅、成就曼荼羅、宇輪曼荼羅、謚密曼荼羅等の種別あり、その八家請來の現圖の曼荼羅に、弘法大師、慈覺大師、智證大師、宗叡僧正及び圓行和尙等の異承あり。卽ち是等經說と現圖との所傳の相異を決定究明するために、大日經及び同疏を始め、演密抄、諸說不同記、石山七集、其の他の古章口說を援引して詳細に說明を下したもの、卷第一に中台、第一重東方如來部壇、北方蓮華部壇、卷第二に南方金剛部壇、持明使者壇の諸尊を解說し、第三卷巳下は惜い哉、今のところその所在を詳かにしない。
❾(東寺觀智院)

大悲胎藏密壇金剛界持誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-mitsu-dan-kon-gō-kai-ji-ju-shi-dai. ❷一卷 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄

大悲胎藏密壇金剛界部持誦次第 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-mitsu-dan-kon-gō-kai-bu-ji-ju-shi-dai. ❷一卷 ❼(參考)本朝台祖撰述密部書目

大悲胎藏瑜伽記 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-yu-ga-ki. ❷一卷 ❹圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891) ❼(參考)諸宗章疏錄第二、山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄

大悲胎藏蓮華部持念法 ❶(日)Dai-hi-tai-zō-ren-ge-bu-ji-nen-hō. ❷一卷 ❸存 ❹安然(承和八—延喜年間 A. D. 841—901—) ❼(參考)諸宗章疏錄第二、本朝台祖撰述密部書目、山家祖德撰述篇目集卷上、密乘撰述目錄

大悲大受苦說 ❶(日)Dai-hi-dai-ju-ku-setsu. ❷一卷 ❸存 ❹東陽圓月(文政元—明治三五 A. D. 1818—1902) ❾寫本(龍大、一五〇二・二〇三)

大悲代受苦事 ❶(日)Dai-hi-dai-ju-ku-no-koto. ❷一册 ❸存 ❹宥範(文永七—文和元 A. D. 1270—1352)口 ❺永正九寫、明應九寫 ❾(寶壽院)

大悲代受苦之事 ❶(日) Dai-hi-dai-ju-ku-no-koto. ❷一帖 ❸存 ❹宥算(—元祿二 A. D. 1689)口 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

大悲代受苦之事 ❶(日) Dai-hi-dai-ju-ku-no-koto. ❷一帖 ❸存 ❹仙順口 ❺寛延一五寫 ❾(寶龜院)

大悲之卷 ❶(日)Dai-hi-no-maki. ❷一卷 ❸存 ❹宗教大學研究科記念出版會編 ❺明治四四刊 ❿東京東光社

大悲の十恩 ❶(日) Dai-hi-no-jū-on. 新案說教大悲の十恩 ❷一卷 ❸存 ❹大宮秀賢 ❺明治四四刊 ❾(谷大、宗洋・二三五)

大悲比丘本願經 ❶(日)Dai-hi-bi-ku-hon-gwan-kyō. (支)Ta-pei-pi-ch'iu-pen-yüan-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻悲華經の抄出。 ❼(參考)出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

大悲分陀利經 ❶(日) Dai-hi-fun-da-ri-kyō. (支) Ta-pei-fen-t'o-li-ching. ❹大宮秀賢 ❺明治四四刊 ❿東京東光社

大悲の十恩 ❶(日) Dai-hi-no-jū-on. 新案說教大悲の十恩 ❷一卷 ❸存 ❹大宮秀賢 ❺明治四四刊 ❾(谷大、宗洋・二三五)

大悲比丘本願經 ❶(日)Dai-hi-bi-ku-hon-gwan-kyō. (支)Ta-pei-pi-ch'iu-pen-yüan-ching. ❷一卷 ❹失譯 ❻悲華經の抄出。 ❼(參考)出三藏記第四、法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

大悲分陀利經 ❶(日) Dai-hi-fun-da-ri-kyō. (支) Ta-pei-fen-t'o-li-ching. 大乘悲分陀利經、大乘大悲分陀利經、悲分陀利經 ❷八卷 ❸存、大正三・二三三 No. 158、鎌宙三、卍一〇・二、北127駒、南127駒、元123駒、明北176歌、清176歌、麗126

Dai-bi-ba 大悲婆 ❶(日) 大悲婆 ❷(漢) 大悲婆 ❸(中) 大悲婆 ❹(韓) 대비바 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih. ❻(満) 大悲婆 ❼(ベト) Đại bi bà ❽(タイ) มหาปชาบดี ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापती ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatī ⓬(パーリ) Mahāpajāpatī ⓭(チベット) Skyes-chen-ma ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö ⓰(トルコ) Büyük-dişi ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah ⓴(ラテン) Magna femina

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆 ❷(漢) 大悲婆 ❸(中) 大悲婆 ❹(韓) 대비바 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih. ❻(満) 大悲婆 ❼(ベト) Đại bi bà ❽(タイ) มหาปชาบดี ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापती ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatī ⓬(パーリ) Mahāpajāpatī ⓭(チベット) Skyes-chen-ma ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö ⓰(トルコ) Büyük-dişi ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah ⓴(ラテン) Magna femina

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun. (梵) Ta-pi-po-sha-wen-i. ❶(日) 大悲婆論 ❷(漢) 大悲婆論 ❸(中) 大悲婆論 ❹(韓) 대비바사론 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論 ❼(ベト) Đại bi bà luận ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษ ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्या ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyā ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyā ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqï ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilbur ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆論 ❷(漢) 大悲婆論 ❸(中) 大悲婆論 ❹(韓) 대비바사론 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論 ❼(ベト) Đại bi bà luận ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษ ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्या ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyā ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyā ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqï ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilbur ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih. ❶(日) 大悲婆論釋 ❷(漢) 大悲婆論釋 ❸(中) 大悲婆論釋 ❹(韓) 대비바사론석 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-ming-chang. ❻(満) 大悲婆論釋 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทาน ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदान ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidāna ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidāna ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆論釋 ❷(漢) 大悲婆論釋 ❸(中) 大悲婆論釋 ❹(韓) 대비바사론석 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih. ❻(満) 大悲婆論釋 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทาน ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदान ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidāna ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidāna ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'ao. ❶(日) 大悲婆論抄 ❷(漢) 大悲婆論抄 ❸(中) 大悲婆論抄 ❹(韓) 대비바사론초 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論抄 ❼(ベト) Đại bi bà luận sao ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานสาร ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानसार ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānasāra ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānasāra ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆論抄 ❷(漢) 大悲婆論抄 ❸(中) 大悲婆論抄 ❹(韓) 대비바사론초 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論抄 ❼(ベト) Đại bi bà luận sao ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานสาร ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानसार ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānasāra ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānasāra ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu. ❶(日) 大悲婆論釋疏 ❷(漢) 大悲婆論釋疏 ❸(中) 大悲婆論釋疏 ❹(韓) 대비바사론석소 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu. ❻(満) 大悲婆論釋疏 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải sớ ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกา ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीका ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkā ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkā ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆論釋疏 ❷(漢) 大悲婆論釋疏 ❸(中) 大悲婆論釋疏 ❹(韓) 대비바사론석소 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu. ❻(満) 大悲婆論釋疏 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải sớ ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกา ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीका ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkā ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkā ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-ji. (梵) Ta-pi-po-sha-lun-chih-shih. ❶(漢) 大悲婆論釋集 ❷(漢) 大悲婆論釋集 ❸(中) 大悲婆論釋集 ❹(韓) 대비바사론석집 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-ji. ❻(満) 大悲婆論釋集 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานสังคหะ ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानसंग्रह ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānasaṃgraha ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānasaṃgaha ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-ji. (梵) Ta-pi-po-sha-lun-chih-shih. ❶(漢) 大悲婆論釋集 ❷(漢) 大悲婆論釋集 ❸(中) 大悲婆論釋集 ❹(韓) 대비바사론석집 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-ji. ❻(満) 大悲婆論釋集 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานสังคหะ ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानसंग्रह ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānasaṃgraha ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānasaṃgaha ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu. ❶(日) 大悲婆論釋疏 ❷(漢) 大悲婆論釋疏 ❸(中) 大悲婆論釋疏 ❹(韓) 대비바사론석소 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu. ❻(満) 大悲婆論釋疏 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải sớ ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกา ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीका ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkā ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkā ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i. ❶(漢) 大悲婆論釋疏纂要 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要 ❹(韓) 대비바사론석소찬요 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải sớ tuyển yếu ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขป ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेप ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepa ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepa ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆論釋疏纂要 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要 ❹(韓) 대비바사론석소찬요 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập tuyển yếu ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขป ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेप ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepa ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepa ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i. ❶(日) 大悲婆論釋疏纂要 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要 ❹(韓) 대비바사론석소찬요 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập tuyển yếu ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขป ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेप ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepa ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepa ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❶(日) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❹(韓) 대비바사론석소찬요초 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập tuyển yếu sao ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขปสาร ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेपसार ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepasāra ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepasāra ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❹(韓) 대비바사론석소찬요초 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập tuyển yếu sao ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขปสาร ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेपसार ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepasāra ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepasāra ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❶(日) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❹(韓) 대비바사론석소찬요초 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập tuyển yếu sao ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขปสาร ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेपसार ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepasāra ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepasāra ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius

Dai-bi-ba-sha-ron-shō. (漢) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❶(日) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❹(韓) 대비바사론석소찬요초 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập tuyển yếu sao ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขปสาร ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेपसार ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepasāra ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepasāra ⓭(チベット) Skyes-chen-ma-ḥgrel-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa-ḥgrel-bu-ḥdus-pa-ḥbyed-pa-ḥbyed-pa ⓮(ウイグル) Ulug-ötükä-nïng-yorïqïnïng-ötüg-ün-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-nin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓯(モンゴル) Ulaan-ötögönö-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge-yin-tayilburin-ü-tayilburin-üge ⓰(トルコ) Büyük-dişi-nïn-yorumunun-nedeni-nin-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu-nun-yorumu ⓱(ペルシア) Bozorg-ādīnā-yi-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓲(アラビア) Al-ʿaẓīmatu-sharḥ-i-nām-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ-i-sharḥ ⓳(ヘブライ) Ha-gdolah-perush-ha-shem-perush-perush-perush-perush-perush ⓴(ラテン) Magna femina-commentarius-nomen-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius-commentarius

一 第叢書類数 ❶(日) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❷(漢) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❸(中) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❹(韓) 대비바사론석소찬요초 ❺(蒙) Ta-pi-po-sha-lun-ch'i-shih-shu-chüeh-i-ch'ao. ❻(満) 大悲婆論釋疏纂要抄 ❼(ベト) Đại bi bà luận giải tập tuyển yếu sao ❽(タイ) มหาปชาบดีวิภาษนิทานฎีกาสังเขปสาร ❾(ビルマ) ∅ ❿(ネパール) महाप्रजापतीव्याख्यानिदानटीकासंक्षेपसार ⓫(サンスクリット) Mahāprajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkṣepasāra ⓬(パーリ) Mahāpajāpatīvyākhyānidānaṭīkāsaṃkhepasāra ⓭(チベット) Skyes-chen-

大毘婆沙論條目 ❶(日)Dai-bi-ba-sha-ron-jō-moku. 毗婆沙論條目 ❷一卷 ❸存 ❹明治一四寫(正大、一一九五・五一)寫本(龍大、研佛)

大毘婆沙論知津 ❶(日)Dai-bi-ba-sha-ron-chi-shin. ❷一卷 ❸存 ❹普寂 德門(寶永四—天明元 A. D. 1707—1781)撰 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

大毘婆沙論通覽記 ❶(日)Dai-bi-ba-sha-ron-tsū-ran-ki. 阿毘達磨大毘婆沙論通覽記 ❷四卷 ❸存 ❹蓮常(—文化一四 A. D. 1817—)記 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

大毘婆沙論備忘 ❶(日)Dai-bi-ba-sha-ron-bi-bō. ❷一册 ❸存 ❹寫本(智、さ・二・左・一二)

大毘婆沙論別用鈔 ❶(日)Dai-bi-ba-sha-ron-betsu-yō-shō. (支)Ta-p'i-p'o-sha-lun-pieh-yung-ch'ao. ❹本立遠 ❼〔參考〕 新編諸宗教藏總錄第一

大毘婆沙論文義次第 ❶(日)Dai-bi-ba-sha-ron-mon-gi-shi-dai. (支) Ta-p'i-p'o-sha-lun-wen-i-tz'ū-ti. ❷一卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷下、奈良朝現在一切經疏目錄2561

大毘婆娑抄 ❶(日)Dai-bi-ba-sha-shō. (支)Ta-p'i-p'o-sha-ch'ao. ❷十卷 ❼(參考) 注進法相宗章疏

大毘盧舍那覺華鈔 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kaku-ke-shō. 大日經疏覺華鈔、大疏覺華鈔、大日經疏那覺華鈔、覺華鈔、開敷覺華鈔、大日經疏開敷覺華鈔 ❷十七卷或五卷 ❸存 ❹妙瑞(元祿九—明和元 A. D. 1596—1764)述 ❻大日經疏覺華鈔の下を見よ。 ❾(智、お・六・中・一一)(京專)

大毘盧遮那經 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-kyō. (支)Ta-p'i-lu-che-na-ching. 大毘盧遮那成佛神變加持經、大日經 ❷七卷 ❸存、大正一八・一No. 848、鎌開一、卍一二・六—七、北426詩、南439詩、元433詩、明北536賢、清526賢、麗438詩、天433詩、指397柔、法420柔、至622青、明南427讚、Ni. 530、佛教大系第一九 ❹唐善無畏(貞觀一一—開元二三 A. D. 637—735)、一行(弘道元—開元二五 A. D. 683—727)共譯 ❻大毘盧遮那成佛神變加持經の下を見よ。 ❼(參考) 本朝古疏撰述密部書目、密乘撰述目錄、山家疏德撰述當目集卷上 ❹永久—久安年間寫(寶菩提院)德川時代刊(寶龜院)元祿六刊(正大、一一六〇・四四)

大毘盧遮那經阿闍梨住阿字觀門 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kyō-a-ja-ri-jū-a-ji-kwan-mon. (支) Ta-p'i-lu-che-na-ching-a-she-li-chu-a-tzū-kuan-mên. 四重宇輪曼荼羅成身觀、三重布字成身曼荼羅觀行、阿字觀門 ❷一卷 ❸存、大正一八・一九三No. 863、卍續二・九・四 ❹唐代惟謹述 ❻阿字觀・字輪觀・布字觀が明されてある。又此の書は二部から成り、第一部は大日經第五卷の阿闍梨眞實智品第十六に相當し、第二部は同卷の布字品第十七の轉載である。大日經の此の二品は說明が極て簡短で有つて、了解し難い點があるが、今の阿字觀門を一讀して、其の意の存する所が明かになる。

阿字は卽ち行者の眞實心にして、一切眞言の能生の母體である。阿字は阿剌囉(arala)にして不動の義あり、不動とは卽ち菩提心の義、又阿字に本不生(anutpada)の義あり、諸字能生の體にして、一切の字は皆此の阿字から出生する。隨つて阿字は一切の字に遍在する所から遍、一切處法門と名づくる、眞言行者は此の字を觀じて、遍一切處の法門に通達悟入して、自身大日如來の佛身を證成し、金剛不壞の身を成ずと言はれてある。

次に布字觀に關して、この布字の法は、卽ち是れ大悲胎藏三重祕密曼荼羅にして、眞明の行を集め、傳授に堪ゆる者に對して始て師は親しく口授を以て之れを傳ふ可きであると說かれてある。

此の文には亂說があり、易く讀過し得ない所がある。又梵有二音、一名阿剌囉云云と有るだけで、次の本不生の梵音が擧げて無い所から見る時に不備の點あることが解る。之れに依て本書が未再治であることが想像せられる。

❾寫本(京大、藏・一六マ・二)

(神林隆淨)

大毘盧遮那經開題 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kyō-kai-dai. 大日經開題 ❷一帖 ❸存 ❺元享四寫 ❾(寶龜院)

大毘盧遮那經儀軌 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kyō-gi-ki. 大日經儀軌 ❷三卷 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)集 ❻本朝古疏撰述密部書目に曰く「經中眞言一卷。印契一卷。補闕一卷。唐無此本」云々。

大毘盧遮那經教主義 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kyō-kyō-shu-gi. ❷一卷 ❸存 ❹常操(寶永六—明和二 A. D. 1709—1765)撰 ❻汎く諸經論を引きて本地身教主說を主張す。 ❺元文三刊

大毘盧遮那經供養次第法疏 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-kyō-ku-yō-shi-dai-hō-sho. (支)Ta-p'i-lu-che-na-ching-kung-yang-tz'ū-ti-fa-su. 不思議疏 ❷二卷 ❸存、大正三九・七九〇No. 1797、鎌倉八、卍續一・三七・二 ❹唐不可思議撰 ❻本疏は大日經第七卷の註釋で、零妙寺の僧釋不可思議は、親しく善無畏三藏の講席に侍し、同三藏の講義を筆錄したものが、卽ち本書である。この大日經第七卷を供養次第法と云ひ、善無畏三藏が北天竺の乾陀羅國で、感得したもので、その感得の經を書寫し二本を作り、一本は同國の國王に獻じ、他の一本を三藏が唐に所持して來られたもので、此の供養次第法を釋したものが、卽ち此の疏である。この供養次第法は五品に分類されて居り、今の疏は上下二卷に分れて矣張、五品と成つてゐる。卽ち

疏卷上(七九〇、A)

眞言行學處品第一(七九〇、A)

增益守護淸淨行品第二(七九三、C)

疏卷下(七九八、C)

供養儀式品第三(七九八、C)

持誦法則品第四(八〇三、B)

眞言事業品第五(八〇六、A)

❾平安朝時代寫(寶菩提院) 鎌倉時代寫(寶龜院)康和四寫(寶壽院) 刊本(高大、寄・一・三四)(京大、藏・一六タ・一二)(立大、A二〇・二二)

大毘盧遮那經供養次第法疏 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-kyō-ku-yō-shi-dai-hō-sho. 國譯大毘盧遮那經供養次第法疏 ❷一卷 ❸存、國譯密敎論釋部第三・四

大毘盧遮那經廣大儀軌 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-kyō-kō-dai-gi-ki. (支) Ta-p'i-lu-che-na-ching-kuang-ta-i-kuei. 廣大儀軌、廣大軌、大悲胎藏 ❷三卷 ❸存、大正一八・九〇No. 851、鎌倉六、卍續一・三・三 ❹唐善無畏譯 ❻この書は惟謹の奧書に依れば、善無畏大國師から、海東新羅國の僧玄超阿闍梨に付屬し、阿闍梨は青龍寺僧慧果阿闍梨に付屬し、慧果は法潤阿闍梨に付屬されたので、あると言はれてある。次に雲雲寺の慧光師の奧書には、本書は善無畏三藏の譯で宗睿僧正の請來せられたものであるが、今の書は未再治本であるらしいと言つてある。

上中下三卷は胎藏次第法の基本と成るものでは有るが、未だ作法次第に適するやうには作られて無い。上卷には九方便から乃至一切法平等開悟に至るまでの印契と眞言とが明されてある。中卷から下卷にかけて胎藏曼荼羅中の部主部母等の諸尊の種子・尊形・位置・眞言などが說かれてある。曼荼羅を明す順序は、遍知院から說き起し、蓮華部院から外金剛部院に至り、最後に中臺八葉院を出してあるが、この順序に注意す可きものがある。

卷之上(九〇、B)

歸敬序と九方便とあり、九方便には印契と眞言と偈文とが揭げてある。次に法界生・降伏四魔三昧・普覺地神偈・五輪觀・道場觀・轉法輪・三世無碍力明妃・觀法身・虛空藏明記・入三昧耶・淨法界・吉祥法輪・金剛甲冑・法界生・大慧刀・吉祥法螺・大印・毫相藏・大鉢・施無畏・與願・佛眼・鉤・索・如來臂・如來臍。如來藏・大方昧耶結大界・高峯觀三昧・大力大護・四大結護・不動尊・閻伽香水・塗香・如來座・入佛三昧耶・獻華・焚香・飲香・燈明・虛空藏明妃・五讚(佛・法・僧・普賢・金剛手)・如來頂・如來甲・如來普光・如來舌相・如來語門・如來牙・如來辯說・如來念處・一切法平等開悟等の印契と眞言とが明されてある。

卷之中(九八、C)

この卷と下卷とは、主として胎藏曼荼羅が說き示されてある。中卷に於ては遍知院から說き起され、蓮華部院・金剛部院・持明院・除蓋障院・虛空藏院・外金剛部院が示されてある。

卷之下(一六〇、B)

中臺八葉院と百光遍照の眞言と法界三昧と諸大乘經典の中で、華嚴・涅槃・楞伽・思益等の經を讀誦して、諸尊に對し法樂を伸べすべきことが說かれてある。 (神林隆淨)

大毘盧遮那經指歸 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kyō-shi-ki. 大日經指歸、大日經旨歸 ❷一卷 ❸存、大正五八・一二No. 2213、大日本佛教全書第二六、日本大藏經 密敎部章疏卷上一、天台小部集釋之內 ❹圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891) ❻章通の智證大師年譜(佛全二八ノ一三三五)に「仁壽元年(A. D. 851)三十八歲。入唐求法。五月二十四日著=太宰府。住=四王院。遣=大日經心目・並指歸各一卷」とあるがこれは誤り。「講翼」に敬光師は「今文に入唐求法沙門珍遠とあり、又文の中に皆釋云といひ疏云と云はない。知證大師は四十五歲歸朝の後に義釋目錄を製して疏と釋との別を定めた。此時以後は義釋を用ひたが以前は疏釋の別が確定してゐない。故に本書は歸朝後の作である」と。恐らく天安二年歸朝の年の作ならんか。本書は三段に分る。一は序。二は正釋判敎相。三は總結。第一の序文は二節よりなる。初めには大日經旨歸を序し、次に撰述の由來。ここの下で他師の謬判を擧ぐ。卽ち「唐朝の老宿(維鍾・廣修)は醍醐を午酥に貶し、本國の幼童(空海・法相宗の人師)は甘露を毒乳に濫ず」といふ。この文によつて本書は有名となつた。第二の正釋敎相は三門に分つ。先づ他師との問答を出し、次に自宗の敎義を二十七條に分つ。後は總じて判釋す。他師問答は廣修・維鍾が大日經を方等部の攝とした のに對する問答。自義を建立するとは隨他・隨自・隨自他の三說によつて佛法を分別すべきである。佛敎は機に隨つて說けられる。機は四種に分る。故に敎も四種となる。今諸宗の徒皆一隅を守つて本師に背くから經文と疏文とを案じて二十七條を連ねてこの守文守義の過ちを除くと記してゐる。其の說の眼目たる點は一大圓敎說。大日敎主。阿字體大。四種曼荼羅等の部敎の說及び大日經の主要敎義を論じ、第三の總判釋卽ち通會に至つて密敎は橫に一切佛敎を統ぶと述べ、諸宗特に弘法大師の十住心說を破し、天台の四敎判釋が密敎の義と一致すると云ひ、天台大師の學說を成立せしめ、且つ天台大師の說は總持門に攝せられるといひ、密敎と天台宗と判敎とは一致する旨を明したもの。

❼(注釋) 大日經指歸講翼一卷敬光 〔參考〕 諸宗章疏錄第二、 日本天台宗章疏目錄、本朝古疏撰述密部書目、山家疏德撰述當目集卷上 ❺延寶五刊 ❾(正大、一一六二・一四八)(高大、一・三四) (田島德雲)

大毘盧遮那經指歸並序抄 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-kyō-shi-ki-narabini-jo-sho. ❷一軸 ❸存 ❺正應三寫 ❾(寶壽院)

大毘盧遮那經主義 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kyō-shu-gi. ❷一卷 ❸存 ❹弘道(—安永頃 A. D. 1772—1780—)撰 ❺安永九刊

大毘盧遮那經住心鈔 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-kyō-jū-shin-shō. 底瑟多千栗多鈔、大日經干栗多鈔、大日經住心鈔、大毗盧遮那住心鈔 ❷七卷 ❸存、大日本佛教全書第四二 ❹信證(應德三—康治元 A. D. 1086—1142)

大師講（ダイシカウ）

大師講（ダイシカウ）

大師講（ダイシカウ）

十四図

❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jim-ben-ka-ji-kyō. 国 譯大毘盧遮那成佛神變加持經

❷(日)Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jim-ben-ka-ji-kyō. 国 大毘盧遮那成佛神變加持經

❸(日)Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jim-ben-ka-ji-kyō. 国 大毘盧遮那成佛神變加持經

❹ 僧 空海 A. D. 1846—1934) 日本の僧侶。真言宗豊山派管長。

大毘盧遮那成佛神變加持經

三種の秘密を説く。仏教の教理は、一切の人間は本来仏であるとする。この立場から、人間の欲望を肯定する。人間は、自己の内に宇宙の原理を内在させているとする。この思想は、密教の教理の中心である。

大毘盧遮那成佛神變加持經

❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jim-ben-ka-ji-kyō. 国 譯大毘盧遮那成佛神變加持經

❷(日)Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jim-ben-ka-ji-kyō. 国 大毘盧遮那成佛神變加持經

❸ 僧 空海 A. D. 1746—1834

經 ❸存、國譯一切經密教部第一 ❹神林隆淨譯

大毘盧遮那成佛神變加持經修眞言行大悲胎藏生大曼拏羅王普通念誦儀軌 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jin-ben-ka-ji-kyō-shu-gon-gyō-dai-hi-tai-zō-shō-dai-man-da-ra-ō-fu-tsū-nen-ju-gi-ki. (支) Ta-pi-lu-che-na-ch'êng-fo-shên-pien-chia-ch'ih-ching-hsia-chên-yen-hsing-ta-pei-t'ai-tsang-sêng-ta-man-na-lo-wang-p'u-t'ang-nien-sung-i-kuei. ❷三卷 ❸存、大正圖像第八 ❹宋日稱等譯 ❺皇祐三(A.D. 1051)

❻本書は大毘盧遮那成佛神變加持經の念誦儀軌として具にその印と眞言とを譯出したもの、特に一々印圖を出したる點に於て他に類例を見ないものである。一般に傳へらるゝ八家請來の胎藏の諸儀軌と異なり、唯宋仁宗の皇祐三年に梵才大師慧詢、惠恬大師文一及び西天梵室大師日稱等によつて新に譯出せられたものであつて所謂宋世新譯儀軌の一として頗る特色を有するものである。此の書夙に善慧大師成尊に由つて我國に托送せられ、治承三年書寫の一本、古く石山寺に秘藏せられたが、古來未だ入藏を見るに到らず、今回始めて大正藏經中に編錄されたものである。

❾(石山寺)

大毘盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jin-ben-ka-ji-kyō-ryaku-ji-shichi-shi-nen-ju-zui-gyō-hō. (支)Ta-pi-lu-che-na-ch'êng-fo-shên-pien-chia-ch'ih-ching-lüe-nien-sung-suei-hsing-fa. 大毘盧遮那經略示七支念誦法 ❷一卷 ❸存、大正一八・一七四No. 856、續圓一、卍二六・一〇、明北1388杜、清1388杜、麗1390執、至877映、明南1300學、N. 1393、三十帖策第一 ❹唐不空(神龍元—大曆九 A.D. 705—774)譯

❻七支とは三昧耶・法界生・金剛薩埵・不動尊・如來鉤・普通眞言・金剛甲冑であつて、これ等七支に皆印・眞言・觀想の三者が具つてあつて、印契は身密・眞言は口密・觀想は意密である。是の如く三密が一致相應するを眞言密教の妙行と稱する。

この七支念誦隨行法に對して、五支毗念誦要行法と稱するものがあつて、之を大日經略攝念誦隨行法と稱する(大正、一八、一七六)。謂ゆる五支とは三昧耶・不動尊・如來鉤・普通眞言・金剛甲冑の五であつて、七支の中から、法界生と金剛薩との二者を除いたものである。

❼(參考) 貞元錄第一五

(神林隆淨)

大毘盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法 ❶(日)Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jin-ben-ka-ji-kyō-ryaku-ji-shichi-shi-nen-ju-zui-gyō-hō. 國譯大毘盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法 ❸存、國譯一切經密教部第二 ❹岡田契昌譯

大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jin-ben-ka-ji-kyō-rengge-tai-zō-hi-shō-man-da-ra-kō-dai-jō-ju-gi-ki. (支) Ta-pi-lu-che-na-ch'êng-fo-shên-pien-chia-ch'ih-ching-lien-hua-t'ai-tsang-pei-shêng-man-t'a-lo-kuang-ta-ch'êng-chiu-i-hui-kuei. 大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會、大毘盧遮那成就儀軌、蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會、玄法寺儀軌、玄法軌 ❷二卷別本 ❸存、大正一八・一二七No. 853、續餘六、卍續二・九・四 ❺唐代法全撰

❻玄法寺儀軌と大體均しいものである。而して結印の說明も無く、眞言の意味も說明されて無いから、初學者には不便である。〔卷之上〕 供養方便會第一(一二七、B)。歸敬序・九方便・淨除三業道・金剛薩埵・金剛甲冑・警發地神・灑淨・受持地・塗神勸請。

祕密漫荼羅品第二(一二九、A)。入祕密漫荼羅法の偈・大惠力・大法螺等の諸眞言。梵讃・一切佛心・虛空眼明妃等の諸眞言。〔卷之下〕曼荼羅品之二(一三五、A)。地藏菩薩・寶手菩薩等の諸眞言・降伏四魔・一切智智眞言が明されてある。

(神林隆淨)

大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jin-ben-ka-ji-kyō-rengge-tai-zō-hi-shō-man-da-ra-kō-dai-jō-ju-gi-ki-ku-yō-hō-benn-e. (支) Ta-pi-lu-che-na-ch'êng-fo-shên-pien-chia-ch'ih-ching-lien-hua-t'ai-ts'ang-pei-shêng-man-t'a-lo-kuang-ta-ch'êng-chiu-i-hui-kung-yang-fang-pien-hui. 大毘盧遮那成佛神變加持經蓮花胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌、大毘盧遮那成就儀軌、蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會、玄法寺儀軌、玄法軌、玄軌 ❷二卷 ❸存、大正一八・一〇八No. 853、續餘六、卍續二・九・四 ❹唐代法全撰

❻本書は法全阿闍梨が玄法寺に居られた時に集錄したものである所から、之を玄法寺儀軌と呼び。日本へは慈覺大師に依つて請來せられたもので、その內容は青龍寺儀軌と大體に於て均しいものであるが、三身の梵讃なぞは、青龍寺儀軌のものよりは、遙に長文句である。〔第一卷〕 供養方便會第一(一〇八、C)。歸敬序・作禮・出罪等の九方便・法界生・金剛輪・金剛甲・無能堪忍・警發地神・灑淨・地神勸請偈・持地眞言。

祕密曼荼羅法品之一(一一〇、A)。入漫荼羅偈・大寶刀・大法螺・蓮華等の諸眞言・梵讃・次に一切佛心・虛空眼明妃等の諸眞言。〔第二卷〕 曼荼羅品之二(一一七、B)。地藏菩薩・寶處菩薩等の諸眞言が明されてある。

(神林隆淨)

大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提幢標幟普通眞言藏廣大成就瑜伽 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-jō-butsu-jim-ben-ka-ji-kyō-rengge-tai-zō-bo-dai-dō-hyō-shiki-fu-tsū-shin-gon-zō-kō-dai-jō-ju-yu-ga. (支)Ta-pi-lu-che-na-fo-shên-pien-chia-ch'ih-ching-ta-chiao-hsiang-ch'êng-p'u-t'ang-ta-ti-chi. ❷二卷 ❸存、大正五一・七八三No. 2081、卍續一・九五・五 ❹唐代海雲記

❻この次第記は兩部大法相承師資付法記とも云ひ、現に大正藏經では、此の名稱を用ゐて居る。上下二卷ある中で、大正藏經は上卷に於て金剛界付法次第を出し、下卷に於て大日經付法次第を出してある。淨住寺の海雲は前者を大和八年甲寅仲秋月二十日に書し、後者を十月上旬有八日に記し已つたことにしてあるから、大正藏經の次第が正しいのであるが、續藏には上卷を大日經傳法次第記とし、下卷を金剛界傳法次第記としてある。

本經は金胎兩部の大經の內容を略記し、且つ相承の次第を明してある。金善互授記は此の次第記が本據と成つて居る。台密に於ては此の次第記に依つて、兩部別々の相承說を執り、東密に於ては、弘法大師の付法傳に依つて、兩部不二の相承說を正しいと見て居る。この次第記は圓仁・圓載・圓珍・宗睿・遍明等の後入唐諸家の將來したものである。

東密に於て本書に對して信用しないのは、付法傳の兩部不二說に異つて、兩部別々の相承說を爲して居るからであるが、本書に又多くの誤傳がある。その最も著しいのは、善善長三藏の支那に着された年次を開元七年と記してあることである。貞元新定釋敎目錄第十四には、以開元四年景辰、大寶梵本、來達長安、祕於興福南院安置、次後五年丁巳、於菩提院、譯虛空藏求聞法一卷云云(大正五五・八七四)とあり、開元四年に善無長三藏が來唐せられたことは、定說と成つて居るにも拘はらず、今の次第記は開元七年說を唱へて居る。之れ明に誤謬である。東密では斯の如き幾多の誤謬あることを指摘して、本書の依用するに足らないことを主張して居る。本書の誤謬を痛烈に指摘してあるのは呆寶の玉印鈔である。

❾寫本(京大、藏・二四タ・一一)(神林隆淨)

大毘盧遮那大敎王相承資血脈圖 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-dai-kyō-ō-sō-jō-shō-ketsu-bysku-zu. ❷一卷 ❸存、日本大藏經天台宗密敎章疏第一、大日本佛敎全書第二八智證大師全集第四台金血脈圖之內 ❹圓珍撰

大毘盧遮那佛眼修行儀軌 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-butsu-gen-shu-gyō-gi-ki. (支)Ta-pi-lu-che-na-fo-yen-hsiu-hsing-i-kuei. 佛眼修行儀軌、佛眼儀軌 ❷一卷 ❸存、大正一九・四一一No. 931、續餘一、卍續二・九・三、祕密儀軌集第一三之內 ❹唐一行(弘道元—開元一五 A.D. 683—727)述

❻本儀軌は獨時不動明王の句で、始つて居るが、恐らく、最初の部分に缺けて居る所があるのではなからうかと思はれる。この儀軌中には不動明王の印と眞言と形相とが明されてある。次に威怒降三世明王・軍荼利明王・六足尊明王・金剛藥叉明王・馬頭明王・無能勝明王・一字佛頂明王・佛眼明妃・觀漫荼羅・觀界道・召請・圓伽・華座・塗香・華・燒香・飲食・燈明・普賢・行願・加持念珠の諸作法が明され、これ等二十一の作法は金剛手菩薩の說かれたものと成つてゐる。

次に五輪五色が明されてあるが、之れを世尊印可の言と說いてある。

この儀軌は金剛手菩薩の說かれた部分と如來の說かれた部分との二部から成つて居る。而して前者に於ては佛眼前の作法が主要と成つて居るから、佛眼修行儀軌と稱する。佛眼佛母尊の法は佛部法中に於て重ぜられて居る。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❾寫本(立大、藏・一六タ・一四)

(神林隆淨)

大毘盧遮那佛眼修行儀軌 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-butsu-gen-shu-gyō-gi-ki. 國譯大毘盧遮那佛眼修行儀軌 ❸存、國譯密經軌部第四

大毘盧遮那佛說要略念誦經 ❶(日) Dai-bi-ru-sha-na-bus-setsu-yō-ryaku-nen-ju-kyō. (支)Ta-pi-lu-che-na-fo-shuo-yao-lüe-nien-sung-ching. 要略念誦經 ❷一卷 ❸存、大正一八・五五

No. 849″ 編因1″ 卍續1・二・三 ❹法華經

❺般若經

❻佛教法の根本を明かす。仏教法は五蘊・無我・縁起・中道・四諦・八正道・十二因縁・三法印・涅槃寂静・三昧・三解脱・三学・三帰・五戒・十善・六波羅蜜・四無量心・四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覚支・八聖道・十八不共法・十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈・大悲・三十二相・八十種好・四禅・四無色定・八解脱・八勝処・九次第定・十遍処・十二縁起・十二因縁・十二支・十二門・十二処・十八界・四聖諦・四諦・四沙門果・四向四果・四念処・四正勤・四神足・五根・五力・七覚支・八聖道・八正道・八正道・八正

規定のもとに擧行され、供養會三十一日間の出仕僧。凡二千七十人餘。拈香僧凡八百七十六人。參詣受齋者僧凡二千六百五十人餘、無緣受齋僧凡七千二百人餘。僧數都合一萬二千八百九十九人。俗數凡二十萬五千三百三人。僧俗受齋都合凡二十一萬八千二百二人に及ぶと誌すから。如何にこの供養會が盛大なものであつたかと分る。

元祿五年四月會奉行の金珠院庸性、地藏院淨性の記錄したものである。

（紀氏隆眞）

大佛開眼供養並萬僧供養之記

❶(日)Dai-butsu-kai-gen-ku-yō-narabini-man-sō-ku-yō-no-ki. ❷一卷 ❸存、大本日佛教全書第一二二東大寺叢書第二 ❹英秀記 ❺元祿五(A. D. 1692)

❻本書は元祿五年三月八日より四月八日に亙り執行されたる奈良東大寺大佛開眼供養及び萬僧供養會の和文記錄である。

初め開白、中間、結願の差定と法式規定を記し、先規兩度の開眼は一箇日の法會作法であつたが、この度は特に大勸進公慶上人の發願で、諸國道俗男女を悉く結緣參詣せしむるため、三十箇日作法を延ばし、諸寺諸山よりの結緣出仕の法事を許したことを記した後、三月八日初日開白專寺學侶衆徒行列の次第を載せ、其れより四月七日迄諸宗諸寺出仕の模樣を錄し、最後結願の四月八日專寺大衆及導師安井御門跡道恕大僧正出仕行列の有樣を詳錄してゐる。

「元祿五年四月下旬、總持院法印英秀、執筆高島玄瑞重信」の奥書がある。庸性の大佛開眼供養記と併せ讀むべき書である。

（紀氏隆眞）

大佛供養

❶(日)Dai-butsu-ku-yō. ❷(參考) 淨土眞宗聖教目錄

大佛供養記

❶(日) Dai-butsu-ku-yō-ki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三

❻本書は慶長十九年七月京都方廣寺大佛供養の記錄で、其の內容は供養會出仕の眞言宗寺院の列名帳である。

京都方廣寺大佛は天正十四年豐臣秀吉の皇都擁護のため建立したもので、慶長元年大地震に破壞したものを同十五年秀賴再建し、慶長十九年供養會を執行して鐘銘事件を惹起したことは普ねく人の知る所である。本書は只眞言宗寺院の交名帳にすぎないが、而も本來合して五百四十二人、右の中本寺五十八人、末寺四百八十四人で、規定の五百人に十六人不足すと但書してゐる所を見れば、隨分大規模の供養會であつたことが窺はれる。天台宗五百口總名帳と併せ見るべき書である。奥に慶長十九年七月二十日の日附がある。

（紀氏隆眞）

大佛供養請僧天台宗五百口總名帳

❶(日) Dai-butsu-ku-yō-shō-go-ten-dai-shū-go-hyaku-kū-sō-myō-chō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三

❻本書は慶長十九年八月京都方廣寺大佛開眼供養出仕の天台宗五百口傳の列名簿である。

試に五百口の部屬を揭出すれば、山門東塔南谷十六人、同東谷二十七人、同北谷十八人、同西谷二十人、同無動寺十四人、山門西塔北谷十四人、同東谷八人、同南谷九人、同北尾五人、同南尾六人、山門橫川二十八人、三塔都合山門衆百六十五人。

自性院衆九人、榮源院衆六人、江北大吉寺五人、諸末寺衆四人、江北八幡寺五人、江州甲賀二人、東塔東谷末七人、江州長命寺三人、同飯道寺六人、同甲賀油日山四人、同海道十五人、同竹生島十一人、同金勝寺二人、勢州篤賀山四人、若州神宮寺三人、但馬國大峯山四人、京逢土七人、城州鞍馬寺十人、愛宕山二十人、眞如堂十三人、京遍四人、京遣迎院衆四人、京革堂二人、京清水寺三人、京祇園三人、西山參鈷寺三人、岩倉寺谷寺三人、八幡山九人、西山吉嶽寺十人、六角堂五人、二尊院十人、播州水無瀨六人、天王寺衆四人、多武嶽十三人、播州書寫山十人、伯州大山五人、播州法花寺位山六人、越州遊樂寺三人、和州吉野山六人、三川衆六人、備前國五人。

即ち五百口を揭へるため伯州備前等からさへ參會して居ることが分る。又叡山三塔百六十五人の交名を見れば、元龜二年九月信長に燒かれ全山焦土と化した北嶽も、關原星霜四十三、昔日の面影はなくとも迫々恢復の運に向ひしを寫ふことが出來る。

（紀氏隆眞）

大佛供養法具方帳

❶(日) Dai-butsu-ku-yō-hō-gu-hō-chō. 大佛御供養法具方帳 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三 ❹松井伊豆 ❺慶長一九(A. D. 1614) ❻大佛御供養法具方帳の下を見よ。

（紀氏隆眞）

大佛供養物語

❶(日) Dai-butsu-ku-yō-mono-gatari. ❷一卷 ❸存、國文東方佛教叢書第一輯第九 ❹慶宣

❻本書は法然上人の弟子俊乘房重源が、宋に渡つて、上人の一宗相承に仰ぐ五祖、卽ち唐宋二代の高僧、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の五影像並に淨土曼陀羅を將來し、師法然上人を導師として東大寺半作の軒下に於てこれ等を供養し奉つた時、上人の說法よく參詣の諸大名高家をはじめ、三論法相諸宗の衆僧碩學を敎化して歡喜讚仰せしめたといふことを叙述したものである。

最初、法然上人は淨土宗の隆盛を祈む南都北嶺の僧侶等に僧誘せられてゐたので、導師を辭したため、比叡南都三井の三僧三座の說法となつたのであるが、それは上藏達をも敎化し得ず、再びの願望によつて上人は終ひに座を立ち、念佛の奥義より說いて法然敎の至極を開明し、上人に恥辱をさへ與へようとした餘宗の惡僧等をも歸信せしめるに至つたといふことを物語つてゐる。短篇な物語草子ではあるが、上人の說法を以てこの物語の主題としてゐるところに尊さを認めることが出來る。又此の物語の內容が法然上人傳記に現はれてゐるところからその參考資料とすることも出來るのである。

❼(參考) 法然上人行狀畫圖第六卷、本朝祖師傳記繪詞第二、法然上人傳記第二下、

法然上人傳第三 ❺享祿四年二月二日書寫畢

（關根靜雄）

大佛慶讚集

❶(日)Dai-butsu-kei-san-shū. 大佛殿慶讚集 ❷一卷 ❸存 ❹北河原公海編 ❺大正五刊 ❻(龍大)(京大、一・二一ヲ・一三)(谷大、餘大・三八四七)

大佛御供養御拵之帳

❶(日)Dai-butsu-go-ku-yō-o-koshirae-no-chō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三 ❹松井伊豆 ❺慶長一九(A. D. 1614)

❻本書は慶長十九年秋京都大佛供養會の砌、妙法院門跡で導師、伴僧、坊官、童子、侍衆、承仕等の裝束入用十一貫六百七十九匁四分の內分け明細を記錄し、慶長十九年六月二十四日妙法院御門跡內、松井伊豆、鳥居小路大藏の連名で、奉行片桐市正配下、梅戸平右衛門尉、河路五兵衛寃に提出したもので、當時の服飾等の市價を示す經濟文獻であつて、大佛御供養法具方帳と同筆に屬するものである。

（紀氏隆眞）

大佛御供養法具方帳

❶(日)Dai-butsu-go-ku-yō-hō-gu-hō-chō. 大佛供養法具方帳 ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三 ❹松井伊豆 ❺慶長一九(A. D. 1614)

❻本書は慶長十九年秋、京都方廣寺大佛開眼供養の法具入費の記錄で、同年六月二十四日妙法院御門跡內、松井伊豆、鳥居小路大藏の連名で、奉行片桐市正殿御內、梅戸平右衛門殿、河路五兵衛殿寃に御拵之帳と共に提出したものである。入費合計拾五貫參百九匁壹を要して居るが、內容は頗る明細な仕樣書で、例せば「四十六滓但三間半壹尺五寸總堂幡壹滓ニ付入用。一、拾九匁六分リン。生絹三丈四尺五寸。足四ツ。足のたけ壹丈五寸。但シ壹はゞを二ツわり。手十八。一はゞを三わり。たけ貳尺壹ツ、。六たけ。此內長はた二ツあり。但生絹壹端貳丈尺ダ。此代拾六匁。壹尺ニ付五分七リンツヽ」と云ふ式で「御拵之帳」と共に當時のこの種物價を知る一資料である。

（紀氏隆眞）

大佛頂開題

❶(日) Dai-buc-chō-kai-dai. 大佛頂經開題 ❷一卷 ❸存、大正六一・六〇一 No. 2233、弘法大師全集第一一敎相部(眞僞未決部) ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰 ❺南北朝時代寫 ❻(寶菩提院)

大佛頂儀軌

❶(日) Dai-buc-chō-gi-ki.(支)Ta-fo-ding-i-kuei. 大佛頂陀羅尼儀軌 ❷一册 ❸存 ❹延久三寫 ❺(寶菩提院)

大佛頂經

❶(日)Dai-buc-chō-gyō.(支)Ta-fo-ting-ching. 大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經、首楞嚴經、萬行首楞嚴經、大佛頂首楞嚴經、中印度那蘭陀大道場經、楞嚴經 ❷十卷 ❸存、大正一九・一〇五 No. 945、編成一、卍一二・四、北433染、南438染、元432染、明北442善、清442善、龍427絲、天432染、指396絲、法419量、至621陰、明南429善、Nj. 446、禪學大系經論部第一、御錄經海一滴第一 ❹唐般刺蜜帝(一神龍元 A. D. 705—)等譯

❺本佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の下を見よ。

大佛頂經開題

❶(日)Dai-buc-chō-gyō-kai-dai. 大佛頂開題 ❷一卷 ❸存、大正六一・六〇一 No. 2233、弘法大師全集第一一敎相部(眞僞未決部) ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰

❺般刺蜜帝譯大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經十卷の開題である。大意、釋題目、入文判釋の三門に分ち、極めて簡單に釋してゐる。

❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❽寬治五寫(仁和寺)、古寫(東寺寶菩提院)寫本(京大、藏・一八ホ・一)(小田嶽舟)

大佛頂經玄贊

❶(日)Dai-buc-chō-gyō-gen-san.(支)Ta-fo-ting-ching-hsüan-tsan. ❷三卷 ❸惟慤述 ❼(參考)

大佛頂經疏

❶(日) Dai-buc-chō-gyō-sho.(支)Ta-fo-ting-ching-su. ❷三卷 ❸惟慤述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上、靈巖寺和尙請來法具等目錄

大佛頂經疏

❶(日) Dai-buc-chō-gyō-sho.(支)Ta-fo-ting-ching-su. ❷六卷 ❸弘抗述 ❼(參考) 常曉和尙請來目錄

大佛頂經疏

❶(日) Dai-buc-chō-gyō-sho. ❷六卷 ❸寶□房 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

大佛頂經疏

❶(日) Dai-buc-chō-gyō-sho.(支)Ta-fo-ting-ching-su. ❷三卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

大佛頂經疏

❶(日) Dai-buc-chō-gyō-sho. ❷五卷 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

大佛頂經文句講錄

❶(日) Dai-buc-chō-gyō-mon-ga-ku-roku. 大佛頂文句講錄、首楞嚴經文句講錄、楞嚴文句講錄 ❷六卷 ❸存 ❹光謙雲空(承應元—元文四 A. D. 1652—1739)述 ❺刊本(智、う・七・中・一三)(京大、一・二三ヲ・四)

大佛頂經問決

❶(日)Dai-buc-chō-gyō-mon-ketsu. ❷一册 ❸存 ❹戒琛慧光(寬文六—享保一九 A. D. 1666—1734)述 ❺寫本(京大、日大未・七四)

大佛頂供次第

❶(日)Dai-buc-chō-ku-shi-dai. ❷一軸 ❸存 ❺德川時代寫 ❻(寶菩提院)

大佛頂玄文

❶(日) Dai-buc-chō-gem-mon.(支)Ta-fo-ting-hsüan-wen. ❷十二卷 ❸存、卍續一・二〇・三一四 ❹明智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)述

❻首楞嚴經玄義と首楞嚴經文句を合せるものの各々その下を見よ。

❼(參考) 諸宗章疏錄第二

大佛頂廣聚陀羅尼經

❶(日)Dai-buc-chō-kō-jū-da-ra-ni-kyō.(支) Ta-fo-ting-kuang-chü-to-lo-ni-ching. 大佛頂無長寶蓮華廣聚光明佛頂一切如來心中祕密藏陀羅尼經 ❷五卷 ❸存、大正一九・一五五 No. 946 ❺唐代(—開成三 A. D. 805)失譯

⑥本經は唐代失譯であると目されて居るが此の經の中章は廣衆佛頂であるから、佛頂部の一經であることは、經題が既に之を證明して居る。佛頂部の諸經は未だ純密教とは見做し得ないが、今一歩で純密教に成らんとするものである。金剛頂部の諸經は佛頂部の諸經から發達したものであるらしい。今經の第一品に於て、此の經が金剛頂宗系の原始的素材を充分に具へて居ることを略々推測するに足るものがある。次に本經五卷内の各品名を擧ぐれば、

第一卷(一五五、B)。阿迦膩吒天請問序品第二(一五五、B)。一切如來持呪功能品第三(一五九、B)

第二卷(一六〇、C)。得見呪師菩薩滅罪品第四(一六〇、C)。眼藥方一切光明品第五(一六一、C)。延年藥法品第六(一六二、B)。眼藥品第七(一六二、C)。相命呪師自證品第八(一六三、A)。觀世音・文殊師利菩薩與願品第九(一六三、C)。仙骨油品第十(一六四、A)。造珍寶品第十一(一六五、B)。

第四卷(一六五、C)。召請諸佛品第十三(一六五、C)。雌黃藥法及祕密壇法品第十四(一六八、C)。辨七種佛頂持誦遍數成就品第十五(一七〇、B)。

第五卷(一七二、B)。壇場八肘大壇法品第十六(一七二、B)。受藥藥法品第十七(一七三、B)。成就呪師衣裳品第十八(一七四、C)。呪師自著呪索品第十九(一七四、C)。呪師灌頂品第二十(一七五、A)。蓮華畫像法品第二十一(一七五、B)。總攝一切諸部手印品第二十二(一七六、B)。大壇功能品第二十三(一七八、A)

大佛頂蠟盛光 ❶(日)Dai-buc-chō-shi-jō-kō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第四五疊禪鈔之内 (神林隆淨)

大佛頂首楞嚴經 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gyō. (支) Ta-fo-ting-shou-léng-yen-ching. 大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經、首楞嚴經、楞嚴經、中印度那陀大道場經、大佛頂經、萬行首楞嚴經 ❷十卷 ❸存、大正一九・一〇五No. 945、縮成一・卍一二・四、北425染、南438染、元432染、明北442差、清442差、麗427絲、天432染、指396絲、法419貧、至621陰、明南429差、Nj. 446、禪學大系經論部第一、御錄經海一滴第一 ❹唐般刺蜜帝(—神龍元A. D. 705—)等譯 ❺大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の下を見よ。

大佛頂首楞嚴經會解 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gyō-e-ge. (支) Ta-fo-ting-shou-léng-yen-ching-hui-chieh. 大佛頂萬行首楞嚴經會解 ❷二十卷 ❸存、縮呂六、明北1618綿逸、清1610綿逸 ❹元代惟則會解 ❺本書は大佛頂首楞嚴經の釋である。天台山智者大師が、西域地方に此の經のあることを知つて夙夜に西に望んで、此の經を見んことを願はれたと云ふことである。唐の則天武后の時に至つて、長安に於て般刺密帝三藏に依つて譯し始められ、中宗の神龍元年五月二十三日に經と成つた。神秀禪師が内道場に入つて奏本を見、傳寫して荆州の度門寺に歸られ、慧振法師が同寺を訪ふて此の經を得て祕藏せられた。天寶十年に西京の興福寺の惟愍法師が、復た故房融の家に於てその筆受の本を得、始めて疏解を作つて廣く之を世に傳ふることゝ成つた。惟愍に繼いで長水・孤山・吳興等の諸學者が遞ひ相發明する所が有つて、此の經を解することが愈々詳かに成つた。そこで師互林天如禪師惟則が、惟愍等の九家の說を集錄し、且つ自說を樹てられたものが、即ち本書で有つて、その集錄せる諸說の釋家は悉く禪門の學者である。 (神林隆淨)

大佛頂首楞嚴經玄義 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gi. (支) Ta-fo-ting-shou-léng-yen-ching-hsuan-i. 大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經玄義、首楞嚴經玄義、楞嚴經玄義 ❷二卷 ❸存、卍續一・二〇・三 ❹智旭(萬曆二七—永曆九A. D. 1599—1655)撰、道昉參訂 ❺首楞嚴經玄義の下を見よ。 ❻刊本(高大、一・二三)(正大、一一七五・三—四)

大佛頂首楞嚴經疏解蔘鈔 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gyō-sho-ge-mō-shō. (支) Ta-fo-ting-shou-léng-yen-ching-su-chieh-mēng-ch'ao. 首楞嚴經疏解蒙鈔、楞嚴經解蒙鈔 ❷三十五卷或三十卷 ❸存、卍續一・二一・一—五 ❹明錢謙益(萬曆一〇—康熙三A. D. 1582—1664)鈔 ❺首楞嚴經疏解蒙鈔の下を見よ。 ❻貞享二刊 ❼(正大、一一七五・三九、四六)

大佛頂首楞嚴經千百年眼髓 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gyō-sen-hyaku-nen-gen-zui. 首楞嚴經千百年眼髓、楞嚴經千百年眼髓 ❷三卷或四卷或五卷 ❸存 ❹凰潛(永應三—元文三A. D. 1654—1738)述 ❺刊本(正大、一一七五—二九)(帝國、一八九・四五)

大佛頂首楞嚴經文句 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gyō-mon-gu. (支) Ta-fo-ting-shou-léng-yen-ching-wen-chü. 大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經文句、首楞嚴經文句、楞嚴經文句 ❷十卷 ❸存、卍續一・二〇・三—四 ❹智旭(萬曆二七—永曆九A. D. 1599—1655)述 道昉訂 ❺首楞嚴經文句の下を見よ。 ❻元祿六刊(高大、一・二三)(正大、一一七五・七) 光緒元刊(帝國、二三六・三五)

大佛頂首楞嚴經文句引據 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gyō-mon-gu-in-ko. 楞嚴經文句引據 ❷三卷 ❸存 ❹通玄(—享保一六A. D. 1731)撰 ❺正德五刊 ❻(正大、一一七五・四四)(叡山文庫)

大佛頂首楞嚴經問決 ❶(日)Dai-buc-chō-shu-ryō-gon-gyō-mon-ketsu. 大佛頂經問決 ❷一册 ❸存 ❹戒琛慧光(寛文六—享保一九A. D. 1666—1734)述 ❺正德二寫 ❻(高大、皆・一・二三)

大佛頂集 ❶(日)Dai-buc-chō-shū. ❷一卷 ❸最澄(神護景雲元—弘仁一三A. D. 767—822) ❹(參考) 山家祖德撰述篇目集卷上、本朝台祖撰述密部書目、密乘撰述書目

大佛頂疏 ❶(日)Dai-buc-chō-sho. (支)Ta-fo-ting-su. ❷三卷 ❹(參考) 書寫請來法門等目錄

大佛頂疏隨文補闕鈔 ❶(日)Dai-buc-chō-sho-zui-mon-ho-ketsu-shō. (支) Ta-fo-ting-su-sui-wen-pu-ch'üeh-ch'ao. ❷一卷 ❹(參考) 入唐新求聖教目錄

大佛頂隨疏科文 ❶(日)Dai-buc-chō-zui-sho-kwa-mon. (支) Ta-fo-ting-sui-su-k'o-wen. ❷一卷 ❹(參考) 入唐新求聖教目錄

大佛頂陀羅尼 ❶(日)Dai-buc-chō-da-ra-ni. (支)Ta-fo-ting-t'o-lo-ni. 大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉陀羅尼、大佛頂如來頂髻白蓋陀羅尼 ❷一卷 ❸存、大正一九・一〇〇No. 944A、縮函六、卍續一・二・四 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉陀羅尼の下を見よ。 ❻(參考) 惠運禪師將來教法目錄 ❼刊本(高大、一・三一)(京專)

大佛頂陀羅尼勸註 ❶(日)Dai-buc-chō-da-ra-ni-kan-chū. (支) Ta-fo-ting-t'o-lo-ni-k'uan-chu. 大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉陀羅尼勸註 ❷一卷 ❸存、大正六一・六〇六No. 2233 ❹明曇(天寧四A. D. 1056—)撰 ❺大佛頂如來放光悉怛多鉢怛羅陀羅尼勸註の下を見よ。

大佛頂陀羅尼儀軌 ❶(日)Dai-buc-chō-da-ra-ni-gi-ki. (支)Ta-fo-ting-t'o-lo-ni-i-kuei. 大佛頂儀軌 ❷一帖 ❸存 ❹般刺蜜帝譯 ❺長治元寫 ❻(寶壽院)

大佛頂陀羅尼啓請法 ❶(日)Dai-buc-chō-da-ra-ni-kei-shō-hō. (支)Ta-fo-ting-t'o-lo-ni-ch'i-ch'ing-fa. ❷一册 ❸存 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺寶曆一〇刊 ❻(高大、一・三一)

大佛頂陀羅尼成就方法決 ❶(日)Dai-buc-chō-da-ra-ni-jō-ju-ho-bō-ketsu. (支)Ta-fo-ting-t'o-lo-ni-ch'eng-chiu-fang-fa-chüeh. ❷一帖 ❸存 ❹書寫請來法門等目錄に曰く「無名集者。廿張。說名持呪功能」云々。 ❺平安朝時代寫 ❻(寶龜院)

大佛頂大陀羅尼 ❶(日) Dai-buc-chō-dai-da-ra-ni. (支) Ta-fo-ting-ta-t'o-lo-ni. ❷一卷 ❸存、大正一九・一〇一No. 946 ❹この陀羅尼は白傘蓋佛頂陀羅尼の梵本で不空三藏の漢音譯の大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉陀羅尼(大正一九・一〇〇)と同一のものである。

大佛頂通用曼荼羅 ❶(日) Dai-buc-chō-tsū-yō-man-da-ra. (支) Ta-fo-ting-t'ung-yung-man-t'u-lo. ❷一張 ❸(參考) 傳教大師將來台州錄

大佛頂如來頂髻白蓋陀羅尼 ❶(日)Dai-buc-chō-nyo-rai-chō-kei-byaku-gai-da-ra-ni. (支)Ta-fo-ting-ju-lai-ting-chi-pai-kai-t'o-lo-ni. 大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉陀羅尼、大佛頂陀羅尼 ❷一卷 ❸存、大正一九・一〇〇No. 944A、縮閏六、卍續一・二・四 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼經 ❻この陀羅尼は梵語で悉怛多鉢怛羅(Sitātapatra)と云ひ、白傘蓋と譯す即ち白傘蓋佛頂の大陀羅尼で有る。佛頂には五佛頂あると言はれて居るが、一般に大佛頂陀羅尼と稱せられて居るのは、即ち此の陀羅尼を指す。 (神林隆淨)

大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼經 **大威德最勝金輪三昧呪品** ❶(日)Dai-buc-chō-nyo-rai-hō-kō-shit-ta-han-ta-ra-dai-jin-riki-to-sai-is-sai-ju-ō-da-ra-ni-kyō-dai-i-toku-sai-shō-kon-rin-sam-mai-ju-hon. (支) Ta-fo-ting-ju-lai-fang-kuang-hsi-ta-pan-ta-lo-ta-shen-li-tu-shē-i-ch'ieh-chon-wang-t'o-lo-ni-ching-ta-wei-te-tsui-shēng-chin-lun-san-mei-chou-p'in. 大佛頂別行法、大佛頂如來放光大神力都攝大威德記最勝金剛三昧呪法 ❷一卷 ❸存、大正一九・一八〇No. 947 ❻この經は佛が舍衛國祇樹給孤獨園に於て迦葉等の大阿羅漢、普賢・文殊等の諸大菩薩、昆倶知神等の諸神に對して、末法相應の教として說かれたものである。二品から成り、第一を大威德最勝金輪三昧呪品と云ひ、第二を放光悉怛多鉢怛羅諸菩薩萬行品と云ふ。この白傘蓋佛頂を大佛頂とも稱し、經の二品に於て護身結界、其の他惡宿等の種々の障難を除去する作法が明されてある。 (神林隆淨)

大佛頂如來放光大神力都攝大威德記最勝金輪三昧呪法 ❶(日) Dai-buc-chō-nyo-rai-hō-kō-dai-in-riki-to-shō-dai-i-toku-ki-sai-shō-kon-rin-sam-mai-ju-hō. (支) Ta-fo-ting-ju-lai-fang-kuang-ta-shen-li-tu-shē-ta-wei-te-chi-tsui-sheng-chin-kang-san-mei-chou-fa. 大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧呪品、大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼經、大佛頂別行法 ❷一卷 ❸存、大正一九・一八〇No. 947

⑯大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧呪品の下を見よ。

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經 ❶(日) Dai-butsu-chō-nyo-rai-micchi-in-shu-shō-ryō-gi-sho-bo-satsu-man-gyō-shu-ryō-gon-gyō. (支) Ta-fo-ting-ju-lai-mi-yin-hsiu-i-chu-p'u-sa-wan-hsing-shou-leng-yen-ching-(梵)Sarva-tathāgatasya-guhya-siddhārtha-abhisamayahetu-sarva-bodhisattvasya-caryā-samuttadeśa-buddhāgāra-śūraṅga-s-(藏傳甲)(藏)甲de-bzhin-gśegs-pajī gsaṅ-ba sgyub-pajī don mṅon-par thob-pajī rgya byaḥ-chub-sems-dpaḥ thams-cad-kyi spyod-pa rgya-mtsho stoḥ-pa saṅs-rgyas-kyi gtsug-tor dpaḥ-bar ḫgro-ba shes-bya-ba theg-pa chen-pojī mdo. 乙 bcom-ldan-ḥdas-kyi gtsug-tor chen-po de-bzhin-gśegs-pajī gsaṅ-ba sgrub-pajī don-mṅon-par thob-pajī rgya byaḥ-chub-sems-dpaḥ thams-cad-kyi spyod-pa dpaḥ-bar-ḫgro-bajī mdo lejū stoḥ-phrag-bcu-paslas lejū bcu-pa (漢重編? 漢譯第九卷の半より第十卷に當る) 大佛頂首楞嚴經、大佛頂經、首楞嚴經、楞嚴經、萬行首楞嚴經、中印度那蘭陀大道場經 ❷十卷 ❸存、大正一九・一〇五No. 945、鎌成1、卍二二・四、北425染、南438染、元423染、明北442善、清442善、麗427餘、天423染、指396餘、法419重、至621除、明南439善、Nj. 446 ❹唐般剌蜜帝譯

❺本經は經題の細經に一名中印度那蘭陀大道場經、於灌頂部錄出別行とあるから、那蘭陀寺に於て行はれて居つたと見られて居ることが明かである。經全體に亘つての主眼と成つて居るものは、攝心に依つて菩提心を了得し眞淨の妙心を體得することである。この眞淨の妙心は禪家で體解悟入せんとするものであるが、この禪家の要門に親部密教思想が加味されたものが、卽ち此の經である。經の第七に是佛頂光聚悉怛多般怛羅祕密伽陀微妙章句、出生十方一切諸佛、十方如來、因此呪心、得成無上正遍知覺、と說てあるのは、卽ち此の意である。

第一卷に於ては、阿難が摩登伽女の惡呪の爲に害され、次に佛が神通力で、阿難を救ひ出し、摩登伽女をも、佛法を歸依するに至らしめたことを明し、次に心の實相に對する說明が試られてある。第二卷に於ては、佛陀と波斯匿王との死後に關する問答、次に阿難が眞性に就て問を起し、佛陀は五陰の虛妄なること、並に如來藏の眞實常住なるを說き給ふ。第三卷には、佛陀が阿難に對して、六入の虛妄不眞なること、並に如來藏眞識に就て說いて居られる。第四卷に於て佛は六師外道の一人である富樓那彌多羅尼子(Pūrṇamaitrāyaṇī-putra)に對して如來藏本妙圓心に就て說き、又阿難に對して奢摩羅識・空如來藏・大圓鏡智に就て說いて居られる。第五卷に於て、憍陳那の五比丘・優波尼沙陀・香嚴童子・藥王藥上二法王子乃至獅勒菩薩等が佛陀に對して、自身で證知した境界を述べて居る。第六卷には觀世音菩薩が衆生濟度の爲に獨覺身、聲聞身等の諸の身相を現することを明し、十四無畏を說き、又四不思議無作の妙德を示し、尙五淨の事をも述べてある。第七卷には白傘蓋佛頂の陀羅尼を出し、且つ其功德を讚賞してある。第八卷には四食・持戒・十住・十行・十廻向・十地を說き、更に婬欲を戒め、善惡の果報を明し、十習の因を辯じ、六報を述べ、又惡想受生に就て示されてある。第九卷には善因に依つて善處に生することが詳說され、次に世間有爲の功德を貶し、摩登伽の呪法の劣眇なるを說いて、阿難を誓め、次に定力を明し、禪那の勝相現ずれば、三僧祇の修行を一念の間に超ゆと斷じ、又眞佛假佛、男佛女佛ありと云ひ、殊に修禪の人に付て、佛涅槃菩提法身、卽是現前我肉身上、父父子子、遷代相生、卽是法身常住不ノ絕、都指ニ現在一、卽爲ニ佛國一、無ニ別淨居及金色相一(中略)男女二根、卽是菩提涅槃眞處、彼無知者、信ニ是綸言一、と說て、邪見妄說を誓てある。第十卷には、四通常論・四顚倒・四有邊論・十種の外道の見解を說き、次に第一立所得心乃至第十圓學寶心の十心を明し、又菩薩所行、金剛十地、等覺圓明、入ニ於如來妙莊嚴海一(中略)奢摩多中毘婆舍那、覺明分ニ拆微細魔事一、魔境現前、次能詣識、心垢洗除、不ノ落ニ邪見一として佛は阿難を誓て居られる。次に五種の顚倒妄業を擧げ、四重十波羅夷に說き及んである。

以上で十卷の內容の概略を述べ已つたが全卷を貫く思想は、阿難が摩登伽女の呪力に依つて、魔道に墮せんとしたのを、佛陀の神力に依つて救ひ出し、禪定の力と白傘蓋陀羅尼の功德力を賞揚し、白傘蓋陀羅尼に依つて、有ゆる魔障を摧退し、かくして禪定に專注して如來の眞實知見を獲得して生死の迷界を脫却することが、最後の目的であることが明されてある。是れ亦雜部密教に屬するものではあるが、稍純密教に成りかゝつて居ることが窺はれる。又本經が禪定を力說されてある所から、密教側に於てよりも禪家に歡迎され、大佛頂首楞嚴經會解の作者である惟則の如きも、矢張禪門の人である。

❼(參考) 開元錄第九、貞元錄第一四 ❾宣統元刊(正大、一一七五・一)(紳林修淨)

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經合轍 ❶(日)Dai-butsu-chō-nyo-rai-micchi-in-shu-shō-ryō-gō-sho-bo-satsu-man-gyō-shu-ryō-gon-gyō-gat-tetsu. (支) Ta-fo-ting-ju-lai-mi-yin-hsiu-i-chu-p'u-sa-wan-hsing-shou-leng-yen-ching-ho-ch'e. 首楞嚴經合轍、楞嚴經合轍 ❷十卷 ❸存、卍續1・二二・三—四 ❹明通潤(—天啓元 A. D. 1621—)述 ❺首楞嚴經合轍の下を見よ。 ❻寛文六刊 ❾(正大、一一七五・二七—二八)

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經玄義 ❶(日)Dai-butsu-chō-nyo-rai-micchi-in-shu-shō-ryō-gi-sho-bo-satsu-man-gyō-shu-ryō-gon-gyō-gen-gi. (支) Ta-fo-ting-ju-lai-mi-yin-hsiu-i-chu-p'u-sa-wan-hsing-shou-leng-yen-ching-hsüan-i. 大佛頂經玄義、楞嚴經玄義、首楞嚴經玄義 ❷二卷 或一卷 ❸存、卍續1・二〇・三 ❹智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)疏、道昉參訂 ❺首楞嚴經玄義の下を見よ。 ❾刊本(正大、一一七五・三—四)

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經集註 ❶(日)Dai-butsu-chō-nyo-rai-micchi-in-shu-shō-ryō-gi-sho-bo-satsu-man-gyō-shu-ryō-gon-gyō-shū-chū. (支) Ta-fo-ting-ju-lai-mi-yin-hsiu-i-chu-p'u-sa-wan-hsing-shou-leng-yen-ching-chi-chu. 首楞嚴經集註、楞嚴經集註 ❷十卷 ❸存、卍續1・一七・一—二 ❹宋思坦註 ❺首楞嚴經集註の下を見よ。 ❾刊本(正大、一一七五・四五)

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經文句 ❶(日) Dai-butsu-chō-nyo-rai-micchi-in-shu-shō-ryō-gi-sho-bo-satsu-man-gyō-shu-ryō-gon-gyō-mon-gu. (支) Ta-fo-ting-ju-lai-mi-yin-hsiu-i-chu-p'u-sa-wan-hsing-shou-leng-yen-ching-wen-chü. 大佛頂首楞嚴經文句、首楞嚴經文句、楞嚴經文句 ❷十卷 ❸存、卍續1・二〇・三—四 ❹唐叡剌蜜帝(—神龍元 A. D. 705—)ノ智旭(萬曆二七—永曆九 A. D. 1599—1655)文句道昉訂 ❺首楞嚴經文句の下を見よ。 ❾刊本(正大、一一七五・四五)

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經會解 ❶(日)Dai-butsu-chō-nyo-rai-micchi-in-shu-shō-ryō-gō-e-ge. (支) Ta-fo-ting-wan-hsing-shou-leng-yen-ching-hui-chieh. 首楞嚴經會解、大佛頂首楞嚴經會解、楞嚴經會解 ❷二十卷 ❸存、縮呂六、明北1618縮邈、清1610縮邈 ❹元代惟則會解 ❺首楞嚴圓通疏の下を參照せよ。

大佛頂無畏寶蓮華廣聚光明佛頂一切如來心中祕密藏陀羅尼經 ❶(日)Dai-butsu-chō-mu-i-hō-ren-ge-kō-jū-kō-myō-buc-chō-ie-sai-nyo-rai-shin-jū-hi-mitsu-nō-da-ra-ni-kyō. (支) Ta-fo-ting-wu-wei-pao-lien-hua-kuang-chü-kuang-ming-fo-ting-i-chieh-ju-lai-hsin-chung-pi-mi-tsang-to-lo-ni-ching. 大佛頂廣聚陀羅尼經 ❷五卷 ❸存、大正一九・一五五No. 946 ❹唐代(—開成三 A. D. 805)失譯 ❺大佛頂廣聚陀羅尼經の下を見よ。

大佛頂文句講錄 ❶(日)Dai-butsu-chō-mon-ku-kō-roku. 大佛頂經文句講錄、首楞嚴經文句講錄、楞嚴文句講錄 ❷六卷 ❸存、楞嚴文句講錄之內 ❹光謙鑒空(承應元—元文四 A. D. 1632—1739)述 ❾刊本(宮大・一・二三ノ・四)(智、う・七・中・一三)

大佛頂略念誦法 ❶(日)Dai-butsu-chō-ryaku-nen-ju-hō. 大佛頂次第 ❸存、日本大藏經眞言宗事相章疏第一、弘法大師全集第六事相部 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)

❺大佛頂如來の念誦法。道場觀までは如ノ常としてこれを略し、道場觀以後の一部分を示した極略の次第である。道場觀・本尊讚・正念觀等を詳記して ゐるのみ。 高野山大傳法院御作目錄に一字頂輪次第一卷とあるは本書を指すか。 (小田慈舟)

大佛傳緣起繪詞 ❶(日)Dai-butsu-den-en-gi-e-shi. ❷二卷 ❸存 ❺享保二寫 ❾(谷大)

大佛殿慶讚集 ❶(日) Dai-butsu-den-kei-san-shū. 大佛慶讚集 ❷一卷 ❸存 ❹北河原公海編 ❺大正五刊 ❾(谷大、餘大・三八四七)

大佛殿千僧供養事 ❶(日) Dai-butsu-den-sen-sō-ku-yō-no-koto. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二二東大寺叢書第二

❺本書は奈良東大寺大佛殿千僧供養會の記錄であつて、佛教全書本は別々の千僧供養會であるが、今便宜一括して此に一言する。

初めの本は嘉祿四年十月八日、大佛殿で行はれた千僧供養の記事で、願主大勸進行勇法印・導師章勝院法印良禎・呪願東南院法印道快の組合せで執行されたもので、本寺末寺を明記の上、千僧の口數所屬が記錄されてゐる。

次の本は寶治元年八月十八日、大佛殿で施主右馬助・導師宗性僧都の下に、南都諸大寺の千僧を集めて執行された千僧供養會の交名帳である。因みに導師宗性僧都とは、俱舍論本義抄四十八卷・華嚴宗香薰抄七卷の名著を殘した學僧宗性のことであらう。 (紀氏隆眞)

大佛殿新始千僧供養私記 ❶(日) Dai-butsu-den-chōnan-hajime-sen-nō-ku-yō-shi-ki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二二東大寺叢書第二 ❹英秀(—元祿元 A. D. 1688—)

❺永祿十年松永久秀の兵火に罹り、東大寺大佛は爾來永く露佛であつたが、貞享四年の四月公慶上人大佛殿再建を企て、諸國を勸進し、翌五年四月勅を拜して建築に着手したのである、本書は其の新始の千僧供養

元祿六刊 ❾(正大、一一七五・七、五五)

大佛頂別行法 ❶(日)Dai-butsu-chō-betsu-gyō-hō. (支)Ta-fo-ting-pieh-hsing-fa. 大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧呪品、大佛頂如來放光大神力都攝大威德最勝金輪三昧呪法 ❷一卷 ❸存、大正一九・一・八〇No. 947

❺大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧呪品の下を見よ。

大佛頂法 ❶(日) Dai-butsu-chō-hō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第四五曼荼羅之內 ❹曼荼羅(康治二—建暦二以後 A. D. 1143—1212—)

大佛頂法 ❶(日) Dai-butsu-chō-hō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書阿娑縛抄之內

大佛頂法次第 ❶(日)Dai-butsu-chō-hō-shi-dai. ❷一帖 ❸存 ❾寫本(寶龜院)

大佛頂萬行首楞嚴經會解 ❶(日)Dai-butsu-chō-man-gyō-shu-ryō-gon-gyō-e-ge. (支) Ta-fo-ting-wan-hsing-shou-leng-yen-ching-hui-chieh. 首楞嚴經會解、大佛頂首楞嚴經會解、楞嚴經會解 ❷二十卷 ❸存、縮呂六、明北1618縮邈、清1610縮邈 ❹元代惟則會解 ❺首楞嚴圓通疏の下を參照せよ。

大佛頂無畏寶蓮華廣聚光明佛頂一切如來心中祕密藏陀羅尼經 ❶(日)Dai-butsu-chō-mu-i-hō-ren-ge-kō-jū-kō-myō-buc-chō-ie-sai-nyo-rai-shin-jū-hi-mitsu-nō-da-ra-ni-kyō. (支) Ta-fo-ting-wu-wei-pao-lien-hua-kuang-chü-kuang-ming-fo-ting-i-chieh-ju-lai-hsin-chung-pi-mi-tsang-to-lo-ni-ching. 大佛頂廣聚陀羅尼經 ❷五卷 ❸存、大正一九・一五五No. 946 ❹唐代(—開成三 A. D. 805)失譯 ❺大佛頂廣聚陀羅尼經の下を見よ。

大佛頂文句講錄 ❶(日)Dai-butsu-chō-mon-ku-kō-roku. 大佛頂經文句講錄、首楞嚴經文句講錄、楞嚴文句講錄 ❷六卷 ❸存、楞嚴文句講錄之內 ❹光謙鑒空(承應元—元文四 A. D. 1632—1739)述 ❾刊本(宮大・一・二三ノ・四)(智、う・七・中・一三)

大佛頂略念誦法 ❶(日)Dai-butsu-chō-ryaku-nen-ju-hō. 大佛頂次第 ❸存、日本大藏經眞言宗事相章疏第一、弘法大師全集第六事相部 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)

❺大佛頂如來の念誦法。道場觀までは如ノ常としてこれを略し、道場觀以後の一部分を示した極略の次第である。道場觀・本尊讚・正念觀等を詳記して ゐるのみ。 高野山大傳法院御作目錄に一字頂輪次第一卷とあるは本書を指すか。 (小田慈舟)

大佛傳緣起繪詞 ❶(日)Dai-butsu-den-en-gi-e-shi. ❷二卷 ❸存 ❺享保二寫 ❾(谷大)

大佛殿慶讚集 ❶(日) Dai-butsu-den-kei-san-shū. 大佛慶讚集 ❷一卷 ❸存 ❹北河原公海編 ❺大正五刊 ❾(谷大、餘大・三八四七)

大佛殿千僧供養事 ❶(日) Dai-butsu-den-sen-sō-ku-yō-no-koto. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二二東大寺叢書第二

❺本書は奈良東大寺大佛殿千僧供養會の記錄であつて、佛教全書本は別々の千僧供養會であるが、今便宜一括して此に一言する。

初めの本は嘉祿四年十月八日、大佛殿で行はれた千僧供養の記事で、願主大勸進行勇法印・導師章勝院法印良禎・呪願東南院法印道快の組合せで執行されたもので、本寺末寺を明記の上、千僧の口數所屬が記錄されてゐる。

次の本は寶治元年八月十八日、大佛殿で施主右馬助・導師宗性僧都の下に、南都諸大寺の千僧を集めて執行された千僧供養會の交名帳である。因みに導師宗性僧都とは、俱舍論本義抄四十八卷・華嚴宗香薰抄七卷の名著を殘した學僧宗性のことであらう。 (紀氏隆眞)

大佛殿新始千僧供養私記 ❶(日) Dai-butsu-den-chōnan-hajime-sen-nō-ku-yō-shi-ki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二二東大寺叢書第二 ❹英秀(—元祿元 A. D. 1688—)

❺永祿十年松永久秀の兵火に罹り、東大寺大佛は爾來永く露佛であつたが、貞享四年の四月公慶上人大佛殿再建を企て、諸國を勸進し、翌五年四月勅を拜して建築に着手したのである、本書は其の新始の千僧供養

の私記である。

即ち貞享五年四月二日より同八日迄七日間執行された新始千僧供養會を、法會前の諸準備から、法式進行の模樣等を漢文體で記錄したものであつて、見取圖も大佛殿新始中門書圖・大佛殿圖・八幡宮假御殿圖・大佛殿圖・大佛殿勸進所井に新始に付假屋圖の五圖を挿入し、私記と云ふも、この種記錄としては最も完備し出色のものである。

奥書に據るに、寺務安井御門跡道恕大僧正の宿坊であつた總持院法印英秀が貞享五年四月下浣、即ち供養會無所障礙完了の後、利詮に執筆せしめたものである。

（紀氏陸眞）

與大佛殿別當書 ❶(日)Dai-butsu-den-bet-tō-ni-atō-ru-sho. ❷一篇 ❸存、日蓮聖人御遺文之内、日蓮聖人全集第七卷之内 ❹日蓮(貞應元—弘安五 A. D. 1232—1282) ❺文永五(A. D. 1268) ❻蒙古國より國書到來せるを機として要路に警告した所謂「十一通御書」の一で、鎌倉大佛殿の別當へ與へた短簡の書。

正月十八日到來の蒙古の國書に依れば、我國が蒙古の命に從はざれば彼より攻撃し來る事明白である、これ日蓮が「立正安國論」に勸へた所と符合するところで、急ぎ退治を要する、而して之を退治する者は日蓮の外には無いから、速に我慢を折つて日蓮に歸依し、後の悔を殘さぬがよいと申送つてある。

（馬田行啓）

大佛殿本堂指圖之覺並佛大少之事 ❶(日)Dai-butsu-den-hon-dō-shi-za-no-oboe-narabini-butsu-dai-shō-no-koto. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(帝國、二一三・三五〇)

大佛殿雷火災燒圖書詞書 ❶(日) Dai-butsu-den-rai-kwa-sai-shō-zu-gwa-kotoba-gaki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三 ❹本書は寛政十年七月朔日夜雷火のため京都方廣寺大佛殿が炎上した時の記事文である。

其の内容は七月朔日夜大雷雨中に、大佛殿北側東から四本目の柱の上井形に落雷があり、間もなく發火、何分高層の大建築であるため、當時の幼稚な消防能力では、如何とも術の施しやうなく、徒に洛中大展勸の中に、二日朱明に亘り終に燒失した事情、及び火災中の出來事等を記したもので、「京大佛殿火災」と共に照らし讀むべきものである。

（紀氏陸眞）

大佛堂供養記 ❶(日) Dai-butsu-dō-kū-yō-ki. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二二東大寺叢書第二 ❹本書は寶永六年三月執行された南都大佛殿落慶供養の日記である。

即ち先づ三月十三日寺務安井門跡大僧正道恕南都下向より肇を起し、蜂起の作法勅使御下向、三綱出仕の儀、專寺學侶兩堂三箇院末寺衆僧交名並座席の次第等を記し、次に三月二十一日回白以後日別に模樣を細錄して四月八日結願に及んでゐる。佛教全書本奥に曰く「表紙に、寶永六己丑年四月日執行奉寺主祐恕東大寺大佛供養日記草書、暇日清書校合可有之也」と。

因みに貞享四年龍松院公慶上人が大佛殿再建を發願して諸國を勸進し、翌五年勅を奉じて大佛殿新始を執行してから、實に星霜二十二年を閲して完成落慶を見たものである。其の努力の程が察せられる。これ現在の大佛殿であつて、大正四年大修理が施された。

（紀氏陸眞）

大佛略憶 ❶(日)Dai-butsu-ryaku-ku. (支)Ta-fo-lüe-chi'an. ❷一卷 ❸存、大正八五・一二九三No. 2841 ❹本書は、スタイン氏の蒐集に係る燉煌出土古寫本、大英博物館藏。首題に「大佛略憶一卷」とあり、末部斷缺す。先づ、歸敬三寶に始まり、一者慚愧、二者恐怖、三者厭離、四者發菩提心、五者慈親平等、六者念報佛恩、七者觀罪性空の七種心を以て一者煩惱、二者是業、三者果報の三障消滅を遂べてゐる。恐くは法式に使用せられし懺悔文の一ならん。

❺燉煌出土本(大英博物館 S. 345)

（矢吹慶輝—成田昌信）

大忿怒金剛童子念誦供養儀軌 ❶(日) Dai-fun-nu-kon-gō-dō-ji-nen-jū-ka-yō-gi-ki. (支) Ta-fen-nu-chin-kang-t'ung-tzu-nien-sung-kung-yang-i-kuei. 金剛童子持念經 ❷一卷 ❸存、大正二一・一三三No. 1224、祕密儀軌集第二 ❹唐代(一開成三 A. D. 838)失譯 ❺金剛童子持念經の下を見よ。

大忿怒金剛童子念誦瑜伽法 ❶(日) Dai-fun-nu-kon-gō-dō-ji-nen-jū-yu-ga-hō. (支)Ta-fen-nu-chin-kang-t'ung-tzu-nien-sung-yü-chieh-fa. 無量壽佛化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法 ❷一卷 ❸存、大正二一・一三〇No. 1223、續餘一、卍續一・三・一 ❹唐金剛智(成亨二—開元二九 A. D. 671—741)譯 ❺無量壽佛化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法の下を見よ。

大別解脫戒因緣廣本 ❶(日)Dai-betsu-ge-datsu-kai-in-en-kō-hon. 現代意譯大別解脫戒因緣廣本 ❸存、現代意譯根本佛教聖典叢書第七—八 ❹手島文倉譯

大遍覺法師畫贊 ❶(日)Dai-hen-gaku-hō-shi-gwa-san. (支)Ta-pien-chi'o-fa-shih-hua-tsan. ❷一卷 ❼(參考) 智證大師請來目錄

大遍照金剛御作目錄 ❶(日)Dai-hen-jō-kon-gō-on-saku-moku-roku. 大師遍照金剛御作目錄、御作目錄、高雄御製作目錄 ❸存、弘法大師全集第一五附錄 ❹豐慶(寛保二—康治二 A. D. 1593—1143)筆 ❺高雄御製作書目錄の下を見よ。 ❻寫本(龍大、二〇一四・一)

大辨正三藏Qる禮文祕決 ❶(日)Dai-ben-shō-san-zō-fu-kū-i-non-hi-ketsu. ❷一帖 ❸存 ❹永祿九寫 ❺(金剛三昧院)

大辨正三藏表制集 ❶(日) Dai-ben-shō-san-zō-hyō-sei-shū. (支)Ta-pien-ch'eng-san-tsang-piao-chih-chi. 代宗朝勅司空大辨正廣智三藏和上表制集、表制集 ❷二卷或六卷 ❸存、大正五二・八二六No. 2120、卍續二・九・三 ❹唐圓照(一貞元一六 A. D. 800—)集 ❺代宗朝勅司空大辨正廣智三藏和上表制集の下を見よ。

❻(參考) 東域傳燈目錄卷下

大辯功德天法 ❶(日)Dai-ben-kū-doku-ten-hō. ❷一帖 ❸存 ❹德川時代寫 ❺(寶菩提院)

大辯才天十句讃 ❶(日) Dai-ben-zai-ten-jū-ku-san. ❷一卷 ❸存 ❹喜永六寫 ❺(龍大、二〇五五・六)

大辯才天女念誦次第 ❶(日)Dai-ben-zai-ten-nyo-nen-ju-shi-dai. ❷一帖 ❸存 ❹德川時代寫 ❺(寶龜院)

大辯才天女祕密陀羅尼經 ❶(日)Dai-ben-zai-ten-nyo-hi-mitsu-da-ra-ni-kyō. 宇賀耶頓得陀羅尼經、最勝護國宇賀耶頓得如意寶珠陀羅尼經 ❷一卷 ❸存 ❹唐不空譯と題す。日本撰述僞經。

大辯才天女品 ❶(日)Dai-ben-zai-ten-nyo-hon. (支)Ta-pien-t'ai-tien-nü-p'in. 金光明最勝王經大辯才天女品 ❸存、金光明最勝王經第七—八(大正一六・四三四No. 665)之内、鎮周一四 ❹義淨(貞觀九—先天二 A. D. 635—713)譯 ❺唐長安三(A. D. 703)

大辯才天祕訣 ❶(日)Dai-ben-zai-ten-hi-ketsu. ❷三卷 ❸存、近世佛教集說之内 ❹淨嚴(寛永一六—元祿一五 A. D. 1639—1702)撰 ❺正德三刊(谷大、餘大・二八一六、餘洋・四二四)(龍大、二六六九・四二)(高大・寄・一・五七)德川時代寫(寶龜院)

大辯才天法 ❶(日) Dai-ben-zai-ten-hō. ❷一帖 ❸存 ❹德川時代寫 ❺(寶龜院)

大辯財天修行法 ❶(日)Dai-ben-zai-ten-shu-gyō-hō. ❷一卷 ❸存 ❹眞源記 ❺(妙法院)

大辯邪正經 ❶(日)Dai-ben-ja-shō-gyō. (支)Ta-pien-hsieh-cheng-ching. 大辯邪正法門經 ❷一卷 ❸存、大正八五・一四一〇No. 2893 ❹本經は、ペリオ氏の蒐集に係る燉煌出土古寫經、巴里國民圖書館藏。首題に「佛說大辯邪正法門品第一」と云ひ、末題に「大辯邪正經」とあり、その直前に後記あり、玄奘及長年師及邪秦等、於如來七寶窟中、得此如來大辯邪正甚深密藏經一卷」と。本經は經錄に由るに大周錄に初めて僞經錄中に出で、後の經錄多く之を踏襲してゐる。本經は總べて次の十一品より成る。大辯邪正法門品第一、十地菩薩品第二、文殊師利菩薩起請品第三、釋迦牟尼佛從初心菩薩說斷六趣見趣品第四、修道品第五、文殊師利菩薩請問大利益品第六、文殊師利菩薩決疑品第七、文殊師利菩薩又問大辯邪正法門品第八、文殊師利菩薩又問三十二相品第九、文殊師利菩薩問八十種好品第十、校量功德品第十一。本經は之等十一品に就いて記述し、終りに十二部を持すと雖も、能く邪正を辨せず、恒に邪見の人となる。覺法を爲すに非ずんば心口にて惡を爲さず、身亦犯す所なし。能く此の三事を持ちて速に生死の淵を出でん。千章を讀むと雖も中義を得ずんば一句に如かず。得道すべくば足る。但だ學者あり、寡かに自ら思慮せよ。虛しく功程を費して恒に迷路に居るを得ざれ」とは一經の總法である。尙鳴沙餘韻解說第二部二八二—二八九頁參照せよ。

❾燉煌出土本(巴里國民圖書館藏 P. 2253)

（矢吹慶輝—成田昌信）

大辯邪正法門經 ❶(日) Dai-ben-ja-shō-hō-mon-gyō. (支) Ta-pien-hsieh-cheng-fa-men-ching. ❷一卷 ❸疑僞經。 ❼(參考) 武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

大菩薩行法 ❶(日) Dai-bo-satsu-gyō-hō. ❷一卷 ❸存 ❹弘化四寫 ❺(京大、印哲・ひ・四七)

大菩薩藏會 ❶(日)Dai-bo-satsu-zō-e. (支) Ta-p'u-sa-tsang-hui. (梵)Bodhisattva-piṭaka (藏傳) (藏) bphags-pa byaṅ-chub-sems-dpaḥi sde-snod ces-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo. 大菩薩藏經 ❷二十卷 ❸存、大寶積經第三五—五四(大正一一・一九五No. 310, 12) ❹玄奘(仁壽二—麟德元 A. D. 602—664)譯 ❺唐貞觀一九(A. D. 645)

❻大乘菩薩藏正法經(異譯品名對照は此項下參照)の異譯。本經は菩提流志によつて大寶積經第十二會に編入せらる。西藏譯は Surendra (-bodhi?), Indra (-bodhi?) の共譯とさる。○全經、二十卷十二品に分れ、舍利弗を對告として四無量・六度・四攝を菩薩道の要用なりと說く。經中、瑜伽師地等の語見え、瑜伽論菩薩師地の成立に影響を受くる經と思はる。發經中、滅後五百歲の讖記あり。開化長者品第一、佛一時鷲峰山にあり、賢守 Bhadrapāla 等五百長者を示教利喜して出家せしめ、(卷三十五)、金毗羅天授記品第二、(1)彼等を率ゐて王舍城に行乞し、歸途、隨從し來れる金毗羅 Kumbhīra 並に諸夜叉に授記し、又金毗羅の子世羅 Śaila には醫王佛となるべしと授記したまふ。(2)かくて一同を率ゐて鷲峰山に還り、微妙吉祥大菩薩藏を說くべしとて衆を集めしめたまふ。試驗菩薩品第三、舍利子の問に應じて、信欲具足と菩提心を以て一切智心を成就すと說き給ふ(卷三十六)。如來不思議性品第四、如來の十種不思議法を明して信受を勸む。(1)如來不思議身。(2)如來不思議雷聲。(3)如來不思議智。(4)如來不思議光。(5)如來不思議尸羅及等觀(三摩地)。(6)如來不思議神通。(7)如來不思議力(如來十力を詳說)。(8)如來不思議無畏(四無畏)。(9)如來不思議大悲。(10)如來不思議不共佛法(十八不共法)。(卷三十七—卷四十)。四無量品第五、往昔、大龜如來が最勝壽轉輪王の子、精進行をば菩薩の法器と認めて、彼に行きて大慈・大悲・大喜・大捨の四無量波羅蜜を說かれたることを廣說す。陀那波羅蜜多品第六、菩薩行として六波羅蜜を擧げ、第一に陀那、五十條の施の心得、二十種の施の功德利益等を明し、昔、旁者羅私如來の時に日に微綾一縑宛を獻じたる織紡綾が、この功德にて後に成佛して善住受知來となりたりといふ故事を擧げて、施の尊

大唐西域求法高僧傳 唐 義淨 ❶ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❷ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❸ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❹ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❺ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❻ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❼ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❽ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨 ❾ 大唐西域求法高僧傳 (日) Dai-tō-saiiki-gu-hō-kō-sō-den (中) Ta-t'ang-hsi-yü-ch'iu-fa-kao-seng-chuan. 唐 義淨

大方廣圓覺修多羅了義經序注

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-shu-ta-ra-ryō-gi-kyō-jo-chū. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-hsiu-to-lo-liao-i-ching-hsu-chu. 圓覺經略疏註序、圓覺經略疏註經、圓覺經略疏註 ❷一卷 ❸存、卍續一・八七・五 ❹宋如山注 ❺圓覺經略疏序註の下を見よ。 ❻寫本(京大、藏・九タ・七)

大方廣圓覺修多羅了義經心鏡

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-shin-kyō. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-hsin-lo-lo-liao-i-ching-hsin-ching. 圓覺經心鏡、圓覺心鏡、智聰圓覺經注 ❷六卷 ❸存、卍續一・九三・五 ❹智聰述 ❺南宋寶慶三(A. D. 1227) ❻圓覺經心鏡の下を見よ。 ❼寫本(京大、藏・九タ・一〇)

大方廣圓覺修多羅了義經略疏

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-sha-ta-ra-ryō-gi-kyō-ryaku-sho. (支) Ta-fang-kuang-yuan-chiao-hsia-to-lo-liao-i-ching-lio-su. 大方廣圓覺經略疏註、圓覺經略疏註、大方廣圓覺修多羅了義經略疏、圓覺略疏 ❷四卷 ❸存、大正三九・五二四No. 1795、鉛律九、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹唐宗密(建中元—會昌元A. D. 780—841)述 ❺圓覺經略疏註の下を見よ。 ❻寫文一〇刊(正大、一一三五・一三、一六)元祿七刊(正大、一一三五・一五)谷大)

大方廣圓覺修多羅了義經略疏序注

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-shu-ta-ra-ryō-gi-kyō-ryaku-sho-jo-chū. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-hsia-to-lo-liao-i-ching-lio-su-hsu-chu. 圓覺經略疏註序、圓覺經略疏序註 ❷一卷 ❸存、卍續一・一五・五 ❹宋代如山撰 ❺圓覺經略疏序註の下を見よ。 ❻寫眞版(京大、藏・九タ・一一)

大方廣圓覺修多羅了義經略疏註

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-sho-chū. (支) Ta-fang-kuang-yuan-chiao-hsia-to-lo-liao-i-ching-liao. 大方廣圓覺經略疏註、圓覺經略疏註經、圓覺經略疏註經、圓覺經略疏、圓覺略疏註經、圓覺經略疏註、大方廣圓覺略疏 ❷四卷 ❸存、大正三九・五二四No. 1795、鉛律九、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹唐宗密(建中元—會昌元A. D. 780—841)述 ❺圓覺經略疏註の下を見よ。 ❻寫眞版(京大、藏・九タ・一一)

大方廣圓覺修多羅了義經略疏註

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-ryaku-sho. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-liao-su. 大方廣圓覺修多羅了義經略疏註、圓覺經略疏註、圓覺經略疏、大方廣圓覺經略疏註 ❷三卷或四卷 ❸存、大正三九・五二四No. 1795、鉛律九、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹唐宗密(建中元—會昌元A. D. 780—841)述 ❺圓覺經略疏註の下を見よ。 ❻刊本(正大、一一三五・一〇—一一)

大方廣圓覺略疏注

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-ryaku-sho-chū. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-liao-su-chu. 大方廣圓覺修多羅了義經略疏註、圓覺經略疏、圓覺略疏註、圓覺略疏、大方廣圓覺經略疏註 ❷四卷 ❸存、大正三九・五二四No. 1795、鉛律九、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹唐宗密(建中元—會昌元A. D. 780—841)述 ❺圓覺經略疏註の下を見よ。 ❻寫文一〇刊(正大、一一三五・一三)谷大)

大方廣圓覺修多羅了義經略疏註

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-sho-ro-ro-liao-i-ching-liao-su-hsu-chu. 圓覺經略疏註、大方廣圓覺修多羅了義經略疏註經、圓覺經略疏、圓覺略疏註經、圓覺略疏、大方廣圓覺略疏 ❷四卷 ❸存、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹宋代如山撰 ❺圓覺經略疏序註の下を見よ。 ❻寫眞版(京大、藏・九タ・一〇)

大方廣圓覺修多羅了義經略疏

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-sha-ta-ra-ryō-gi-kyō-ryaku-sho-jo-chū. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-hsia-to-lo-liao-i-ching-liao-su-hsu-chu. 大方廣圓覺修多羅了義經略疏註、圓覺經略疏註、圓覺經略疏、大方廣圓覺經略疏註、圓覺經略疏註、圓覺略疏、大方廣圓覺略疏註 ❷三卷或四卷 ❸存、大正三九・五二四No. 1795、鉛律九、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹唐宗密(建中元—會昌元A. D. 780—841)述 ❺圓覺經略疏註の下を見よ。 ❻刊本(正大、一一三五・一〇—一一)

大方廣圓覺略疏注

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-ryaku-sho-chū. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-liao-su-chu. 大方廣圓覺修多羅了義經略疏註、圓覺經略疏、圓覺略疏註、圓覺經略疏、大方廣圓覺略疏註 ❷四卷 ❸存、大正三九・五二四No. 1795、鉛律九、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹唐宗密(建中元—會昌元A. D. 780—841)述 ❺圓覺經略疏註の下を見よ。 ❻寫文一〇刊(正大、一一三五・一三)谷大)

大方廣圓覺修多羅了義經略疏

❶(日)Dai-hō-kō-en-gaku-sha-ta-ra-ryō-gi-kyō-ryaku-sho-jo-chū. (支)Ta-fang-kuang-yuan-chiao-hsia-to-lo-liao-i-ching-liao-su-hsu-chu. 大方廣圓覺修多羅了義經略疏註、圓覺經略疏、圓覺略疏註經、圓覺經略疏、圓覺略疏、大方廣圓覺略疏註 ❷四卷 ❸存、大正三九・五二四No. 1795、鉛律九、卍續一・一五・一、明南1609石 ❹唐宗密(建中元—會昌元A. D. 780—841)述 ❺圓覺經略疏註の下を見よ。 ❻寫文一〇刊(正大、一一三五・一四)

大方廣經

❶(日)Dai-hō-kō-kyō. (支)Ta-fang-kuang-ching. 大通方廣經 ❷三卷 ❸(参考) 奈良朝現在一切經疏目錄1779

大方廣華嚴十惡品經

❶(日)Dai-hō-kō-ke-gon-jū-aku-hon-kyō. (支) Ta-fang-kuang-hua-yen-shih-te-e-p'in-ching. ❷一卷 ❸存、大正八五・一三五九No. 2875

❹本經は、スタイン氏の蒐集に係る燉煌出土古寫本、大英博物館藏。首部破損、末題に「大方廣華嚴十惡品經」とありて、これを階の法經錄卷二僞妄中の「華嚴十惡經一卷」(大正五五卷一二二頁上段)に當るものゝ如し。殘卷首部に、一者不害衆生、二者不行放逸、三者不飲酒、四者不食肉、五者常行大慈の不斷善根の五善を揭げ、次に第三不飲酒に就て迦葉の問に答へて、釋尊は一切衆生にて酒肉を食せざるものは阿鞞多羅三藐三菩提心を得發せんと結び、次に法酒せし令婆提國の吉槃泣女の往因を叙し、婆羅門羅が飲酒醉亂の爲に犯せし罪過の因緣を擧げて飲酒を誡め、次に食肉の非を說き、地獄に墮する諸相を示し、終りに不飲酒不食肉の功德を列擧してゐる。

本經は結局六朝時代禁酒斷肉の勵行に上下を擧げて恪守すべきを勸めし因緣により僞作せられしもので當時の斷肉思想を知る資料の一つであらう。尙鳴沙餘韻解說第二部二一七—二二〇頁を參照せよ。

❺燉煌出土本(大英博物館S. 1320)

(矢吹慶輝—成田昌信)

大方廣三戒經

❶(日)Dai-hō-kō-san-kai-kyō. (支) Ta-fang-kuang-san-chieh-ching. ❷一卷 ❸失譯 ❹(参考) 法經錄第五

大方廣三戒經

❶(日)Dai-hō-kō-san-kai-kyō. (支)Ta-fang-kuang-san-ch'eh-ching. (梵藏)大寶積經三律儀會第一參照、三戒經、演說三戒經、說菩薩禁戒經、集一切佛法經 ❷三卷 ❸存、大正一一・六八七No. 311、鉛旭七、卍六・三、北34乃、南27乃、元21乃、明北21乃、清21乃、麗24字、天27乃、17字、法23字、至291推、明南21乃、Nj. 24 ❹北涼曇無讖(太元一〇—元嘉一〇 A. D. 355—433)譯

❺本經は三卷より成り、一に三戒經、又は演說三戒經、說菩薩禁戒經、集一切佛法經ともいひ、大寶積經の三律儀會第一の異譯であつて、佛、一切諸佛如來の境界、菩薩の所行を分別して、三戒を說かれしが故にこの名が存するのである。

本經は上卷に於て、佛王舍城紙園崛山に於て、無量無數の大菩薩・大比丘・その他大衆に圍繞せられて、大迦葉を對告衆として無上菩提を求めんには、一切の執著の想を

離れ、女人を離るゝ等の二十事を捨離すべきことを說き、更に佛滅後の末法の世に入れば、たとひ菩提心を發すも、比丘尼に親近し、不淨食を受くる等の二十法の中に終始し、三寶を敬信すること無くして、遂にこの經を聞くも誹謗すること至ることを說き、中卷に於ては、菩提を求めんものは「一切法は悉く所有無し」との一法に親近して、一切の相の心を離るべきことを力說し、更に成就すべき四種の菩薩の行を說き、少欲と寂靜とを讚嘆し、下卷に於ては一切諸法の不可得、一切諸法に於て心所住無きことが、沙門婆羅門を成ずることなること、及び、在家の菩薩の成ずべき諸種の三法、成ずべからざる三法等在家人の禁戒を說かれたもので、般若系の空思想を隨所に見るものである。

本經は大寶積經第一會の別譯であつて、その內容殆んど全くこれと合致するものである。

❼(参考) 開元錄第四、貞元錄第六

(林五邦)

大方廣師子吼經

❶(日)Dai-hō-kō-shi-shi-ku-gyō. (支)Ta-fang-kuang-shih-tzu-hou-ching. (梵)Siṁha-nādika (藏傳)(藏) hphags-pa seṅ-geḥisgra bagras-pa shes-byaḥ-ba theg-pa chen-poḥi mdo. 師子吼經 ❷一卷 ❸存、大正一七・八九〇No. 835、鉛宙二、卍一〇・七、北247傷、南266傷、元247傷、明北259良、清259良、麗244昃、天248傷、指226昃、法242昃、至330改、明南245男、Nj. 263 ❹地婆訶羅譯 ❺唐永隆元(A. D. 680)

❻本經は先づ勝積菩薩が世尊の敎を受け北方歡樂世界に往きて法起佛に見え、故に菩薩何所より來りしやと問はれし時、菩薩は默して言說することなかりし因緣を揭げ、法起如來が曾聲菩薩の願ひにより、勝積菩薩の默せしは諸法本來無來無去、無有言說にして不可得なるに依りし爲であると說かれしことを述べ、無說こそ是れ眞說なりと示し、更に法起佛は淨身菩薩の爲に法界は無字無屬にして一切衆生の能く覺知し宣辯する所に非るも、因緣和合して字屬顯現し、而も衆生の音屬語言は悉く佛の四無礙智に入りて本來不動なりと說かれ、如來は此の眞實の義を師子吼して以て遍く一切衆生を利益することを一切大衆に告げ給ふことを述べ、最後に此の如來の實語を聞き、此經を信受するものは其の功德の大にして諸佛の擁護する所となるを說いてゐる。尙、本經の異譯元魏(正光六 A. D. 525)佛陀扇多譯如來師子吼經一卷も同樣である。

❼(参考) 開元錄第九、貞元錄第一二

(本田義英)

大方廣十地經

❶(日)Dai-hō-kō-jū-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-shih-ti-ching. 大方廣菩薩十地經、大方廣菩薩地經、菩薩十地經 ❷一卷 ❸存、大正一〇・九六三No. 308、鉛黃一〇、卍八・三、北93衰、93南91衰、元93衰、明北99壹、清99壹、麗97伏、天99衰、指87伏、法93伏、至155賓、明南94邇、Nj. 103 ❹元魏吉迦夜(—延興二 A. D. 472—)、曇曜(—和平三 A. D. 462—)共譯 ❺大方廣菩薩十地經の下を見よ。

大方廣十輪經

❶(日)Dai-hō-kō-jū-rin-kyō. (支)Ta-fang-kuang-shih-lun-ching. (梵藏)大乘大集地藏十輪經、參照、十輪經 ❷八卷 ❸存、大正一三・六八一No. 410、鉛玄七、卍六・九、北61弔、南61弔、元58弔、明北61弔、清61弔、麗59唐、天60弔、指50唐、法58唐、至130周、明南58唐、Nj. 65 ❻北涼代(A. D. 397—439)失譯

❻玄奘譯大乘大集地藏十輪經(同項參照)は本經の異譯であり、內容も略ゞ之と出入してゐない。本經は他の地藏諸經(占察善惡業報經・地藏本願經)に見るが如く地藏信仰の鼓吹である。而して本經が著しく調和的傾向を有せるは注意すべきである。即ち、釋迦・彌勒二佛の中間にあつて調和し、佛法と王法との調和接近、佛弟子は大乘に驕慢であり、二乘を卑下することなく、三乘兼習にして而も大乘(般若の無相皆空)に旨歸すべしとなし、僧は持戒堅固なるべく、俗人は三寶に對し絕對的信敬を持すべく、兩者を戒飾し、接近せしめたるが如きである。品次は次の如し。

(1)序品。(2)諸天女問四大品。(3)發問本業鬘結品。(4)灌頂品。(5)相輪品。(6)剎利施陀羅現智相品。(7)衆善相品。(8)剎利依止輪相品。(9)菩薩護嶽品。(10)布施品。(11)持戒相品。(12)忍辱品。(13)精進品。(14)禪相品。(15)智相品。

(江田俊雄)

大方廣善巧方便經

❶(日)Dai-hō-kō-zen-gyō-hō-ben-kyō. (支) Ta-fang-kuang-shan-chiao-fang-pien-ching. (梵藏)大寶積經第三十八大乘方便會及び慧上菩薩問大善權經、參照、善巧方便經 ❷四卷 ❸存、大正一二・一六六No. 346、鉛地一二、卍一五・六、北1298鐵、南1302鬼、元1392鬼、明北921深、清921深、麗1450刑、天1283鬼、至490請、明南954清、Nj. 692 ❹施護譯 ❺宋太平興國五以後(A. D. 980—)

❻大乘方便會(大寶積經第三十八會)の異譯、その下の解說を參照。內容全一なるも字句稍々廣し、中に「如持明人、菩修瑜伽悉地法門、於祕密五種縛中、而受繫縛(乃至)而獲安住祕密行門」等の增句見え、明かに密部思想家によつて潤飾せられたるものなるを知られる。

(美濃晃順)

大方廣總持經

❶(日)Dai-hō-kō-sō-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-tsung-ch'ih-ching. 大乘方廣總持經、大乘方等總持經、總持經 ❷一卷 ❸存、大正九・三七九No. 275、鉛盈九、卍一〇・七、北150方、南150方、元145方、明北249才、清249才、麗149萬、天149方、指138萬、法147萬、至227養、明南151五、Nj. 253 ❹隋毘尼多流支(—開皇二 A. D. 582—)譯 ❺大乘方廣總持經の下を見よ。

大方廣總持寶光明經

❶(日)Dai-hō-kō-sō-ji-hō-kō-myō-gyō. (支)Ta-fang-kuang-tsung-chih-pao-kuang-ming-ching. (梵)Ratnolkā-dhāraṇī (引用、藏傳) (蒙) hphags-pa dkon-mchog ta-la-lahi gzuns shes-bya-ba theg-pa chen-po-hi mdo. 總持寶光明經、寶光明經 ❷五卷 ❸存、大正一〇・八八四No.299、縮天一一、卍一五・二一、北1101相、南1117相、元1111相、明北78力、清786力、麗1102藏、天1100相、至635當、明南783渭、Nj.785 ❹宋法天(一)開寶六 A.D. 973—)譯 ❺(要旨) 寶光明の法とは無礙無斷不空法不空智無漏無際無盡無來無去無邊本性無著の法で具體的には菩薩十住の法門である。佛は法慧菩薩をして菩薩無邊相應寶光三昧に入りこの法門を說かしむ、舍利弗等、未曾見聞如是正法と驚歎す、佛、文殊と普賢とをして、舍利弗其他羅閱諸天大衆を集め、之を訓戒しつゝ、遙に法滅五百歲の後の爲にこの寶光明總持の陀羅尼を說き、後にこれが護持の方法を詳說する。

(傳譯) この經梵本未見。西藏本は祕密經典類に橫し、大谷甘珠爾目錄No.472に在り、よく一致する。 (櫻部文鏡)

大方廣入如來智德不思議經

❶(日) Dai-hō-kō-nyū-nyo-rai-chi-toku-fu-shi-gi-kyō. (支) Ta-fang-kuang-ju-ju-lai-chih-te-pu-sse-i-ching. (梵)Tathāgata-guṇ ajñān ācinty avtāra-nirdeśa. (藏傳)(蒙) hphags-pa de-bzhin-gśegs-pahi yon-tan daḥ ye-ces bsam-gyis-mi-khyab-pahi yul la ḥjug-pa bstan-pa shes-bya-ba theg-pa chen-po-hi mdo. 入如來智德經、入如來智德不可思議經 ❷一卷 ❸存、大正一〇・九二四 No.304、縮天一一、卍八・二一、北86伏、南85伏、元83伏、明北89壺、清89壺、麗87臣、天83伏、指77臣、法83首、至158率、明南85通、Nj.93 ❹唐實叉難陀(永徽三—景雲元652—710)譯

❺失譯の度諸佛境界智光嚴經、因那崛多譯と傳ふる佛華嚴入如來德智不思議境界經と同本異出。梵本缺。西藏本(大谷甘珠爾目錄No.852)は因那崛多譯及び失譯本に近くこの實叉難陀譯には最も遠い。

佛摩竭提國寂滅道場菩光明殿に數多の比丘比丘尼菩薩無量の八部衆と俱に在り(各々歎德の文あり)。文殊師利童子の問に答へて滅諸蓋菩薩は如來此會に安住し給ひつゝ諸天人の出家修行成道說法等を見たまふ智德不思議境界を說き、之を信解すれば解脫度生し種々の三昧を具足し陀羅尼を得と說く。

更に文殊の問に應じて滅諸蓋菩薩は餘の勝法ありとして五法を信解すべきを示し、終に施羅漢、施獨覺、聞佛名、觀見佛像、持戒等よりもこの如來智德不思議境界法門を信ずるに勝る福德なしと說いて一經を終る。內容は凡そ大本華嚴經中に散見するところ、此經が華嚴部に橫せらるゝ所以である。

❼(參考) 開元錄第九、貞元錄第一三 (櫻部文鏡)

大方廣入如來不思議境界經

❶(日) Dai-hō-kō-nyū-nyo-rai-fu-shi-gi-kyō-gai-kyō. (支) Ta-fang-kuang-ju-ju-lai-pu-ssū-i-ching-chieh-ching. ❷二卷 ❸存、大正一〇・九二四 No.302、縮天一一、卍八・二一、北86伏、南85伏、元83伏、明北89壺、清89壺、麗87臣、天83伏、指77臣、法83首、至158率、明南85通、Nj.93 ❹唐實叉難陀(永徽三—景雲元 A.D. 652—710)譯

❺花嚴宗經論章疏目錄に佛花嚴入如來不思議境界二卷隋因那崛多譯、度諸佛境智嚴經一卷梁曾伽婆羅譯、度諸佛境界智光嚴經一卷失譯と本經を並記し、その左に註して曰く「右件四經。同本異譯。並在二普光堂一說。此據二花嚴傳一也。若貞元錄非二是同本一。乃是別經。今依二本傳一。卽費長房三寶錄說同。故與二花嚴一同本異譯」云々。

大方廣如來性起微密藏經

❶(日) Dai-hō-kō-nyo-rai-shō-ki-mi-mitsu-zō-kyō. (支)Ta-fang-kuang-ju-lai-hsing-chi-wei-mi-tsang-ching. ❹失譯 ❺舊華嚴經如來性起品の抄出。 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第一、開元錄第一六、第一七、貞元錄第二六

大方廣如來藏經

❶(日)Dai-hō-kō-nyo-rai-zō-kyō. (支) Ta-fang-kuang-ju-lai-tsang-ching. 如來藏經 ❷一卷 ❸存、大正一六・四六〇No.667、縮成六、卍續一・三・四、麗1385且 ❹唐不空(神龜元—大曆九 A.D. 705—774)譯

❺本經は不空三藏によつて天寶五年—大曆六年(A.D. 747—771)の間に譯されたものであるが、同本異譯たる大方等如來藏經が既に三百餘年前佛陀跋陀羅(覺賢)によつて譯せられてゐる。兩經を比較するに、その內容は殆んど同一であり、唯だ不空譯は量に於て覺賢譯よりも約八割を增してゐる。それは本經が叙述を詳細にしてゐるからにすぎぬ。本經は舊譯と同樣に序分、正宗分、流通分の三分から成り、序分では世尊が成道十年の後に靈鷲山梅檀藏樓閣で多くの聲聞・菩薩・諸有情類に圍繞せられてゐることを述べ、正宗分では金剛慧菩薩の質問から續いて、釋尊の如來藏の說明がある。卽ち常恒不變の法性法界たる如來藏が一切有情に存することが說かれてゐる。以下如來藏の存在を、それぞれ蜜房・穀物・糞中の金磚・貧家の伏藏・樹木の種子・繰吊の佛像・醜女の胎兒・泥犂中の金像等の譬喩を以て說明してゐる。流通分ではこの經典の受持・讀誦・書寫等の利益を說いてゐる。以上各々の叙述に於ては先づ長行を以て說き、更に同じ趣意を偈を以て繰返してゐる。舊譯で流通分の最後に一連の偈が述べられてゐるのは、本經では二分せられ、其の間に舊譯にない長行が加はつてゐる。詳しくは大力等如來藏經參照。

❼(參考) 貞元錄第一五 (水野弘元)

大方廣如來難思議境界經

❶(日)Dai-hō-kō-nyo-rai-nan-shi-gi-kyō. (支)Ta-fang-kuang-ju-lai-nan-ssū-i-ching-chieh-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹唐實叉難陀(永徽三—景雲元 A.D. 652—710)譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大方廣如來祕密藏經

❶(日)Dai-hō-kō-nyo-rai-hi-mitsu-zō-kyō. (支) Ta-fang-kuang-ju-lai-pi-mi-tsang-ching. ❷二卷 ❹失譯 ❼(參考) 開元錄第四、貞元錄第六

大方廣如來祕密藏經

❶(日)Dai-hō-kō-nyo-rai-hi-mitsu-zō-kyō. (支) Ta-fang-kuang-ju-lai-pi-mi-tsang-ching. (梵)Tathāgata-kośa(引用) 祕藏經、如來祕密藏經、祕密藏經 ❷二卷 ❸存、大正一七・八三七No.821、縮字一〇・卍一二・二一、北416藏、南425藏、元423藏、明北439染、清439染、麗414藏、天433藏、指384藏、法410藏、至431藏、明南421染、Nj.443 ❺三藏代(A.D. 350—431)失譯

❻本經は佛が常出大菩國より來至せる無量志莊嚴王菩薩に對して、祕密藏法を說く。菩薩は歡喜して身を以て佛を供養し、希有廣大の神通變化を現ずる。これに就て大德迦葉問を起し、佛は更に祕密藏法を敷演する。これが一經の主旨である。

抑も祕密藏法とは大乘佛敎の立場から、一種の特別な角度を以て、通途佛敎の德目を眺めた、その觀點なり、視野なりを意味するので、本經に於ては迦葉に對しての說法中に始めてこれが顯はれるやうである。卽ち菩薩の修行を妨害する衆生は決して惡趣に墮せずとか、如來の塔物を盜取してたとひ地獄に墮するとも、悔心により出離すれば、外道の見に歸するよりは勝るとかいふ如き論法は常途一般のものと聊か異る所がある。殊に煩惱は總て不實の法にして如來の說法も不實なりと云ひ、十惡業道も堅著せざれば不犯にして、其の性本來無垢淸淨なりと云ふに至つては頗る奇矯の言といふべきである。尤も空觀の立場からは是の如き言說は許さるべきも、一步を過まれば邪見にして、全く佛魔一紙のきはどい境地と謂ふべきである。

最初無量志莊嚴王菩薩に對する四法とか二法とかの德目の列擧にはあまりこれといふ意義も見出されない。只得るに隨つて大乘菩薩の德目を收載したものと見える。本經の興味は寧ろ後段の迦葉に對する說法によりて喚び起される。一體大迦葉は婆羅門出身の弟子で、かうした論議を背負つて立つには實に適り役と謂ふべきだ。同じく後段に阿難が出て來るが、彼は現身を供養した菩薩が如何して菩提を覺り得るかとか、この蹠臺に乘れる諸菩薩は何時正覺を得るかとか、例によつて瑣細な問題に注意を向けてゐる。此處でも佛典文學に現はれる人格それぞれの書き分け方が興味を惹くのである。

本經は秦錄に附載せられてゐるだけで、譯人の名も知れず、又他に異譯の經典も無く、只此の經一本だけであるが、譯文は暢達にして高雅、譯者は決して凡手ではない。

面白いことは本經の梵本が存在を認められてゐることである。尤も相當する梵本が完全に保存されてゐるといふのではない。大乘集菩薩學論といふ幾多の經典を引用した論本であつて、その梵文が近時出版された。題して Śikṣāsamuccaya と云ふ。學集の義である。この中に本經の十惡業に關する一節が援引せられてゐる。これで本經には正に相當せる梵文、それも純正なサンスクリット原文があつたことが云へるわけである。

今これに相當すべきは宋法護譯大乘集菩薩學論第十一の文である。

尙ほ一九二二年ロンドンに於て出版せられしラウズ (W. H. D. Rouse) の英譯一六八頁にこれに相當する文がある。梵文は一九〇二年に出版の完成を見たのでベンドール (Cecil Bendall) の校訂にかゝり、露都に於て佛敎叢書の第一卷として公にされた。

本經の標題は梵文では tathāgata-kośa となつてゐるが、附註の言ふ所によればスバーシタサングラハ (善說集) と稱する梵本の中にはこの經は tathāgata-guḥy-ā-kośa-sūtra となつて引用されてゐるといふ事だし、西藏譯では tathāgata-gsar-bhaṅ-sūtra となつてゐるとの事である。支那譯となつた分の梵本には更に大方廣 mahā-vaipulya なる語が冠せられてあつたものと見える。 (泉芳璟)

大方廣如來不思議境界經

❶(日)Dai-hō-kō-nyo-rai-fu-shi-gi-kyō-gai-kyō. 如來不思議境界經、不思議境界經 ❷一卷 ❸存、大正一〇・九〇九No.301、縮天一一、卍八・二一、北93壺、清93壺、麗86臣、天85伏、指77臣、法85首、至160率、明南86通、Nj.97 ❹唐實叉難陀譯 ❻證聖元以後(A.D. 695—)

❻大華嚴經普光法堂會の別譯。佛一時、摩竭陀國菩提樹下にあり、觀自在菩薩等の諸菩薩、雜染土に於て衆生化益の爲に靡聞の形を現ずる諸菩薩、舍利弗、大目揵連以下、下劣衆生調伏の爲に、女身を現ずる摩訶波闍波提等無量の比丘尼、釋梵護世、天龍乾闥婆等凡べて來會した。

こゝに於て、佛、如來不思議境界と言はるゝ三昧に入り、その三十二相は一々の相中に、十方の世界とその佛とを悉く顯現する。然るに、一切如來も常に此の定に入るは、これに依つて威神力を成じ、法空を征し、佛國として種々の自在を現はさしむる爲にである。それに要するはたゞ一念、其の間に無量の佛事の自在無礙を現じて、衆生の利益を成就し、深妙な解脫の門に入らしめるのである。扨、未だ此の意味を明かにしない、德藏菩薩、普賢菩薩に如來の入る三昧の名と又、此の三昧に於て、十方一切の世界は、如何なる樣式を以て、自在に種々の佛事を示現し、衆生を度脫せしむるかを問ふ。普賢、之れに對し、上に說く所を敷衍し、佛事の無障礙自在の樣相を細說する。更に此の三昧證得の方法として、普賢は德藏の問に對し、修すべき福德施戒智惠卽、六波羅蜜の行を細說する。最後に又德藏の問により、普賢は、衆生此の法門を得、これを受持・讀誦・解說書寫すれば、三界一切衆生をして生死を脫し、羅漢を得しめ、一百劫中戒律を守り、或は、忍辱・精進・禪定を修すれば無量の福德を得、此の法門を聞き尊重・信受・毀謗する所なければ速かに正覺を成ずべきを敎ふる。こゝに於

で、普賢菩薩・弥勒菩薩・其の面門より無量の色光を放ち、大地は震動し、此の法門の勝を讃じ、全世の諸菩薩摩訶薩をして、信受奉行せしむる。

❹〔参考〕同元録第九、貞元録第一三（橋井慈荘）

大方廣不生不滅經 ❶(日)Dai-hō-kō-fu-shō-fu-metsu-kyō. (支) Ta-fang-kuang-pu-shêng-pu-mieh-ching. ❷1巻 ❸缺 ❹北魏文菩提流支(永寧元年A.D. 652—710)譯 ❺〔参考〕同元録第一四、貞元録第二四

大方廣不思議佛經 ❶(日)Dai-hō-kō-fu-hō-butsu-kyō. (支)Ta-fang-kuang-pu-pang-fo-ching. ❷1巻 ❸缺 ❹〔参考〕宋周録第一五、同元録第一八、貞元録第二八

大方廣菩薩藏行願品 ❶(日)Dai-hō-kō-fu-gen-gyō-gwam-bon. (支)Ta-fang-kuang-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in. 華嚴經、大方廣佛華嚴經、入不思議解脱境界普賢行願品、四十華嚴、貞元譯 ❹四十巻 ❺存、大正一〇一No. 293、縮天五、卍七・一〇一八・一、明北85秋至露、麗1288秋至霜、明南80秋至霜、Nj. 89 ❻東晉譯 ❼唐貞元二一一四(A. D. 795—798) ❽ ❾華嚴經の下を見よ。 ❿貞文二一刊 ⓫(名題)

大方廣菩薩藏所說經 ❶(日)Dai-hō-kō-fu-gen-sho-setsu-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-hsien-so-shuo-ching. 大方廣菩薩藏所說經、菩薩所說經 ❷1巻 ❸菩薩藏所說經、如來不思議境界經、菩薩所說經、如來不思議境界經 ❹一巻 ❺存、大正一〇・九〇九No. 301、縮天一一、卍八・一、北88秋、南84秋、元85秋、北93菜、洪93菜、麗88臣、天85秋、南76臣、洪85治、至160年、明南88潤、Nj. 97 ❻唐貞文菩提流支(永寧三一年至景元A. D. 652—710)譯 ❼〔参考〕 花嚴宗所依經典

後日録

大方廣佛記經 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-kwan-gyō. (支)Ta-fang-kuang-fo-kuan-ching. 大乘大方廣佛觀經、佛觀經 ❷1巻 ❸存、大正一四・一一〇No. 438、縮往四、卍一五・九、北1335鎌、南1340鎌、元1330鎌、明北963治、洪963治、麗1505九、天1320鎌、明南985鎌、Nj. 963 ❹宋法護(太平興国元一景德元三 A. D. 963—1058)譯 ❺大乘大方廣佛觀經の下を見よ。

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching. (梵題)回嚴經、六十華嚴、華嚴經、華嚴佛華嚴經、華嚴、華嚴經、新華嚴、新華嚴、五No. 278、縮天七一九、卍七・三一五、北81秋至乘、南81秋至乘、元78秋至乘、明北83治至乘、洪83治至乘、麗80治至乘、天80秋至乘、南70治至乘、法78治至乘、至153年至乘、明南78治至乘、Nj. 87 ❷東晉佛陀跋陀羅(八十年三一元嘉六 A. D. 359—429)譯 ❸華嚴經の下を見よ。 ❹貞治一一刊(宋大七・一三三・式) 唐末六十一巻安年回刊(宋大七・一三三・式) 唐末(唐大、法華)(谷大、華田・四二) 刊本(唐大、法華)(谷大、華大・一五九四)(正大、一一三一・一一二、五)

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching. (梵) Buddhâvataṁsaka nāma mahāvaipulya-s. (漢譯)Gaṇḍa-vyuha(別用)(藏)saṅs-rgyas phal-po che shes-bya ba çin-tu rgyas-pa chen-poḥi mdo. 巻二十六十地品(梵)Daśa-bhūmīśvara (Ed. by. J. Rahder with omission of most gāthās. 1926)、巻三十六普賢行品(梵) Bhadracarī-praṇidāna-rāja (Ed. by. K. Watanabe)、巻三十九入法界品(梵) Subhana-kumāra-kalyāṇa-mitra-paryupāsita-caryā. (英訳本) 華嚴經、八十華嚴、新華嚴、華嚴經、新經、華經 ❷八十巻 ❸存、大正一〇・一No. 279、縮天一一四、卍七・六一九、北82秋至臣、南82秋至臣、元79秋至臣、明北84秋至臣、洪84秋至臣、麗81秋至臣、天81秋至臣、南71秋至臣、法79秋至臣、至154臣至臣、明南79秋至臣、Nj. 88、❹貞文菩提流支(永寧三一景雲元 A. D. 652—710)譯 ❺華嚴經の下を見よ。 ❻〔参考〕同元録第九、貞元録第一三 ❼同唐元刊(龍大、三〇三・三、法華)(谷大、華大・七四五)(宋本)

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching. 華嚴經、大方廣佛華嚴經、入不思議解脱境界普賢行願品、入不思議解脱境界普賢行願品、四十華嚴、貞元譯

十華嚴、貞元譯 ❹四十巻 ❺存、大正一〇・六六一No. 293、縮天五一六、卍七・一〇一八・一、明北85秋至露、麗1288秋至霜、明南80秋至霜、Nj. 89 ❻東晉譯 ❼唐貞元二一一四(A. D. 795—798) ❽ ❾華嚴經の下を見よ。 ❿貞文二一刊 ⓫(名題)

大方廣佛華嚴所說經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-sho-setsu-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-hsien-so-shuo-ching. 大方廣菩薩藏所說經、菩薩所說經 ❷1巻 ❸菩薩藏所說經、如來不思議境界經、菩薩所說經、如來不思議境界經 ❹一巻 ❺存、大正一〇・九〇九No. 301、縮天一一、卍八・一、北88秋、南84秋、元85秋、北93菜、洪93菜、麗88臣、天85秋、南76臣、洪85治、至160年、明南88潤、Nj. 97 ❻唐貞文菩提流支(永寧三一景雲元 A. D. 652—710)譯 ❼〔参考〕 花嚴宗所依經典

後日録

大方廣佛說經 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-kwan-gyō. (支)Ta-fang-kuang-fo-kuan-ching. 大乘大方廣佛觀經、佛觀經 ❷1巻 ❸存、大正一四・一一〇No. 438、縮往四、卍一五・九、北1335鎌、南1340鎌、元1330鎌、明北963治、洪963治、麗1505九、天1320鎌、明南985鎌、Nj. 963 ❹宋法護(太平興国元一景德元三 A. D. 963—1058)譯 ❺大乘大方廣佛觀經の下を見よ。

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching. (梵題)回嚴經、六十華嚴、華嚴經、華嚴佛華嚴經、華嚴、華嚴經、新華嚴、新華嚴、五No. 278、縮天七一九、卍七・三一五、北81秋至乘、南81秋至乘、元78秋至乘、明北83治至乘、洪83治至乘、麗80治至乘、天80秋至乘、南70治至乘、法78治至乘、至153年至乘、明南78治至乘、Nj. 87、❷東晉佛陀跋陀羅(八十年三一元嘉六 A. D. 359—429)譯 ❸華嚴經の下を見よ。 ❹貞治一一刊(宋大七・一三三・式) 唐末六十一巻安年回刊(宋大七・一三三・式) 唐末(唐大、法華)(谷大、華田・四二) 刊本(唐大、法華)(谷大、華大・一五九四)(正大、一一三一・一一二、五)

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching. 華嚴經、大方廣佛華嚴經、入不思議解脱境界普賢行願品、入不思議解脱境界普賢行願品、四十華嚴、貞元譯 ❹四十巻 ❺存、大正一〇・六六一No. 293、縮天五一六、卍七・一〇一八・一、明北85秋至露、麗1288秋至霜、明南80秋至霜、Nj. 89 ❻東晉譯 ❼唐貞元二一一四(A. D. 795—798) ❽ ❾華嚴經の下を見よ。 ❿貞文二一刊 ⓫(名題)

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. 國譯大方廣佛華嚴經 ❷1巻 ❸存、國譯一切經華嚴部巻一一四 ❹唐澤勝郎譯

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. 國譯大方廣佛華嚴經 ❸存、昭和新纂國譯大藏經巻九一一一

大方廣佛華嚴經 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō. 口語全譯大方廣佛華嚴經、口語全譯華嚴經 ❷1巻 ❸存 ❹江部鴨村譯 ❺大正一一刊 ❻貞文生文館

大方廣佛華嚴經音義 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-on-gi. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-yin-i. 新譯大方廣佛華嚴經音義、華嚴經音義、華嚴音義、新譯華嚴經音義 ❷1巻 ❸存、縮成一〇、卍三五・三、北1067秋、南1083秋、元1078秋、麗1071秋、天1066秋、洪1026秋、法1053秋、守山国教書巻九四 ❹法藏撰(一説智儼 A. D. 634—704—)譯 ❺新譯大方廣佛華嚴經音義の下を見よ。 ❻元録九刊 ❼〔正大、一一三三・三一一三三〕(宋大、谷・一・一六)

大方廣佛華嚴經感通傳 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-kann-ō-den. (支)Ta-fang-kuaug-fo-hua-yen-ching-kan-ying-ch'uan. 華嚴經感通傳、華嚴感通傳 ❷1巻 ❸存、大正五一・一七三No. 2074、卍續一二乙・七・三 ❹唐慧祥(一説法琳 A. D. 687—)撰、補遺貞(一説中国A. D. 783—)撰

❺もともと華嚴宗の法藏の門下だった慧祥が、晩年天平(A. D. 783)四明山の浙江沿岸の法華に住んでいた頃、華嚴信仰の弘布に努めんとしたものである。華嚴信仰中の諸説を集めたものであって、最初の天親を除けば、中支系の著述である。而もその大半は唐人である。これは支那の華嚴信仰史上特に唐時代のそれを研究するにも資料である。

(澤木興道)

大方廣佛華嚴經感略記 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-kan-ryak-ki. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-kan-liao-chi. 華嚴經感略記、感略記 ❷1巻 ❸存、卍續一二乙・七・三、華嚴經感略記一二 ❹明徳安(享禄)一一一貞治四〇 A. D. 1532—1612)記、貞治四三、年八一没)撰 ❺華嚴經感略記の下を見よ。 ❻刊本(正大、一一三三・六四)(宋大、華・一九九・一二)

大方廣佛華嚴經義海 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-gi-kai. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-i-hai. 華嚴經義海百門 ❷11巻第1巻 ❸存、大正四五・六一七No.1875、卍續一一・八・一 ❹唐法藏(貞觀一七一永徽元 A. D. 643—712)撰 ❺華嚴經義海百門の下を見よ。 ❻〔参考〕 新羅大師講来目録

大方廣佛華嚴經義分 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-gi-shō. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-i-ch'ao. ❷六十巻 ❸存 ❹貞文菩提流支(永寧三一景雲元A. D. 652—710)譯、定賢(開元二五一四宝三A. D. 737—838)撰 ❺(宋本)

大方廣佛華嚴經行願品 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-gyō-gwam-bon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-hsing-yüan-p'in. 華嚴經普賢行願品 ❷1巻 ❸存 ❹東晉譯 ❺法藏中二一完和元(A. D. 781—810) ❻刊本(谷大、華大・四〇二四)

大方廣佛華嚴經願行願門章目 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-gwan-gyō-kwam-mon-kotsu-moku. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-yüan-hsing-kuan-mên-ku-mu. 華嚴經願行願門章目、華嚴經願行願門章目 ❷1巻 ❸存、大正三六・一〇四九No. 1742、卍續一・四・五 ❹法藏撰(貞観一一一一貞観四〇 A. D. 711—782)撰 ❺天台の湛然法華経が、法華七喩九分二十九品の八十華厳の願文を導りて、願文に説したものの。種に上下二巻にして、而も之を讃めば、始んと華厳大願を説かんとしの感がある。由来華厳を許して有教無教あるとする天台宗の両も中興の法華に此の願境あるは、実に中ならしめることである。

❻刊本(谷大、華大・四〇二四)(正大、一一三一・一一二、五)

大方廣佛華嚴經願行願門章目貞觀 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-kō-moku-kwan-shō. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-kang-mu-kuan-shê. 華嚴經願行願門章目貞觀 ❷1巻 ❸存、卍續一・八・五 ❹法藏撰、宋代本天台撰 ❺華嚴經願行願門章目貞觀の下を見よ。 ❻刊本(谷大、華・九九・一四)

大方廣佛華嚴經願文 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-kō-yō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-kang-yao. 華嚴經願文、華嚴願文 ❷八十巻 ❸存、卍續一・一二・五一・一・四・一 ❹唐慧苑(貞観二一五一天徳三 A. D. 1546—1623)撰 ❺華嚴經願文の下を見よ。 ❻同出一〇刊 ❼(谷国、一二三大・一二九)

大方廣佛華嚴經合論 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-gō-ron. (支)Ta

-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ho-lun. 華厳経合論・華厳合論 ❷百二十巻 ❸存、卍続一・五・四—一・七・二 ❹菩叉難陀(永徴三—景雲元A. D. 653—710)譯、李通玄(貞観九—開元一八 A. D. 635—730)造、志寧合論 ❺華厳経合論の下を見よ。 ❻寫文一一刊 ❼(京大、蔵・九タ・一五)(正大、一一三三・四一)

大方廣佛華厳経合論簡要 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-gō-ron-kan-yō. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ho-lun-chien-yao. 華厳経合論簡要 ❷四巻 ❸存、卍続一・七・三 ❹明代李贄簡要 ❺華厳経合論簡要の下を見よ。 ❻寫本(京大、蔵・九タ・一六)

大方廣佛華厳経合論纂要 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-gō-ron-san-yō. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ho-lun-tsuan-yao. 華厳経合論纂要 ❷三巻 ❸存、卍続一・八八・四 ❹明代方澤纂 ❺華厳経合論纂要の下を見よ。 ❻寫本(京大、蔵・九タ・一七)

大方廣佛華厳経金師子章 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-kon-ji-shi-shō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-chin-shih-tzu-chang. 華厳金師子章、金師子章 ❷一巻 ❸存、仏教大系第一四 ❹法蔵(貞観一七—先天元 A. D. 643—712)述 ❺唐長安元(A. D. 701) ❻華厳金師子章の下を見よ。 ❼(参考) 入唐新求聖教目録

大方廣佛華厳経金師子章註 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-kon-ji-shi-shō-chū. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-chin-shih-tzu-chang-chu. 華厳経金師子章註、註華厳金師子章 ❷一巻 ❸存、大正四五・六六七No. 1881、卍続二・八・一 ❹唐法蔵(貞観一七—先天元 A. D. 643—712)撰、承遷註 ❺註華厳金師子章の下を見よ。

大方廣佛華厳経三十九品大意 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-san-jū-ku-hon-tai-i. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-san-shih-chiu-p'in-ta-i. 華厳経三十九品大意 ❷一巻 ❸存、卍続一・八八・五 ❹清代永光撰 ❺華厳経三十九品大意の下を見よ。 ❻寫本(京大、蔵・九タ・一四)

大方廣佛華厳経私記 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-shi-ki. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-sze-chi. ❷二巻 ❸親公 ❹(参考) 智證大師請來目錄

大方廣佛華厳経修慈分 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-shū-ji-bun. 修慈分 ❷一巻 ❸存、大正一〇・九五九No. 306、續天一一、卍八・二、北90伏、南86伏、元84伏、明北90壺、清90壺、歴85区、天84伏、指78区、法97伏、至162率、明南96過、Nj. 94 ❹提雲般若等譯 ❺唐天授二(A. D. 692) ❻華厳部に屬する小經典。一時佛王舍城鷲峯山にあり、彌勒以下無量の大菩薩之れに從つた。こゝに於て、彌勒は佛德を讃へ、諸菩薩をして勤苦を經ずして、速かに佛の菩提を證せしむる方法を問ふた。佛、之れに對し、慈心には慈念を修習し、以て自ら調伏すべきを教へる。而して、其の修習の中には、念々に六波羅蜜具はり之れに依つて佛果に到達するを得るのである。何者、其處に十力・四無畏・十八不共法・三十二相・八十種好の最勝功德あらはれ自らを莊嚴し、盡未來際安樂に住し、一切衆生無始以來の諸業重障を除滅するが故である。かく一經を通じて、慈心を說き、修慈者の德を讃嘆し、彼に於て開示せらるべき無盡の世界の樣相を叙說する。 ❼(参考) 開元錄第九、貞元錄第一三、淨土依憑經論章疏目錄 (櫻井雋晃)

大方廣佛華厳経疏 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sho. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-su. 華厳経疏、華厳大疏、大方廣佛華厳経清涼疏、華厳疏 ❷六十巻 ❸存、大正三・五〇三No. 1735、續歴一—四、卍三三・一〇—三四・四、明北1583用至威、明南1573顔至最、Nj. 1559、 ❹澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)撰 ❺唐興元元—貞元三(A. D. 784—787) ❻華厳経疏の下を見よ。 ❼(参考) 智證大師請來目錄

大方廣佛華厳経疏演義 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sho-en-gi. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-su-yen-i. 華厳経疏演義鈔、華厳経隨疏演義鈔、華厳大疏鈔、演義鈔、華厳疏 ❷八十巻或九十巻 ❸存、大正三六・一No. 1736、續歴五—一〇、卍三四・四—九、明北1583沙至禹、明南1574精至丹、Nj. 1590 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A.D. 737—838)述 ❺華厳経隨疏演義鈔の下を見よ。 ❻刊本(京大、蔵・九タ・一九)

大方廣佛華厳経疏演義鈔 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sho-en-gi-shō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-su-yen-i-ch'ao. 大方廣佛華厳経隨疏演義鈔、華厳経隨疏演義鈔、華厳疏 ❷九十巻 ❸存、大正三六・一No. 1736、續歴五—一〇、卍三四・四—九、明北1583沙至禹、明南1574精至丹、Nj. 159) ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述 ❺華厳経隨疏演義鈔の下を見よ。 ❻刊本(京大、蔵・九タ・一九)

大方廣佛華厳経疏演義鈔玄談 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sho-en-gi-shō-gen-dan. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-su-yen-i-ch'ao-hsüan-tan. 華厳経疏演義鈔玄談、大方廣佛華厳経疏序演義鈔、華厳玄談、華厳懸談 ❷九巻 ❸存、卍続一・八・三—四 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述 ❺華厳経疏鈔玄談の下を見よ。 ❻刊本(京大、蔵・九タ・一八)

大方廣佛華厳経疏科文 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sho-kwa-mon. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-su-ko-mên. 華厳経疏科文、大方廣佛華厳経清涼疏科 ❷十巻 ❸存、卍続一・八・一—二 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述 ❺華厳経疏科文の下を見よ。 ❻寫本(京大、蔵・九タ・二四)

八・一—二 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述 ❺華厳経疏科文の下を見よ。 ❻刊本(正大、一一三三・三五)

大方廣佛華厳経清涼疏科 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sho-kwa. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ching-chin-shih-tzu-ko. 華厳経疏科文、大方廣佛華厳経疏科文 ❷十巻 ❸存、卍続一・八・一—二 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述 ❺華厳経疏科文の下を見よ。 ❻寫本(京大、蔵・九タ・二四)

大方廣佛華厳経疏注 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sho-chū. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-su-chu. 華厳経疏注 ❷百二十巻 ❸存、卍続一・八八・一—四 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述、宋淨源(大中祥符四—元祐三A. D. 1011—1088)注 ❺華厳経疏注の下を見よ。 ❻寫本(京大、蔵・九タ・二二)

大方廣佛華厳経清涼疏 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-shō-ryō-sho. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ch'ing-liang-su. 大方廣佛華厳経疏、華厳経疏、華厳大疏 ❷六十巻或四十巻 ❸存、大正三五・五〇三No. 1735、續歴一—四、卍三三・一〇—三四・三、明北1582用至威、至1583洞至遠、明南1573顔至最、Nj. 1589 ❹澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)述 ❺唐興元元—貞元三(A. D. 784—787) ❻華厳経疏の下を見よ。

大方廣佛華厳経淨行品 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-shō-gyō-sho-kwa.(支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ching-chin-hsing-p'in. 華厳経淨行品、新譯華厳経淨行品 ❷一巻 ❸存 ❹唐實叉難陀(永徴三—景雲元 A. D. 652—710)譯 ❺八十華厳経淨行品の別行。 ❻寫政一二刊 ❼(黄檗院)

大方廣佛華厳経隨疏演義鈔 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-zui-sho-en-gi-shō. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-sui-su-yen-i-ch'ao. 華厳経隨疏演義鈔、華厳経隨疏演義鈔、華厳疏 ❷九十巻 ❸存、大正三六・一No. 1735、續歴五—一〇、卍三四・四—九、明北1583沙至禹、明南1574精至丹、Nj. 159) ❹唐澄觀(開元二五—開成三A. D. 737—838)述 ❺華厳経隨疏演義鈔の下を見よ。 ❻寫本(正大、一一三三・六)

大方廣佛華厳経隨品讚 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-zui-hon-san. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-sui-p'in-tsan. 華厳経隨品讚 ❷十巻 ❸缺 ❹澄文神武睿孝撰 ❺(参考) 至元法寶勘同總錄第一〇

大方廣佛華厳経搜玄分齊通智方軌 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sō-gem-bun-sei-tsū-chi-hō-ki. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-sou-hsüan-fen-chi-t'ung-chih-fang-kuei. 華厳経搜玄記、搜玄記、搜玄、華厳経方軌 ❷十巻 ❸存、卍続一・八・一—二 ❹唐智儼(仁壽二—總章元A. D. 602—668)述 ❺華厳経搜玄記の下を見よ。 ❻寫本(正大、一一三三・六)

大方廣佛華厳経搜玄分齊通智方軌 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-sō-gem-bun-sei-tsū-chi-hō-ki. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-sou-hsüan-fen-chi-t'ung-chih-fang-kuei. 華厳経搜玄記、搜玄記、搜玄、華厳経方軌、華厳経搜玄記、大方廣佛華厳経搜玄分齊通知方軌 ❷九巻 ❸存、大正三五・一三No. 1733、卍続一・三・五 ❹唐智儼(仁壽二—總章元A. D. 602—668)述 ❺華厳経搜玄記の下を見よ。 ❻寫本(正大、一一三三・六)

大方廣佛華厳経著述集要 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-chō-jutsu-shū-yō. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-chao-shu-chi-yao. ❷十二巻 ❸存 ❹支那刊本(京大、蔵・九タ・二一)

大方廣佛華厳経呑海集 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-don-kai-shū. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-chi-ang-t'un-hai-chi. 華厳経呑海集 ❷三巻 ❸存、卍続一・一二・四 ❹宋代道通撰 ❺華厳経呑海集の下を見よ。 ❻承應三刊(京大、蔵・九タ・二四一四・四一)(谷大、餘大・一八三八)光緒一六刊(正大、一一三三・四二)

大方廣佛華厳経入不思議解脫境界普賢行願品 ❶(日)Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-jū-gyō-bon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-hsing-p'in. 華厳経淨行品、新譯華厳経淨行品 ❷一巻 ❸存 ❹唐實叉難陀(永徴三—景雲元 A. D. 652—710)譯 ❺八十華厳経淨行品の別行。 ❻寫政一二刊 ❼(黄檗院)

-butsu-ke-gon-gyō-nyū-fo-shi-gi-gō-dai-tsu-kyō-gai-fu-gen-gyō-gwan-bon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ju-pu-ssū-t'chieh-t'o-ching-chieh-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in. 大方廣佛華嚴經普賢行願品、入不思議解脫境界普賢行願品、四十華嚴、貞元經 ②四十卷 ③存、大正一〇・六六一No. 293、縮天五—六、卍七・一〇—八・一、明北85伏至翹、龍1388策至實、明南92伏至羌、Nj. 89 ④般若譯 ⑤唐貞元一一—一四(A. D. 795—798) ⑥華嚴經の下を見よ。

大方廣佛華嚴經入法界品

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-nyū-hok-kai-bon. 大方廣華嚴經證入法界品、證入法界品、華嚴經入法界品 ②一卷 ③存、大正一〇・八七六No. 295、縮天一一、卍八・三、北106翹、南93夜、元91夜、明北97壹、清97壹、龍105羌・天93夜、指95羌、至178王、明南92過、Nj. 101 ④地婆訶羅譯 ⑤唐永隆元(A. D. 680) ⑥探玄記によると、菩譯六十華嚴經入法界品の中(第五十七卷の後半)摩耶夫人以下彌勒菩薩の前に至る迄、八・九紙の經文の欠けたるを補充せんが爲に、新たに梵本より翻譯されたるものと傳へらるゝ經典である。(探玄記、第一卷、六十丁a)

此の中に善知識は天主光童女以下有德童女に至る九人を含め、經は善財が摩耶夫人の勸告に依り、其の許を辭し、三十三天、正念王の童女天主光に向ふに始まり、妙意花門城の童子德生及び童女有德の二人の許に於て、其の善根力不思議を以て善財は身に柔軟光澤を得るに至つた經過を述べる。

尙、此の經は唐譯八十華嚴經にあつては第七十六卷の後半より、第七十七卷初頭に至るものと全然同一である。

❼(參考) 開元錄第九、貞元錄第一三 (櫻井善晃)

大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-nyū-hok-kai-bon-shi-jū-ni-ji-kwan-mon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ju-fa-chieh-p'in-ssū-shih-erh-tzū-kuan-mén. 華嚴經入法界品四十二字觀、華嚴入法界品四十二字觀門 ②一卷 ③存、大正一九・七〇七No. 1019、縮閏八、卍二七・二、北1396武、南1400衡、元1388衡、明北1444鍾、清1444鍾、龍1355宅、天1377衡、法1089相、明南1170寬 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)

⑤華嚴經卷第七十六入法界品の四十二字門を別出して新に譯したもので、1阿𑖀。2囉𑖭。3波𑖨。4左𑖮。5養𑖯。6擺𑖰。7摩𑖲。8麼𑖳。9拏𑖴。10瀉𑖵。11鬱𑖶。12多𑖷。13野𑖸。14瑟吒𑖹。15迦𑖺。16娑𑖻。17莽𑖼。18識𑖽。19他𑖾。20惹𑖿。21娑囉𑗀。22馱𑗁。23拾奇。24佉𑗂。25訖瀉𑗃。26娑頞𑗄。27旗𑗅。28囉伽𑗆。29婆𑗇。30曷𑗈。31袈麼𑗉。32訶囉𑗊。33哆袈𑗋。34伽𑗌。35始𑗍。36像𑗎。37顛𑗏。38塞尊𑗐。39也娑𑗑。40宗左𑗒。41咤𑗓。42茶𑗔の四十二字門、並に此の諸解脫根本の字に入る時は、四十二般若波羅蜜を首と爲して、無量無數の般若波羅蜜門に入ることを述べ、更に諸字門を解すれば、(1)護壇念。(2)勝慚愧。(3)堅固力。(4)法旨題。(5)增上卷。(6)殊勝慧。(7)無礙辯。(8)總持門。(9)無疑惑。(10)違順語不生悲愛。(11)無高下平等兩住。(12)於有情言音善巧。(13)蘊善巧、處善巧、界善巧。(14)緣起善巧、因善巧、緣善巧、法善巧。(15)根勝劣智善巧、佗心智善巧。(16)觀星曆善巧。(17)宿住隨念智善巧、神境智善巧、死生智善巧。(18)漏盡智善巧。(19)說處非處智善巧。(20)往來等威儀路善巧等の二十種の殊勝功德を得る旨が說き明されてある。

(神林隆淨)

大方廣佛華嚴經入法界品頓證毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-nyū-hok-kai-bon-ton-shō-bi-ru-sha-na-hos-shin-ji-rin-yu-ga-gi-ki. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-ju-fa-chieh-p'in-tun-cheng-p'i-lu-che-na-fa-shen-tzū-lun-yü-chieh-i-kuei. 華嚴經入法界品頓證毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌、華嚴經儀軌、大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門、華嚴經字輪儀軌 ②一卷 ③存、大正一九・七〇九No. 102J、縮閏八、卍二七・二、北1396武、南1400衡、元1388衡、明北1444鍾、清1444鍾、龍1355宅、天1377衡、法1089相、明南1170寬 ④唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯

⑥之は空海・圓仁の請來したものである。華嚴經法の儀軌とでも稱すべきものである。字輪觀の瑜伽行法を內容とする。華嚴經入法界品四十二字門の四十二字を字輪として觀ずる規則を說き、圓明字輪の圖を出しておるものもある。又原本には四十二字頌を明しておる。元來四十二字門は入法界品の中で善財童子が善知衆藝童子の處に到る章數に說き明してあるもので、この四十二字門は般若經の四十二字門の系統を繼承したものである。卽ち 𑖀𑖮𑖿𑖭𑖽 等の字相字義を說き明したもので之は金剛頂經釋字母品の五十字門に對立するものである。

(久野芳隆)

大方廣佛華嚴經不思議佛境界分

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-shi-gi-butsu-kyō-gai-bun(支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-pu-ssū-t'o-ching-chieh-fen. 大方廣佛華嚴佛境界分、華嚴經不思議佛境界分 ②一卷 ③存、大正一〇・九〇五No. 310、縮天一一、卍八・二、北387伏、南34伏、元85伏、明北92過、清92過、龍89臣、天56伏、指76臣、法84首、至159率、明南87過、Nj. 96 ④提雲般若譯 ⑤唐永昌元—天授二(A. D. 689—692)

⑥此の經には、二譯有つて共に現存してゐる。初譯は此の提雲般若の譯であり、第二譯は實叉難陀の譯である。兩譯共に譯經圖紀以後の諸經錄に載せられてゐて、經名及び譯者に就ては何等の疑問もない。經の內容は大本の華嚴經に其のまゝ一致する品は

ない。此の經は初に菩提樹の德と莊嚴とを叙述し、十方の佛は菩薩身を現じて觀音、普賢となり、無量の菩薩は摩聞形を現じて舍利弗等となり、天龍八部等と共に集會し、佛は如來不思議佛境界と名くる三昧に入つて、諸の相好の中に、十方の佛刹及び過去の修行を現ずることを說いてある。全體の調子が全く大本華嚴經の序分に相當してゐる。次に德藏菩薩の請問に應じて普賢菩薩は此の三昧の名義を說き、佛は眉間の光を放ちて一多大小の相入、重に無盡の緣起を示し、諸菩薩は供養聞法の力に依つて此の不思議の境界に證入せることを明かし、更に此の三昧の因行として願德、施戒、智慧を擧げ、次いで又此の法門の願德利益を叙し、歸結として佛は普賢菩薩の此の敎說を讚歎し、偈文を以て經の得益を頌し、通途の如く一經を結んである。かくの如く全體の調子が華嚴經の縮圖の如き趣がある。只此の經の所說で特に注意すべきことは終の三田供養の智慧を說く所に唯心觀に基く佛身觀を述べてゐることである。華嚴經は唯心緣起の根本經典として、常に十地品の有名なる三界唯心の文が引用せらるゝが、此の經に於ても亦顧る明了に唯心觀が說かれてある。

❼(參考) 開元錄第九、貞元錄第一三 (衛藤卽應)

大方廣佛華嚴經不思議佛境界分

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-shi-gi-butsu-kyō-gai-bun. 國譯大方廣佛華嚴經不思議佛境界分 ③存、國譯一切經華嚴部第四 ④衛藤卽應譯

大方廣佛華嚴經普賢行願讚

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwan-san. 梵譯大方廣佛華嚴經普賢行願讚 ③存 ④慈雲(享保三—文化元A. D. 1718—1804)編 ⑨刊本(龍大、二一五一・二八)

大方廣佛華嚴經普賢行願讚梵本附校異

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwan-san-bon-pon-tsuikettari-kō-i. 普賢行願讚梵本附校異 ②一卷 ③存、慈雲尊者全集第九

⑥この梵本は尊者が四本を以て校訂せしことは、左に抄譯せる天明三癸卯夏の尊者の識文に徵して明かである。

斯の普賢願王は佛海に入り、衆生界、衆生業煩惱の中に入つて、攝取して倦まず、修證して盡きず、江海を量となすとも、その足らざるを知り、須彌を筆となすとも、その足らざるを知る。斯の六十二頌は雜華を構して大小施設す。頌に四句あり、句に十一字あり、字々構說して虛空とともに盡くることなく、衆生とともに盡くることなく、佛海とともに盡くることなし。書寫して以て之れを迴通に共す。梵本四般其の承くる所や、一は無量壽院の所藏、一は金剛三昧院の所藏、一は之れを左海に得たり、後批に總持寺金剛臺と云へり。三本並に堅書なり。一は之れを構州に得たり。小曾根海輪と云ふ者之れを予に寄す、其の文橫書なり。今の寫す所は橫書に依準して餘本を參伍すると云ふ。(原漢文)

とありて、每頌梵字の右側に漢譯字を註せり。又版本の奧書に

斯の梵本や慈雲律師が某甲の需に應じて書する所なり。彫刻既に成つて版を吾山に寄せんと請ふ。故に其の志を美として之れを寶庫に藏すと云ふ。天明五年秋八月。洛東華頂山知藏誌す。(原漢文)

とありて、その版京都知恩院に現存してゐる。

(高見寬應)

大方廣佛華嚴經普賢行願品

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwam-bon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in. 大方廣佛華嚴經、華嚴經、大方廣佛華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品、四十華嚴、貞元經 ②四十卷 ③存、大正一〇・六六一No. 293、縮天五—六、卍七・一〇—八・一、明北85伏至翹、龍1388策至實、明南80伏至羌、Nj. 89 ④般若譯 ⑤唐貞元一一—一四(A. D. 795—798) ⑥華嚴經の下を見よ。 ⑦安政六刊 ⑨(龍大、二一四・六、研佛)

大方廣佛華嚴經普賢行願品疏

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwam-bon-sho. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in-su. 華嚴經行願品疏、華嚴經普賢行願品疏、貞元新譯華嚴經疏、華嚴經行願品疏 ②十卷 ③存、卍續一・七・三—四 ④唐澄觀(開元二五—開成三A. D. 737—838)述 ⑥華嚴經行願品疏の下を見よ。 ⑦(參考) 入唐新求聖敎目錄

大方廣佛華嚴經普賢行願品疏科文

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwam-bon-sho-kwa-mon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in-su-k'o-wén. 華嚴經行願品疏科、華嚴經別行疏科文 ②一卷 ③存、卍續一・七・五 ④唐宗密(建中元—會昌元 A. D. 780—841)撰 ⑥華嚴經行願品疏科の下を見よ。 ⑨寫文一三刊 ⑨(正大、一一三三・四九)

大方廣佛華嚴經普賢行願品別行疏科文

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwam-bon-betsu-gyō-sho-kwa-mon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in-pieh-hsing-su-k'o-wén. 華嚴經普賢行願品別行疏科 ②一卷 ③存、卍續一・八八・五 ④唐宗密(建中元—會昌元 A. D. 780—841)述、宋遵式(乾德元—明道元 A. D. 963—1032)治定 ⑥華嚴經普賢行願品疏科の下を見よ。 ⑨寫本(京大、藏・九タ・二六)

大方廣佛華嚴經普賢行願品別行疏鈔

❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwam-bon-betsu-gyō-sho-shō. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in-pieh-hsing-su-ch'ao. 華嚴經普賢行願品別行疏鈔、華嚴經普賢行願品疏鈔、華嚴經別行疏鈔、華嚴經品疏鈔 ②六卷、科文一卷 ③存、卍續一・七・五 ④唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)疏、宗密(建中元

—會昌元 A. D. 780—841)鈔 ⑥華嚴經行願品疏鈔の下を見よ。 ⑦寛文一三刊 ⑨(京大、藏・九タ・二七)

大方廣佛華嚴經普賢行願品別行疏並鈔 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-gyō-gwan-bon-betsu-gyō-sho-narabini-shō. (支)Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'u-hsien-hsing-yüan-p'in-pieh-hsing-su & ch'ao. 華嚴經普賢行願品別行疏鈔、華嚴經普賢行願品疏鈔、華嚴經別行疏鈔、華嚴經品疏鈔 ❷六卷 ❸存、卍續一・七・五 ❹唐澄觀(開元二五—開成三 A. D. 737—838)疏、宗密(建中元—會昌元 A. D. 780—841)鈔 ⑤華嚴經行願品疏鈔の下を見よ。 ⑦寛文一三刊 ⑨(正大、一二三三・四八)

大方廣佛華嚴經普賢菩薩行願王品 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-fu-gen-bo-satsu-gyō-gwan-ō-bon. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'u-hsien-p'u-sa-hsing-yüan-wang-p'in. ❷一卷 ❸存、大正八五・一四五四 No. 2908

⑥本書は、スタイン氏の蒐集に係る燉煌出土古寫本、大英博物館藏。本經を般若譯「四十華嚴」の普賢行願品の偈頌並に不空譯「普賢菩薩行願品」に比較するに全く異なれる一本である。七言一句百四十行の長行讃である。

⑨燉煌出土本(大英博物館藏 S. 234)

(矢吹慶輝—成田昌信)

大方廣佛華嚴經法界觀 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-hō-kai-kwan. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-fa-chieh-kuan. 註華嚴法界觀門、華嚴法界觀門、華嚴經法界觀、華嚴法界觀 ❷一卷 ❸存、大正四五・六八三 No. 1884、續藏三、卍三四・一〇、明北1589跡、明南1577青、Nj. 1596 ❹隋杜順(永定元—貞觀一四 A. D. 557—640)集、唐宗密(建中元—會昌元 A. D. 780—841)註 ⑥註華嚴法界觀門の下を見よ。 ⑦(參考) 智證大師請來目錄

大方廣佛華嚴經品會名圖 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-hon-e-mei-zu. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-p'in-hui-ming-t'u. 華嚴品會名圖 ❷一卷 ❸缺 ⑦(參考) 御請來目錄

大方廣佛華嚴經要解 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-yō-ge. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-yao-chieh. 華嚴經要解 ❷二卷 ❸存、卍續一・二・四 ❹宋代戒環集 ⑥華嚴經要解の下を見よ。 ⑨同治一一刊 ⑩(京大、藏・九タ・二八)

大方廣佛華嚴經論 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-ron. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-lun. 華嚴經論、華嚴經論 ❷百卷(現存一卷) ❸存、卍續一・九三・五、至1575亭至昆 ❹曇無讖譯 ⑥華嚴經論の下を見よ。

大方廣佛華嚴經論 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-gyō-ron. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-ching-lun. 新華嚴經論、華嚴經論 ❷四十卷 ❸存、大正三六・七二一 No. 1739、續律六—八、卍續一・五・五、麗1289勒至銘 ❹李通玄(貞觀九—開元一八 A. D. 635—730)述 ⑥新華嚴經論の下を見よ。 ⑦(參考) 智證大師請來目錄

大方廣佛華嚴修慈分 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-shu-ji-bun. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-hsiu-tz'u-fen. 大方廣佛華嚴經修慈分、華嚴修慈分 ❷一卷 ❸存、大正一〇・九五九 No. 305、續天一一、卍八・二、北90伏、南86伏、元84伏、明北90壹、清92壹、麗89臣、天84伏、指78臣、法87伏、至162岸、明南86邇、Nj. 94 ❹提雲般若譯 ⑤唐永昌元—天授二(A. D. 689—692) ⑦(參考) 花嚴宗經論章疏目錄

大方廣佛華嚴佛境界分 ❶(日) Dai-hō-kō-butsu-ke-gon-butsu-kyō-gai-bun. (支) Ta-fang-kuang-fo-hua-yen-fo-ching-chieh-fen. 大方廣佛華嚴經不思議佛境界分、華嚴經不思議佛境界分、不思議境界分 ❷一卷 ❸存、大正一〇・九〇五 No. 300、續天一一、卍八・二、北87伏、南84伏、元85伏、明北92邇、清92邇、麗89臣、天86伏、指76臣、法84菅、至159岸、明南87邇、Nj. 96 ❹提雲般若譯 ⑤唐永昌元—天授二(A. D. 689—692) ⑥大方廣佛華嚴經不思議佛境界分の下を見よ。 ⑦(參考) 花嚴宗經章疏目錄

大方廣菩薩十地經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-jū-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-sa-shih-ti-ching. ❷一卷 ❹失譯 ⑦(參考) 出三藏記第四

大方廣菩薩十地經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-jū-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-sa-shih-ti-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(—太始二—建興元 A. D. 265—312—)譯 ⑦(參考) 武周錄第一二

大方廣菩薩十地經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-jū-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-sa-shih-ti-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(—太始二—建興元 A. D. 265—312—)譯 ⑦(參考) 武周錄第一二

大方廣菩薩十地經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-jū-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-sa-shih-ti-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(—太康初—永嘉末 A. D. 280—312—)譯 ⑦(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大方廣菩薩十地經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-jū-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-sa-shih-ti-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉法護(—惠帝代 A. D. 290—316—)譯 ⑦(參考) 武周錄第一二

大方廣菩薩十地經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-jū-ji-kyō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-sa-shih-ti-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹元魏吉迦夜(—延興二 A. D. 472—)譯 ⑦(參考) 武周錄第一二

大方廣菩薩十地經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-jū-ji-kyō. 大方廣菩薩地經、菩薩十地經 ❷一卷 ❸存、大正一〇・九六三 No. 308、續實一〇、卍八・三、北93戎、南91戎、元93戎、明北93壹、清93壹、麗97伏、天95戎、指87伏、法95伏、至165賓、明南94邇、Nj. 103 ❹吉迦夜譯 ⑤元魏延興二(A. D. 472—) ⑥十地經の先驅と考へらるゝ華嚴部の小經典。(但し、歡喜地等の十地の名稱は未だ

現れてゐない。)

一時佛、王舍城、耆闍崛山にあり、大比丘衆及菩薩の多くが會座に來集した、擬、無盡智菩薩の問に依り、佛は菩提・菩提心を說く。其の初心以下十心の生ずるは、夫々十波羅蜜に因るのであり、且又、それは一々の心が根據とする十三摩提の爲である。而して十地には各々其の前相たる嘉瑞の存するあり、こゝに於て諸菩薩十種の陀羅尼を得べしと述べ、更に地々の所屬に配せらるゝ十波羅蜜を十に細分して總計一百の波羅蜜を列擧し次で波羅蜜の意味を解說する。

最後に師子輪無礙光耀天の請に應じ、佛是經を聞き、讚歎し、その法を持するに於て、諸種の利益を得べきを說く。

❼(參考) 三寶紀第九、內典錄第四、譯經圖紀第三、開元錄第六、貞元錄第九

(櫻井義晃)

大方廣菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-zō-kyō-chū-mon-ju-shi-ri-kom-pon-ichi-ji-da-ra-ni-kyō. (支) Ta-fang-kuang-p'u-sa-tsang-ching-chung-wen-shu-shih-li-kēn-pēn-i-tzū-t'o-lo-ni-ching. 文殊師利根本一字陀羅尼經、文殊一字陀羅尼法、文殊根本一字陀羅尼法 ❷一卷 ❸存、大正二〇・七八〇 No. 1181、續閏一三、卍一・一、北300効、南312効、元308効、明北339能、清329能、麗300男、天308効、指285男、法294男、至554因、明南304必、Nj. 333 ❹唐寶思惟譯 ⑤唐長安二(A. D. 702) ⑥佛が淨居天の寶莊嚴道場中に於て、諸天衆の爲に、文殊師利(Mañjuśrī)根本一字呪を說かれた。此の呪は、諸呪中の大神呪王で、大威神力があるから、若し善男子・善女人が能く受持すれば、文殊師利童子菩薩に常に擁護せられて、一切の所願悉く皆圓滿成就する旨を述べる、次に其の呪を示し、最後に或は左手に本生印(拳印)を作り、右手を以て病人の頭を摩すれば、疾患卽ち除癒すと說き、或は七色の繩を以て呪索を結んで、蓮華形・輪形・金剛杵形等を作り、之を呪すること一百八遍して、七日の中に自身の頂上に繫げば、一切の厄難悉く消散するとあり、或は帛上に所怖者の形を畫き、其の四邊に一字呪を書いて之を圍み、或は蓮華・輪・卍字・螺・魚・金剛鉤・寶瓶等を畫いて之を圍み、呪を誦すること七遍すれば、所怖卽ち除かる等の諸呪詛法が說かれてある。

(神林隆淨)

大方廣菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼法 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-zō-kyō-chū-mon-ju-shi-ri-kom-pon-ichi-ji-da-ra-ni-hō. (支)Ta-fang-kuang-p'u-sa-tsang-ching-chung-wen-shu-shih-li-kēn-pēn-i-tzū-t'o-lo-ni-fa. 大方廣菩薩藏經中文殊師利根本一字陀羅尼經、文殊根本一字陀羅尼法 ❷一卷 ❸存、大正二〇・七八〇 No. 1181、續閏一三、卍一・一、北300効、南312効、元308効、明北339能、清329能、麗300男、天308効、指285男、法294男、至554因、明南304必、Nj. 333 ❹唐寶思惟譯 ⑤唐長安二(A. D. 702) ⑥寫享四寫 ⑨(寶菩提院)

大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經 ❶(日) Dai-hō-kō-bo-satsu-zō-mon-ju-shi-ri-kom-pon-gi-ki-kyō. (支) Ta-fang-kuang-p'u-sa-tsang-wen-shu-shih-li-kēn-pēn-i-tzū-t'o-lo-ni-ching-mahādhyāya 1. Ganapati Śastr). (梵)Āryamañjuśrī-mū-la-kalpa (Ed. by Mahāmahādhyāya 1. Ganapati Śastr). (藏)'phags-pa hjām-dpal gyi rtsa-ba-hi rgyud. 文殊師利根本儀軌經、文殊儀軌、大方廣文殊儀軌經 ❷二十卷 ❸存、大正二〇・八三五 No. 1191、續成九、卍一六・九、北1137戶、南1153戶、元1147戶、明北1031若、清1051若、麗1115府鐵、天1135戶封、法1262冠、至692厳與、明南909則、Nj. 1056 ❹宋天息災(—成平三 A. D. 1000)譯 ⑥雜密法。文殊法を說く、現に梵本存在し、ガナパチ・シャーストリー(Gaṇapati Śastr)によつて公刊せられた。

この軌には菩薩名、王名、仙名等が無數に記述されてゐるから印度文化研究の參考にならうと思はれる。

梵本第四十一章に相當する漢譯文殊師利菩薩根本大教王經金翅鳥王品(大正藏、二十一、一二七六)はこの儀軌の一部と考へることが出來る。漢部は二十八品あり、梵本は四十九章ある。各品の一々に就てその內容を紹介することは繁雜であるから一二の興味ある點を擧げると、佛母般若波羅蜜多經(Bhagavatī Prajñāpāramitā)彌月光三摩地經(Ārya-candra-pradīpa-samādhi)深華嚴經(Ārya-gaṇḍavyūha)深金光明經(Ārya-suvarṇa-prabhāsottamo-sūtra)を大乘經典の代表作を見ており、蓮華部、金剛部、寶部を蓮華族、金剛族、寶族と譯してゐる。

❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

(久野芳隆)

大方廣寶篋經 ❶(日) Dai-hō-kō-kyō-gyō. (支)Ta-fang-kuang-pao-ch'ieh-ching. (梵)Ratna-karaṇḍa(藏傳)(藏)'phags-pa dkon-mchog gi za-ma-tog ces-bya-ba theg-pa chen-poḥi mdo 寶篋經 ❷三卷 ❸存、大正一四・四六六 No. 462、續字一〇、卍九・九、北152蓋、南154蓋、元148蓋、明北165巷、清165巷、麗151方、天153蓋、指140方、法148方、至229登、明南172敢、Nj. 169 ❹求那跋陀羅(太元一九—泰始四 A. D. 394—468)譯 ⑤劉宋元嘉二二—二〇(A. D. 435—443) ⑥西晉(太始六、A. D. 270)竺法護譯二卷文殊師利現寶藏經を同本異譯とする本經は、大德須菩提が世尊已に靈鷲の爲に說法し給ひしにより、更に文殊師利童子に菩薩法を說かん事を請ふや、文殊は佛の法器を說くに菩薩の般若波羅蜜空を以てし、之に依つて菩薩は能く智慧と方便とを成就する所以を說き、世尊も亦文殊の所說を讚歎し喩說し給ふことを示し、之と共に文殊所說の法界は無盡にして須菩提等の能く知る境界に非ず、智慧第一の舍利弗を以てするも及ぶ能はざる所なるを示さんが爲に、先づ

須菩提は曾つて東方鴦伽國光相如來の所に智慧第一の智燈大摩聞有りて文殊の論說に默然たらしめられし事實を見し事を舍利弗に告ぐるや、舍利弗も亦西方の佛國土及び南方一切莊嚴國の寶大佛の所に於ける文殊の神通說法の勝れたりし事を須菩提に告げて、彼等は敢て文殊に論說するを欲せざりしことを物語つてゐる。同樣にして阿難も亦曾つて大非時の雲雨に饑饉起りし時、文殊が魔波旬に惱まされることなく、多くの比丘を一鉢の食を以て飽滿せしめた事を、又迦葉も曾つて文殊の不可思議の神通と無量の智慧とを見し事を、更に亦富樓那も曾つて文殊が外道の薩遮尼乾子及び其の徒衆を漸次佛の正法に歸入せしめ、又勝志外道が文殊に從つて佛道を得て勝志菩薩となり、佛亦之を讚歎し給ひし因緣を夫々舍利弗に物語り、以て舍利弗を始め須菩提、阿難、迦葉、富樓那の如き大摩聞が文殊の無礙の辯說に何れも沈默せしめられたる事を示してゐる。かくして本經は其等の物語の間に於て文殊が法界の無礙無盡を說いて菩薩法の根本を開闡せんとしたものであつて、かの維摩經等と同一趣旨に出てゐると思はれる。

❼(參考) 三寶紀第一〇、內典錄第四、譯經圖紀第三、開元錄第五、貞元錄第七 (本田義英)

大方廣曼殊室利經 ❶(日)Dai-hō-kō-man-jū-shi-ri-kyō. (支)Ta-fang-kuang-man-shu-shih-li-ching. 大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記經、觀自在多羅菩薩

經、大方廣曼殊室利經觀自在多羅菩薩儀軌經、觀自在菩薩儀軌經、曼殊室利經、多羅菩薩儀軌經 ❷一卷 ❸存、大正二〇、四五〇No. 1101、縮開一一、卍一六・九、北1352漢、南1354尹、元1344尹、明北1045止、清1045止、麗1302伊、天1334尹、法1103槐、明南1041取、Nj. 1050、三十帖策子第六 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774) ❻觀自在授記經の下を見よ。

大方廣曼殊室利經觀自在多羅菩薩儀軌經 ❶(日)Dai-hō-kō-man-jū-shi-ri-kyō-kwan-ji-zai-ta-ra-bo-satsu-gi-ki-kyō. (支)Ta-fang-kuang-man-shu-shih-li-ching-kuan-tzŭ-tsai-tō-lo-p'u-sa-i-kuei-ching. 大方廣曼殊室利經、曼殊室利經、多羅菩薩儀軌經、大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記經、觀自在多羅菩薩授記經、觀自在授記經 ❷一卷 ❸存、大正二〇・四五〇 No. 1101、縮開一一、卍一六・九、北1352漢、南1354尹、元1344尹、明北1045止、清1045止、麗1302伊、天1302伊、天1334尹、法1103槐、明南1041取、Nj. 1050、三十帖策子第六 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774) ❻觀自在授記經の下を見よ。

大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記經 ❶(日) Dai-hō-kō-man-jū-shi-ri-kyō-kwan-ji-zai-bo-satsu-ju-ki-kyō. (支)Ta-fang-kuang-man-shu-shih-li-ching-kuan-tzŭ-tsai-p'u-sa-shou-chi-ching. 大方廣曼殊室利經、觀自在菩薩授記經、多羅菩薩儀軌經、曼殊室利經、多羅菩薩儀軌經 ❷一卷 ❸存、大正二〇・四五〇 No. 1101、縮開一一、卍一六・九、北1352漢、南1354尹、元1344尹、明北1045止、清1045止、麗1302伊、天1334尹、法1103槐、明南1041取、Nj. 1050、三十帖策子第六 ❹不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺唐天寶五—大曆九(A. D. 746—774) ❻觀自在授記經の下を見よ。

大方廣曼殊室利童眞菩薩華嚴本敎讚閻曼德迦忿怒王眞言阿毘遮嚕迦儀軌品 ❶(日)Dai-hō-kō-man-jū-shi-ri-dō-jin-bo-satsu-ke-gon-hon-gyō-san-em-man-tok-ka-fun-nu-ō-shin-gon-a-bi-sha-ro-ka-gi-ki-hon. (支) Ta-fang-kuang-man-shu-shih-li-t'ung-chen-p'u-sa-hua-yen-pên-chiao-tsan-yen-man-te-chia-fen-nu-wang-chen-yen-e-p'i-che-lu-chia-i-kuei-p'in. 藏文は大廣方菩薩藏文殊師利根本儀軌經藏文第三十四品 Kho-bhi rgyal-po dçin-rje-gçed-kyi mdon-spyod-dah legs-par sdom-pahi lehu pahi cho-ga rab-bbyam に相當す。忿怒王儀軌品 ❷一卷 ❸存、大正二一・七七No. 1216、縮開一三・卍二七・一、明北1417藁、清1417藁、Ni. 1434 ❹唐不空(神龍元—大曆九A. D. 705—774)譯 ❺大威德明王の儀軌にして、阿毗遮嚕迦(abhicāraka)儀軌品第三十一と、閻曼德迦(Yamāntaka) 忿怒王品第三十二との二品に分れ、前者は悉く五言頌を以て、壇像儀軌及び調伏法を明し、後者は長行を以て諸成就法を說く。その閻曼德迦像法は、六面・六手足・黑色にして肚は狼の如く、獨鈷杵を持して怒り、虎皮を以て裙と爲し、種々の器仗を持し、棒を手にして長る可く、眼赤にして暴惡の形をし、三目を標幟と爲し、豎髮熾んなること火焰の如く、或は黑煙色を擧ばして、其の狀劫燒の如くにし、水牛に乘れるを畫くことに成つて居る。而して其の像を畫くには、犬骨を管と爲し、死人の髮を以て筆を作り、犬脂を牛酪に和し、盛るに獨鈷器を以てし、更に自らの血を以て之に調和し、然る後に壇作す可きことが示してある。從つて調伏法成就法中には、惡法多く、或は摩醯首羅陵說(Maheśvara-liṅga)廟に於て、護摩(homa)を行ずる時は、毒藥・芥子・犬血を熱水に和して、摩醯首羅の陵說に塗り、人腸を取り神線と爲して之に絡繞し、右手に人の髑髏を持し陵說を鄉打し、左脚を以て之を踏んで彝教し、或は犬肉を燒いて焚香に充て、亦は屍林燒屍處に於て、一日一夜斷食し、黑月十四日に、毒藥・芥子を血と和和し、屍林の柴を取つて燒き、眞言一遍每に一燒して、寃家喪滅・火災等を祈り、或は燒屍灰を取つて、旃に散ずれば、非男を成ぜしめ、生支に散ずれば、世事を爲すこと能はざらしめ、女陰に散ずれば、其の女をして餘の男子と非法を行ずること能はざらしめ、若し之を行ずれば、其の根發壞し、若し本夫

に於て交會すれば、其の根再び調適を得、若し灰を男子の生支に散ずれば、便ち婆悖して、本妻の外は淫を行ずること能はざらしめ、又若しそれを男女の根間に散ずれば、互に情愛深うして、假令餘の男子・女人が遠近しても、斷じて交會することが出來ないなど、餘灰外道の說に類する所が多い。明本と淨嚴校訂本とには、俱に不空譯(A. D. 746—774)となつて居るけれども、恐らく名を不空に借りたものであらう。兎に角、貞元錄にも見えてゐないから、最はしい經典と想像せざるを得ない。 (神林隆淨)

大方廣未曾有經善巧方便品 ❶(日) Dai-hō-kō-mi-zō-u-kyō-zen-kyō-hō-bem-bon. (支) Ta-fang-kuang-wei-tseng-yu-ching-shan-chiao-fang-pien-p'in. 未曾有經善巧方便品 ❷一卷 ❸存、大正一七・九三一 No. 844、縮宙八、卍一五・一〇、北1412後、南1417宅、元1406宅、明北987斯、清987斯、麗1447法、天1397宅、明南1031閏、Nj. 992 ❹施護譯 ❺宋大平興國五以後(A. D. 980—)

❻佛、大意菩薩の爲めに香燈衣服等を曼拏羅處に施す時、心にこれを一切衆生に施すと念じ、一切の男女奴婢を見ては衆生が恩愛繩縛を離れんことを念じ、行住坐臥に一切衆生の得脫を思うことを願へた。耶餘の經宣によつた菩薩の勝相を說いた經である。 (和田徹城)

大方廣文殊儀軌經 ❶(日)Dai-hō-kō-mon-ju-gi-ki-kyō. (支)Ta-fang-kuang-wen-shu-i-kuei-ching. 大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經、文殊師利根本儀軌經、文殊儀軌 ❷二十卷 ❸存、大正二〇・八三五 No. 1191、縮成九、卍一六・九、北1137戶、南1153戶、元1147戶、明北1051若、清1051若、麗1145府羅、天1135戶封、法1262冠、至682厳與、明南909則、Nj. 1055 ❹宋天息災(—成平三A. D. 1000)譯 ❺大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經の下を見よ。

大方禪師語錄 ❶(日) Dai-hō-zen-ji-go-roku. (支) Ta-fang-ch'an-shih-yü-lu. ❷二卷 ❸存 ❹清代行海諦、超明編 ❼(參考) 禪籍目錄

大方等修多羅王經 ❶(日)Dai-hō-dō-shu-ta-ra-ō-kyō. (支)Ta-fang-teng-hsiu-to-lo-wang-ching. 大方等修多羅經、修多羅王經 ❷一卷 ❸存、大正一四・九四八 No. 575、縮宙一、卍一〇・七、北261女、南273女、元331女、明北281良、清281良、麗265傷、天270女、指244傷、法356傷、至338得、明南276才、Nj. 285 ❹後魏菩提流支譯 ❺永平元—天平二(A. D. 508—535) ❻元魏佛多羅多譯有經、唐義淨譯大乘流轉諸有經と同本、第一譯、佛王舍城迦蘭陀竹園に在り、頻婆娑羅王のために、一切の諸法、名字を以て分別して說くも、第一義諦に於ては是れ實有のものに非ざることを說きたまひしことを記す。

❼(參考) 三寶紀第九、內典錄第四、譯經圖紀第四、開元錄第六、貞元錄第九

大方等修多羅經 ❶(日)Dai-hō-dō-shu-ta-ra-kyō. (支) Ta-fang-teng-hsiu-to-lo-ching. 大方等修多羅王經、修多羅經 ❷一卷 ❸存、大正一四・九四八No. 575、縮宙一、卍一〇・七、Nj. 258 ❹菩提流支譯 ❺後魏永平元—天平二(A. D. 508—535)

大方等十輪經 ❶(日)Dai-hō-dō-jū-rin-kyō. (支) Ta-fang-teng-shih-lun-ching. 大乘大集地藏十輪經、大乘地藏十輪經、地藏十輪經 ❷十卷 ❸存、大正一三・七二一 No. 411、縮玄七、卍六・九、北60唐、南60唐、元57唐、明北60陶、清60陶、麗58陶、天59唐、指49陶、法57陶、至129陶、明南57陶、Nj. 64 ❹唐玄奘(仁壽二—麟德元 A. D. 602—664)譯 ❺大乘大集地藏十輪經の下を見よ。

大方等善住意天子所問經 ❶(日) Dai-hō-dō-zen-jū-i-ten-shi-shō-mon-kyō. (支) Ta-fang-teng-shan-chu-i-t'ien-tzŭ-so-wen-ching. (梵) Suśhitamati-devaputra-paripṛcchā (藏譯) (藏譯) hphags-pa-lhahi-bu blo-gros rab rab-gnas kyis shes-byas-pa theg-pa chen-pohi mdo. 善住意天子會 ❷四卷 ❸存、大寶積經第一〇二—一〇五(大正一一・五七一 No. 310. 36) ❹達摩笈多譯 ❺隋大業年間(A. D. 605—616)

❻聖善住意天子所問經、如幻三昧經の二異譯あり、本經は菩提流志によつて大寶積第三十六會に編入せられた。他の二異譯に比し最も增廣せられ全經十品に分たる。文殊、善住意の二人、問答往復して、無相大乘の實義を明し、以て三乘、凡夫等の執相を破し、如幻三昧を說示する經。般若を受けて維摩に先驅する經と思はる。緣起品第一、佛一時耆闍崛山に在り、時に文殊師利菩薩、十方世界の諸菩薩を集會して佛より妙法を聞かんとし、普光無垢莊嚴三昧に入りて十方世界を照す。十方世界の諸菩薩、各その師佛より光明の所以を聞きて娑婆界に來至し、釋迦を供養し空中に止りて隱身三昧に入る。佛弟子摩訶迦葉、舍利弗、須菩提、これらの菩薩を求めんとして三昧に入れども、三乘の境に非ずれば見ることを得ず。時に文殊、三昧より起ちて更に諸天衆を招集せんとし、八萬四千億那由他の蓮華を化作して化佛及び化菩薩を安置するに、この化佛菩薩に勸召せられて無量無邊の諸天大衆來集して釋迦牟尼佛を供養し奉る。(以上第百二卷)開實義品第二、文殊、衆中より善住意天子 Suśhitamati を撰んで實義を論議す。先づ說聽二義を論じて三縛(見我、見衆生、見法)を離れて三淨(不見自身、不見說者、不見所說)に就くを對機とすとし、次で退轉、不退轉の義に就て論ず。文殊神變品第三、善住意、佛所に詣つて聞法せんといひ、玆に於て見佛の義を論じ、一切不見は見佛、如來卽虛空界と說き、次で文殊神變を現じて三十二所の重閣に化佛菩薩の充てるを化作し、この化佛菩薩と共に佛所に詣る。破魔品第四、時に會利弗、この瑞相に驚き佛より文殊の作す所と聞くも文殊の身見えず、蓋し文殊この時破散諸魔三昧に入りて諸魔を降伏し、威光變じて梵衆に、天女を老母と化せしむ。諸

數字順 ❶題名(書名) ❷巻数 ❸存 ❹著 ❺代年作著 ❻内容 ❼解説 ❽書名(註釋書參考書) ❾刊年の月 ❿所現館(書庫名) ⓫所藏者 ⓬刊行所

慶奪いて佛所に詣つて救を求む。佛、文殊の詣るを待つて何處にてこの三昧を得たるやと問ひ給ふに、文殊、曼荼羅華香如來の下にて二十法及び六種の四法を修し、次で一切寶電藏日月光如來の下にて成就せりといひ、次で佛命によつて諸魔に歎誨を加へて本形に復せしむ。菩薩身行品第五、爾の時、摩訶迦葉の請によりて文殊、十方來集の諸菩薩の身相を現ぜしめ、次で佛に善薩摩訶薩の義を請問するに、佛即ち「能く一切の法を覺了するを以ての故に名づけて菩薩摩訶薩と爲す」とて、その覺了の義を詳說したまふ(以上第百三卷)。破菩薩相品第六、(1)文殊、佛に初發心の義を問ひ、貪恚癡を生ずるを以て初發心なりと解し、善住意の疑難を受けて發心の義を詳說するに、舍利弗、佛に初發心と無生法忍と差無きかと問ふ。佛、爾りと答へ給ふに應じて、文殊、一切の初發はこれ不發、不發即ち初發心なりと諒解す。(2)爾の時、摩訶迦葉、文殊は能く作し難きを作せりと讚ぜるを以て、文殊、作し難きを作すは凡夫にして、諸佛には諸作なく已作當作亦なしといひ、更に佛に無生忍に就て請問し、佛說を承けて「煩惱の爲に壞られざるを忍とす」と諒解し、再び善住意の疑難を受けて詳說す。(3)善住意、文殊に發起膠行と轉增諸地に就て等ね、文殊、幻化の法中に發起・轉增共に無し等と詳說す。破二乘相品第七、(1)善住意、出家の度法並に授戒に就て等ね、文殊、一出家の心を發さゞれば眞の出家、二種愛を斷除せざれば眞の出家、三裝束を著けざれば眞の出家、四具戒を受けざれば眞の出家、五禁戒を持たざれば眞の出家、六供養を受けて分別を起さず、報恩を念せざれば淨持戒、七一切の頭陀に於て分別を起さゞれば頭陀行具足、八四諦道品三脫を修證せざれば如實覺知なりと答へ、無相法を以て分別法を破す。(2)善住意問、禪行比丘とは如何。文殊答、無生乃至無合無散、これ禪行。(3)大衆、文殊の所說に疑念を持てるを以て、文殊、舍利弗をしてこれを解かしむ(以上第百四卷)。(4)善住意、文殊を利智と讚ずるや、文殊、利智は凡夫の法なりといひ、我はたゞ宇句によりて說くのみといふ。次に佛、汝已に陀羅尼を得たりと讚じ給ふや、文殊、所得あるは凡夫法、佛法は無所得なり、故に我實には陀羅尼を得ずといふ。よつて善住意の疑難あり、舍利弗また、會中にこの法門を信受しがたき五百比丘あるを以て且らく說法を止めんを請ふ。文殊、我に取著して聞法すれば恒沙の諸佛を供養するとも菩提を證せずと說き、世尊之に讚說したまふ。破凡夫相品第八、善住意、文殊、問答往復して、梵行、殺生、黑白二業、殺業、殺三寶、報恩、所住、沙門、剛心、種德等、凡夫道の主題に就て論じ、無相法を以て凡夫執相を破斥す。いはゆる、一爲作無きこれ梵行、二我相衆生相を殺すは眞の殺生、三黑白二業を平等に見るはこれ梵行、殺即生と知つて心頭を斷つは殺業、五三寶に染著なきは梵行、六作不作の念を離れて報恩を念ぜざるが眞の報恩、七無所住に住して衆生即如、如即如來、此二別無、八非沙門非婆羅門これ眞沙門、九放意柔軟の心これ金剛心、十無作行これ菩本等の說である。神通證說法品第九、文殊、善住意の請によつて如幻三昧に入り、十方佛國を現ずるに、善住意一切法本より生なく、不生・不作・不起・不滅にして幻化の如くなるを諒す。次で文殊、佛威神を受け、執劍妙法門を說いて未だ幻化の法を解せざる五百の菩薩をして無生法忍を得しめ、又、十方世界來集の菩薩の請により、十方世界の佛土に各文殊と善住意の在るを現じて、彼等によく幻化の法を領悟せしむ。稱讚付法品第十、佛、この法門の如きは三世諸佛の要道なりとて文殊を讚じ、文殊、滅後五百歲にこの經を流布せんと請ふ。而して彌勒菩薩の問によりて、佛、七阿僧祇の昔、普華最上師子遊步勝功德聚如來の下にて、文殊、善住意の二人、始めてこの經を聞けりと宣ふ。

(美濃晃順)

大方等陀羅尼經

❶(日)Dai-hō-dō-dara-ni-kyō. (支)Ta-fang-teng-to-lo-ni-ching. 方等檀特陀羅尼經、檀持陀羅尼經、大方等檀持陀羅尼經、方等陀羅尼經 ❷四卷 ❸存、大正二一・六四一No. 1339、鎌成五、卍二一・七、北397可、南410可、元404可、明北417信、清417信、麗598使、天404可、指365使、法391使、至615慶、明南400信、Nj. 431 ❹法衆譯 ❺北涼永安中(A. D. 402—413)

❻本經は摩訶祖持陀羅尼の因緣、功德、修懺行法等を說いたもので卷一に初分、卷二に初分餘、授記分、卷三に參行分、卷四に護戒分、不思議蓮華分の五分より成つてゐる。此の中、初分には一時佛舍衛國祇陀林に在る時、文殊師利法王子、波斯匿王、郁伽優婆塞、毘舍佉優婆夷、須達多長者等を主としてゐる多くの衆會の爲に勸請せられて法輪を轉じ、更に文殊師利の請問に依つて、世尊は正法中最勝の摩訶祖持陀羅尼等の十八種の陀羅尼法門を說く。時に雷音比丘は三昧に住す。祖茶羅魔王之を妨ぐ、時に華聚菩薩は彼の摩訶祖持陀羅尼章句を以て彼の魔王を降伏し、更に雷音比丘の爲に、自警陀羅尼を說き、又彼の祖茶羅魔王を初とする十二神王をして菩提心を起さしめた因緣を揭ぐ、此の中雷音比丘は、釋迦牟尼の因位の身である。次に伽藍奢天王、婆叟仙人等の來會歸佛の因緣を說き、次に華聚菩薩は、雷音比丘の爲に此の陀羅尼を昔し東方衆香世界寶王佛の所に於て過去佛栴檀華如來より受けられた旨を明し、(已下第二卷初分餘)更に旃檀如來及び東方寶王佛の本事因緣並に陀羅尼の威神力功德を說き。授記分には佛此の大方等陀羅尼を阿難に付囑し、更に雷音寶王如來、寶月王如來及び東方離垢世界の天子、南方染色世界の天子、西方妙色世界の天子、北方衆難世界の天子、下方衆摩世界の天子、上方衆妙世界の天子並に餓鬼、阿修羅等に成佛の授記を與へたるを述べ、次に此の陀羅尼持誦の功德と及び文殊師利の請問に依つて陀羅尼の義趣とを說き、次に其の修行法、次に此の法の誹謗者の罪報を說き。參行分には

十二參王(十二神王)の爲に、七日行法を詳說し、次に此の陀羅尼を持誦し書寫する者は、華聚如來の妙樂世界に往生すべきを述べ。護戒分には初に四重禁戒を犯したる比丘の爲に過去七佛宣說の陀羅尼並滅罪懺悔法、八重禁戒を犯したる比丘の爲に內外律の陀羅尼及び懺悔法、次に八重禁戒を受け、更に受くべき淨律法、次に沙彌、沙彌尼等の爲に淨戒法を說き、次に護戒の五事及び護戒の行に世出世の二種あるを說き。不思議蓮華分には此の陀羅尼の流通並に其の功德を說いてある。

蓋し本經は法衆(高昌の人)が北涼永安年中譯出に於て河西王蒙遜の爲に譯したもので密教經典としては最古のものに屬してを り、南岳慧思は本經に依つて方等三昧を行ひ、天台智顗は方等三昧行法を作つてゐる。

❼(參考) 出三藏記第二、三寶紀第九、內典錄第三、譯經圖紀第三、開元錄第四、貞元錄第六、八家錄錄卷上方等法。

(神林隆淨)

大方等大雲經

❶(日) Dai-hō-dō-dai-un-kyō. (支) Ta-fang-teng-ta-yun-ching. 大方等無想經、方等大雲經、方等無相大雲經、大雲無相經、大雲密藏經、方等大雲無想經、大方等無想大雲經、無想經、大雲經 ❷六卷 ❸存、大正一二・一〇七七No. 387、鎌成一〇、卍二〇・六、北165五、南166五、元163五、明北240男、清340男、麗165大、天156五、指155大、法113四、至343貞、明南175毀、Nj. 344 ❹曇無讖譯 ❺北涼玄始三—一五(A. D. 414—426) ❻大方等無想經の下を見よ。

大方等大雲經請雨品第六十四

❶(日)Dai-hō-dō-dai-un-kyō-shō-u-hō-bon-dai-roku-jū-shi. (支) Ta-fang-teng-ta-yun-ching-yu-p'in-di-liu-shih-sai. 大雲經請雨品第六十四、大方等大雲經請雨經、大雲請雨經 ❷一卷 ❸存、大正一九・五〇〇No. 992、鎌成六、卍一〇・二、北169五、南163五、元155五、明北182毀、清182毀、麗168大、天159五、指158大、法165四、至246貞、明南178傷、Nj. 186 ❹闍那耶舍譯 ❺周保定四—建德元(A. D. 564—572) ❻大雲經請雨品第六十四の下を見よ。

大方等大雲請雨經

❶(日)Dai-hō-dō-dai-un-shō-u-kyō. (支)Ta-fang-teng-ta-yun-ching-yu-ch'ing. 大雲經請雨品第六十四、大方等大雲經請雨品第六十四、大雲請雨經 ❷一卷 ❸存、大正一九・五〇〇No. 992、鎌成六、卍一〇・二、北169五、南163五、明北182毀、清182毀、麗168大、天159五、指158大、法165四、至246貞、明南178傷、Nj. 186 ❹闍那耶舍譯 ❺周保定四—建德元(A. D. 564—572) ❻大雲經請雨品第六十四の下を見よ。

大方等大集經

❶(日)Dai-hō-dō-dai-jū-kyō. (支)Ta-fang-teng-ta-chi-ching. ❷二十七卷 ❸缺 ❹後漢支婁迦讖(—建和元—中平三A. D. 147—186—)譯 ❺第一譯。 ❻(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大方等大集經

❶(日) Dai-hō-dō-dai-jū-kyō. (支) Ta-fang-teng-ta-chi-ching. (梵) Mahā-vaipulya-mahā-saṃnipāta-sūtra. 大集經 ❷六十卷或三十卷 ❸存、大正一三・一No. 397、鎌玄一—四、卍六・六—八、北57位至有、南57住至有、元54位至有、明北57位至國、清57位至國、麗57推至鷹、天56位至有、指56推至資、法55推至鷹、至126陶至弔、明南54位至國、Nj. 61 ❹曇無讖譯 ❺北涼玄始三—一五(A. D. 414—426)

❻(一)大集の名義。本經に依ると、大集なる語は、少くとも兩義に用ひられて居る。卷一に悉來大集(異譯に集會)、悉已大集(異譯は皆來大集)などいひ、卷二十に「若欲ㄗ聽ニ受無上正法ㄘ、見ニ大集會ㄘ宜當ニ往ニ詣……釋迦如來所住之處ニ(異譯には欲ㄗ見……無量佛集ㄘ、今正是時、可ㄗ共我等、往ニ彼世界釋迦所住之處、大集法會ㄘ)とあり、卷二十一には「娑婆世界、當ㄗ有ニ十方無量諸佛菩薩集會ㄘ是大集時、汝於ニ此中ㄘ當ニ得……菩薩記」(異譯には釋迦如來、以ニ大願ㄘ說大集ニ諸佛及菩薩衆ㄘ、汝當ニ於ㄗ彼得ㄘ受ニ……記」)と云ひ、卷二十二には「爲ニ此大集ㄘ於ニ大(衆)集中ㄘ演ニ說正法」(異譯に是故彼佛、爲ニ大衆說ニ法」)などとあるのは、異譯も示すが如く、正しく佛菩薩などの多數の「集り」を云ふ爲に用ひられた所である。然しかゝる多人數の集りをいふ場合には、又諸佛の大會とか大會衆とか、牟尼衆集とか大衆とかの語が用ひられ、寧ろその方が普通であるから、これを示すのに大集の文字を用ふるのは、やゝ特例と云つて差支へないであらう。ところが海慧菩薩品の「如來所說大集妙典、豁未ㄗ說耶(異譯には大集會中所有正法、今尙說耶)」とか、無盡菩薩品の「我今……欲ニ往聽ニ受大集妙典」(異譯に來ニ詣此會ㄘ、聽ㄗ說ニ經典ㄘ)とか、虛空藏菩薩品の「亦爲ニ此大菩集經、分ニ別少法門分ㄘ放(異譯に亦爲ニ分ニ別此大集會微妙法門ㄘ)」とか、寶幢分第五品の「以ニ汝因緣ㄘ有ニ是大集」(異譯に由ニ汝因緣ㄘ、今得ニ此處大集法門ㄘ)」とか、同第七品の「應當ニ供ニ養是大集經受者說者」何以故、是大集經、即是十方諸佛印封、若能供ニ養如ㄗ是大集ㄘ即是供ニ養十方諸佛」(異譯に若有ニ善男子善女人ㄘ當ㄗ共受ニ持書ニ寫大集法門」——以下相當文を缺く)の句に於ける大集の語は、前に云つたものとやゝ異なる意味を持つて居る。

これは各品の終に於ける流通分の文と併せ考ふべきであつて、卷第七の寶女品の終には「是經名爲ニ眞實法義・毘尼方便・成就發心無量寶聚・無量陀羅尼・十力四無畏不共法藏ㄘ」とあり、卷第十二の海慧菩薩品の終には「是經名ニ大寶聚」といひ、卷第十三の不可說菩薩品の終には「是經名爲ニ方等大集」とし、卷第二十六の寶幢品の終には「是法名曰ニ方等大集大陀羅尼大行菩薩入處」といひ、卷第三十の無盡意菩薩品の終

には「此經名曰無盡意所說不可盡義章句之門」又名大集」と云つて居る。玆には大集の語の外に寶業、大寶業又は業などの語が見られるが、これは獨り經の終に限らず、海慧菩薩品五の三(卷第十)には、海慧菩薩の「大乘は、何の法か攝取し、何の法か利益し、何の法をもつてか得難く、何の法か障碍し、何の因緣の故に名づけて大乘とは爲す」の問に對し、佛が多くの法數を以て答へ終つて後、「是大寶業亦無增減若有受持讀誦乃至能爲人常住三昧道中……。若有受持如是人寶者是人則具一切善法……是大智業。」と云つて居られる。從つて大集とは「寶の業」と義を異にするものでは無いと云ひ得る。而して寶は卽ち法であるから、大集とは亦法の業であらねばならぬ。總じて大集經は法數を擧げることが著しく、全卷殆んど法數を以て滿たされて居る。勿論說明の爲に三義五義などを數ふることは、極めて有りふれたことであるが、この經に於ては只數へんが爲に數へて居ると見らるゝ部分が極めて多く、法數を擧げ法業を列擧することが、その中心をなして居る。從つて法數に據つて解說するよりも、單に羅列するに止まつて、法相相互の間に內容の聯關を認め難いもの反覆重說に及ぶものも極めて多く、大集經は法數・法相を擧ぐること多き經典の編輯なりと云つても過言ではあるまい。

(二)大集經六十卷本の由來。大正一切經では、大集經は六十卷より成つて居るが、六十卷本は、經錄の示す所によると、隋代に僧就が編んだのに始まるものであつて、古くは大集經は多く三十卷內外の本を指し、他は大集部に屬しつゝも失れ〳〵別名を以て記されて居たのである。而してこの三十卷內外の大集經は、六十卷本の前半と少異あるのみであるから、便宜上、六十卷本の前半を、そのまゝ大集部第一第二として譯出するに至つたのである。(現に宋・元・明の三大藏經に於ても、大集經としては、日密分までを含み、その間、無盡意菩薩品を除いて、三十卷をなして居る。)

僧就が大集經六十卷を編むに至つたのは歷代三寶記十二によると、招提寺沙門の釋僧就が、閬那崛多三藏から、かねて于闐の東南二千餘里に遮拘迦と云ふ國があり、その國王亦純信にして大乘を敬重し、諸國の名僧至るも、試練して大乘の學人のみ請ひ停らしめ、王宮內に摩訶般若、大集、華嚴など各十萬偈の本を持して祕藏し、此の國の東南二十餘里の地にも、大集、華嚴、寶積等十二部の、各十萬偈なるを安置し、防護守視せしむる有るを聞き、大集經完本の在らざるを恒に嗟歎して居たが、高齊の世に月藏經が譯され、次いで開皇六年(A. D. 586)に日藏經の譯出を見、何れも大集經廣本の一部なるを知り、欣躍して前晉の所翻に此等を合し、六十軸の新合本を編んだとある。彼のこの編輯は、大集經の完本を成さんとするより外他意が無かつた。而して前に譯されて居た大集經(その卷數は或は二十七、三十、三十一などとあつて、一定して居ない)に、新に編入した諸經は、開元錄十一によると、前記の日藏月藏二經以外に、十方菩薩品と題して月藏經の次に置いた明度五十校經と、無盡意經とであつて、全部五十八卷より成つて居たらしい。內典錄五には大方等大集經(六十卷或五十八卷)、曇無讖譯前三十卷。北齊隋時耶舍譯後三十卷といひ、大周錄以下の諸經錄、また多く之に倣つて居るが、現藏と對照して、果してどれだけが、所謂前晉の所翻で、どれだけが僧就によつて加へられたかは、前述の諸經錄も、記載明瞭を缺くので、僅に決定しかねるが、ともかく隋以前に大集經と云つたのは三十卷內外の本であつた事は、經錄の一致する所であるから、今假に六十卷本に就ても前半と後半とを分け、前半とは、僧就新合以前に大集經と呼ばれたものを指し、後半とは僧就の編入した部分を云ふものとして、以下これ等の部分の經譯とその內容、特にその品數を一瞥しやう。

僧就參考の爲に諸異本に於ける品數と其の次第とを對照すると次の如くになる。

〔諸異本に於ける內容比較〕

	藏	帖錄 甲	帖錄 乙	丹本	僧就本	後序	第五本	宋元明三本
一、	瓔珞品	1	1	1	1		1	1
二、	陀羅尼在自王品	2	2	1	1		1	2
三、	寶女品	3	3	2	2		2	3
四、	不眴菩薩品	4	4	3	3		3	4
五、	海慧菩薩品	5	5	4	4		4	5
六、	無言菩薩品	7	7	6	5		5	7
七、	不可說菩薩品	8	8	7	6		6	8
八、	虛空藏品	9	9	5	7		7	6
九、	寶幢分	10	9	8	8		8	6
十、	虛空目分	11	10	9	9		9	10
一一、	寶骨菩薩品	12	11	10	10		10	11
一二、	無盡意菩薩品	13	10	14	16		10(?) 12	11
一三、	日密分		11	11	11		11	12
一四、	日藏分			11	13		12	
一五、	月藏分			12	14		13	
一六、	須彌藏分			15	17		15	
一七、	十方菩薩分			13	15		14	

(三)內容。何れにするも現藏に編入されて居るものは、第十二、無盡意菩薩品を除く外は、曇無讖譯と稱せらるるものであつて、出三藏記九に、僧祐が見た舊錄に於ける內容と略同一のものである。彼の記によると、二十九卷より成り、首尾十二段有つて、第一瓔珞品、第二陀羅尼自在王品、第三寶女品、第四不眴菩薩品、第五海慧菩薩品、第六無言菩薩品、第七不可說菩薩品、第八虛空藏菩薩品、第九寶幢分、第十虛空目分、第十一寶骨菩薩品、第十二無盡意菩薩品、がそれである。然るに別に二十四卷本があつて、右の第八虛空藏所聞品(五卷)と第十二の無盡意所說不可思議品(四卷)との二品四卷を缺く外、經文悉く同じく、只殘りの二十卷を分つて二十四卷にしたものに過ぎない。この兩本は共に海慧菩薩品を第五とし、第六無くして、直ちに無言菩薩品を第七として居るが、第六品を缺く所以は不詳であるといふ。また錄を檢すると、別に大虛空藏經の五卷本があるが、これは卽ち此經の虛空藏品であり、無盡意經の四卷本があつて本經末の無盡意品がそれであるといふ。以上の記錄によると、僧祐の見た舊錄に依るものと、別本とは同一系のもので、何れも第六品を缺いて居り、後者は尙ほ二品少い點で、前者と異つて居る。然るに開元錄十一には、右の僧祐の記を引いて後、「今經本を檢するに僧祐の記と同じからず、第一陀羅尼自在王品、第二寶女品、第三不眴菩薩品、第四海慧菩薩品、第五虛空藏菩薩品、第六無言菩薩品、第七不可說菩薩品、第八寶幢分、第九虛空目分、第十菩薩品、第十一寶骨菩薩品、第十二無盡意菩薩品、がそれである。而して第一陀羅尼自在王品の中に、別に瓔珞品を別出する經本あるも、この二品は一段を成すもので、別出すべきではない。また僧祐の見た舊錄の中のものは、日密分無くして無盡意品があるのは不可である。蓋し無盡意經は大集の別分ではあるが、曇無讖の譯では無いから。次に祐は虛空藏品を不可說品の後に置くが、その所以を明にしない。要するに陀羅尼自在王品より日密分に至る間は總じて十一分である」といふ。開元錄によると、これが所謂大集經の前半を成すことになり、前の二本に對して別種の一本があることになる。麗藏大集經卷一の終に、校正後序があつて、宋本・丹本との比較を示して、宋本には首に瓔珞品があるが丹藏には無く、虛空藏品は宋本などには不可說の後に在り、丹藏では無言品の前に在り、宋本等は寶骨本の後に無盡意品四卷あるも、丹藏には無くて、日密分三卷があるといひ、更に本經各品の出沒、次第の不同によつて、異本六種を擧げて居る。その第一本なるものは、僧祐の「舊錄に依るもの」と同じく、第二本は前に引いた開元錄と同じもので、丹本卽ち是れである。(第三本以下は後半を合したものであるから後に說く。)以上が先づ、吾人が假に前半と稱したものの內容を成すのであるが、玆に問題となつたのは、虛空藏品の位置並にその脫落(僧祐の記す別本に於て)と無盡意品並に日密分の有無とであつて、他は三本共に不同無しと云つていゝ。但し僧祐の記に云ふ所の、かの兩本が第六品を缺くのは、第七品とあるのが、實は第六品とすべきものゝ誤で、以下順次に一つ寃繰り上ぐべきか、それとも兩本共に第六品を失したのかは不明であるが、後の諸經錄は皆之を問題にして居らず、玆に別の品目の有る異本も無かつた樣であるから、或は六とは七の誤で以下順次に一つ寃繰り上ぐべきもの歟。

〔虛空藏品〕僧祐の別本では闕けて居り、他の諸本皆之を存して居る。彼が舊錄によつて記した大集經の品目に第八として之を揭ぐる以上、曇無讖が確に譯出したのであらうが、いつしか失せて現代には之が無かつたことは、彼の特に注意した所であり、同時に別に大虛空藏經五卷有つて、卽ち此の經(大集經)の虛空品なりと記して居るが、如何にしてこの五卷本が、かの虛空藏品の別譯と判じたか、兩もそれは何人の譯であつたかが問題となる。そこで出三藏記二を見ると、「方等王虛空藏經五卷(或曰大虛空藏)、檢經文、與大集經第八卷虛空藏品同、未詳是別出不別錄云、河南乞佛寺沙門釋聖堅譯出)」をば、曇無讖譯經の下に擧げて居る。而もこの經をば聖堅譯とする說もあつたことがわかり、同卷には別にまた「虛空藏經八卷(右一部凡八卷、宋武帝世、河南乞佛時沙門聖堅出)」を擧げ、異出經錄の下には「虛空藏經(曇摩讖出、方等王虛空藏五卷。曇摩蜜多出、虛空藏經一卷。聖堅出、虛空藏五卷。佛陀耶舍出、虛空藏一卷)右一經、四人出」のことを述べて居る。これに依ると無讖の譯の外に聖堅譯など三本があつたことになる。曇無讖が大集經二十九卷を譯しながら、そのうちの一部分(卽ち虛空藏品)を別に譯出するといふことは、疑ふべき所であるのみならず、僧祐が「別に大虛空藏經五卷の本があつて、此經(大集經)の虛空經品と同じ」といふも、無讖の譯とは云はず、方等王虛空藏經に就て、其の經本を檢するに大集經の第八分と同じといふも、彼の見た本には虛空藏品が、缺けて居ると明記して居るから、對照のしやうが無い筈であり、從つて「別出か否か」も不明なのが當然で、大集經の虛空藏品と同じいといふのは、彼自ら檢した所に依つたものでは無くて、他の錄にでも依つて記入したものに相違ない。開元錄十四に「方等王虛空藏經八卷(亦云虛空藏所問)五卷。乞伏沙門釋聖堅譯。右一經是大集虛空藏品異譯、藏中錄有、乃是別生虛藏品、無讖所翻、非異譯者。」と云ふ根據も、かくて薄弱と云はざるを得ない。却つてこの經は聖堅の譯とする方が、此等の經錄に通じた所であり、法經錄以下も聖堅譯虛空藏經の存在を示して居る。卽ち虛空藏品の別本と稱せらるるものは、曇無讖譯とするよりも聖堅譯と見るのが、諸經錄の示す所に、よりよく合致する譯である。次に僧祐の云ふが如く、舊錄には虛空藏品の名目が存するけれども、彼の見た別本に是れが闕けて居たのだから、(その原因乃至理由は判定出來ないが)、曇以後に於ける大集經

の虚空蔵品は、恐らく後人の補遺に成つたと考へて大過無かるべく、是を補ふに際して、古くよりその別本と稱せられたものを用ひたと考へることが出來ないであらうか。現蔵の大集經の虚空蔵品も、從つて無識の譯では無くて聖堅の譯出といふことになる。この事は、同品の形式的内容を吟味することによつて、その大半が決せられる譯であるが、今試に二三の特色と考へらるるものを擧ぐれば、大集經の各品には、後に示すが如く、屢々大集經なる文字が用ひられて居るのに、此の品に限り「亦爲ニ此大普集經、分ニ別少法門分一（異譯に亦爲ニ分ニ別此大集會微妙法門一）」とか「爾時虚空蔵菩薩、雨ニ妙華……及此大普集經」などといひ、大集とは云はない。同一人の手に成る譯ならば、他の場合の如く大集と譯すべきで、此の品に限り、別に大普集の字を用ふべき必要は無い筈である。更に說法の場所としては、此の品と無盡意品との外は、皆欲色二界中間大寶坊庭となすに、この二品は妙寶（又は寶）莊嚴堂と云つて居る。妙寶莊嚴堂と欲色二界中間の大寶坊といふとは、一見異るが如きも、寶女品や海慧品には欲色二界中間の大寶坊とあるに對して、その異譯には如來寶淨高座とか大寶莊嚴道場などとある所を以て見ると、この二譯は必ずしも、その原語を異にするのでは無くして、譯し方の相違に因るもので、これ亦同一譯者の手に成らざるを示す一證と見るを得やう。更に此の品では偈文が七言のものも無いでは無いが、五言或は四言より成るものが極めて多い。ところが無識譯の他の部分では、七言の偈が主であつて四言のものは見當らない。偈文は譯者の異なるに從つて、その語數の異るのが普通で、これは各その得意とする所に從ふによるからであつて、何等の規定の存する譯では無い。同一人ならば大抵同じ形式を用ひるべきを、特に異なつた四言などの偈の存在は、亦異人の譯出たるべきを想像せしむる一助となる。 玆で吾人は、更に諸異本に於ける、虚空蔵品の地位を併せ考へねばならぬ。別表の示すが如く、日密分までに於ては、無盡意品を除いて、その順位の問題となつたものは、虚空蔵品以外にない。而もその順位は、諸の異本に於て、二類になつて居る。一は不可說品と寶輪分との間に置くもので、僧祐の見た舊錄を初とし、僧就の合集本、後序の第五本、並に羅本であり、他は海慧品と無言品との間に置くもので、丹本、並に宋・元・明の三蔵本の如き、これである。此經の前半に於ける諸品は、最初の二品（又は一品）以外は、その形式から云つても、その内容から見ても、決定的の順序を付し得るものでなく、前にも一言した如く、各獨立の經の編輯であつて、その順位の前後の如きは、本質的に何等の問題をも提供しない。從つて虚空蔵品の如く、一本では前に在り、一本ではやゝ後に位したとて、一部の經としては、何等の差支も無い譯ではあるが、只此の品のみに、その地位の問題が起る所に、注意の價値があり、況して一且或る時代に、初譯の本の中で、この品のみが闕けて居たとなると、この品に關する限り、その順位は、重大な問題となる。即ち此の品の失はれた部分を、何時か、何人かが、他の（両して恐らく耨堅譯）本を以て補つた際に、一は僧祐の舊記に依つて、不可說品の後に編し、一は海慧品の後に第六として編入した所に起因するものと見得るであらう。海慧品の後に第六として入れることは、僧祐の記に明記した如く、舊錄本も、別本も、共に第六を闕いて居たから、その所へこの品を挿入し、以後漸次に順位を附したものであらう。かくて虚空蔵品は、現蔵に無識譯とはなすものの、その實は異譯を取り入れたもので、それが爲に其の順序に於ても、如上の二類の異本が存することになつたものと考へられる。若し無識譯の虚空蔵品がそのまゝ、傳はつて居たならば、かゝる次第の不同を生ずる筈はなく、これのみに不同の生じたのは、僧祐の見た別本に於けるが如く、闕けた所が二箇處あつたが爲である。

〔無盡意品〕 現蔵に依れば、無盡意品は、智嚴が寶雲と共に譯出した事になつて居るが、僧祐の記には、明に大集經第十二分をして無盡意品を擧げて居るから、曇無讖譯の大集經には、この品が最後をなして居たものと見ればならぬ。然るに開元錄十一に曰ふ、「この記に、日密分無くして無盡意品のあるのは甚だ不當である、何となれば無盡意經は大集の別分ではあるが、無讖譯に非ざるを以てであるといふ。そして隋の僧就が六十卷本を編んだ時も、是を最後に置いて居るが、これ亦非なること明である。何者、無盡意經の首には「大集經中無盡意菩薩說不可盡義品第三十二」とある。両して品とは即ち分のことで、これが第三十二經を成すべきであるから、日藏、月藏、地藏十輪、須彌藏、虚空孕、念佛三昧、賢護、譬喩王を列して後に無盡意を置き八十卷となすべし」と云つて居る。（この說では初品と第二品とは、内容から見て連續して居るにより一品とすべしと云ひ、日藏は日密と共に第十一分をなし、以下八經を加ふるも十九經を成すのみで、第三十二經とはならない。却つて品は即ち品で、彼に云ふ如く、第一自在王品一、第二寶女品一、第三不眴菩薩品一、第四海慧品一、第五虚空蔵品一、第六無言本品一、第七不可說品一、第八寶輪分十三品、第九虚空目分十品、第十寶髻分一品、第十一無盡意品一とせば無盡意品は第三十二となる。）

開元錄のこの說は、僧就の編した五十八卷本は亟准無き故に依るべからず、若し合せんと欲せば、總じて八十卷を成す上記の如くならしむべしといふ意見であつて、八十卷本が存した譯ではなく、異本は僧就の說に從つて最後に置くものか、僧祐の舊錄及び龍蔵に於ける如く第十二分とするものかの二種で、丹、番、宋・元・明の諸本は、何れも之を缺いて、日密分を最後にして居る。（即ち僧就の五十八卷又は六十卷本の前半に當る。）この品も亦、僧祐の見た別本に闕けて存しない。從つて後人の補ふ所となつたこと、虚空蔵品に於けるが如くであらう。故に一應諸經錄を檢べることにする。

出三蔵記二には法護譯經の條に無盡意經四卷と阿差末經四卷とを擧げ、同卷の新集異出經錄にも無盡意經（竺法護出、無盡意、四卷。竺法眷出、無盡意十卷。曇摩讖、大集後無盡意四卷。有一經三人出）、阿差末經（支謙出、阿差末二卷。法護出、阿差末四卷）の二を別出して居るのは、これ等を別の經と考へたからであらう。然るに法經錄一には、大集經別品殊譯の下に阿差末經七卷（是無盡意品、或四卷、法護譯）、無盡意經四卷（亦是阿差末經、法護譯）を擧げて兩者の同本異譯なるを示し、更に無盡意經には法眷譯十卷本のあつた事を記して居る。開元錄十一には、この經典の異譯とその存闕とについて、阿差末經七卷（晉曰無盡意、或四卷、或五卷、法護譯、第三譯）、無盡意經六卷（亦云阿差末經、出ニ大集經一、智嚴共ニ寶雲一譯、第四譯）とを記し、右二經同本異譯（前後五譯、三譯闕本）とし、同十四の、有譯闕本の頂に阿差末經四卷（吳維祇難譯、第一譯）、同（支謙譯、第二譯）、無盡意經十卷（法眷譯、第五譯）を掲げて居る。從つて出三蔵記がこれ等の二經を別の如くに扱へるの誤なるを知ると共に、法護・法眷譯以外に曇無讖・支謙・智嚴寶雲・維祇難などの譯があつた事になる。無讖の別譯に就ては出三蔵記が記すのみで他は云はず、既に大集經をまとめ譯した無讖が重ねて別出したとすることの疑はしい事は、虚空蔵品に於けると同樣であり、維祇難譯本と支謙の譯本とは、内典錄二に依ると、小異ありと云はるるが、開元錄の云ふが如く、已に失せたとすれば、さして問題とならない。次に智嚴寶雲譯本のことは、歴代三寶紀の智嚴の下に、無盡意經六卷（亦云ニ阿差末經一云云）を出し、内典錄の四及び六、古今譯經圖紀三、大周錄二などに之を出すも、出三蔵記以下隋の諸錄に之を出さざるは怪しむべきである。反對に法眷譯は、出三蔵記や法經錄、並に内典錄六などに出で恣怪錄、靜泰錄、開元錄などは闕本となして居る。而して法護譯は別本として今も存在するから、梁代に失はれて居た大集經の無盡意品も、後に他の譯を以て補つたものであらうし、それには法眷譯か智嚴等の譯かを以てしたに相違ない。而して現蔵では後者となつて居るが、前述の如き疑もあるから、法眷譯を以てしたのではなからうかと考へられる。而も僧就が新に大集經を編んだ時、是の品を最後に置いたと云はれるから、その頃までこの品は闕けたまゝになつて居た爲、僧就が日蔵以下の諸經を加へた後、この品の別譯を追加したものではなからうか。若しそれ以前に補はれて居たとすると、僧就が之を最後に「加へた」理由が解し難くなる。

内典錄六には無讖譯大集經三十卷を擧げ、續いて日藏月藏の二經と共に大方等大集經八卷を列して、「已前四經並大集之宗致、……前後譯別、今合之爲ニ六十卷一、或五十八卷、見ニ費長房開皇三寶錄一」と註記し、次に十五經の大集經別品殊譯を掲げて居る中に、法眷譯無盡意經十卷も存して居る。然るに開元錄十一によると、「内典錄及大周錄中、更有ニ大集經八卷一、等ニ其文句一、即是合部大集經第六帙也、初之兩卷、名ニ十方菩薩品一、乃是明度五十校計經。……後六卷、乃是無盡意經、既是寶重、亦除不レ錄。」とあつて、内典錄に出す八卷の大集經とは、丁度僧就が最後に置いたと云はれる、明度五十校計經と無盡意經との合本といふことになる。而して開元錄では、この八卷本大集經を擧げず、無盡意經の方は智嚴寶雲譯を載せ、出ニ大集經一と註記して居るが、前にも述べた如く、この譯には疑はしいところがあるから、八卷本大集經に入つて居る方は法眷譯であつたが、是を明記しなかつた爲に、別に法眷譯としての殊譯が掲げられたのではあるまいか。

〔日密分〕 僧祐の記によれば、無讖譯大集經には、日密分を含んで居ない。開元錄十一に、僧祐の記と比較した經本には、無盡意品の代りにこの日密分が第十一分となり、曇無讖の譯となすものの如くであるが、諸經錄にはこの經の讖譯に就て記するのが見當らない。既に僧祐の所謂舊錄之を含まず、彼の見た別本にも見えず、他にも之を記さないのであるから、此の譯を無讖に歸するのは謂れ無き事と云はねばならぬ。龍蔵井に宋、元、明本は、日密分三卷の中、初二卷を無讖に、後の一卷を那連提耶舍に歸して居るが、その根據何れに在るや不明である。

元來現存日密分は、開元錄十一にも云ふ如く、完本では無くして、恐らく後の一卷を闕くものの如く、而もその部分は當代既に「尋求するも得ず」とあるから、恐らく未完の本が經の一部に編入されたものであらう。無讖既に之を譯せず、耶舍また之を譯したとは思はれないから、梁以後隋代に至る間に於て、何人かの手によつて編入せられたものであらう。尤もこの編入は理由無くして行はれたものではない。經によれば虚空目安邦毅那甘露門を說き了つて、日密分を說くことになつて居る。この點からすれば、開元錄十一もいふ如く、虚空目分に續いて、日密分が置かれるべきで、その間に寶髻品のあるのは、不當かも知れないが、虚空目分の次に寶髻品の在るのは、曇無讖本以來の例になつて居るのと、この經が未完のものであつたが爲に、曇無讖譯本の最後に置かれたものと考へられる。

（四）大集經前半に就て。所謂曇無讖譯とせらるゝ、大集經の前半を構成する各品はその形式から見て、各々單獨の一經を成して居る。その内容に於て、他の諸大乘經典に見るが如く、物語の連續もなく、所說の法に何等の次第も有ることなく、此の點から云へば、各品の順位に何等の絶對性も無い。端的に云へば、此等の各品は法相・法數を說くといふ點に於て、互に共通して居るのみで、是が中心となつて、諸の單一經を一まとめにして、所謂大集經を形くるに至つたのかも知れない。出三蔵記第四の失譯雜經錄の下には、抄大集又は抄方等大集經と註した經が數多く列記せられ、法經錄

第二には、大集經の別生として、舍利弗問寶如經一卷(出=第二卷)、菩薩導示行經一卷、訓伏衆生業經一卷、大慈無減經一卷、(以上、出=第三卷)、魔業經(出=第十一卷)、菩薩出要行無礙法門經一卷(出=第十二卷)虛空藏初)、過魔法界經一卷(出=第十六卷)同上、中)、無言菩薩流通法經一卷(出=第十七卷)、佛弟子化魔子誦偈經一卷、その他部分譯と覺しきもの三十部を出し、同卷第一には大集經別品秩譯として、大哀經、寶女經、無言童子經、何差末經、虛空藏經、寶髻菩薩經外五經を揭げて居る。而もその多くは西晉の法護の譯で、出三藏記の二によると大哀經は元康元年(A.D. 291)に、寶女經は太康八年(A.D. 287)に譯したとあるから紀元三世紀には、大集經各品の別譯や、その部分譯が行はれて居る。而して此等別譯の或るものは、經錄によると前後五回も譯出されて居るが、現存するものを、經に對照すると次の如くである。

現藏品名	卷	異譯品名	卷	譯者
一、瓔珞品(卷一)	大哀經	八卷	西晉	法護
二、陀羅尼自在王品(卷一—四)				
三、寶女品(卷五—六)	寶女所問經	四(又は三)卷	西晉	法護
四、不眴菩薩品(卷七)				
五、海慧菩薩品(卷八—一一)	海意菩薩所問淨印法門經		宋	惟淨
六、無言菩薩品(卷一二)	無言童子經	二卷	西晉	法護
七、不可說菩薩品(卷一三)				
八、虛空藏品(卷一四—一八)	大集大虛空藏菩薩所問經	八卷	唐	不空
九、寶幢分(一九—二一)	寶星陀羅尼經	十卷	唐	波羅頗蜜多羅
一〇、虛空目分(卷二二—二四)				
一一、寶髻菩薩品(卷二五—二六)	寶髻菩薩所問經(寶積經四七會)	七卷	西晉	法護
一二、無盡意菩薩品(卷二七—三〇)	阿差末菩薩經			

此等の諸異譯は、すべて一經の體裁を具へ、初に序分があり、正宗分是に次ぎ、終に流通分が有り、何時何處で何の因緣の故に、經が說かるゝに至つたかの所以を初に記し、經を說き終へては如何にしてこの法を持し、如何が名くべきかを示して居る。それが大集經に入つて居るものになると、初の序分の記事が極めて簡潔になり、その大部が略され、或る處まで來ると、兩者殆んど平行して最後に至るのが普通である。

中には經名を擧げないものもあるが、各品いづれも一部として纏まつたものである。大集經は是等を編纂したものであることは、內容の或る文句を、異譯と對照することに依つても知られる。それは此の經內には經題と同じ大集經なる名が屢用ひられて居るが、此等を異譯と對照すると、必ずしも大集に相當する原語が、當該箇處にあつたとは想像されない。寶女品の初に「我今於=大集經中一、欲=少問ㇾ義」とあるも、異譯には「我身今欲ㇾ音ㇾ問如來、於=斯經典章品之句一、志所ㇾ趣向」とあり、海慧菩薩品の初に「我等於=此大集經中一、欲=少發ㇾ問」とあるに對し、異譯には「我於=如來……今有ㇾ所ㇾ問……」と云ふのみ。また無言菩薩品に「今復因=於無言菩薩一、聽=受知ㇾ是大集經典一、并來覲=見供=養於我」とあるに、異譯には「今者故來行=供發德一、亦欲ㇾ覲=見於此大會奉=覲佛聖」と云ひ、「欲=往聽=受大集妙典」の相當文には「來=詣此會一、聽=說經典」とあるが如き、その一例である。その他、經に受持如是大集經典とあるも、異譯に持斯經典とのみあつて、大集の名を冠せざるなど、或は編者の加筆によるものかと考へられる。尤も海慧菩薩品の終には、「爲……佛ㇾ過=數量一諸菩薩等=說=大集經」とあるに對し、異譯には「如來……爲=十方世界諸來集會菩薩衆一、廣大宣=說大集會正法」と云ひ、不眴菩薩品の初に我等「於=此大集經中一、欲=少發ㇾ問」とあり、異譯には「於=此大集會正法之中一、而有ㇾ所ㇾ聞」と云つて居るのは、原文に關うあつたからであること勿論である。虛空藏所問經に「與ㇾ我俱來、詣=至妙喜世界一、爲ㇾ欲ㇾ聽=聞大集經」とある句の相當文が、虛空藏品には缺けて居るので、此の場合の原語の推定は困難であるが、如上の對比によつて、特に大集の二字が加はつて居るのは、初の方即ち序分にのみであり、六十卷本では、一品の序分が數行に過ぎぬものさへあつて、略された事が明であるのを併せ考へると、各品は一類の經典ではあつたが、一經として次第づけられてなかつたものを、編纂して一部の經とする際に、重復又は矛盾する恐れある序分を削り、前後の連絡と一經としての體裁とを整へるに至つたものと考へられるのである。然し經の內容を檢べると、同樣の事柄に就ても、明に前後に於て、相一致しないものがある。例へば自在王品(第四卷)と海慧菩薩品(第十卷)とには、各々宇門の解釋が出て居る。「阿宇は一切の法門なり、阿とは無を云ふ、一切諸法はみな悉く無常なればなり」といふ如く、或る宇音を取り、その意味する所に依つて、是に種々の釋義を施すものであるから、必ずしも一定のものではないが、この兩品に見ゆる此等宇門の解釋は、同一の文宇に對して全く相異るものも多い。然もそれ等の解釋が、各々其の場合に於て、絕對的に必要なものとも考へられないとなると、始めから經つた一部の經典として說かれたものでなくて、もつと一群をなせる經典をば、たゞ次第付けたのみで、內容の重複や矛盾は、措いて問はざりしに由るものと云はねばならぬ。而して「大集」なる名も、此等の諸經を纏めた際に、經の內容からして、新につけられたものであらう。然らば此等の諸品が何時、そして何處で斯くの如き形に編纂されたかが問題となるが、今之を決する積極的の資料がない。恐らく多くの大乘經典

の場合に於けると同じく、それは中央アジアの邊に於て行はれ、其の時期は、此の經の別品が初めて譯出された時代を隔たること、甚だ遠からざる時代であらう。法護の初譯は(A.D. 281)に出でた寶女品で、大哀經之につぎ、無言・阿差末の二品も、その前後に譯されたものであらうから、當時西域に於ても、諸品が獨立の一經をなして居たのが普通であつたらしい。それが五世紀の初頭には一部の經として曇識の譯出する所となつて居るから、現存の經典に據る限り、法護と曇識との中間の時代、恐らくは西紀四世紀頃に、此等が一經としてまとめられるに至つたものと考へられ、これが內容をなす各品は、更に遡つて西紀一・二世紀頃には、略現形を具へた經として存在したものと推定せられる。

(五)大集經の後半に就て。曇無讖の譯に歸せられる大集經へ、更に日藏以下の諸經を、隋の僧就が付け加へたものが五十八卷(或は六十卷)本であると云はれる。僧就がこの大本を編んだ時、付け加へた諸品は何々であつたか。歷代三寶記十二には日藏經と月藏經とを明示するのみであるが、開元錄十一に依ると、この二經の後に明度五十校經を十方菩薩品と改めて置き、更に無盡意經を加へて五十八卷となした樣である。而も別に六十卷の本もあつて、それには日密分の前に寶髻品が第二十六・七卷にありながら、第三十一・二卷に重ねて寶髻品を入れて居るといふ。この二種は、龍藏大集經第一卷校正後序に、異本六ありとして居る內の第四本と第五本とに當るものである。後序はこの寶髻品を重出せるものを、「是れ即ち第五本也」とし、續いて「今以=品次一驗ㇾ之、則今兩藏(國宋)本經六十卷者是矣。但不ㇾ重=載寶髻品一、斯爲=小異一耳、即於=前第四本五十八卷經中一、分=彼日藏分中十卷一、爲=十二卷一足=成六十一耳」と云つて、第四本五十八卷を開いて六十卷となすものあるを記して居る。然し何れも須彌藏分の存否に就いて云ふものが無いけれども、恐らく同じく編入されて居たのであらう。先づ日藏經はかの日密分と同本異譯であるが、日密分はその文極めて簡略なると、その終の部分が約一卷も闕けて居るので、之を補ふ目的を以て、續いてこの經を置き、第十一分としたものであらうし、月藏分は開元錄十一に依ると、また大乘大集經月藏分第十二と題するもの有り、(龍本では初の十卷に、月藏分第十四といひ、後の八卷には月藏分第十二とある。犍語藏本では初の十卷も第十二となすを以て、龍藏に第十四とあるは第十二の誤なるべし)、經の初には、「化=諸龍衆一、說=日藏經一、已」の後に、この經を說くことになつて居るから、日藏經の後に月藏經が置かるべき順序である。

次に須彌藏分は、經の初に題して大衆大集經須彌藏分第十五といひ、十方菩薩品には第十三とある。僧就が明度五十計校經を改題して、月藏分の次にこの經を編入した時、第十三としたもの(であらうし、この次には例の無盡意經が置かれたので、須彌藏分が第十五となつた譯であらう。龍藏では この四經みな那連提耶舍の譯となつて居るが、校正後序には、十方菩薩品は耶舍の譯にあらずとして、後漢(A.D. 25—220)安世高の譯とし、出三藏記二、安世高の條に五十校計經(或云明度五十校計經)を擧げ、法經錄、開元錄亦然り、而も大集經別譯の條には載せざるを以て、安世高の譯といふべし。若し支謙迦識が大集經二十七卷を譯したと傳へらるゝことが、眞實ならば、現存大集經の大半は既に紀元前に成立して居たと云ひ得る。然し是れは確實性を缺くにより暫く措くも、右の安世高の譯によつて、大集經の少くとも一部分が既に早く紀元一世紀には存在した事がわかる。

(六)大集經の內容に就て。本經の內容は、經題の示すが如く、法相・法數の集であり、法寶の業であつて、これが經の中心をなして居る。而してこの中心に配するに、經は一面に於て般若系統の空思想と、他面に於て所謂密敎的分子を具つてして居る。即ち本經は至る處に法相・法數を說くが、是れを說く場合に於て、著しく眼につくのは、無又は非などの否定的の語を用ふることである。佛敎では始から否定的な表現が好んで用ひられ、積極的に規定指示することは、佛陀の努めて避けられた處であるから、消極的な表現は必ずしも般若系統には限られない。けれども「凡てを否定」して一切皆空とするのは、般若中觀の特色であり、本經また著しくこの色彩を帶びて居ること、經を一瞥する者の等しく認め得る處である。それと共に經には密敎的分子が混れて居る。自在王品には八種の陀羅尼を說き、卷第十一に梵釋四王の呪を揭ぐるを始として、陀羅尼・呪は到る處に發見される。その外、寶幢那や日藏分に於ける星宿の說(即ち一種の天文說)や曆日の法など、若しそれが密敎に限られたものでないと云はば、當時の通俗文化の採用でなくて何であらう。況して月藏經(卷第五十六)に揭げた諸國(經では諸の國々を擧げて、之れを各星宿に付囑して攝護養育せしめて居る)は、單に印度のみならず、中亞西域より、遠く震丹にまで及んで居るのは、よし月藏經が、此等の國々を知つた、中亞に於て成立したと云ひ得ないまでも、少くとも「この部分」は中亞に於て成り、從つて當時の中亞に於ける文化に依つた事を物語るに外ならない。(シルバン・レヴイ敎授も極東佛蘭西學院學報、一九〇二年に、この事を注意して居られる。現代佛敎、昭和三年五月號參照)。かくて一部としての大集經の內容全般に亙つては、空思想を立場として、是れに密敎的分子と通俗信仰とを始として諸多の思想信仰を配し、法相を說くのが主で、部分的な重復矛盾などは、經の成立上止むを得ざるものと云はねばならぬ。

⑨黃麟版(正大、一一七九・四—五)延寶四刊(龍大、二一五二・四)　(蓮澤成淨)

大方等大集經

❶(日) Dai-hō-dō-dai-jiku-kyō.　❷十五卷　❸存　❹知空(寫永一一—享保三 A.D. 1634—1718)校點　❺延寶四刊　❻(龍大、二一五二・四)

大方等大集經

❶(日) Dai-hō-dō-

dai-juk-kyō. 國譯大方等大集經 ❸存、國譯一切經大集部第一—三 ❹蓮譯成涼譯

大方等大集經賢護分

❶(日)Dai-hō-dō-dai-juk-kyō-gen-go-bun (支)Ta-fang-teng-ta-chi-ching-hsien-hu-fen. 大方等大集賢護經、大集經賢護分、大集賢護經、大集賢護菩薩經、賢護菩薩經、賢護經 ❷五卷 ❸存、大正一三・八七二No. 416、續玄九、卍七・一、北71譯、南71譯、元68譯、明北71譯、清71譯、指53伐、法63伐、至140湯、明南63伐、Nj. 75 ❹闍那崛多譯 ❺隋開皇一四—一五(A. D. 594—595)

❻本經は後漢支婁迦讖譯の般舟三昧經三卷の異譯と目すべきものであるが、その各品の名稱開合に多少の相違あり、原典は般舟三昧經を更に整頓し脩飾したものゝ如くである。

本經も亦思想的には大乘經初期に於ける念佛思想と禪觀思想との融會を試みた經典で、大集經菩薩念佛三昧分等と脈絡を有する。併し本經に說く念佛は未だ心念にして唱名ならず、見佛にして往生ではない。

內容の梗概を窺ふと、佛が王舍城迦蘭陀竹園精舍に在した時、賢護菩薩が佛に云何にして多聞の大海に入り、智慧の藏を獲、愚癡を生ぜず、宿命智を得、諸佛世尊を見奉り、正法を聽くを得るか云々の問により斯かる諸功德を得んには菩薩の思惟諸佛現前三昧なるものを習ふべしと敎へ(思惟品)、更に四種の四法を行ずることによつて此の三昧が得らるゝことを說き、(三昧行品)、斯くすれば、十方の諸佛を作爲功用を假らずして見奉るを得、六度も自然に圓滿すると說き(見佛品)、次に愚癡邪曲の人によつて此の三昧の經典が佛說に非ずとて嗤笑毀謗せられんも、之を受持讀誦する者は福業大なるを示し(正信品)、更に重ねて此の三昧の法に於て、隨喜信敬して他の爲めに說く者の如きは不退轉地に住し、所願窟の如くに成ぜんと云ひ(受持品)、次に佛を見るの心得を示して佛身に執著すべからざるは一切諸法、本來寂滅、無相無爲なるによる旨を諭され(觀察品)、此の三昧を說き、此の三昧を思はんとせば先づ淸淨戒行を具し、正しく佛法僧の三寶に歸し、天神を禮せざれと說き(戒行具足品)、次に此の經を持する者は諸天善神等に稱讚愛敬せらるべきを述べ(稱讚功德品)、更に過去世に於ける須達長者の修行を述べ、此の三昧が菩薩の眼であり、父であり、母であり、此の三昧が即ち佛性、法性なることを說き、再び之を諸法皆空一切不可得の立場から說明する(發菩品)。乃で賢護は佛を我が家に招待し、佛は五法を具すれば、此の三昧を得べきを說法され(具五法品)、又過去燃燈佛の所にて、此の三昧を聞き、來世に釋迦牟尼佛として成佛すべき授記を得たることを述べ(授記品)、遂んで、此の三昧空の立場よりは思惟すべからざるもの見るべからざるもの、從つて一切法中に無礙なるもの、現前自在なるもの、百千の威儀を具足するものなることを力說される(莊嚴品)。佛は更に賢護に向つて、此の三昧を習ひ、又說かんとせば、妄想を捨てゝ十法と八事とを成就すべく(十法品)、更に十八不共法と佛の十力を得(不共功德品)、尙四隨喜の德を具足すべきを說き、之を師子窟如來の本生譚にて說明し(隨喜功德品)、次に佛が過去世に此の三昧を覺窟し、之を和輪比丘に學び、三萬六千歲を經るも、魔障ありて聞くを得なかつたことを述べ(覺窟品)、最後に斯くの如くなれば、勤めて此の三昧を聽き、此の三昧の大乘經典を書寫し、如來印を以て封じ、長く後世に傳ふべきことを迦葉・舍利弗・目連等に懇囑して結ばれてゐる(囑累品)。

❼(參考) 三寶紀第一二、內典錄第五、第六、譯經圖紀第四、開元錄略出第一、開元錄第七、貞元錄卷第一〇 (江田俊雄)

大方等大集經菩薩念佛三昧分

❶(日)Dai-hō-dō-dai-jū-kyō-bo-sat-sa-nem-butsu-san-mai-bun. (支)Ta-fang-teng-ta-chi-ching-p'u-sa-nien-fo-san-mei-fen. 大集經菩薩念佛三昧分、大方等大集菩薩念佛三昧經、大集念佛三昧經 ❷十卷 ❸存、大正一三・八三〇No. 415、續玄八、卍六・一〇、北68伐、南68伐、元65伐、明北65民、清68民、麗65民、天67伐、指53民、法63民、至137殷、明南65民、Nj. 72 ❹達摩笈多譯 ❺元祿五刊 ❻劉宋の大明六年(A. D. 462)に功德直が譯した菩薩念佛三昧經五卷は本經の異譯である。宋譯に比すれば、本經には最後に正念品、大衆奉持品の二品が闕けて、十五品しかないが、之は一度譯出されたのが、中途に失はれたものらしい。

本經は大方等大集經と冠してある如く大集部の一經にして初期大乘經の二大系たる淨土敎經典と般若經とに於ける主情的念佛思想と主智的禪定思想との調和融合を計るために作られた念佛三昧を明す經典である。念佛三昧は見佛への前提であつて、それは佛道修行の菩薩の重要な行業とされる。經には念佛の功德を述べて、「是の如き三昧をば既に能く修習し、此の三昧を觀察し思惟し已らば、則ち現前の安樂行法を增廣し成就するを得るが故に。則ち無貪の善根……無癡の善根を增廣するを得るが故に。則ち慚愧を具足するを得るが故に。則ち一切の佛法を圓滿するを得るが故に。則ち一切の佛土を淸淨にするを得るが故に。云々」(第七)といつてゐる。而して爰に所謂念佛には二つの意味が含まれてゐる。卽ち佛及び佛の功德の憶念、例へば「是の三昧を成就せんと欲せば、先づ當に過去の……汝で現在の……汝で未來の有らゆる諸の如來・應供・等正覺を念ずべし」とか「彼の如來・應供・等正覺の心に動亂なく、亦常に無所著の心に安住するを念ずべし」とかの如きと、般若による佛身の觀察、例へば「何等をか名けて如來と曰ふ。當に色

に卽するもの、是れ如來たるや、當に色を離れたるもの、是れ如來たるや」(何れも卷第七)の如きである。

內容は序品、不空見本事品、神變品、彌勒神通品、歎佛妙音勝緣品、讚如來功德品、佛作神通品、見無邊佛廣請問品、讚三昧相品、正觀品、思惟三昧品、示現微笑品、神通品、說修習三昧品及び諸菩薩本行品に分れ、佛が王舍城耆闍崛山中に於て不空見菩薩を主なる對機として說法せられたものである。

❼(參考) 內典錄第五、第六、譯經圖紀第四、開元錄第七、第一一 (江田俊雄)

大方等大集月藏經

❶(日)Dai-hō-dō-dai-jū-gwatsu-zō-kyō. (支)Ta-fang-teng-ta-chi-yueh-tang-ching. 月藏分、大集月藏經、月藏經 ❷十卷 ❸存、大方等大集經第四五—五六(大正一三・二九八No. 397. 15)、續玄之內Nj. 63 ❹那連提耶舍譯 ❺高齊天統二(A. D. 565)

❻本經は大集經の一部に含まれるものであるが、菅尾完全なれば獨立の一經として扱はれてゐる。

本經は日藏經の後に說かれ、大集經としても、後期の作に屬する。佛が迦羅帝山に於て、比丘菩薩を初め、多くの魔王・波旬・阿修羅・天・龍・鬼神等を化して、歸佛せしめたことを記した經である。

內容の梗概、(月輪神呪品第一)迦羅帝山の佛說法の道場に大華雲現はれ、大光明輝くや、大衆の頭上に半月の鬘が掛り、大衆の驚くうちに、月藏菩薩が現はれ、禮佛して月輪神呪を說く。(魔王波旬詣佛所品第二)魔王宮を光明照し、半月現じ、釋迦牟尼佛に就きて問法すべしと驚く自然の聲に惡魔恐怖し、佛所に詣る。(阿修羅詣佛所品第三)月藏菩薩の說く月輪神呪の力に感じ、阿修羅共佛所に集まり法を聽く。(本事品第四)佛が彌勒や阿修羅と過去に於て兄弟であつたが、佛道を修したのと、害惡を爲したのとによつて分れたことを明す。(第一義諦品第五)月藏菩薩が佛に、菩薩が第一義を修して月の如くなるを得、四無礙を以て衆生を成熟し、六波羅蜜を滿す方法を問ひ、佛は衆生の苦惱の愛取の因緣によることを明し、之を捨てゝ第一義を思惟し、衆苦を除き、無明黑闇の月の晴れ行く過程を、初日月より十五日月まで滿ち行くことに對比して說かれ、(令魔得信樂品第六)更に歸依せる魔波旬に惡の德を說かれる。(一切鬼神集會品第七)四天王が佛に此の國土の風雨自然の害は鬼神の行爲なれば、之を造讓せられんことを望み、(諸惡鬼神得敬信品第八)佛が四天下一切の鬼神を集めて敎化され、禪定についても詳しく說法される。(諸天護持品第九)續いて四禪の詳說があり、大梵天王の進言により佛は四天下を諸天・七宿・三曜・三天童女に分屬して護持せしめられる。(諸魔得敬信品第十)魔王の歸佛讚。(提頭賴吒天王護持品第十一)毘樓勒叉天王品第十二、毘樓博叉天王品第十三、毘沙門天王品第十四)諸天王の國土護持を說く。(呪輪護持品第十五)密語の呪力による魔障退治をいひ、(恐辱品第十六)佛によつて跳梁の餘地なきに至り佛を盥める阿修羅の悔悟と佛の忍の說法とが示され、(分布闍浮提品第十七)閻浮提五十三國を諸天に分布付屬して衛護せしめられ、(星宿攝受品第十八)又諸星宿に三百四十三國二處の攝護敎化を分囑せられる。(建立塔寺品第十九)大梵天王、釋提桓因、四天王等諸國諸佛建立の塔寺を守護せんと誓ふ。(法滅盡品第二十)月藏菩薩が佛滅後、佛の正法久住せざらんと豫言するを聞いて月燈菩薩佛に何故に法滅があり、誰が法を滅するかと問ふ。佛は長い偈もて、法滅を慰起解說され、正法久住の陀羅尼を唱へ、彌勒に法を付囑し、此の月藏法門を受持・書寫・讀誦・解說・修行の功德を說かれる。

尙本經に於て注意せられることは說法の會衆が多種類(菩薩諸天鬼神)多數(例へば有學無學六百萬人とか、諸眷屬八十億那由他百千菩薩摩訶薩とか)なること、信仰の混入せる星宿占法の奇怪な記述、印度十六國を初め、西域諸國を含む歷史地理的國名地名の羅列、法滅盡思想の詳細なる描寫等である。

❼(參考) 三寶紀第十二、大唐錄第六、開元釋敎錄略出第一、貞元錄第九 ❽寬永一五天海版(京大、一・二三・貴)刊本(正大、一一七九・八)黃檗本(高大、寄・一・二三) (江田俊雄)

大方等大集月藏經

❶(日)Dai-hō-dō-dai-jū-gwatsu-zō-kyō. ❷五卷 ❸存 ❹知空(寬永一一—享保三 A. D. 1634—1718)校點 ❺延寶四刊 ❻(龍大、二一五二・三)

大方等大集賢護經

❶(日)Dai-hō-dō-dai-jū-ken-go-kyō. (支)Ta-fang-teng-ta-chi-hsien-hu-ching. 大方等大集經賢護分、大集經賢護分、大集賢護菩薩經、賢護菩薩經、大集賢護經 ❷五卷 ❸存、大正一三・八七二No. 416、續玄九、卍七・一、北71譯、南71譯、元68譯、明北71譯、清71譯、麗67伐、天68譯、指53伐、法63伐、至140湯、明南63伐、Nj. 75 ❹闍那崛多譯 ❺隋開皇二〇(A. D. 561—600) ❻大方等大集經賢護分の下を見よ。 ❼同治一二刊 ❽(京大、藏・一タ・三)

大方等大集日藏經

❶(日)Dai-hō-dō-dai-jū-nichi-zō-kyō. ❷五卷 ❸存 ❹知空(寬永一一—享保三 A. D. 1634—1718)校點 ❺延寶四刊 ❻(龍大、二一五二・五)

大方等大集菩薩念佛三昧經

❶(日) Dai-hō-dō-dai-jū-bo-satsu-nem-butsu-san-mai-kyō. (支)Ta-fang-teng-ta-chi-p'u-sa-nien-fo-san-mei-ching. 大方等大集經菩薩念佛三昧分、大方等大集菩薩念佛三昧經 ❷十卷 ❸存、大正一三・八三〇No. 415、續玄八、卍六・一〇、北68伐、南68伐、元65伐、明北68民、清68民、麗65民、天67伐、指53民、法65民、至137殷、明南65民、Nj. 72 ❹達摩笈多譯 ❺隋大業年中(A. D. 605—616) ❻大方等大集經菩薩念佛三昧分の下を見よ。

大方等檀特陀羅尼經

❶(日)Dai-hō-dō-dan-doku-da-ra-ni-kyō. (支) Ta-

fang-teng-tan-tō-tō-ni-ching. 大方等陀羅尼經、方等檀特陀羅尼經、方等陀羅尼經、檀特陀羅尼經 ❷四卷 ❸存、大正二一・六四一No.1339、縮成五、卍二一・七、北397可、南410可、元404可、明北417信、清417信、麗398使、天404可、指360使、法391使、至615慶、明南400信、Nj.421 ❹法衆譯 ❺永安年中(A. D. 402—413) ❻大方等陀羅尼經の下を見よ。

大方等頂王經 ❶(日) Dai-hō-dō-chō-ō-kyō. (支)Ta-fang-têng-ting-wang-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹姚秦鳩摩羅什譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大方等頂王經 ❶(日) Dai-hō-dō-chō-ō-kyō. (支)Ta-fang-têng-ting-wang-ching. (梵) Vimalakīrti-nirdeśa (引用) 頂王經、維摩詰子問經、維摩詰子所問經、善思童子經 ❷一卷 ❸存、大正一四・五八八No.477、縮貫八、卍九・五、北124白、南125白、元120白、明北141萬、清141萬、麗123樹、天125白、指115白、法121樹、至201薔、明南128萬、Nj.145 ❹西晉竺法護譯 ❺太始二—建興元(A. D. 265—313)譯 ❻月婆首那譯の大乘頂生王經及び闍那崛多譯の善思童子經と同本異譯。開元錄には本經を初出とせり。内容は善思童子經の項を參照。 ❼(參考) 出三藏記第二、三寶紀第六、内典錄第二、譯經圖紀第二、開元錄第二、貞元錄第三、第四

(和田徹城)

大方等日藏經 ❶(日) Dai-hō-dō-nichi-zō-kyō. (支)Ta-fang-têng-jih-ts'ang-ching. 日藏分、大乘大方等日藏經、大方等大集日藏經、日藏經 ❷十卷 ❸存、大方等大集經第三四—四五(大正一三・二三三No.397.14)、縮支、Nj.62 ❹隋那連提耶舍譯 ❺天保八—開皇五(A. D. 569—585) ❻日藏分の下を見よ。

大方等如來經疏 ❶(日)Dai-hō-dō-nyo-rai-kyō-sho. (支) Ta-fang-têng-ju-lai-ching-su. 大方等如來藏經疏 ❷二卷 ❹衍法師 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2013.2014

大方等如來藏經 ❶(日)Dai-hō-dō-nyo-rai-zō-kyō. (支)Ta-fang-têng-ju-lai-ts'ang-ching. ❷一卷第二譯 ❸缺 ❹白法祖(一元康頃A. D. 291—299—)譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大方等如來藏經 ❶(日)Dai-hō-dō-nyo-rai-zō-kyō. (支)Ta-fang-têng-ju-lai-ts'ang-ching. ❷一卷第一譯 ❸缺 ❹西晉法立、法炬(一惠帝代 A. D. 290—306—)共譯 ❼(參考)仁壽錄第五、靜泰錄第五、開元錄第一四、貞元錄第二四

大方等如來藏經 ❶(日)Dai-hō-dō-nyo-rai-zō-kyō. (支)Ta-fang-têng-ju-lai-ts'ang-ching. (梵)Tathāgata-kośa (引用) Tathāgata-garbha-s (藏傳)、(藏)bphags-pa de-bshin-gcegs-pahi snin-po shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. 如來藏經 ❷一卷 ❸存、大正一六・四五七No.666、縮宇三、卍二一・四、北367必、南383過、元373必、明北380使、清382使、麗361過、天375必、指337過、法360男、至376能、明南365慶、Nj.384 ❹佛陀跋陀羅譯 ❺東晉元熙二(A. D. 420) ❻本經は一切衆生が諸趣煩惱中に在りながら尙如來藏有りて常に染汚せらるゝことなきを示せるもので、最初に此の如來藏と名づける大方等經を說かんが爲に、世尊は諸菩薩大衆に、無量の化佛によりて莊嚴せられたる無數の蓮花が忽然として萎變せし奇瑞を現じ、金剛慧菩薩をして此の未曾有の神變の因緣を問はしめた上、萎變せる蓮花の如く、一切衆生は貪瞋痴の諸煩惱に覆はるれども、佛眼を以て見れば其の身中嚴然として如來藏存し、佛の出世と不出世とを問はず常住不變なりと說き、如來は衆生をして煩惱を滅して佛性を顯現せしめんが爲に出世して此の經法を說くとし、更に如來藏を種々巧妙に喩說して後、本經を受持讀誦書寫供養する功德の勝れたることを示し、最後に金剛慧菩薩が過去久遠の世、常放光明王如來の所に於て無邊光菩薩として此經を彼の如來に問ひて受持せしことを說いてゐる。尙、本經には異譯として唐(天寶五—大曆九 A. D. 746—774)不空譯に係る大方廣如來藏經一卷存し、内容は兩者同樣であるが、唯此の經の最後には阿難に對し業障を消滅せんとする者が多數の佛所に於て加持說法を得此の如來藏法を得ずしての佛の說法が更に附加されてゐる所が異つてゐる。 ❼(注釋) 疏一卷圓光(昭和法寶目錄第一卷二八五頁下) (參考) 出三藏記第二、三寶紀第七、内典錄第三、譯經圖紀第二、開元錄第三、貞元錄第五、東域傳燈目錄卷上 ❾刊本(高大、寄・一・二三)(正大、一一七九・一〇)

(木田義英)

大方等無相經 ❶(日) Dai-hō-dō-mu-sō-kyō. (支)Ta-fang-têng-wu-hsiang-ching. 大方等大雲經、大雲經 ❷五卷節一譯 ❸缺 ❹姚秦竺佛念譯 ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大方等無想經 ❶(日) Dai-hō-dō-mu-sō-kyō. (支)Ta-fang-têng-wu-hsiang-ching. (梵)Mahāmegha (藏傳)、(藏)sprin-chen-po 方等大雲經、大方等大雲經、方等無相大雲經、大雲無相經、大雲密藏經、方等大雲無想經、大方等無想大雲經、無想經、大雲經 ❷六卷 ❸存、大正一二・一〇七七No.337、縮盈一〇、卍一〇七七、北165五、南166五、元162五、明北240男、清240男、麗165大、天166五、指155大、法163四、至243貞、明南175豊、Nj.244 ❹曇無讖譯 ❺北凉玄始三(元?)甲寅—一五(一三?)丙寅(A. D. 414—426) ❻○西藏譯と品別一致す。竺佛念に同名の異譯存したる由、三寶紀に記すも出三藏記に見えない、從つて急かに信じ得べきことでない。而して本經はその品名より見る時は、全三十七犍度に亘つて大雲初分と冠するより見る時は、大雲經なる大本の一部譯出の如くに思はるゝが、實は本經が曇無讖が梵本將來の時代が、寃も製作過程期に當り、而も初分が製作されたのみで中絕したため、後世にその續篇と見るべきものの譯傳を見なかつたのでないかと思ふ。このことは同人譯の大般涅槃經が製作過程期に屬したために、再度往西して三十六卷本を完譯した例に徵しても想定し得ることであり、從つて製作地や年代の如きもほゞ想定し得ること、思ふ。○本經別れて三十七犍度となり、思想としては同人譯の涅槃經を受けて出で、增長犍度の始に、如是經典、凡有三名、一名大雲、二名大般涅槃、三名無想、大雲密藏菩薩所問故名大雲、如來常住無有畢竟涅槃者、一切衆生悉有佛性、故得名爲大般涅槃、受持讀誦如是經典、斷一切想故名無想といへるもの、正しく本經の所說の核心をなすものといひ得る。次下各犍度を略解す。○大衆犍度第一、大雲密藏菩薩九十三句を揭げて賞ね、佛、本經中所說の要項四十一句等を揭げ、又如來・常・樂・我・淨の五文字を要とする旨を述べて神呪を說く。三昧犍度第二、四百三昧を擧名說示し、淨密天子請佛す。陀羅尼犍度第三、三十六陀羅尼名、寶鬘天女請。密語犍度第四、二十三種密語道迹、衆愛天子請。轉生有藏犍度第五、十神通行入有生行藏微妙光王法門、愛光天女請。得轉生死樂煩惱犍度第六、十生死煩惱業田得心定願藏法門、無毒龍王請。智狂入犍度第七、十種智狂不可思議神通王所入法門、善鬘天女請。解脫轉福德藏法門犍度第八、十智甚深入無長行法王法門、金光明天女請。解脫有德轉藏犍度第九、十種大雲見流不可思議功德寶藏法門、智愛樂天子請。轉功德行犍度第十、十種雨流不可思議功德藏法門、虛空雷天子請。雲虛空生犍度第十一、十種大雲得虛空定法門、妙族生天女請。電光轉犍度第十二、十種大雲電光法門、善喜天女請。電轉犍度第十三、十種寶電行法門、恒河神天女請。神通犍度第十四、十種大雲電光幻法門、大喜天女請。寶雷犍度第十五、十種大神通法門、嚴飾自喜天女請。金剛智犍度第十六、十智金剛行入智法門、深智愛天女請。無盡犍度第十七、十無盡宣入神通法門、大法輪天女請。正行犍度第十八、十正道法門、善得天女請。師子吼犍度第十九、十種甚深師子吼行法門、微妙聲天女請。師子吼神通犍度第二十、十師子吼神通法門、師子吼天子請。善方便犍度第二十一、十入世間方便法門、婆羅呵迦天子請。神通犍度第二十二、十神通寶藏入法門、增長有德天子請。金翅鳥犍度第二十三、十金翅鳥神通所入法門、深淨行天子請。大拾犍度第二十四、十大拾時微妙神通王法門、寶貴德天子請。無畏犍度第二十五、十無所畏大力神通所入法門、寶甚星天子請。入行犍度第二十六、十入行法門、寶正光天子請。至心犍度第二十七、十種至心所入法門、波頭摩智天子請。勇力犍度第二十八、十勇王大力微妙法門、勇武天子請。善犍度第二十九、十種善行大神通王所入法門、善護天女請。神通犍度第三十、十三神通藏得開示法門、大海意天女請。智犍度第三十一、十智初行法門、須鬘那華天女請。智寶藏犍度第三十二、十智寶藏法門、蓮華鬘天女請。施犍度第三十三、十正知微妙寶藏法門、法寶樂天女請。福田犍度第三十四、十種福田種子法門、寶雨天子請。正法犍度第三十五、十種眞實神通安樂王所入法門、大光天子請。如來涅槃犍度第三十六、大梵王犍行、並に大雲密藏の諸問によりて神呪を說き、更に甚深淨水大海三昧を開說して、常樂我淨に入り、佛棲常住之身を得、又種々の衆生形を現じて之を度すを得樂と說く。此時、善德婆羅門、如來一切智にして何故提婆達多の如きを出家授戒したまへるやと尋ねしに對し、大雲密藏、佛に代つて、提婆達多、實はこれ大丈夫にして逆罪者に非ざることを說く、この數說正しく涅槃經の闡提成佛說を受くるものといふべし。次で一切衆生樂見梨車童子と、善德との間に佛身常住の譬說あり、而して淨光天女の問により、佛、この兩人の本生として同性燈如來本事を說き給ふ。この内、阿育王を懸記して滅後百二十年とすること注意すべし。次で本經が正法滅せんとする四十年の頃南方に流布し次で北方に至つて流布することを說き、最後に喜見乾闥婆王の請問に對し、迦葉代つて如來法身不名肉身、佛身金剛非破壞身乃至、一切衆生悉有佛性得菩提心等と說くこと、頗る大乘涅槃經に於ける迦葉菩薩の地位を髣髴せしむるものである。增長犍度第三十七、南方諸天子の請に依り、本經の名義(初記を參照)、流布の時代、世相等に就て詳說し(世相は涅槃經說に近し)、滅後千二百年(阿育王を百二十年とするを以て西紀九世紀代となる)、南天竺國王、毫多婆呵那及び同須福吒國善方便河華鬘持の衆生樂見が不惜身命にして護法し自ら所造の大雲經を說く等といひ、次で本經信受の功德、不惜身命の護法護戒を說き、化身、法身、幻身、煩惱身、法身等を說いて佛身を讚し、常樂我淨の德を擧ぐ。最後に淨光天女に對し、滅後七百年、南天竺無明國の等乘王の女增長として生れ、王位を紹ぎて崇佛敎法、本經を尊信し、變成男子して無量壽佛の國に往生し、淨實增長佛となるべしと授記す。 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

(美濃晃順)

大方等無想大雲經 ❶(日)Dai-hō-dō-mu-sō-dai-un-kyō. (支)Ta-fang-têng-wu-hsiang-ta-yün-ching. 大方等無想經、方等大雲經、大方等大雲經、大雲無相經、大雲密藏經、方等大雲無想經、方等無想大雲經、無想經、大雲經 ❷六卷 ❸存、大正一二・一〇七七No.337、縮盈一〇、卍一〇・六、北166五、南166五、元162五、明北240男、清240男、麗165大、天166五、指155大、法163四、至243貞、明南175豊、Nj.244 ❹曇無讖譯 ❺北凉玄始三—一五(A. D. 414—426) ❻大方等無想經の下を見よ。

大方佛決狐疑經 ❶(日) Dai-hō-butsu-ketsu-ko-gi-kyō. (支) Ta-fang-fo-chieh-hu-i-ching. ❷一卷 ❹曇鸞撰。 ❼(參考) 仁壽錄第四

大方便佛報恩經 ❶(日) Dai-hō-bem-butsu-hō-on-gyō. (支)Ta-fang-pien-fo-pao-en-ching. ❷七卷 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第一、三寶紀第四、開元錄第一、貞元錄第二

大方便佛報恩經 ❶(日) Dai-hō-ben-butsu-hō-on-gyō. (支)Ta-fang-pien-fo-pao-en-ching. (蔵) thabs-mkhas-pa chen-po sans-rgyas drin-lan-bsab-pahi mdo. 報恩經、佛報恩經 ❷七卷 ❸存、大正三・一二四 No. 156、鎌宙五、卍一二・一、北402巻、南156巻、元409巻、明北427巻、清427巻、鹿403頁、天409巻、指374頁、法396頁、至407頁、明南40巻、Nj. 431 ❺後漢代(一A. D. 220)失譯

❻本經は名の示す如く、佛の報恩に關して說かれたもので委しく云へば、序品にある如く世尊は親を捨てゝ出家し、苦惱を與へてゐるから忘恩の徒であるといつた一種忘の誹謗が動機となつて、佛教に於ける恩の意味を演說したものである。卽ち如來は無量生死の間に一切衆生の父母となり、一切衆生は亦如來の父母となつた。この故に如來が一切衆生の爲めに出家學道せられたことは、そのまゝ一切の父母の爲めの報恩の行であるといふ思想上の立場が、本經に一貫する所である。つまり世尊を忘恩者とするは、只現世一生に限られたる視野からの見解である、眞の報恩の爲めには「大悲心をもつて一切衆生を捨てない」ことであるとする。

從つて材料として佛の本生譚が多く須ゐられてゐるにしても、それは上述の思想を內容づける爲めであるから、本經は「本緣部に收めるのは、一經のテーマからすれば無理であらう。矢張り名の示す如く、報恩の意義を廣く大乘的に取り扱つた經典と見るべきである。

各品の內容を抄出すれば第一卷は上述の如き說經の動機を父母の飢の爲めに肉身を捧げた須闍提(世尊の前生)の本生譚を說き、第二卷には、菩薩が一切世間の全生活に入りて自行化他すること誓願行をとき、第三卷には、同じく世尊の前生として忍辱太子が父王の病を治する爲めに體や兩眼を明せしこと、並に五百子をあげた鹿母夫人の奇しき因緣物語りを說く、第四卷には世尊の前身たる善友太子提婆の前身たる惡友太子が海に入りて寶を求める興味ある物語りをとき、尙ほ提婆達多に關する諸事項を記す、第五卷には、大光明王の布施行、流離王の迦毘羅城時代、鞞色比丘尼の話をとき、第六卷は「優波離品第八」で、律に關する一般常識ともいふべき諸項目を問答體に說明し、第七卷は、第一卷とゝもに本經の本質をなすもので、「方便」の何物たるかを實例をもつて懇切に說示してゐる。そして「知恩報恩」を單なる地上の道德の意味に取らず、人生の根本的立場から、法の爲めに身命を惜まず、大法の護持と宣揚の爲めに働くことであるとする。光畑萬丈の如き大數說を見せてゐる。 (山邊習學)

大方便報恩經 ❶(日) Dai-hō-ben-hō-on-gyō. (支) Ta-fang-pien-pao-en-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹後漢支婁迦讖(一—建和元—中平三 A. D. 147—186—) ❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四 ❾德川時代寫 ⑩(寶龜院)

大法 ❶(日)Dai-hō ❷十一帖 ❸存 ❷一帖 ❸存 ❾德川時代寫 ⑩(寶龜院)

大法口訣 ❶(日) Dai-hō-ku-ketsu.

大法鼓經 ❶(日) Dai-hō-ku-kyō. (支) Ta-fa-ku-ching. (梵) Mahā-bherī-hāraka-parivarta (蔵譯)、(蔵)brhag-pa rdas-ba-the chen-pohi leju shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo. 法鼓經 ❷二卷 ❸存、大正九・二九〇No. 270、鎌盈四、卍一二・二、北413盈、南439盈、元430盈、明北436染、清436染、鹿417貴、天430盈、指358貴、法407貴、至418貴、明南418染、Nj. 440、大藏經要義第一 ❹求那跋陀羅譯 ❺劉宋元嘉一二—二〇(A. D. 435—443) ❻本經の原名は Mahābherīhāraka-parivarta-sūtra で、劉宋の元嘉年中に印度の僧求那跋陀羅(Gunabhadra德賢)が上下二卷として譯するところである。一說には『佛說菩薩行方便境界神通變化經』三卷(同人譯、大正藏經No. 271)は其の異譯であると言はれて居るが、內容を比較點檢するに、殆んど全く相違して、或は寧ろ『大薩遮尼乾子所說經』の經名を指して『六字の名號』と說いてあるが、漢譯では四字しかないから、原名の Mahābherī を別語として六字の名號としたものであらう。而して大法鼓なる經名は、本經が波斯匿王の戰鼓に託して說法せられたからであることは、內容を一見すれば直に首肯される。尙ほ本經は法華部に屬するが、古來始んど研究せられず、隨つて註釋類も存在しない。

本經の說時が釋尊の晩年であることは經中處々に涅槃問題を取扱ひ、又『涅槃の後』なる語が數々出て居ることによつて推測出來る。而して經初に、『苦樂を離れて涅槃第一の樂あり』とか、『有、非有法門』を說いてからとか言ふ如き「般若の空」に類する思想があるところからすれば、般若經の後に位するものと言ふことが出來、『涅槃せずして涅槃を示す』とか、『如來は常住にして滅せず』とか言ふ如き涅槃經的思想が現はれて居るところから見れば、涅槃經の前に位置するものと言ふべきで恰かも法華經と時を同じくすることゝなる。のみならず、本經の大旨が「三乘閑會」「開三顯一」にあることは、經中到るところに『分別して三と說く』とか、『三乘を開示し、二涅槃を現はし、又一乘を說く』とか、『一乘を樂しまざる者には三乘を說く』とか言ふ如き文が散在することによつて明かである。其他「長者窮子の譬」や、「化城の譬」や、「父少子老の譬」等が、たとひ法華と粗密の差はあつても、三乘開說の譬として說かれてあり其他法華經と類似又は近似の思想又は文句が少なくないところを見れば、此經を法華部に屬するものと判定したことは至極當然と言はねばならぬ。若し遠慮のない憶測を下すならば、本經は法華經の前驅をなすものではないかと思はれる程で、若し假りに法華經の前驅をなすものでないとしても、涅槃經の「法身常住」、「大我」等の思想や、「五味の譬」等が存在するところから見て、或は法華涅槃兩經未分の母經ではないかと推測することが出來ないこと

もない。以て本經の經典上に於ける位置を推知すべきである。

本經は上下二卷から成り、簡單な「序分」と、極めて短い「流通分」とがあるのみで、大部分は「正宗分」である。もつとも、殆んど凡ての經典の形式がさうであるので、法華經ほどに長い「序分」と、殊に特別に長い「流通分」とを所有する經典は他に存在しない。本經は、波斯匿王の戰鼓に託して說法せられたものであるが、初に、『如來祕密の法藏は難解難信』であること、我慢自矜の者が退座すること、佛の「三誡」に對して迦葉の「三請」があるあたりは、法華經の順序に似て居る。「正宗分」に入つて、『如來の隱覆の說とは如來の常住不滅』であると說じ、『般涅槃せずして般涅槃を示し、生ぜずして生を示す』と說く所は、涅槃經と同じく法身常住の說である。而して、この法身常住の說は二乘の解する能はざるところであるが、佛はこの一乘を光顯するために『三乘を開示』するのである、三乘開會を行つて居るところが法華の開會思想である。これを中心として『因緣和合施設』の說があり、『八功德』の說があり、『十三緣起支』の說があり、『有亦有』の說があるのであつて、說述の樣式や過程は、可なり煩瑣であり廻りくどくもあるが、內容となる思想は比較的單純である。たゞ、法華と涅槃と般若とを混雜、錯綜させた如きところに本經の特色があると云ふべく、其處に亦た一種の價値もあり、興味もあると言へやう。

❼(參考) 三寶紀第一〇、內典錄第四、譯經圖紀第三、開元錄第五、貞元錄第七 (馬田行啓)

大法鼓經 ❶(日)Dai-hō-ku-kyō. ❷一卷 ❸存、國譯一切經法華部 ❹馬田行啓譯

大法外儀 ❶(日)Dai-hō-ge-gi. ❷一帖 ❸存 ❹慮深(建久三—弘長三A. D. 1192—1263) ❼(參考) 諸宗章疏錄第三 ❾建保七寫 ⑩(寶菩提院)

大法眼文益禪師語錄 ❶(日)Dai-hō-gen-mon-yaku-zen-ji-go-roku. (支) Ta-fa-yen-wen-i-ch'an-shih-yü-lu. 金陵清涼院文益禪師語錄、大智藏大導師語錄、法眼錄 ❷一卷 ❸存、大正四七・五八八No. 1991、卍續二・二四・五 ❹明代語風圓信、郭凝之共編 ❻金陵清涼院文益禪師語錄の下を見よ。

大法炬陀羅尼經 ❶(日)Dai-hō-kodara-ni-kyō. (支) Ta-fa-chü-t'o-lo-ni-ching. 法炬陀羅尼經 ❷二十卷 ❸存、大正二一・六六一No. 1340、鎌宙九、卍一一・七—八、北390彼、南49彼、元398彼、明北418使、清418使、鹿389識、天397彼、指360識、法382識、至615尺、明南401使、Nj. 432 ❹隋闍那崛多譯 ❺天嘉二—開皇二〇(A. D. 561—600)

❻本經は大法炬陀羅尼の義趣功德を廣說したものである。其の內容は緣起品には陀羅尼の字義、句義を明し、伏魔品には陀羅尼の摧魔の功德(已上第一卷)。授魔品には諸魔の菩提を得て成佛をなす授記。三乘行品には離聞・緣覺・菩薩の三乘の爲に陀羅尼方便法を示す。問法性品には陀羅尼の甚深の句義は虛空の性と平等なるを說き、菩薩行品には菩薩は次第に六波羅蜜を修行して一切善法の成熟を爲すを說く(已上第二卷)。菩薩行品之餘には六波羅蜜、陀羅尼方便力を示し、相好品には波羅蜜の意義、五除、六緣、三十二相の中、始の十一相を明す(已上第三卷)。相好品之餘には後の二十一相を說き、四念處品には心受身法の四念處の義を說く(已上第四卷)。四聖諦品には苦集滅道の四聖諦を說き、忍校量品には諸の譬喩を以て此の陀羅尼の功德無量なるに比し、三乘歎品には離聞詐支佛の所行事業及び菩薩の學處を說く(已上五卷)。三法藏品には人言敎藏、天言敎藏、非人非天言敎藏の三種敎藏の方便を說き、法師相品には法師行相の律儀、誘法果報品には法門に疑謗を起し信ぜざる者の所獲の果報を說き、勸受持品には三種敎藏を受持する者の功德を敍し(已上第六卷)。智成就品には三法藏の義門を了知する智力、精進力を成ずべきを說き、惡成就品には惡の種類、惡力成就の義、惡力成就者の功德を擧げ、證涅槃品には世間出世間の一切法の本性は、涅槃である旨を明す(已上第七卷)。證涅槃品之餘には菩薩堅固心の著鎧甲の相並に所斷の斷常二見涅槃の義を說き、勸證品には阿迦那の三字門の勸證を說き(已上第八卷)。勸證品之餘には一切色法及び如來藏の眞實相を說き、法師行相品には法師所行の心相を說く(已上第九卷)。遮誘品には法門誹謗の人の所受の業果を說き、持經功德品には此の法門持受の功德を敍し、爲他悔過品には誹謗者をして悔懺せしめ正念を發さしむるを說き、六度品には六度の中檀戒忍の三波羅蜜(已上第十卷)。六度品之餘には進禪惠の三波羅蜜を說き、求證品には般若波羅蜜、十二因緣、四聖諦の義を明し、菩薩證三昧品には念佛三昧に住する爲の觀想法を說く、召諸菩薩品には菩薩此の解脫法門を證得せば諸天來たりて尊重供養するを說く(已上第十一卷)。問等覺品には佛陀卽ち覺の義を說く、三昧因緣品には佛の三昧に入る因緣並に三昧の種類を擧げ(已上第十二卷)。供養法師品には三種言敎藏、及び此法門を宣說する法師の供養承給衛護の十六待者を說き(已上第十三卷)。入海神變品には世尊海岸に於て火焰金剛神等をして神通を現はさしむるを說き、佛昇須彌山頂品には佛須彌頂忉利天宮に於て帝釋に授法し歸佛せしめたる因緣を說く(已上第十四卷)。天伏阿修羅品には帝釋、世尊の敎勅を受け善面主兵天子を遣して阿修羅を調伏し歸佛せしめたるを說き、阿修羅本業品には世尊帝釋の爲に阿修羅の業行及び所受の業報を說き玉へるを述べ、雜類本業品には畜生夜叉の業行果報及び阿修羅及び陀那婆の名字を說き、無相品には阿迦那の三種句門不可得の義を說き、勸修行品には阿迦那の不離三種言敎業藏の受持念誦の行法を說き、三字門品には阿(人言敎)迦(天言敎)那(非人非天言敎)の三字の義趣を說き、將護法師品には法師を請ふて此の三種方便業藏を受くべ

大寶積經密迹金剛力士會（だいほうしゃくきょうみっせきこんごうりきしえ）

大寶積經（だいほうしゃくきょう）

大寶積經（だいほうしゃくきょう）

大寶積經（だいほうしゃくきょう

て、一つ一つ種類の違った幾十の經典を斟合して、一つの大部の經としたのである。さうして、其の編纂は何時頃誰れに依つて爲されたか、又、如何なる經緯を以て選定し、如何なる方針を以て其の順序を定めたかは判明しない。勿論、印度に斯の經の梵本が有つて、早く既に後漢の代に迦葉摩騰・竺法蘭に依つて、唐の代に玄奘三藏・菩提流志等に依つて支那に將來されたことは、本經の徐鍇の序文にも見えて居り、又、其れ其れの譯者の年代を考へて見ても然か思はれ、尙又、玄奘三藏が唐の高宗の麟德元年正月に、一度、門下の請に由つてこれが譯出に著手しようとしたが、既に大部の大般若經を譯了して、精力も消盡し死期も亦遠くないのを知つて、之れを中止したと云ふ傳說に據つても推知できるが、惜しい哉、今日は其の梵本の一少部分しか傳つて居らないやうである。又、西藏譯の經典中には寶積部と稱する大部の經を傳へて居ると云ひ、或は、隋の代に東遊した闍那崛多三藏の說として、于闐國の東南に當つて居る山中に般若・大集・華嚴・方等・寶積等の諸經を藏して居ると云ふことである。

この經は、唐の代に菩提流志が、唐の中宗の神龍二年から睿宗の先天二年までの七年間に、前代の譯本で梵本と同じ者二十三種を採用し、舊譯の理義の通じない者十五種を更に重譯し、殘りの十一種を新に飜譯し、玆に四十九會七十七品を匯めて、百二十卷の一經とした者であつて、此れには睿宗御製の序文と前述の徐鍇の序が添へてある。今其の目次を列擧すれば左の如くである。

(一)三律儀會(卷の一—三)唐、菩提流志。(二)無邊莊嚴會(卷の四—七)同上。(三)密跡金剛力士會(卷の八—十四)西晉、竺法護。(四)淨居天子會(卷の十五—十六)同上。(五)無量壽如來會(卷の十七—十八)唐、菩提流志。(六)不動如來會(卷の十九—二十)同上。(七)被甲莊嚴會(卷の二十一—二十五)同上。(八)法界體性無分別會(卷の二十六—二十七)梁、曼陀羅。(九)大乘十法會(卷の二十八)元魏、佛陀扇多。(一〇)文殊師利菩門會(卷の二十九)唐、菩提流志。(一一)出現光明會(卷の三十—三十四)同上。(一二)菩薩藏會(卷の三十五—五十四)唐、玄奘。(一三)佛爲阿難說人處胎會(卷の五十五)唐、菩提流志。(一四)佛說入胎藏會(卷の五十六—五十七)唐、義淨。(一五)文殊師利授記會(卷の五十八—六十)唐、實叉難陀。(一六)菩薩見實會(卷の六十一—七十六)高齊、那連提耶舍。(一七)富樓那會(卷の七十七—七十九)姚秦、鳩摩羅什。(一八)護國菩薩會(卷の八十—八十一)隋、闍那崛多。(一九)郁伽長者會(卷の八十二)唐、玄奘。(二〇)無盡伏藏會(卷の八十三—八十四)唐、菩提流志。(二一)授幻師跋陀羅記會(卷の八十五)同上。(二二)大神變會(卷の八十六—八十七)同上。(二三)摩訶迦葉會(卷の八十八—八十九)元魏、月婆首那。(二四)優波離會(卷の九十)唐、菩提流志。(二五)發勝志樂會(卷の九十一—九十二)同上。(二六)菩臂菩薩會(卷の九十三—九十四)姚秦、鳩摩羅什。(二七)善順菩薩會(卷の九十五)唐、菩提流志。(二八)勸授長者會(卷の九十六)同上。(二九)優陀延王會(卷の九十七)同上。(三〇)恒河上優婆夷會(卷の九十八)同上。(三一)無長德菩薩會(卷の九十九)元魏、佛陀扇多。(三二)無垢施菩薩應辯會(卷の百)西晉、法護。(三三)功德寶華敷菩薩會(卷の百一)唐、菩提流志。(三四)善德天子會(卷の百一—百五)隋、達摩笈多。(三五)阿闍世王子會(卷の百六)唐、菩提流志。(三六)大乘方便會(卷の百六—百八)東晉、竺難提。(三七)賢護長者會(卷の百九—百十)隋、闍那崛多。(三八)彌信童女會(卷の百十一)唐、菩提流志。(三九)彌勒菩薩所問會(卷の百十一)唐、菩提流志。(四〇)普明菩薩會(卷の百十二)(譯者不明)。(四一)寶梁聚會(卷の百十三—百十四)北涼、釋道龔。(四二)無盡慧菩薩會(卷の百十五)唐、菩提流志。(四三)文殊師利說般若會(卷の百十五—百十六)梁、曼陀羅仙。(四四)寶髻菩薩會(卷の百十七—百十八)西晉、竺法護。(四五)廣博仙人會(卷の百十九)唐、菩提流志。(四六)勝鬘夫人會(卷の百二十)同上

因みに、菩提流志の舊譯經を採用した態度は、多くは其の儘、全文を取つて此れを改めることが無かつたが、隋代、闍那崛多の移譯經二卷を取つて第三十九會とする際に新に證信序を加へたと云ふことである。

さて、以上の如く、本經は實に種々雜多の經典を幾十と斟合したので、隨つて之れを一經として見ると種々無量の法門が含まれて居るのである。例へば、第十四會の如きは、有部毘奈耶雜事の或る者に相當し、第二十九、第四十九會などは、小乘の經典と見るべく、第二、第三、第七、第十一、第二十四の諸會は、密敎と關聯して居り、將又、第四十六會は般若經、第四十七會は大集經と出入して居るなどが其れであつて、要するに、其の名の示すが如く、實に大寶積の經典である。

❼〔注釋〕 大寶積經遺一卷(卍續)、徐鍇。音義三卷。 闡贊一卷(二卷)。 玄奘十卷、賢證。大意一卷。 闡祥一卷、樹爐。三律儀會疏三卷。金剛密迹經略解一卷、道安。菩入不思議法門經疏一卷、智圓。妙慧童女會疏三卷科一卷、思孝。菩薩藏經疏七卷(十卷)靖邁。菩薩藏經疏十卷報師。文殊般若經疏二卷、智圓。

〔參考〕 開元錄第九、貞元錄第一四

❾寬文三刊(高大、寄・1・二三)刊本(正大、一一七九・一)寫本(正大、一一七九・三)

(長井眞琴)

大寶積經 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō. (支)Ta-pao-chi-ching. 遺日摩尼寶經、古品日遺日說般若經、古品遺日說般若經、佛遺日摩尼寶經、摩訶衍寶積經 ❷一卷 ❸存、大正一二・一八九No. 330、鎌地一二、卍六・五、北55推、南53推、元50推、明北53推、龍53裏、明南50推、Nj. 57 ❹支婁迦讖譯 ❺後漢建和元—中平三(A. D. 147—185) ❻遺日摩尼寶經の下を見よ。

大寶積經 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō.

國譯大寶積經 ❸存、國譯一切經寶積部第一—五 ❹長井眞琴譯

大寶積經科 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-kwa. (支)Ta-pao-chi-ching-k'o. ❷一卷 ❹思孝述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

大寶積經玄贊 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-gen-shin. ❷十卷 ❹賢證 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

大寶積經述 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-jutsu. (支)Ta-pao-chi-ching-shu. ❷一卷 ❸存、卍續一・九二・一 ❹唐代徐鍇撰 ❺本書は大寶積經述と稱するも大寶積經四十九會七十七品百二十卷の大册を述べたるものでは無く極めて大宣を開陳したるもの、所謂解題の簡なるものに過ぎない。續藏經の本書に依れば、唐朝議郎行河南府吉成縣主簿徐鍇の撰述に係る。初に尖日月出矣。雨輕雖十方。時雨降矣以下の序文を載せ、次に大寶積經とは後漢の迦葉摩騰・竺法蘭及び今朝玄奘法師・菩提流志等成く西天竺より致せし所なりといひ、中略。次に大寶積經翻譯に從事せる人々の名を列ね、而して曰ふには「今新に翻ずる所の經は凡そ四十九會七十七品有り。合して一十二軸なり。類を以て相從ひ、撰寫して成く畢る。先天二年六月三十日を以て太上皇に進じ、八月二十一日皇帝に進じたまへり」と。以下在家人布施者の名を陳ねて本經を「長存拓路之文。勃火燒天。不滅多羅之典」なりと結んでゐる。

(成田昌信)

大寶積經祥 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-sho. 大寶積經廟祥 ❷一卷 ❸存 ❹樹羅述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

大寶積經大意 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-tai-i. ❷一卷 ❸存 ❹松原開敎述 ❺昭和五刊 ❼(高大、寄・1・二六)

大寶積經知津 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-chi-shin. ❷一卷 ❸存 ❹普寂德門(寶永四—天明元 A. D. 1707—1781)撰 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

大寶積經拔萃 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-bas-sui. ❷二卷 ❸存 ❹僧純(寬政三—明治五 A. D. 1791—1872) ❺寫本(龍大、二一五1・二六)

大寶積經普入不思議法門經疏 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-fu-nyū-fu-shi-gi-hō-mon-gyō-sho. (支)Ta-pao-chi-ching-p'u-ju-pu-ssu-i-fa-mên-ching-su. ❷1卷 ❹宋智圓(太平興國元—乾興元 A. D. 976—1022)述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

大寶積經彌勒所問會 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-mi-roku-sho-mon-e. (支)Ta-pao-chi-ching-mi-lê-so-wên-hui. ❷一卷 ❹唐菩提流志(太建四—開元一五 A. D. 572—727)譯 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

大寶積經妙慧童女會疏 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-myō-e-dō-nyo-e-sho. (支)Ta-pao-chi-ching-miao-hui-t'ung-nü-hui-su. ❷三卷 ❹思孝述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

大寶積經玄贊 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-gen-shin. ❷十卷 ❹賢證 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

大寶積經述 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-jutsu. (支)Ta-pao-chi-ching-shu. ❷一卷 ❸存、卍續一・九二・一 ❹唐代徐鍇撰 ❺本書は大寶積經述と稱するも大寶積經四十九會七十七品百二十卷の大册を述べたるものでは無く極めて大宣を開陳したるもの、所謂解題の簡なるものに過ぎない。續藏經の本書に依れば、唐朝議郎行河南府吉成縣主簿徐鍇の撰述に係る。初に尖日月出矣。雨輕雖十方。時雨降矣以下の序文を載せ、次に大寶積經とは後漢の迦葉摩騰・竺法蘭及び今朝玄奘法師・菩提流志等成く西天竺より致せし所なりといひ、中略。次に大寶積經翻譯に從事せる人々の名を列ね、而して曰ふには「今新に翻ずる所の經は凡そ四十九會七十七品有り。合して一十二軸なり。類を以て相從ひ、撰寫して成く畢る。先天二年六月三十日を以て太上皇に進じ、八月二十一日皇帝に進じたまへり」と。以下在家人布施者の名を陳ねて本經を「長存拓路之文。勃火燒天。不滅多羅之典」なりと結んでゐる。

(成田昌信)

大寶積經祥 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-sho. 大寶積經廟祥 ❷一卷 ❸存 ❹樹羅述 ❼(參考) 東域傳燈目錄卷上

大寶積經大意 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-tai-i. ❷一卷 ❸存 ❹松原開敎述 ❺昭和五刊 ❼(高大、寄・1・二六)

大寶積經知津 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-chi-shin. ❷一卷 ❸存 ❹普寂德門(寶永四—天明元 A. D. 1707—1781)撰 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

大寶積經拔萃 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-bas-sui. ❷二卷 ❸存 ❹僧純(寬政三—明治五 A. D. 1791—1872) ❺寫本(龍大、二一五1・二六)

大寶積經普入不思議法門經疏 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-fu-nyū-fu-shi-gi-hō-mon-gyō-sho. (支)Ta-pao-chi-ching-p'u-ju-pu-ssu-i-fa-mên-ching-su. ❷1卷 ❹宋智圓(太平興國元—乾興元 A. D. 976—1022)述 ❼(參考) 新編諸宗敎藏總錄第一

大寶積經彌勒所問會 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-mi-roku-sho-mon-e. (支)Ta-pao-chi-ching-mi-lê-so-wên-hui. ❷一卷 ❹唐菩提流志(太建四—開元一五 A. D. 572—727)譯 ❼(參考) 淨土依憑經論章疏目錄

大寶積經論 ❶(日) Dai-hō-shak-kyō-ron. (支)Ta-pao-chi-ching-lun. (梵)Ārya-mahā-ratna-kūṭa-dharma-paryāya-śatasāhasrika-parivarta-kāśyapa-parivartaṭīkā (藏傳)、(藏) bhagas-pa dkon-mchog brtsegs-pa che-n-po chos-kyi-rnam-grans leju stoṅ-phrag-brgya-pa las bod-skyes kyi leju rgya-cher bśad-pa 大乘寶積經論、寶積經論 ❷四卷 ❸存、大正二六・二〇四 No. 1523、鎌柔一〇・卍二一・三、北556傳、南569傳、元563傳、明北1238翻、清1239翻、龍559谷、天552傳、指530谷、法544谷、至1279目、明南1319弗、Nj. 1231 ❹著者は漢譯にその名を失したれど、西藏譯によれば安慧(Blo-brtan. ~Sthiramati)と傳ふ。後魏菩提流支譯 ❺此の論は大寶積經論と名づけられてゐるが、菩提流志譯編の百二十卷の大寶積經全體に關する論著ではなく、その中第百十二卷に編入せる第四十三普明菩薩會の註疏である。これに對同する上揭西藏譯本の題名は「聖大寶積法門十萬品中の迦葉品の疏」といふ義である。抑々唐の流志所譯の如き大部の大寶積經梵本の存在に就ては隋の闍那崛多の口傳、玄奘入寂一ケ月前の言葉、流志の譯出事實等によつて疑ない樣でもあるが、果してそれは何時頃から大寶積經の名のもとに現在の如き雜多の經を內含して呼ばれてゐたか問題であつて、支那譯經史上古くから寶積經と呼ばれたものは、たゞ第四十三普明菩薩會のみなのである。この會は流志勸編以前は大寶積經といひ、その異譯は支讖は佛遺日摩尼寶經とし、晉代失名は摩訶衍寶嚴經(一名大迦葉品)とし、闍那耶舍は寶積經(失本)とし、施護は大迦葉問大寶積正法經と譯し、梵本・西藏本も現存し、その對校出版者スタールホルスタインは西藏本によりて Kāśyapa parivarta と題を與へたが、梵本寫本には題名の部分を缺失してをる。併し大乘集菩薩學論大乘

若般若波羅蜜経巻の梵本に Ratnakūṭa（宝積部）としてて引用するものは皆、大乗の宝積部経典であるこの四十三会のみの文である。されば、この巻四十三会のみが古くから宝積部と呼ばれたのであり、今の大宝積部経典もたぶん四十三会のみの註釈であろうと云はれるのである。

倶舎文は冒頭に偈数六三頌を出し、次に賢聖僧の説に依り一切の大乗法中に頌数無量の説法あり、この頌はこれら十六相応相乗般若波羅蜜の説法を示す。この頌は十六相応相乗般若波羅蜜の説法あり、この頌はこれら十六相応相乗般若波羅蜜の説法を示す。この頌は十六相応相乗般若波羅蜜の説法あり、この頌は十六相応相乗般若波羅蜜の説法を示す。

故、「賢聖」とあり、「一切の大乗法中に頌数無量の説法あり」とし、以下頌文を解釈せるに、倶舎に同様の説を以て頌数の文義を詳細に説いてある。

本経所説の頌文は、本頌の意義は、梵文和訳の現代文義に本経も近い。

西蔵本は丹殊経頌蔵経 Ji 函 fols. 244 a—350a（北京版）に収録されてある。

❹〔参考〕 三宝紀巻九、内典録巻四、開元釈教録巻六、貞元録巻九

（藤枝文雄）

大北寸法米洪支配 ❶(日) Dai-hoku-to-hō-mai-yū-shi-hai. ❷1巻 ❸存 ❹慈川時代写 ❺〔参考文献〕

大本経 ❶(日)Dai-hon-gyō. (支)Ta-pēn-ching. (巴) D. 14 Mahāpadāna S. ❷❸存、写真合冊巻1（大正1・1 No. 1, 1）

大本四教義 ❶(日) Dai-hon-shi-kyō-gi. (支)Ta-pēn-ssū-chiao-i. 四教義、大部四教義 ❷十二巻 ❸存、大正四六・七二1 No. 1929、編目八、卍三三・五、明北1562帙、洛1511伊、宋1617中、明南.545

❹〔参考〕 田三郎『法華思想』、法華経研究五、『仏教学研究』第三巻第一号、『仏教研究』第一巻第五、『仏教研究』第一巻第五、『仏教研究』第二巻第一

❺刊本（高大、谷・1・二三）

大品般若経 ❶(日) Dai-hon-han-nya-kyō. 現代訳大品般若経 ❷存、現代意訳学叢書般若経第五 ❸三井品史書

大品般若経 ❶(日) Dai-hon-han-nya-kyō. 新訳大品般若経 ❷1巻 ❸存 ❹三井品史書 ❺大正1・五刊 ❻更汝甲子註

大品般若経科 ❶(日)Dai-hon-han-nya-kyō-kwa. (支)Ta-p'in-pan-jo-ching-k'o. ❷三巻写1巻 ❹〔参考〕 新編諸宗教蔵総録1

大品般若経科文 ❶(日)Dai-hon-han-nya-kyō-kwa-mon. (支)Ta-p'in-pan-jo-ching-k'o-wên. ❷1巻 ❹〔参考〕 東京帝室図書目録巻上、奈良朝現在一切経疏目録2045

大品般若経品目 ❶(日)Dai-hon-han-nya-kyō-hom-moku. ❷1巻 ❸存 ❹貞応釈 ❺〔参考〕 大日本仏教全書講刊 貞応書目

大品般若賢疏 ❶(日)Dai-hon-han-nya-kō-sho. (支) Ta-p'in-pan-jo-kuang-su. 大品般若経賢疏 ❷十巻 ❸存、卍続1・三八・1一二 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔 ❺〔参考〕 諸宗章疏録1

大品般若推理鍵 ❶(日) Dai-hon-han-nya-shō-kei-roku. ❷1巻 ❸存 ❹慈円写1七一元禄八 A. D. 1640—1695）鈔 ❺〔参考〕 『仏法記』

大品般若遊意 ❶(日)Dai-hon-han-nya-yū-i. (支)Ta-p'in-pan-jo-yu-i. 大品般若遊意、大品遊意 ❷1巻 ❸存、大正三三・六三 No. 1696、卍続1・三八・1 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔 ❺大品般若遊意の下を見よ。 ❻〔参考〕 諸宗章疏録巻1

大品般若略疏 ❶(日)Dai-hon-han-nya-ryaku-sho. (支)Ta-p'in-pan-jo-liao-su. ❷四巻 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔 ❺〔参考〕 諸宗章疏録巻1

大品般若科簡 ❶(日)Dai-hon-han-nya-ryō-ken. (支) Ta-p'in-pan-jo-liao-chien. ❷1巻 ❹〔参考〕 奈良朝現在一切経疏目録2046

大品遊意 ❶(日)Dai-hon-yū-i. (支) Ta-p'in-yu-i. ❷1巻 ❸存、大正三三・六三 No. 1696、卍続1・三八・1 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔 ❺大品般若遊意の下を見よ。 ❻〔参考〕 諸宗章疏録巻1

大品般若略疏 ❶(日)Dai-hon-han-nya-ryaku-sho. (支)Ta-p'in-pan-jo-liao-su. 大品般若略疏、大品略疏 ❷十巻 ❸存、卍続1・三八・1一二 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔 ❺〔参考〕 諸宗章疏録巻1

大品般若科簡 ❶(日)Dai-hon-han-nya-ryō-ken. (支) Ta-p'in-pan-jo-liao-chien. ❷1巻 ❹〔参考〕 奈良朝現在一切経疏目録2046

大品遊意 ❶(日)Dai-hon-yū-i. (支) Ta-p'in-yu-i. ❷1巻 ❸存、大正三三・六三 No. 1696、卍続1・三八・1 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔

❺大品般若遊意の下を見よ。 ❻〔参考〕 諸宗章疏録巻1

大品般若略疏 ❶(日)Dai-hon-han-nya-ryaku-sho. (支)Ta-p'in-pan-jo-liao-su. ❷四巻 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔 ❺〔参考〕 諸宗章疏録巻1

大品般若科簡 ❶(日)Dai-hon-han-nya-ryō-ken. (支) Ta-p'in-pan-jo-liao-chien. ❷1巻 ❹〔参考〕 奈良朝現在一切経疏目録2046

大品遊意 ❶(日)Dai-hon-yū-i. (支) Ta-p'in-yu-i. 大品般若遊意、大品般若遊意 ❷1巻 ❸存、大正三三・六三 No. 1696、卍続1・三八・1 ❹所者疏（天治三一武徳六 A. D. 549—623）鈔 ❺大品般若遊意の下を見よ。 ❻〔参考〕 諸宗章疏録巻1

大品般若略疏 ❶(日)Dai-hon-han-nya-ryaku-sho. (支)Ta-p'in-pan-jo-liao-su. 大品般若略疏、大品略疏 ❷十巻 ❸存、卍続1・三八・1一二

ものは、二卷二十五品（上卷十六品、下卷九品）の傳寫本に依られたものである。

本書の說は僞妄であり、僞經である事に就ては、忽滑谷博士の「禪學思想史」上卷第二編第一章第十七節拈華微笑の本據如何より第二十一節に涉つて詳說され、亦前記の禪學批判附錄に於ても論述されて居るから、詳しくは兩書に就て見るが可い。

❹寫本（京大、藏・一カ・一）（帝國・二二九・二七七）（大久保堅瑠）

大梵天王問佛決疑經に就て

❶(日) Dai-bon-ten-ō-bom-butsu-ketsu-gi-kyō-ni-tsui-te. ❸存、禪學批判論附錄 ❹忽滑谷快天著 ❺明治三九、昭和二再刊 ❻東京鴻盟社

大摩耶經 ❶(日) Dai-ma-ya-kyō. (支)Ta-mo-ya-ching. 摩耶經 ❷一卷 ❸缺 ❹後漢支婁(一中平二 A. D. 185—)譯 ❺第一譯。❼(參考) 開元錄第一四、貞元錄第二四

大摩里支菩薩經 ❶(日) Dai-ma-ri-shi-bo-satsu-kyō. (支)Ta-mo-li-chi-pu-sa-ching. 摩哩支菩薩經 ❷七卷 ❸存、大正二一・二六二No. 1257、縮成一一、卍一五・四、北1158騫、南1172騫、元1168騫、明北839盡、清839盡、麗1162路、天1151騫、法1279盤、至695出、明南843臨、Nj. 844 ❹宋天息災(一成平三 A. D. 1000)譯 ❺本は摩里支(marici)菩薩の息災增益調伏敬愛の四種法に就きて、種々の願望を成ぜしめる成就法、及び護摩法、曼荼羅等を明した經で、其の內容は第一卷には摩里支菩薩の威力、摩里支菩薩の陀羅尼、大三寶眞言を出し、次に息災、增益、調伏、敬愛の四種法通用の成就法を說き、次に一切の善惡を知る成就法、寃家をして病苦を生ぜしむる成就法、大摩里支降伏寃兵法、降伏他寃擁護自衆の成就法等を說き。第二卷には四種法の護摩行法、大曼荼羅成就法行、護摩壇の相、大曼拏羅成就法及び種々の成就法を說き。第三卷には起壇の法、增益金敬愛法、降伏金敬愛法、降伏夜叉女法、變身成就法、隱身成就法、祈雨法等の諸種の成就法を明し。第四卷には祈雨法曼荼羅の形相即ち中央の毘盧如來、四邊の四菩薩、四方四隅の八大龍王の曼荼羅の相及び各尊の眞言及び諸種の藥法並に成就法を出し。第五卷には摩哩支菩薩供養儀則、去除寃家成就法を說き。第六卷には增益・調伏・敬愛・息災の四種法について諸種成就念誦法を詳說し。第七卷には曼拏羅建立法並に其の諸尊の眞言を說いてある。

又本經は摩哩支菩薩の供養念誦並に諸種の成就法を說いてある全課にして、本經の抄出別生經と見らるべき不空等の譯經が已に行はれてゐる。卽ち末利支提婆華鬘經、摩利支天菩薩陀羅尼經、摩利支天菩薩念誦法、摩利支天一印法等是れである。（神林隆淨）

大曼供法則 ❶(日) Dai-man-ku-hō-soku. 大曼荼羅供法則 ❷一册 ❸存 ❹寫本（金剛三昧院）（高大、寄・一・六三）

大曼供法則及宥快口訣諷誦文

❶(日) Dai-man-ku-hō-soku-yoshi-yō-kwai-ku-ketsu-fu-ju-mon. ❷二帖 ❸存 ❹足利時代寫 ❺(寶龜院)

大曼荼羅供法則 ❶(日) Dai-man-da-ra-ku-hō-soku. ❷一帖 ❸存 ❹嘉永六寫 ❺(金剛三昧院)

大曼荼羅十七尊義述 ❶(日) Dai-man-da-ra-jū-shichi-son-gi-jutsu. (支) Ta-man-t'o-lo-shih-chi-tsun-i-shu. 般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述、十七尊義述、十七尊釋、大曼荼羅十七尊釋 ❷一卷 ❸存、大正一九・六一七No. 1004、縮閏八、卍二七・二、北1397武、南1401衡、元1389衡、明北1444藏、清1444藏、麗1360宅、天1378衡、明南1171寬、Nj. 1451、三十帖策子第二七 ❹唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ❺般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述の下を見よ。

❼(參考) 智證大師請來目錄

大曼荼羅十七尊釋 ❶(日) Dai-man-da-ra-jū-shichi-son-shaku. (支)Ta-man-t'o-lo-shih-chi-tsun-shih. 般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述、十七尊義述、十七尊釋、大曼荼羅十七尊義述 ❷一卷 ❸存、大正一九・六一七No. 1004、縮閏八、卍二七・二、北1397武、南1401衡、元1389衡、明北1444藏、清1444藏、麗1360宅、天1378衡、明南1171寬、Nj. 1451、三十帖策子第二七 ❹唐不空(神龍元—大曆九 A. D. 705—774)譯 ❺般若波羅密多理趣經大安樂不空三昧眞實金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述の下を見よ。

大曼荼羅圖 ❶(日) Dai-man-da-ra-zu. ❷一軸 ❸存 ❹足利時代寫 ❺(寶菩提院)

大名目 ❶(日) Dai-myō-moku. ❷一卷 ❸存、大正八三・八三三No. 2671 ❹顯智(嘉祿二—延慶三 A. D. 1226—1310)撰 ❺本書は「觀無量壽經」並に同疏の淨土門大綱を國示したるもので、先づ淨土宗有二門と標して聖道門九を列擧し次で淨土門を明したものである。淨土門に就て、初に經の名目を列ね、定善十三觀と散善三福とを示し因に報化二身を明してある。次に疏の名目を列ねる。第一に「玄義分」に就て先づ歸敬偈の標目・因淺・賢聖、後に七科を擧げる。一に序題、二に釋名、三に宗旨不同、四に說人差別、五に定散兩門（出在何文・何機得受）、六に和會經論（問答釋義・因意趣・十信・十住・十行・十回向・十地・種姓・等覺・妙覺・四念處・三僧祇・百大劫・四正斷・四神足・五根・五力・四無所畏・四無礙・十八不共）、七に得益である。第二に「序分義」に就て先づ總じて經の五門を明し、後に正しく第一門序分を明すべく證信序と發起序（化前序・禁父緣・禁母緣・厭苦緣・欣淨緣・散善顯行緣・定善示觀緣）とに亙つてある。第三に「定善義」に就て先づ總標し、後に日想觀・水想觀・寶池觀・眞身觀に就て詳說して

ある。第四に「散善義」に就て先づ總標し、後に三福・九品・文前細科・三心・三明・八解脫十二部經・五逆・同類罪・大乘逆罪・五種嘉譽に就て詳說してある。

本書は顯智自筆卷子本一卷高田山專修寺寶庫に現存する。自序に「夫記此名目者非爲餘宗兼學之人非爲廣智宏才之士唯爲少智昏人爲無才小童集之耳但此宗異義蘭菊料簡區分雖名目次第取捨不定纔汲一川之流浴金渠之波單尋一樹之影戀玉條之風之計也更後見人勿令嘲弄矣」とある。寶庫に祕藏されて四百餘年、方めて慧辨之を謄寫し、流布を圖つたものである。

❼(注釋) 大名目集註三卷(慧辨) (參考) 淨土眞宗教典志第二 (生桑完明)

大名目集註 ❶(日) Dai-myō-moku-shuc-chū. ❷三卷 ❸存 ❹慧辨作 ❺延享二(A. D. 1745) ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二 ❽延享三刊 ❾(龍大、一〇二三・六)(谷大、宗大・二七〇三)(哲・さ・三・中・二一)

大妙經 ❶(日) Dai-myō-kyō. (支)Ta-miao-ching. 大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經、大妙金剛經 ❷一卷 ❸存、大正一九・三三九No. 953、縮餘一、卍續一・三・一 ❹唐達磨栖那譯

大妙金剛經 ❶(日) Dai-myō-kon-gō-kyō. (支)Ta-miao-chin-kang-ching. 大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經、大妙經 ❷一卷 ❸存、大正一九・三三九No. 953、縮餘一、卍續一・三・一 ❹唐達磨栖那譯

大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經 ❶(日) Dai-myō-kon-gō-dai-kan-ro-gun-da-ri-em-man-shi-jō-bucchō-gyō. (支)Ta-miao-chin-kang-ta-kan-lu-t'ho-na-li-yen-man-ch'ih-shêng-fo-ting-ching. 大妙金剛經、大妙經 ❷一卷 ❸存、大正一九・三三九No. 965、縮餘一、卍續一・三・一 ❹唐代達磨栖那譯 ❺本經は大佛頂の修行儀軌であつて、其の內容は尾哨左義 Vairocana (大日)如來が鷲足山に在て、妙金剛大甘露軍荼利焰鬘熾盛大三摩地に入り、八輻金剛焰輪の相を現じ、手に寶瓶印(佛頂形の如し)を結ぶや、大光明を放て虛空中の諸佛を、此の光明中に攝盡せしを說き、又世尊身に攝一切佛頂輪王の相を現じ、手に八輻金剛印を結ぶや、八方八色の輪光を放ち、其の輪光中に八種花座を現ず、卽ち世尊の面前(東)に光聚佛頂輪王、右隅(東南)に發生一切佛頂輪王、右邊(南)白纖蓋佛頂輪王、右隅(西南)に勝頂輪王、後隅(西北)に除一切蓋障佛頂輪王、後隅(西北)に黃色佛頂輪王、左邊(北)に一字最勝頂輪王、左隅(東北)に無邊音聲佛頂輪王の八佛頂各其の花座上に現じ、又世尊鉤召三摩地に入つて、十方諸佛を鉤召して、能く大佛事を成ずる十字眞言を說く、時に之を讚歎せし集會の十字眞言を說く、大妙金剛手菩薩は、降三世金剛明王を現じて、八字心眞言を說き、妙吉祥菩薩は、六臂六頭六足金剛明王を現じて、三字心眞言を說き、虛空藏菩薩は、大奚金剛明王を現じて、十字心眞言を說き、慈氏菩薩は、大輪金剛明王を現じて、六字心眞言を說き、觀自在菩薩は、頂上に馬頭金剛明王を現じて、十字心眞言を說き、地藏菩薩は、無能勝金剛明王を現じて、十三字心眞言を說き、一切蓋障菩薩は、不動尊金剛明王を現じて、十四字心眞言を說き、普賢菩薩は、步擲金剛明王を現じて、七字心眞言を說いたことを述べ、更に世尊は、此の中十字心眞言の功德を說き、又此の八大菩薩の爲に、一字心眞言、及び根本密印の心印一字の法、及び修行儀則として、蚓字觀、攝一切佛頂輪王本三昧耶發生無邊諸佛剛勝印(十葉印)を說き、次に木印法卽ち神通法悉地、修三摩地法悉地、報佛恩の法を說いてある。蓋し本經所說の八佛頂は、大日經第一具緣品(大正一八・七)、一字佛頂輪王經第四大法壇品(大正一九・二四七)、義無畏譯の尊勝佛頂修瑜伽法儀軌卷上畫像品(大正一九・三七六)等に說けるものと其の名目及方位に少異がある。

❼(參考) 八家祕錄卷下軍荼利法、祕密儀軌隨聞記第一七 ❹寫本（京大、藏・一六ヒ・七）（神林隆淨）

大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經 ❶(日) Dai-myō-kon-gō-dai-kan-ro-gun-da-ri-em-man-shi-jō-bucchō-gyō. 國譯大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經 ❸存、國譯密敎經軌部第四 ❹塚本賢曉譯

大明經 ❶(日) Dai-myō-kyō. (支)Ta-ming-ching. 大明度經、大明度無極經 ❷六卷 ❸存、大正八・四七八No. 225、縮月八、卍五・五—六、北8羽、南9羽、天9羽、明北8潛、清8潛、麗9潛、天9羽、指8潛、法8潛、至8潛、明南8潛、Nj. 8 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A. D. 223—253) ❻大明度經の下を見よ。

大明月庵錄 ❶(日) Dai-myō-gettan-roku. 月庵和尙語錄、大明禪寺開山月庵和尙語錄、月庵錄 ❷二卷或一卷 ❸存 ❹月庵宗光(嘉曆元—康應元 A. D. 1326—1339)語 ❼(參考) 禪籍目錄

大明國師行狀 ❶(日) Dai-myō-kokushi-gyō-jō. ❷一卷 ❸存 ❹明投撰 ❼(參考) 大日本佛敎全書續刊豫定書目

大明國師塔銘 ❶(日) Dai-myō-kokushi-tō-mei. 無關和尙塔銘、佛心禪師大明國師無關大和尙塔銘 ❸存、續群書類從第九 ❹椿庭無喬(文保二—應永八 A. D. 1318—1401)譯 ❺無關大和尙塔銘の下を見よ。

大明呪經 ❶(日) Dai-myō-ju-kyō. (支) Ta-ming-chou-ching. 摩訶般若波羅蜜大明呪經、摩訶大明呪經、心經 ❷一卷 ❸存、大正八・八四七No. 250、縮閏八、卍五・六、北21羽、南21羽、元15羽、明北16羽、清16羽、麗23羽、天21羽、指12羽、法20羽、至20羽、明南17羽、Nj. 19 ❹姚秦鳩摩羅什譯 ❺摩訶般若波羅蜜大明呪經の下を見よ。

大明神講式 ❶(日) Dai-myō-jin-kōshiki. ❷一卷 ❸明惠(承安三—貞永元 A. D. 1173—1232)撰 ❼(參考) 諸宗章

疏錄第二

大明禪寺開山月庵和尙行實

❶(日)Dai-myō-zen-ji-Kai-san-Getsu-an-o-shō-gyō-jitsu. 月庵和尙行實 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九 ❹興樹撰 ❺應永一三(A. D. 1406) ❻月庵和尙行實の下を見よ。

大明度經 ❶(日) Dai-myō-do-kyō. (支)Ta-ming-tu-ching. 大明度無極經、大明經 ❷六卷 ❸存、大正八・四七八 No. 225、縮月八、卍五・五—六、北8羽、南9羽、元9羽、明北8潛、清8潛、麗10潛、天9羽、指8鱗、法8潛、至8潛、明南9潛、Nj. 8 ❹吳支謙譯 ❺黃武二—建興二(A. D. 223—253)

❻此の經は、南吳時代に於いて、月支國の居士、支謙によりて譯出せられ、六卷三十品より成る般若部の聖典であるが、後漢の時代に、月支國の三藏、支婁迦讖によりて譯出された道行般若經と同本異譯である。而して彼の道行般若經は、般若部の聖典中、最古の飜譯であり、且つ此の大明度經よりも、譯文が流暢であるから、唯こゝには此の經の品名だけを列記して、其の解說は、道行般若のそれに讓る方が妥當だと思ふ。乃ち卷第一には、行品第一の一品、卷第二には、天帝釋問品第二、持品第三、功德品第四、變謀明慧品第五の四品、卷第三には地獄品第六、淸淨品第七、悉持品第八、覺邪品第九、照明十方品第十の五品、卷第四には、不可計品第十一、譬喩品第十二、分別品第十三、本無品第十四、不退轉品第十五、恆竭淸信女品第十六、守眞品第十七の七品、卷第五には、遠離品第十八、善友品第十九、天帝釋品第二十、貫高品第二十一、學品第三十二、守行品第二十三、强弱品第二十四、累教品第二十五、不盡品第二十六、隨品第二十七の十品、卷第六には、普意菩薩品第二十八、法來聽品第二十九、竭果阿羅品第三十の三品が含まれて居る。

❼(參考) 出三藏記第二、三寶紀第五、內典錄第二、譯經圖紀第一、開元錄第二、貞元錄第三 ❽刊本(正大、一一七九・五八)

(山上曹源)

大明度無極經 ❶(日)Dai-myō-do-mu-gok-kyō. (支) Ta-ming-tu-wu-chi-ching. 大明度經、大明經 ❷六卷 ❸存、大正八・四七八 No. 225、縮月八、卍五・五・六、北8羽、南9羽、元9羽、明北8潛、清8潛、麗9潛、天9羽、指8潛、法8潛、至8潛、明南8潛、Nj. 8 ❹支謙譯 ❺吳黃武二—建興二(A. D. 223—253) ❻大明度經の下を見よ。

❼(正大、一一七九・五八)

大明錄 ❶(日)Dai-myō-roku. 新編佛法大明錄 ❷存 ❸宋圭堂居士撰 ❼(參考) 禪籍志卷下 ❽(朔大)

大明高僧傳 ❶(日)Dai-min-kō-sō-den. (支) Ta-ming-kao-seng-ch'uan. 明高僧傳四集、高僧傳四集、明傳、明高僧傳 ❷八卷 ❸存、大正五〇・九〇一 No. 2063、卍續二乙・七・三 ❹如惺撰 ❺明萬曆四五(A. D. 1617)

❻本書には、明高僧傳四集、高僧傳四集、明高僧傳、明傳とさま〻な略稱が用ひられてをる。四集といふは、梁・惠皎の高僧傳、唐・道宣の續高僧傳、宋・贊寧の宋高僧傳の三を繼ぐものといふ意なるべきも、著者の卷頭の叙文には、正しく「命曰大明高僧傳」とある。

內容は、六卷に分れてをるが、譯經篇、解義篇、習禪篇の三類に亘つて、南宋七十九人、元二十二人、明十八人にて、計百七十九人と之に附見六十人を加へ、總計百七十九人の高僧を傳してゐるものである。左の如し。

譯經篇 (一)沙羅巴(刺沮ト、迦羅思巴)解義篇(二)淨眞。(三)覺。(四)若訥。(五)了然。(六)了宜(善榮)。(七)性澄(雲夢澤)。(八)肇潤(古源、竹堂傳)。(九)眞淨(無極度)。(一〇)盤谷。(一一)允若(大山恢、天岸齊、我庵無)。(一二)必才。(一三)善繼。(一四)子文(以上卷一)。(一五)融照。(一六)弘濟(犇田滿)。(一七)本無。(一八)行可。(一九)文才(迦羅斯巴)。(二〇)英辯(稻林潭)。(二一)德謙。(二二)達益巴(絳思吉)。(二三)妙文(大德明)。(二四)了性。(二五)寶嚴(大林性)。(二六)志德(海閑、法照禪)。(二七)善寧(無念禪)(以上卷二)。(二八)祖傳(石室英竹屋禪)。(二九)行五。(三〇)原眞。(三一)慧日(栢子庭)。(三二)土璋(大心榮、絕宗繼)。(三三)如玘。(三四)大同(春谷、古懷肇、繼江恩、海機天岸濟古林茂)。(三五)紹宗(靜庵鎭)。(三六)居敬(東源)。(三七)普智。(三八)善啓。(三九)應能。(四〇)圓鏡。(四一)祖住(大章)(以上卷三)。(四二)明龍(大光)。(四三)眞節。(四四)明得(百川海、妙峯覺)。(四五)眞淸(寶珠荊山月溪)(以上卷四)。

習禪篇 (四六)正覺(枯木成丹霞淳)。(四七)敎亨(普照寶)。(四八)宋杲。(四九)紹隆。(五〇)鐘裕。(五一)法泰。(五二)景元。(五三)慧遠(雲巖復)。(五四)心道。(五五)智才。(五六)士珪(宗範)。(五七)安民。(五八)道元(大別道)。(五九)雲棲(寄菴圓)。(六〇)善悟。(六一)法忠(以上卷五)。(六二)法寧。(六三)道行。(六四)守珣(廣鑑瑛)。(六五)眞覺(佛性)。(六六)曇華。(六七)德光(光化吉月庵果百丈霞)。(六八)祖覺(慧日能南堂靜)。(六九)自回。(七〇)居靜。(七一)彌光(黃檗祥)。(七二)道顯。(七三)肅雷。(七四)道謙。(七五)清且。(七六)行機。(七七)仰安(裴自)。(七八)寶印(智策)(以上卷六)。(七九)詠才(海印隆)。(八〇)妙普(雪寶持)。(八一)應熾。(八二)道寧。(八三)法一。(八四)普交。(八五)道旻。(八六)瑞仙。(八七)天遊。(八八)法因。(八九)羅能(澄甫崇能)。(九〇)宗顯。(九一)法常。(九二)智策(寂室光大圓)。(九三)道楓。(九四)海慧(清慧)。(九五)有權(以上卷七)。(九六)德昇(慧泓)。(九七)自圓(普能)。(九八)彥充。(九九)眞淳。(一〇〇)安永(安分)。(一〇一)善寄。(一〇二)成傑。(一〇三)祖先(法鑑)。(一〇四)崇岳。(一〇五)師範。(一〇六)惠。(一〇七)道悟(白雲海)。(一〇八)曉瑩。(一〇九)顯萬(淨業)。(一一〇)法全。(一一一)道沖。(一一二)德宮(以上卷八)

本書の江北刊經處本には補刻として宋僧贊寧の傳を附してある。民國となりて、道階、喩謙等の編纂せる新續高僧傳四集六十六卷には、本書の殆んど大部分を併合編入してある。

❼(參考) 新續高僧傳四集 ❽慶安二刊

(正大、一〇三五・一四)慶安四刊(正大、一〇三五・一二、一五)(谷大、餘大・一六〇七)(高大、寄・一・二一)(帝國、一七七・二五)(高大、一・二一)(龍大、研史)(京專)光緒一八刊(藤井草宣)

大明三藏經目錄 ❶(日) Dai-min-san-zō-kyō-moku-roku. 大明三藏聖敎目錄 ❷一卷 ❸存、昭和法寶目錄第二 ❹鐵眼校 ❽(帝國、一六八・一一)

大明三藏聖敎 ❶(日)Dai-min-san-zō-shō-gyō. (支) Ta-ming-san-tsang-sheng-chiao. 明本一切經 ❸存 ❽(正大、一〇二・一)

大明三藏聖敎目錄 ❶(日) Dai-min-san-zō-shō-gyō-moku-roku. (支)Ta-ming-san-tsang-sheng-chiao-mi-lu. 大明三藏聖敎北藏目錄、北藏目錄 ❷四卷 ❸存、昭和法寶目錄第二 ❼(參考) 淨土眞宗敎典志第三 ❽寬文九刊(高大、寄・一・二〇)(正大、一〇〇・三六、四六)天和元刊(帝室、一一一・二九)(帝國、一一八・七八)刊本(谷大、餘大・六三〇)(龍大、二〇二・一九)(京大、一・二〇タ・二)(正大、一〇〇・一一—一五、四七、五四—五一)(高大、寄・一・二〇)(京專)

大明三藏聖敎目錄 ❶(日) Dai-min-san-zō-shō-gyō-moku-roku. 大明三藏聖敎南藏目錄、南藏目錄 ❷一卷 ❸存、昭和法寶目錄第二

大明三藏聖敎目錄 ❶(日) Dai-min-san-zō-shō-gyō-moku-roku. (英)A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka, by Bunyiū, Nanjō. ❷一卷 ❸存 ❹本條文雄(嘉永二—昭和二 A. D. 1849—1927)著 ❺明治一六、昭和四刊 ❻英國牛津(Oxford)大學校印書局、東京南條博士記念刊行會

大明三藏聖敎目錄 ❶(日) Dai-min-san-zō-shō-gyō-moku-roku. 校正大明三藏聖敎目錄 ❷一卷 ❸存 ❽(龍大、二〇一・二三、研佛)

大明三藏聖敎目錄 ❶(日) Dai-min-san-zō-shō-gyō-moku-roku. 校訂大明三藏聖敎目錄 ❷三册 ❸存 ❽刊本(高大、寄・一・二〇)

大明三藏聖敎目錄並續又續目錄 ❶(日) Dai-min-san-zō-shō-gyō-moku-roku-narabini-zoku-yō-zoku-moku-roku. ❷二卷 ❸存 ❻龍大本と法光寺本とを參照せるもの。❽寫本(龍大、二〇一・二四)

大明三藏聖敎目錄並補正索引 ❶(日) Dai-min-san-zō-shō-gyō-moku-roku-narabini-ho-sei-saku-in. ❷二卷 ❸存 ❹南條文雄(嘉永二—昭和二 A. D. 1849—1927)著 ❺昭和四刊 ❻東京南條博士記念刊行會

大明三藏法數 ❶(日)Dai-min-san-zō-hos-sū. (支) Ta-ming-san-tsang-fa-shu. 三藏法數 ❷五十卷 ❸存、縮露一—二、卍三六乙・一—三 ❹一如編 ❺明永樂一七(A. D. 1419)

❻一如は明の永樂年中、僧錄司となり上天竺寺に住した學僧。幻輪の釋鑑稽古略續集三卷の、永樂十七年(A. D. 1419)の三月三日に、道成一如等八人に勅して藏經を校勘し、新舊比對し僧を選めて寫錄せしむといひ、大明法數の下に、一如法師勅を奉じといひ、大藏經を探討して采輯類編すとあるに依れば本書の成立年時事歷を知ることが出來る。即ち本書五十卷は大藏經中より法數に關する名目並に之れに附隨せる解釋を集め、それを類別排次したるもので、初の三卷は總目錄にして、一々の項目には典據を記入してゐる。名目は一心より始まり、八萬四千の法門に終り、錄むる所の語數は凡そ千六百に及んでゐる。從來流行されてゐる藏乘法數並に諸乘法數の諸書に比較して增益されてゐる。序、跋共に無し。後の纂集に係る大藏法數七十卷は固より本書を校訂增補せるもので、學者の便に資すること大である。

❼慶安五刊(龍大、二〇二・二八)(帝國、八二一・一五一)(正大、一〇一・七一)(谷大、餘大・一二二)刊本(京專)(谷大、餘大・一六四九)明治三五刊(帝國、一一七・一六七)

(成田昌信)

大明三藏目錄 ❶(日)Dai-min-san-zō-moku-roku. (支)Ta-ming-san-tsang-mu-lu. ❷四卷 ❸存 ❹張心泰撰 ❺光緒八刊 ❽(龍大、二〇一・二五)

大明釋敎彙門標目 ❶(日) Dai-min-shak-kyō-i-mon-hyō-moku. (支)Ta-ming-shih-chiao-hui-men-piao-mu. ❷四卷 ❸存 ❹明代寂聽撰 ❺元祿一四刊 ❽(谷大、餘大・五六七)(京大、藏・二一タ・一三)

大明重刊三藏聖敎目錄 ❶(日) Dai-min-jū-kan-san-zō-shō-gyō-moku-roku. (支) Ta-ming-chung-k'an-san-tsang-sheng-chiao-mu-lu. ❷一卷 ❸存、縮結八

大明太宗文皇帝御製觀音讚 ❶(日) Dai-min-tai-sō-bun-kō-tei-gyo-sei-kwann-on-san. (支) Ta-ming-t'ai-tsung-wen-huang-ti-yu-chih-kuan-yin-tsan. 大明太宗文皇帝御製大悲觀世音菩薩讚 ❷一卷 ❸存、聖觀自在菩薩讚之內(大正二〇・七〇 No. 1055)、縮霜二 ❹聖觀自在菩薩梵讚の下を見よ。

大明太宗文皇帝御製序讚文 ❶(日) Dai-min-tai-sō-bun-kō-tei-gyo-sei-jo-sam-mon. (支)Ta-ming-t'ai-tsung-wen-huang-ti-yu-chih-hsü-tsan-wen. ❷一卷 ❸存、縮霜二、卍三五・六

❻太宗皇帝の御製序並びに讚文を集めたるもの、總て十篇あり。(1)藏經讚にて永樂八年(A. D. 1410)三月九日のもの。(2)御製如來正宗大覺妙經序にて、永樂十年(A. D. 1412)九月十五日のもの。(3)御製四部經序

大雲輪請雨経 ❶(ロ)Dai-mu-ryō-ju-kyō-no-chi-betto-yaku. 1巻 ❷唐 ❸不空 ❹(漢)大雲輪請雨経の異訳。

大雲輪請雨経 ❶(ロ)Dai-mu-ryō-ju-kyō-shin-gi. 無量寺中日本 ❷唐 ❸不空 ❹(漢)大雲輪請雨経新儀 ❺日 1巻 ❻(宋)〇〇(一〇二〇)

大雲輪請雨経 ❶(ロ)Dai-mu-ryō-ju-kyō-koku-yaku. 屋嶋寺 ❷唐 ❸不空 ❹(漢)大雲輪請雨経国訳 ❺日 1巻 ❻(宋)〇〇(一〇二〇)

大雲輪請雨経疏 ❶(ロ)Dai-mu-ryō-ju-kyō-shō. (米)Ta-wu-liang-shou-ching-su. 東寺 ❷唐 ❸法蔵 ❹(漢)大雲輪請雨経疏 ❺日 1巻 ❻(宋)〇〇(一〇二〇)

大雲輪請雨経疏 ❶(ロ)Dai-mu-ryō-ju-kyō-shō. (米)Ta-wu-liang-shou-ching-shu

は、後漢の末帝の貞明七年（A. D. 921）皆せし者は、後漢の末帝の貞明七年（A. D. 921）皆せし者は、後漢の末帝の貞明七年（A. D. 921）皆

主村とせる周谷蘇嘉等請文を書いたもの主村とせる周谷蘇嘉等請文を書いたもの主村とせる周谷蘇嘉等請文を書いたもの

が分る。一巻の内容は日観道教等の修記を が分る。一巻の内容は日観道教等の修記を が分る。一巻の内容は日観道教等の修記を

で、天台詩七言詩の数等種を形成し、一方で、天台詩七言詩の数等種を形成し、一方で、天台詩七言詩の数等種を形成し、一方

に語句の形式を取りつゝ作言語言を交へて に語句の形式を取りつゝ作言語言を交へて に語句の形式を取りつゝ作言語言を交へて

られたる一種の俗歌小説である。即ち目 られたる一種の俗歌小説である。即ち目 られたる一種の俗歌小説である。即ち目

しは母用を以て先づ亡き父母を天界に覓め しは母用を以て先づ亡き父母を天界に覓め しは母用を以て先づ亡き父母を天界に覓め

しが父の冥土天上にて母たし。乃ち冥官に入 しが父の冥土天上にて母たし。乃ち冥官に入 しが父の冥土天上にて母たし。乃ち冥官に入

りて母を求めたるに、其の母事説の訳者に冥 りて母を求めたるに、其の母事説の訳者に冥 りて母を求めたるに、其の母事説の訳者に冥

官りしめを知りて冥官として如来の所に冥 官りしめを知りて冥官として如来の所に冥 官りしめを知りて冥官として如来の所に冥

り、七月十五日に天国金蓮華を奉じたこの ヤ り、七月十五日に天国金蓮華を奉じたこの ヤ り、七月十五日に天国金蓮華を奉じたこの ヤ

ろう。給るに母は此の功徳に由りて地獄餓 ろう。給るに母は此の功徳に由りて地獄餓 ろう。給るに母は此の功徳に由りて地獄餓

鬼の苦を免れ、王舎城中に再び身の苦生涯 鬼の苦を免れ、王舎城中に再び身の苦生涯 鬼の苦を免れ、王舎城中に再び身の苦生涯

に戻したれば、目連更に仏塔前に詣でゝ大 に戻したれば、目連更に仏塔前に詣でゝ大 に戻したれば、目連更に仏塔前に詣でゝ大

乗語を講説して、別身より盛に女人身を厭 乗語を講説して、別身より盛に女人身を厭 乗語を講説して、別身より盛に女人身を厭

せしめたるを記してある。何等の仏教語解説 せしめたるを記してある。何等の仏教語解説 せしめたるを記してある。何等の仏教語解説

巻一部三五七—三六一頁参照せよ。

⑭ 敦煌出土本（大英博物館蔵S. 2614）

（矢吹慶輝・佐田自信）

大目連変経 ❶（日）Dai-moku-ren-ju-hō-kyō. (支)Ta-mu-lien-shou-pao-ching. ❷1巻 ❸出本文記1切有部毘奈耶雑事第十八巻の抄出。 ❹〔参考〕同元録巻第1六、巻1七、貞元録巻第11六

大門園上三尊印相之事 ❶（日）Dai-mon-kaku-jō-zan-son-in-sō-no-koto. ❷1巻 ❸存、唐鑑教考附録 ❹続本（谷大、宗大・11五1六）

大乗又愛子成就法 ❶（日）Dai-yaku-sha-ai-shi-jō-ju-hō.(支)Ta-yao-ch'a-ai-tzŭ-ch'êng-chiu-fa. 大乗又女教等母愛子成就法、教等母愛子成就法、阿哩底母法、大乗又女愛愛子法 ❷1巻 ❸存、大正11・11八六No. 1260、編図一四、卍二六・一〇、明北1383社、洛1385社、麗1374教、Nj. 1392、三十帖策子第一九 ❹出不空（曾龍元一—大唐九 A. D. 705—774）譯 ❺〔参考〕初期大密密教目録

大乗又女教等母愛子成就法 ❶（日）Dai-yaku-sha-nyo-kwan-gi-mo-narabini-ai-shi-jō-ju-hō. (支) Ta-yao-ch'a-nü-huan-hsi-mu & ai-tzŭ-ch'êng-chiu-fa. 教等母愛子成就法、阿哩底母法、大乗又女愛愛子法 ❷1巻 ❸存、大正11・11八六No. 1260、編図一四、卍二六・一〇、明北1383社、洛1385社、麗1374教、Nj. 1392、三十帖策子第一九 ❹出不空（曾龍元一—大唐九 A. D. 705—774）譯 ❺此の題は其の題目に示す如く、初に教等母（即ち阿哩底母 Harīti）の説法の因縁、仏宗後裔川、咒呪法を説き、次に愛子等阿修羅陀羅尼法（即ち愛子成就法）を説いてある。其の内容は初の阿哩底母法には、多多（ata）婆又大所の女教等（Harīti）大乗又女及び其の数多子又母（Pañcika）大乗又婆は五百女子ありて大威力を具く説の有情に善薩を加ふ。時に第一切有情に無畏を施し、教等母母をして説像せしめ、五戒を善薩はしめて有情に無畏を施し、教等母母をして説像せしめ、五戒を善薩はしめて有情に無畏を施し、教等母母をして説像せしめ、五戒を善薩はしめて有情

尼を変化して、教等母及び未来世の諸の婆羅子に付して有情を護く守護し安楽にせしめ給ひし因縁を称げ、次に成就陀羅尼法を出し、中に教等母の形像、壇法、修法起請

目、念誦法、護摩等の法を説き、次に、種種の咒呪法を説き、次に請召、降伏、殺鬼の印契を説く。次の愛子等阿修羅陀羅尼法（大正11・二八八頁三二行以下）には護身、請召、降伏の印明、新願を説き、次に請観の咒呪法を説く、次に等阿修羅観音法、壇法、修法、護摩法を説いてある。蓋し本経所説の初の諸仏の説因縁に関しては、縁覚経第巻の十一、南海寄帰伝巻上、有部毘奈耶雑事巻九、慶喜寄帰巻巻第一、受菩薩戒巻巻に も説ける所である。

⑭〔参考〕唐開元録巻巻上、貞元録巻第1五、続密録目録目録巻五 （前井慈俊）

大乗又女教等母愛子成就法 ❶（日）Dai-yaku-sha-nyo-kwan-gi-mo-narabini-ai-shi-jō-ju-hō. 国書大乗又女教等母愛子成就法 ❷存、国書密教部軌儀第1

大乗又女愛愛子法 ❶（日）Dai-yaku-sha-nyo-narabini-ai-shi-hō. (支)Ta-yao-ch'a-nü & ai-tzŭ-fa. 大乗又女教等母愛愛子成就法、教等母愛子成就法、阿哩底母法、阿哩底母法、大乗又愛子成就法 ❷1巻 ❸存、大正11・11八六 No. 1260、編図一四、卍二六・一〇、明北1383社、洛1385社、麗1374教、Nj. 1392三十帖策子第一九 ❹出不空（曾龍元一大唐九 A. D. 705—774）譯 ❺大乗又女教等母愛愛子成就法の下を見よ。

大乗善巧方便経 ❶（日）Dai-yaku-zen-gyō-hō-ben-gyō. (支) Ta-yao-shan-ch'iao-fang-pien-ching. ❷11巻 ❸出本説1切有部毘奈耶雑事巻巻三十七巻11十八巻の抄出。

❹〔参考〕同元録巻1六、巻1七、貞元録巻第11六

大用灌頂和尚語録 ❶（日）Dai-yū-e-shō-o-shō-go-roku. ❷1巻 ❸存 ❹大用灌頂語録 ❺〔参考〕曹洞目録

大用国師詩歌集 ❶（日）Dai-yū-koku-shi-shi-ka-shū. ❷1巻 ❸存 ❹誠周稗（延享三—文政三 A. D. 1746—1820）

❺刊本（刊大）

大用国師日記 ❶（日）Dai-yū-koku-shi-nik-ki. ❷五巻 ❸存 ❹誠周稗（延享三—文政三A. D. 1746—1820）

❺〔参考〕曹洞目録

大勇菩薩分別業報略集 ❶（日）Dai-yū-bo-satsu-fum-betsu-gō-hō-ryaku-s'hū. (支) Ta-yung-p'u-sa-fên-pieh-yeh-pao-liao-chi. 分別業報略集、分別業報略集、業報略集 ❷1巻 ❸存、大正1七・四四六No. 723、編蔵八、卍二六・七、北1044資、南1057資、元1056資、明北1342有、洛1342有、麗1051資、天1043資、明南1137法、Nj. 1349 ❹唐慧能撰書 ❺刊宋本 完録11一1九（A. D. 434—442） ❻分別業報略集の下を見よ。

大要秘密集 ❶（日）Dai-yō-hi-mitsu-shū. ❷1冊 ❸存 ❹（前、け・五・右・11七）

大陽和尚行實 ❶（日）Dai-yō-ō-shō-gyō-jitsu. ❷存、横浜市鶴見区総持寺蔵 ❺11世である大智禅師瑞巌龍吟和尚に随侍

し、法燈の本天寺、京都の妙心寺、京都の妙心寺、京都の妙心

Dai-raku-kon-gō-sat-ta-nen-ju-gi-ki. (Ck) Ta-lo-chin-kang-sa-t'o-nien-sung-i-ku-ei. 唐開元寺の僧慧能の碑文。唐の開元寺の僧慧能の碑文。

大乗涅槃経 (日) ❶ 唐 **Dai-raku-kon-gō-jō-ju-gi-ki.** (Ck) Ta-lo-chin-kang-ch'eng-chiu-i-kuei. 唐の開元寺の僧慧能の碑文。

大乗法苑義林章 (日) ❶ 唐 **Dai-raku-kon-gō-fu-ku-shin-jitsu-sam-ma-ya-kyō-han-nya-ha-ra-mit-ta-ri-shu-shaku.** (Ck) Ta-lo-chin-kang-pu-k'ung-chên-shih-san-mei-ya-chu-shih. 唐の法苑義林の注釈。唐の金剛仏空真実三昧耶経の注釈。

大乗法苑義林章 (日) ❶ 唐 **Dai-raku-kon-gō-fu-ku-shin-jitsu-sam-ma-ya-kyō-han-nya-ha-ra-mit-ta-ri-shu-shaku.** (Ck) Ta-lo-chin-kang-pu-k'ung-chên-shih-san-mei-ya-chu-shih. 唐の法苑義林の注釈。唐の金剛仏空真実三昧耶経の注釈。

大乗理趣六波羅蜜多経 (日) ❶ 唐 **Dai-raku-ri-shu-roku-ha-ra-mit-ta-kyō.** (Ck) Ta-lo-chin-kang-pu-k'ung-chên-shih-san-mei-ya-chu-shih.

錄柴　❶（名）Dai-ryō-roku. 大涼録　❷ 書 ❸ 名 ❹ 江戸時代の法令集。幕府の命令を記録したもの。

錄柴大日本國國會議事堂　❶（名）Dai-ryō-kai-ki-tō-no-koto. 大涼録日本國國會議事堂　❷ 書 ❸ 名 ❹ 明治憲法下の国会。

錄柴大日本帝國憲法　❶（名）Dai-ryō-kō-koku-zen-ji-go-roku. 大涼録日本帝國憲法　❷ 書 ❸ 名 ❹ 明治憲法の公式の解説書。

錄柴大日本帝國憲法義解　❶（名）Dai-ritsu-shi-sa-saku-shō-yō-hō. 大涼録日本帝國憲法義解　❷ 書 ❸ 名 ❹ 伊藤博文の著。

錄柴大日本帝國憲法草案　❶（名）Dai-riki-shi-shuk-ke-toku-ō-kyō. 大涼録日本帝國憲法草案　❷ 書 ❸ 名 ❹ 憲法起草委員会。

錄柴大日本帝國憲法正文　❶（名）Dai-shih-ch'u-chia-tē-tao-ching. 大涼録日本帝國憲法正文　❷ 書 ❸ 名 ❹ 憲法の公定漢文。

錄柴大日本帝國憲法發布式　❶（名）Dai-ki-nip-pon-jin. 大涼録日本帝國憲法發布式　❷ 書 ❸ 名 ❹ 明治22年の式典。

錄柴大日本帝國憲法義解　❶（名）Dai-ritsu-shi-sa-saku-shō-yō-hō. 大涼録日本帝國憲法義解　❷ 書 ❸ 名 ❹ 伊藤博文の注釈。

錄柴大日本帝國憲法正文　❶（名）Dai-riki-shi-shuk-ke-toku-ō-kyō. 大涼録日本帝國憲法正文　❷ 書 ❸ 名 ❹ 憲法の漢文正文。

錄柴大日本帝國憲法發布式　❶（名）Dai-ki-nip-pon-jin. 大涼録日本帝國憲法發布式　❷ 書 ❸ 名 ❹ 明治天皇の勅語。

錄柴大日本帝國憲法義解　❶（名）Dai-ritsu-shi-sa-saku-shō-yō-hō. 大涼録日本帝國憲法義解　❷ 書 ❸ 名 ❹ 公式注釈。

錄柴大日本帝國憲法草案　❶（名）Dai-riki-shi-shuk-ke-toku-ō-kyō. 大涼録日本帝國憲法草案　❷ 書 ❸ 名 ❹ 起草委員会。

錄柴大日本帝國憲法正文　❶（名）Dai-shih-ch'u-chia-tē-tao-ching. 大涼録日本帝國憲法正文　❷ 書 ❸ 名 ❹ 漢文正文。

錄柴大日本帝國憲法發布式　❶（名）Dai-ki-nip-pon-jin. 大涼録日本帝國憲法發布式　❷ 書 ❸ 名 ❹ 1889年の式典。

錄柴大日本帝國憲法義解　❶（名）Dai-ritsu-shi-sa-saku-shō-yō-hō. 大涼録日本帝國憲法義解　❷ 書 ❸ 名 ❹ 公式解説。

錄柴大日本帝國憲法草案　❶（名）Dai-riki-shi-shuk-ke-toku-ō-kyō. 大涼録日本帝國憲法草案　❷ 書 ❸ 名 ❹ 草案。

錄柴大日本帝國憲法正文　❶（名）Dai-shih-ch'u-chia-tē-tao-ching. 大涼録日本帝國憲法正文　❷ 書 ❸ 名 ❹ 正文。

錄柴大日本帝國憲法發布式　❶（名）Dai-ki-nip-pon-jin. 大涼録日本帝國憲法發布式　❷ 書 ❸ 名 ❹ 発布式。

錄柴大日本帝國憲法義解　❶（名）Dai-ritsu-shi-sa-saku-shō-yō-hō. 大涼録日本帝國憲法義解　❷ 書 ❸ 名 ❹

と言はれて居るが、かゝる場合に此の供養法を修すれば、越法罪の罪垢を悉く消除して、其の修行は圓明の淨法と成つて、悉地成就を得と說かれてある。行法の次第は、入道場・懺悔滅罪・普禮諸佛聖衆・淨三業・奉獻三業・佛部三昧耶・蓮華三昧耶・金剛三昧耶・鎧甲・結地界・金剛網・種發菩轉法輪・虛空藏廣大供養・寶車幣・迎請本尊・降三世忿怒金剛・上方金剛網・金剛火院界・獻閼伽・獻蓮華座・廣大不空王摩尼供養・觀本尊・大輪金剛眞言・拍掌・念珠・振鈴・所願・發遣の次第順序と成つてある。この法は毎日三時に之を行じ、時別に大輪金剛眞言を一千八十遍を誦じ、三洛叉(lakṣa十萬)を滿ずれば、悉地成就を得と說いてある。

❺平安朝時代寫 ❻(寶菩提院)(神林隆淨)

大輪金剛修業悉地成就及供養法 ❶(日) Dai-rin-kon-gō-shu-shi-chi-jō-ju-yōbi-ku-yō-hō. 國譯大輪金剛修業悉地成就及供養法 ❸存、國譯密教經軌部第四

大輪金剛總持陀羅尼經 ❶(日) Dai-rin-kon-gō-sō-ji-da-ra-ni-kyō. (支) Ta-lun-chin-kang-tsung-chih-to-lo-ni-ching. 金剛輪總持陀羅尼經、大輪金剛陀羅尼經 ❷一卷 ❸存、大正二一・一六一No. 1230、給餘二、卍續一・三・一 ❺唐代失譯

❻この經は佛陀が王舍城著闍崛山の中に居られた時に、末法の衆生が之れに依つて、善法を成就し、最後に佛果を得るに至る爲に、執金剛神に對して說かれたものである。而し此の經中の主要の部分は大輪金剛陀羅尼で有つて、七日七夜、淨香を燒き、尊像の前に於て、此の陀羅尼を誦し、且つ懺悔すれば、三業所作の一切の罪過は皆悉く消滅するに至る。この陀羅尼を誦する時に山河石壁皆震動し、諸天鬼神も悉く不安と成り、誦持者の命に服して驅使せらるゝに至り、この陀羅尼を誦する者は、遂に金剛藏菩薩の位を得、常に一切諸佛に加護せられ、一切菩薩は頓に伴侶となり、資糧に乏しき者は、誦持の功德に依つて、豐足を得、色力熾盛となると說てある。

この經の本尊曼荼羅は、中央に盧遮那佛、その左右に阿難と迦葉と、及び觀世音と大勢至との二大菩薩を侍せしめ、又左右に二金剛神を畫く、盧遮那佛の前には金の大香爐が置かれ、香烟の斷ゆることがない。

次に八印が擧げてある。謂ゆる八印とは法身印と天魔印と消滅罪障印と摧碎鬼神惡趣印と降伏天魔印と金剛刀印と金剛火輪印と金剛藏王降伏魔印とである。

尙又此の陀羅尼經を四十九遍誦ずれば、薄福短命の衆生も壽命を得、雜產の者も安產と成ることを得、その他の大病並に天災地妖等は、此の陀羅尼を一千八遍を誦すれば、それ等を皆悉く除去し得ると說いてある。

(神林隆淨)

大輪金剛總持陀羅尼經 ❶(日) Dai-rin-kon-gō-sō-ji-da-ra-ni-kyō. 國譯大輪金剛總持陀羅尼經 ❸存、國譯密教經軌部第四 ❹塚本賢曉譯

大輪金剛陀羅尼經 ❶(日) Dai-rin-kon-gō-da-ra-ni-kyō. (支) Ta-lun-chin-kang-to-lo-ni-ching. 大輪金剛總持陀羅尼經、金剛輪總持陀羅尼經 ❷一卷 ❸存、大正二一・一六一No. 1230、給餘二、卍續一・三・一 ❺唐代失譯 ❻大輪金剛總持陀羅尼經の下を見よ。 ❼(參考) 傳教大師將來越州錄

大輪明王 ❶(日) Dai-rin-myō-ō. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第三九阿娑縛抄之內

大樓炭經 ❶(日) Dai-rō-tan-gyō. 大樓炭經 起世因本經

(一)閻浮利品 (二)鬱單曰品 (三)轉輪王品 (四)泥梨品 (五)阿須倫品 (六)龍鳥品 (七)高善士品 (八)四天王品 (九)忉利天品 (十)戰鬪品 (十一)小劫品 (十二)災變品 (十三)天地成品

(一)閻浮洲品 (二)鬱多羅究留洲品 (三)轉輪王品 (四)泥獄品 (五)地獄品 (六)阿須倫品 (七)諸龍金翅鳥品 (八)四天王品 (九)三十三天品 (十)戰鬪品 (十一)劫住世品 (十二)最勝品

(支) Ta-lou-t'an-ching. 樓炭經 ❷六卷 ❸存、大正一・三七七 No. 23、給從一、卍一四・一、北666容、南680容、元672容、明北547編、清547編、麗669帙、天566帙、指629帙、法654帙、至902後、明南550積、Ut. 551 ❹西晉法立共法炬譯 ❺惠帝代(A. D. 290—306)

❻この經典の內容及び他本の關係に就ては起世因本經(本書第一卷二二七頁)を見よ。こゝには本經を主とする四本の目次對照を擧げる。

起世經 長三〇世記經

(一)閻浮洲品 (二)鬱單曰品 (三)轉輪聖王品 (四)地獄品 (五)阿須倫品 (六)龍鳥品 (七)四天王品 (八)忉利天品 (九)戰鬪品 (十)劫住品 (十一)世住品 (十二)世本緣品

(赤沼智善)

大六向拜經 ❶(日) Dai-roku-kō-hai-kyō. (支) Ta-liu-hsiang-pai-ching. 尸迦羅越六向拜經、六向拜經 ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(一泰始二—建興元 A. D. 266—313—)譯 ❼(參考) 開元錄第一五、貞元錄第二四

大論義抄 ❶(日) Dai-ron-gi-shō. ❹忠尊(治曆元—保延四 A. D. 1065—1138)撰 ❼(參考) 山家眞德撰述篇目集卷下

大論疏 ❶(日) Dai-ron-shō. (支) Ta-lun-su. ❷十一卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄2538

大論抄 ❶(日) Dai-ron-shō. ❷四卷 ❹圓珍(弘仁五—寬平三 A. D. 814—891)撰 ❼(參考) 本朝台嗣撰述書部書目、山家眞德撰述篇目集卷上

大論略說廣設辯 ❶(日) Dai-ron-ryaku-setsu-kō-setsu-ben. ❷一卷 ❸存 ❹本純 ❻(明德院)

大和上樣御尊詠 ❶(日) Dai-wa-jō-sama-gō-son-ei. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第一五 ❹慈雲(享保三—文化元 A. D. 1718—1804)

❺尊者の和歌百五十九首を集む。恐くは門下尼僧の手にて集めしか。この中に重出四首、他人の歌一首あり。集中和歌は惠日集に一三二、御詠草に一四、飲明集に一九、皓月集に九、雙龍尊者和歌集に二、葛城尊者和歌集に九出てゐる。

(高見寬藤)

太神宮啓白 ❶(日) Dai-jin-gū-keibyaku. ❸存、念佛安心篇之內 ❹延寶五寫 ❻(谷大、內餘大・二〇二〇)

太神宮啓白文 ❶(日) Dai-jin-gū-kei-byaku-mon. ❸存、弘法大師全集第一四神道部、弘法大師法鏡錄 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰

❺天長八年八月十五日伊勢太神宮に於ける啓白文と稱せられ、兩部神道の意を述べてゐる。後一條院萬壽元年七月、吉田長卜部兼延撰名法要集上奏之書中に此表白文を引證する旨、寬延四年如環寫本の奧書に識してゐる。空海撰と稱するも元より僞作である。

太神宮啓白 ❶(日) Dai-jin-gū-kei-byaku. (高見寬藤)

太神宮秘法 ❶(日) Dai-jin-gū-hihō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❻(寶龜院)

太神宮法華十講會緣起 ❶(日) Dai-jin-gū-hok-ke-jū-kō-e-en-gi. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二〇寺誌叢書第四

❺天曆四年二月某日始めて太神宮社頭の精舍に於て修められた法華十講の緣起であつて、文中に大法に値ひたるを小緣でないとし、本地垂跡の意を表して居る。大日本佛教全書所載の本緣起題下に「天曆四年二月始修、眞松房」と割註してあつて、この眞松房とは何者なるか明でないが恐らくは、法華十講の發願主で、本緣起の作者ではなからうかと考へられる。

太壇護摩壇四橛圖 ❶(日) Dai-dan-go-ma-dan-shi-ketsu-zu. 太壇護摩壇四橛圖理性院 ❷一裏 ❸存 ❺德川時代寫 ❻(寶龜院)

❷(參考) 諸宗章疏錄第三 (小田慈舟)

太神宮御相傳袈裟記 ❶(日) Dai-jin-gū-go-sō-den-ke-sa-ki. ❸存、群書類從第一五雜家部 ❹天隱 ❺北朝永德二(A. D. 1383)十二月二十八日

❻本書は別峰和尙が永德二年に伊勢大神宮參詣の砌、神宮の禰宜貞昌の靈夢によつて、昔、由良心地上人が納められた藏絲の袈裟を附興せられたことの顚末を、同年十二月二十八日に鼓山天隱の記したものである。

卽ち永德二年閏正月十日、別峰和尙が初めて伊勢大神宮に參詣し、御山蓮臺寺に數ケ月間寓居された事がある。丁度禪師の滯在中である同年四月に、禰宜貞昌は、我社に昔法燈和尙心地覺心(承元元—永仁六 A. D. 1207—1298)が納められた藏絲の袈裟があるからそれを別峰和尙に附與せよとの大神の夢告を受けたが意外の事にて半信半疑であつた。然るに同年五月十六日、再度同樣の神託があつたので貞昌は驚いて他の禰宜等と相謀り、神殿を開いた所、果して此の袈裟を得た。そこで同六月三日に神勅を傳へて別峰和尙に贈つたと記してゐる。次いで此袈裟は、彼の由良心地上人が渡宋の際(建長元年)に、五台山にて一童子から得られたもので、歸朝後、伊勢大神宮に詣でられた時、大神の乞によつて納められたものであることを述べ、又別峰が八月二日に再び大神宮に謁した際に、外宮に於ける白蛇出現の奇瑞の事などを記してゐる。

東福寺所藏の原本に、永德二年八月十三日、禰宜貞昌の筆になる「由良開山心地覺人御袈裟相傳次第」といふ一文が附せられてゐるが、之に依つて此の袈裟相傳の次第が窺はれる。

❹原本(京都、東福寺) (不破幹雄)

太神宮御本地事 ❶(日) Dai-jin-gū-go-hon-ji-no-koto. ❷一帖 ❸存 ❺足利時代寫 ❻(寶菩提院)

太神宮參詣記 ❶(日) Dai-jin-gū-san-kei-ki. ❷一帖 ❸存 ❺文明八寫 ❻(金剛三昧院)

太神宮講座次第 ❶(日) Dai-jin-gū-chin-za-shi-dai. ❷一軸 ❸存 ❹天德院舊藏(金剛三昧院)

太神宮秘法 ❶(日) Dai-jin-gū-hihō. ❷一帖 ❸存 ❺德川時代寫 ❻(寶龜院)

太神宮法華十講會緣起 ❶(日) Dai-jin-gū-hok-ke-jū-kō-e-en-gi. ❷一卷 ❸存、大日本佛教全書第一二〇寺誌叢書第四

❺天曆四年二月某日始めて太神宮社頭の精舍に於て修められた法華十講の緣起であつて、文中に大法に値ひたるを小緣でないとし、本地垂跡の意を表して居る。大日本佛教全書所載の本緣起題下に「天曆四年二月始修、眞松房」と割註してあつて、この眞松房とは何者なるか明でないが恐らくは、法華十講の發願主で、本緣起の作者ではなからうかと考へられる。

太壇護摩壇四橛圖 ❶(日) Dai-dan-go-ma-dan-shi-ketsu-zu. 太壇護摩壇四橛圖 ❷一裏 ❸存 ❺德川時代寫 ❻(寶龜院)

太壇護摩壇四橛圖 ❶(日) Dai-dan-go-ma-dan-shi-ketsu-zu. 太壇護摩壇四橛圖理性院 ❷一裏 ❸存 ❺德川時代寫 ❻(寶龜院)

內裏御造營ニ付差加ヘ金名所之寫 ❶(日) Dai-ri-go-zō-ei-ni-tsuki-sashi-kuwa-e-kim-mei-sho-no-utsushi. ❷一冊 ❸存 ❺安政二寫 ❻(龍大、別置)

代兒推擊錄 ❶(日) Dai-ji-sui-geki-roku. ❷一卷 ❸存 ❹日度撰 ❼(參考) 大日本佛教全書續刊豫定書目

代宗朝贈司空大辨正廣智三藏和上表制集 ❶(日) Dai-sō-chō-zō-shi-kū-dai-ben-shō-kō-chi-san-zō-wa-jō-hyō-sei-shū. (支) Tai-tsung-chao-tseng-ssū-k'ung-ta-pien-cheng-kuang-chi-san-tsang-ho-shang-piao-chih-chi. 表制集、大辨正三藏表制集 ❷六卷 ❸存、大正五二・八二六 No. 2120、卍續二・九・三 ❹唐圓照(養老三—貞元一六 A. D. 719—800)集

❺贈司空大辨正廣智三藏とは、不空三藏のことである。されば、一に不空三藏表制集と稱し、また略して表制集とも云ふ。

德宗の貞元年中に、貞元釋教錄等を初め、幾多の佛教資料を編纂せし當時隨一の佛教學者、圓照の編になる。玄宗・肅宗・代宗三代の殊遇をうけて、長安を中心に、朝廷を背景として活躍せし不空が、上表せし諸文

法に帰依し僧の給養を施供したものである。そのお蔭で一百四十四年に滅ぜず。

かくて仏教は「不空の使」「神僧」「聖僧」「聖中聖の法安」「帝室を中心とする帰依」「仏教の保護者」「法に依る中心となる」「仏教の保護者」「法に依る中心となる」「仏教の保護者」「法に依る中心となる

享三—文政一一 A. D. 1746—1828)述 ❻文政一一 (A. D. 1828) ❾寫本(谷大・宗大・二五八)

第十八願講義 ❶(日)Dai-jō-hachi-gwan-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❹謙琳(正德五—寶政元 A. D. 1715—1789)述 ❼(參考) 眞宗全書刊行豫定目錄

第十八願講義 ❶(日)Dai-jō-hachi-gwan-kō-gi. 念佛往生願講義 ❷一卷 ❸存 ❹深鯨(寶延二—文化一四 A. D. 1749—1817)述 ❾寫本(龍大) 明治二四刊(谷大・宗小・二九九)

第十八願講義 ❶(日)Dai-jō-hachi-gwan-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(谷大・宗大・三八二)

第十八願就正記宿善論 ❶(日) Dai-jō-hachi-gwan-jō-shō-ki-shuku-zen-ron. ❷一卷 ❸存 ❹僧鎧(—天保一一 A. D. 1840)述 ❾寫本(龍大・一二一二・九八)

第十八願十條 ❶(日)Dai-jō-hachi-gwan-jū-jō ❷一卷 ❹慧然(元祿六—明和元 A. D. 1693—1764)作 ❼(參考) 淨土眞宗教典志第二

第十八願十條釋義 ❶(日)Dai-jō-hachi-gwan-jū-jō-shaku-gi. ❷三卷 ❸存 ❾寫本(谷大・宗大・一五三三)

第十八願成就宗要文 ❶(日)Dai-jō-hachi-gwan-jō-jū-shū-yō-mon. 第十八願成就之文宗要文 ❷一卷 ❸存 ❹慧空(正保元—享保六 A. D. 1644—1721)述 ❾刊本(立大・A四〇・七七)(谷大・宗小・三二・一一二)

第十八願成就文聞薰鈔 ❶(日) Dai-jō-hachi-gwan-jō-jū-no-mon-kun-shō. ❷一卷 ❸存 ❾寫本(龍大・一二一二・一一二)

第十八願成就之文宗要文 ❶(日) Dai-jō-hachi-gwan-jō-jū-no-mon-shū-yō-mon. 第十八願成就宗要文 ❷一卷 ❸存 ❹慧空(正保元—享保六 A. D. 1644—1721)述 ❾刊本(立大、A四〇・七七)(谷大、宗小・三四)

第十八願隨聞記 ❶(日) Dai-jō-hachi-gwan-zui-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❹鼎龍(—天明六 A. D. 1786)述 ❾寫本(龍大、研眞)

第十八願隨聞記 ❶(日) Dai-jō-hachi-gwan-zui-mon-ki. ❷一卷 ❸存 ❺文政一三寫 ❾(谷大、宗大・三九七六)

第十八願刀刀記 ❶(日) Dai-jō-hachi-gwan-tō-tō-ki. 十八願刀刀記 ❷四卷 ❸存、眞宗叢書第四 ❹龜龍(明和六—天保一一 A. D. 1769—1841) ❻四十八願中玉本願と稱せらるゝ生因の願たる第十八願を解釋せるものである、題して刀刀と云ふは深厚にして涯底なきこの本願の深意を探りてものするところは宛かも竊語に似たりとの意にて名づけられたものである。云く「其衆生因果の法(中略)深なり、廣なり、邈なり、遠なり、玄なり、微なり、十方三世執れか企望し、之を測るものあらん、十方三世尚ほ既に測るものなし、況んや龍に於てをや、而るに今この事あるは實に竊語の分のみ」内容は第一卷に興由、次第、得名、願義、正釋の五門を擧げ、卷二以下隨文解釋してある。龍華學說の義旨を知る規矩たり。 (大原性實)

第十八願聞記 ❶(日)Dai-jō-hachi-gwan-mon-ki. 念佛往生願耳提記 ❷一卷 ❸存 ❹深鯨(寶延二—文化一四 A. D. 1749—1817) ❾寫本(谷大、宗大・三六四〇)

第十六章十二轉聲事 ❶(日)Dai-jō-roku-shō-jū-ni-ten-jō-no-koto. ❷一帖 ❸存 ❹宥快(貞和元—應永二三 A. D. 1345—1416)口 ❺足利時代寫 ❾(寶龜院)

第二回時局講演集 ❶(日)Dai-ni-kwai-jū-kyoku-kō-en-shū. ❷一卷 ❸存 ❹佛教聯合會編 ❺大正八刊 ❾(立大、B一八・一八)

第二劫莊嚴論引文科判第三劫眞言門諸師異說評文 ❶(日)Dai-ni-kō-shō-gon-ron-in-mon-kwa-han-dai-san-kō-shin-gon-mon-sho-shi-i-setsu-hyō-mon. ❷一冊 ❸存 ❾寫本(高大、寄・一・二四)

第二劫莊嚴論御引證科文 ❶(日)Dai-ni-kō-shō-gon-ron-go-in-shō-kwa-mon. ❷一帖 ❸存 ❺文政八寫 ❾(寶龜院)

第二劫莊嚴論御引證科文第三劫眞言門分區諸師異說評 ❶(日)Dai-ni-kō-shō-gon-ron-go-in-shō-kwa-mon-dai-san-kō-shin-gon-mon-bun-ku-sho-shi-i-setsu-hyō. ❷一冊 ❸存 ❺文政六寫 ❾(高大、一・五七)

第二四門經 ❶(日)Dai-ni-shi-mon-kyō. (支)Ti-er-sa-mên-ching. 十二門經 ❷一卷 ❹失譯 ❻長阿含經の抄出。❼(參考) 出三藏記第四、開元錄第一六、貞元錄第二六

第二重 ❶(日) Dai-ni-jū. 大疏第二重 ❷一紙 ❸存 ❺德川時代寫 ❾(寶龜院)

第二重私口決 ❶(日) Dai-ni-jū-shi-ku-ketsu. ❸存 ❹印融(永享七—永正一六 A. D. 1435—1519)口決 ❾寫本(金剛三昧院)

第二重七箇大事口傳 ❶(日)Dai-ni-jū-shichi-ka-dai-ji-ku-den. ❷一卷 ❸存 ❺文久二刊 ❾(比叡山華藏院藏)

第二重七大事口傳 ❶(日) Dai-ni-jū-shichi-dai-ji-ku-den. ❷一卷 ❸存 ❹心寶口傳 ❾(眞如藏)

第二重授手印講義 ❶(日)Dai-ni-jū-ju-shu-in-kō-gi. ❷一卷 ❸存 ❺安政六寫 ❾(正大、一五五二・一二〇)

第二重目錄 ❶(日)Dai-ni-jū-ma-ku-roku. ❷一帖 ❸存 ❺慶長一〇寫 ❾(寶善提院)

第二心境義 ❶(日)Dai-ni-shin-kyō-gi. ❷一冊(下卷) ❸存 ❹登舜述 ❾寫本(龍大、研佛)

第二傳密記 ❶(日) Dai-ni-denmitsu-ki. ❷一卷 ❸存 ❹宗觀(大同四—元慶八 A. D. 809—884)(一說云淳祐)撰 ❻弘法大師を根本とし、禪林寺宗叡を後入唐と聽する故、これを第二傳と名付く、金剛界法に就きて諸口決を記せり。但し一本に延喜四年八月二十八日求法僧淳祐と記し、外題下に石山と註せる故に淳祐說出ず。

第二佛法の世界 ❶(日) Dai-ni-bup-pō-no-se-kai. ❷一卷 ❸存 ❹田中定夫著 ❺昭和七刊 ❾東京佛法の世界社

第八回大藏會圖錄附解說 ❶(日) Dai-hachi-kwai-dai-zō-e-zu-roku-tsuketari-kai-setsu. ❷一卷 ❸存 ❹日下無倫編 ❺大正一二刊 ❾(龍大、研佛)

第八回大藏會展觀目錄 ❶(日) Dai-hachi-kwai-dai-zō-kō-ten-kwam-mokuroku. ❷一卷 ❸存 ❺大正一一刊 ❾京都佛教各宗學校聯合會

提清經 ❶(日)Dai-i-kyō. (支) Ti-wei-ching. 提謂波利經 ❷二卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄1788

提違經 ❶(日) Dai-i-kyō. (支) Ti-wei-ching. 提謂波利經 ❷二卷 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄1789

提謂經 ❶(日) Dai-i-kyō. (支) Ti-wei-ching. ❷二卷 ❻疑僞經 ❼(參考) 法經錄第四、仁壽錄第四、靜泰錄第四

提謂經 ❶(日) Dai-i-kyō. (支) Ti-wei-chiog. ❷一卷 ❹失譯 ❼(參考) 出三藏記第四、法經錄第一、仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第五、第一五、貞元錄第八、第二五

提謂經考 ❶(日)Dai-i-kyō-kō. ❷一卷 ❸存 ❹大安 ❾寫本(谷大)

提謂波利經 ❶(日)Dai-i-ha-ri-kyō. (支)Ti-wei-po-li-ching. ❷二卷 ❹曇靖撰 ❺宋孝武帝時 ❻疑僞經。❼(參考) 出三藏記第五、內典錄第一〇、武周錄第一五、開元錄第一八、貞元錄第二八

提謂問事經 ❶(日) Dai-i-mon-ji-kyō. (支) Ti-wei-wên-shih-ching. 提謂波利經 ❷二冊 ❸存 ❼(參考) 奈良朝現在一切經疏目錄1790

提耳訓 ❶(日)Dai-ni-kun. ❹默庵周論(—應安六 A. D. 1373) ❼(參考) 日本禪林撰述書目

提婆達多經 ❶(日)Dai-ba-da-ta-kyō. 現代意譯提婆達多經 ❸存、現代意譯根本佛教聖典叢書第五冊一阿含經抄 ❹泉芳璟譯

提婆達多品經 ❶(日)Dai-ba-da-ta-hon-kyō. (支)Ti-p'o-ta-to-p'in-ching. ❷一卷 ❻妙法蓮華經第五卷の抄出。❼(參考) 法經錄第二、仁壽錄第三、靜泰錄第三、開元錄第一六、貞元錄第二六

提婆傳 ❶(日)Dai-ba-den. (支)Ti-p'o-ch'uan. 提婆菩薩傳 ❷一卷 ❸存、大正五〇・一八六 No. 2048、鎌錄九、卍二七・二、北1037畫、南1062畫、元1049畫、明北1455法、清1455法、麗1047畫、天1036畫、法1024畫、至1487相、Nj. 1462 ❹姚秦鳩摩羅什(建元二—義熙九 A. D. 344—413 一說弘始一一或義熙中寂)譯 ❻提婆菩薩傳の下を見よ。

提婆菩薩釋楞伽經中外道小乘涅槃論 ❶(日)Dai-ba-bo-satsu-shaku-ryō-ga-kyō-chū-ge-dō-shō-jō-ne-han-ron. (支)Ti-p'o-p'u-sa-shih-leng-ch'ieh-ching-chung-wai-tao-hsiao-ch'êng-nieh-p'an-lun. 提婆菩薩涅槃論、楞伽外道論、外道小乘涅槃論、釋下道小乘涅槃論、破外道涅槃論、破外道小乘涅槃論、破外道涅槃論 ❷一卷 ❸存、大正三二・一五六 No. 1640、縮參五、卍二二・五、北650臨、南664臨、元656臨、明北1253邊、清1253邊、麗649命、天650臨、指664命、法624命、至1373甲、明南1397華、Nj. 1250 ❹菩提流支譯 ❺後魏永平元—天平二(A. D. 508—535)

❻別に楞伽外道論、外道小乘涅槃論、釋外道小乘涅槃論、破外道小乘涅槃論、破外道涅槃論などとも云ふ。小乘及外道の涅槃因を二十種擧げてこれ等を虛妄分別であるとなすのが本書の內容である。但し一々に對しては論破を說いてゐない。二十種とは、一者小乘外道論師、二者方論師、三者風論師、四者遮陀論師、五者伊賒那論師、六者裸形外道論師、七者昆世師論師、八者苦行論師、九者女人眷屬論師、十者行苦行論師、十一者淨眼論師、十二者摩陀羅論師、十三者尼犍子論師、十四者僧佉論師、十五者摩醯首羅論師、十六者無因論師、十七者時論師、十八者服水論師、十九者口力論師、二十者本生安荼論師である。第一は諸受陰盡が涅槃の因であるとなす說、第二は方が世界の生住滅の因であるから常住で涅槃の因であるとなす說、第三は風を同樣の理由で涅槃の因となす說、第四は那羅延天の臍中から大蓮華が生じ、それから梵天組公が、梵天から一切命無命物及び四姓等が生ずる。故に梵天を供養し彼處に生れ得るのが

沙弥である。ら、其天は舎住で沙弥の因で、四姓の生じ方は梵仙人説陀のあるとする説で、四姓の原人説（一〇・九〇・一一二）の原人説である。第五は伊羅那は一切万有神を作り、それが沙弥の因となる説で、伊羅那は梵天の異名である。第六は微塵は種々の形相を見て沙弥となす説、第七は自然は舎住で他一切物を生ずるから、それが沙弥の因となる説、第八は今世間諸種種差別は人を沙弥となす説、第九は婆羅門婆羅門天が人女を作り、これ等の女人から諸天人類一切が生れたから、女人が舎住で沙弥の因となす説、第十は所聞種種差別を沙弥となす説、第十一は所聞種種差別和合を沙弥となす説、第十二は諸種種天は一切衆生中の尊勝、一切水中の大海、一切仙山中の大須彌山王、一切水中の大海、一切人中の婆尼婆羅弟尼で あるので、一切は彼から生じ彼に還反するから、これが沙弥の因である と なす説である。この文の中には婆羅門婆羅門多中の有名なバガヴァッドギーター（頌）、註は足令篇、婆羅門教とを以て片目仏教ちゃ婆羅門教（Kāṇadeva）と呼ばれた。博識学者に依ると提婆は南天竺の人、婆羅門教徒の門弟として一代の盛名を誇せた提婆菩薩の事記。提婆は龍樹と共に三論宗の三祖にして大に教宗を興隆したる人。本書に依れば、提婆は国人の大自在天像に頂礼ありとなし、詩作する者頗る多き天は。本書に依れば、提婆は国人の大自在天像を見て心平かならず、仍りて世民の差心を非難ふんと欲し、一日国人を天廟に集め、日月前にて像の一眼を抉出し、以て其の言論なりき所を證したりと。提婆は後、信徒雲集国に至り都城に就て教宗の講説を始めてその説法の効子となりて各地に遊行す。後、仏法氏族に就て外道と一大論議をなしてこれを征服せしに、其天は舎住で沙弥の因となす説で、これ等は恐らく四論師三、十論師摩訶六、七論師摩訶六の説に相当する。

提婆菩薩傳　❶(日)Dai-ba-bo-satsu-den.（支）T'i-p'o-p'u-sa-ch'uan. 提婆菩薩伝　❷一巻　❸存　大正五〇・一八六 No. 2048　編纂元、卍二七・二一、北1037黄、南1062黄、元1049黄、明北1455洛、南1455洛、南1047黄、天1036黄、法1024黄、至1487相、Nj. 1462　❹龍樹菩薩傳作（姚秦元二一編纂元 A. D. 344—413）（完成紀初一一提婆菩薩中説）説

❺龍樹菩薩の門弟として一代の盛名を誇せた提婆菩薩の事記。提婆は龍樹と共に三論宗の三祖にして大に教宗を興隆したる人。本書に依ると提婆は南天竺の人、婆羅門種、姓は足令篇、婆羅門教徒なるを以て片目仏教ちゃ婆羅門教（Kāṇadeva）と呼ばれた。博識学者に依ると提婆は国人の大自在天像に頂礼ありとなし、詩作する者頗る多き天は。本書に依れば、提婆は国人の大自在天像を見て心平かならず、仍りて世民の差心を非難ふんと欲し、一日国人を天廟に集め、日月前にて像の一眼を抉出し、以て其の言論なりき所を證したりと。提婆は後、信徒雲集国に至り都城に就て教宗の講説を始めてその説法の効子となりて各地に遊行す。後、仏法氏族に就て外道と一大論議をなしてこれを征服せしに、其天は舎住で沙弥の因となす説で、これ等は恐らく四論師三、十論師摩訶六、七論師摩訶六の説に相当する者の説に相当する。

❻(参考)　三宝紀巻六、内典録巻三、開元録巻四、貞元録巻六（定日昌撰）

四宗綱要若蓮華経釈中外道小乗　❶(日)Dai-ba-bo-satsu-ha-ryō-ga-kyō-chū-ge-dō-shō-jō-shi-shū-ron.（支）T'i-p'o-p'u-sa-p'o-lêng-ch'ieh-ching-chung-wai-tao-hsiao-ch'êng-ssū-tsung-lun. 提婆菩薩伝　❷一巻　❸存　大正三一・五五 No. 1639　編纂元、卍二二・五、北649黄、南663黄、元655黄、明北1252洛、法1252洛、南652合、天649黄、相603合、法625合、至1372中、明南1396黄、Nj. 1259　❹若蓮華経釈中外道小乗四宗綱要　❺後魏永平元—天平二（A. D. 508—535）

❻別に外道小乗四宗綱、又は外道小乗四宗綱、又に外道小乗四宗綱と云ふ。内容は一切諸仏不仏は提婆菩薩四宗綱に依つて外道を四宗に分類し一々を説明してゐるので ある。四宗とは一切法一を説く説綱、一切法異々となす説綱、一切法仏と云ふ尼犍子、一切法不仏と説く若提子を云ふ。即ち説綱は我是二法は一なりと立てるので、丁度火と熱との二法無別不可説の如く、実は白と黒に對して此れは白、此れは黒と云ふことが不可説であるから云ふのが我を離れば不可得であるから云ふのが我を離れば不可得であるから云ふのが、外道の説元来無明なる者の説に頼れる前、三論宗諸師の一なる百論二十品を説つてゐる。本書は要するに提婆菩薩の真意説の一である。

❼(参考)　三宝紀巻六、内典録巻三、開元録巻四、貞元録巻六（定日昌撰）

の説法を知る上に好資料を提供する者である。

❼(参考)　三宝紀巻六、七論師摩訶六、十論師摩訶六、七論師摩訶六の説に相当する。

提婆菩薩傳　❶(日)Dai-ba-bo-satsu-den.（支）T'i-p'o-p'u-sa-ch'uan. 提婆菩薩伝　❷一巻　❸存　大正五〇・一八六 No. 2048　編纂元、卍二七・二一、北1037黄、南1062黄、元1049黄、明北1455洛、南1455洛、南1047黄、天1036黄、法1024黄、至1487相、Nj. 1462　❹龍樹菩薩傳作（姚秦元二一編纂元 A. D. 344—413）（完成紀初一一提婆菩薩中説）説

❺龍樹菩薩の門弟として一代の盛名を誇せた提婆菩薩の事記。提婆は龍樹と共に三論宗の三祖にして大に教宗を興隆したる人。本書に依ると提婆は南天竺の人、婆羅門種、姓は足令篇、婆羅門教徒なるを以て片目仏教ちゃ婆羅門教（Kāṇadeva）と呼ばれた。博識学者に依ると提婆は国人の大自在天像に頂礼ありとなし、詩作する者頗る多き天は。本書に依れば、提婆は国人の大自在天像を見て心平かならず、仍りて世民の差心を非難ふんと欲し、一日国人を天廟に集め、日月前にて像の一眼を抉出し、以て其の言論なりき所を證したりと。提婆は後、信徒雲集国に至り都城に就て教宗の講説を始めてその説法の効子となりて各地に遊行す。後、仏法氏族に就て外道と一大論議をなしてこれを征服せしに、其天は舎住で沙弥の因となす説で、これ等は恐らく四論師三、十論師摩訶六、七論師摩訶六の説に相当する者の説に相当する。

❻(参考)　三宝紀巻六、内典録巻三、開元録巻四、貞元録巻六（定日昌撰）

四宗綱要若蓮華経釈中外道小乗　❶(日)Dai-ba-bo-satsu-ha-ryō-ga-kyō-chū-ge-dō-shō-jō-shi-shū-ron.（支）T'i-p'o-p'u-sa-p'o-lêng-ch'ieh-ching-chung-wai-tao-hsiao-ch'êng-ssū-tsung-lun. 提婆菩薩伝　❷一巻　❸存　大正三一・五五 No. 1639　編纂元、卍二二・五、北649黄、南663黄、元655黄、明北1252洛、法1252洛、南652合、天649黄、相603合、法625合、至1372中、明南1396黄、Nj. 1259　❹若蓮華経釈中外道小乗四宗綱要　❺後魏永平元—天平二（A. D. 508—535）

❻別に外道小乗四宗綱、又は外道小乗四宗綱、又に外道小乗四宗綱と云ふ。内容は一切諸仏不仏は提婆菩薩四宗綱に依つて外道を四宗に分類し一々を説明してゐるので ある。四宗とは一切法一を説く説綱、一切法異々となす説綱、一切法仏と云ふ尼犍子、一切法不仏と説く若提子を云ふ。即ち説綱は我是二法は一なりと立てるので、丁度火と熱との二法無別不可説の如く、実は白と黒に對して此れは白、此れは黒と云ふことが不可説であるから云ふのが我を離れば不可得であるから云ふのが、外道の説元来無明なる者の説に頼れる前、三論宗諸師の一なる百論二十品を説つてゐる。本書は要するに提婆菩薩の真意説の一である。

❼(参考)　三宝紀巻六、内典録巻三、開元録巻四、貞元録巻六（定日昌撰）

提婆　❶(日)Dai-yō.　❷五巻　❸存

名所行録の ❷説話(説話) ❸説話 ❹説話 ❺説話 ❻説話 ❼説話 ❽説話 ❾説話 ❿説話 ⓫説話 ⓬説話 ⓭説話 ⓮説話 ⓯説話 ⓰説話 ⓱説話 ⓲説話 ⓳説話 ⓴説話 ㉑説話 ㉒説話 ㉓説話 ㉔説話 ㉕説話 ㉖説話 ㉗説話 ㉘説話 ㉙説話 ㉚説話 ㉛説話 ㉜説話 ㉝説話 ㉞説話 ㉟説話 ㊱説話 ㊲説話 ㊳説話 ㊴説話 ㊵説話 ㊶説話 ㊷説話 ㊸説話 ㊹説話 ㊺説話 ㊻説話 ㊼説話 ㊽説話 ㊾説話 ㊿説話 (1)説話 (2)説話 (3)説話 (4)説話 (5)説話 (6)説話 (7)説話 (8)説話 (9)説話 (10)説話 (11)説話 (12)説話 (13)説話 (14)説話 (15)説話 (16)説話 (17)説話 (18)説話 (19)説話 (20)説話 (21)説話 (22)説話 (23)説話 (24)説話 (25)説話 (26)説話 (27)説話 (28)説話 (29)説話 (30)説話 (31)説話 (32)説話 (33)説話 (34)説話 (35)説話 (36)説話 (37)説話 (38)説話 (39)説話 (40)説話

（歴史人名）

題目和尚 ❶（名）Dai-moku-wa-dan-shō. ❷ 仏教語。題目唱題を説く僧侶。

題目唱題 ❶（名）Dai-mon-zui-mon-ki. ❷ 鎌倉時代の僧日蓮が題目唱題を説いて回った記録。

題目体系 ❶（名）Dai-moku-tai-hon-jaku-ron. ❷ 仏教用語。

題目体系学 ❶（名）Dai-moku-tai-hon-jaku-gaku. ❷ 仏教用語。

題目体路要 ❶（名）Dai-moku-shō-ryaku-yō. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-mi-chi. ❷ 鎌倉時代の僧。

題目目録 ❶（名）Dai-moku-bei-shō. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-go-hi-ku. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-go-nyō-mi-sō. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-go-dem-bō-kwan-jō-ki. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-go-in-zō-den-ju-moku-roku. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-go-ji-zō-in-ryō-den-ju-moku-roku. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-go-mono-gatari-ki. ❷ 仏教用語。

題目和尚 ❶（名）Dai-go-ji-zō-in-ryō-den-ju-moku-roku

高井田長榮寺世代屈 ❶(日)Taka-i-da-chō-ei-ji-se-dai-todoke. ❷一卷 ❸存、懸雲草者全集第一七雜篇八之下 ❺明治四年六月長榮寺住職蓮堂より堺縣廳へ屆出でたる世代である、尙同五年八月屆出の住侶數及地所反別をも附記してゐる。 ❹原本(長榮寺所藏) (高見寬應)

高雄記 ❶(日)Taka-o-ki. ❷一冊 ❸存 ❹元文四寫 ❹(寶菩提院)

高雄口訣 ❶(日)Taka-o-ku-ketsu. 金剛界曼荼羅次第法 ❷一卷 ❸存、大正七八・二二 No. 2466、日本大藏經眞言宗事相章疏 ❹眞濟(延曆一九—貞觀二 A. D. 800—860)撰 ❺天長年間(A. D. 824—833) ❻金剛界曼荼羅次第法の下を見よ。 ❹文龜三寫(金剛三昧院)德川時代寫(寶龜院)

高雄口訣同別行鈔 ❶(日)Taka-o-ku-ketsu-dō-betsu-gyō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)口決、眞濟(延曆一九—貞觀二 A. D. 800—860)記 ❺寶永二寫 ❹(谷大、餘大・一〇七二)

高雄灌頂記 ❶(日)Taka-o-kwan-jō-ki. 高雄灌頂交名帳 ❷一卷 ❸存、弘法大師全集第一〇拾遺雜集 ❹空海(寶龜五—承和二 A. D. 774—835)撰 ❺弘仁三—四(A. D. 812—813) ❻空海が高雄山神護寺に於て灌頂を授けたる人々と投華得佛名とを列記したるもの。即ち此の中に弘仁三年十一月十五日金剛界灌頂四名、同年十二月四日胎藏灌頂大僧二十二人沙彌四十人近士四十二人童子等七十四人晉歷人二十人合計一百九十八人、弘仁四年三月六日金剛界灌頂十九人の名が記されてある。高雄山神護寺に著者眞蹟本を藏す、但し此の原本に就て大部分は餘人の筆とし、或は全部餘人の筆とする說もあるけれど、空海の眞筆とする說が多い。 ❼(參考) 弘法大師年譜第五 ❹原本(神護寺) (吉祥眞雄)

高雄山灌頂曆名 ❶(日)Taka-o-san-kwan-jō-ryaku-myō. ❷一卷 ❸存 ❺寫文三、寶永七寫 ❹(比叡山淨土院藏)

高雄山寺弘仁三年灌頂記 ❶(日)Taka-o-san-ji-kō-nin-san-nen-kwan-jō-ki. ❷一卷 ❸存 ❹寂源 ❺延寶七刊 ❹(龍大、研佛)

高雄山神護國祚寺略誌 ❶(日)Taka-o-san-jin-go-koku-so-ji-ryaku-shi. ❷一卷 ❸存 ❹高雄山神護國祚寺編 ❺明治四〇刊 ❹(高大、一・二二二)

高雄山神護寺緣起 ❶(日)Taka-o-san-jin-go-ji-en-gi. ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三、國文東方佛教叢書第一一六 ❹賢忠 ❺永應二(A. D. 1653) ❻本書は從三位賢忠公が永應二年夏、和氣氏の子孫、半辯護庵瑞堅の依頼に依り、京都洛西高雄神護寺を和氣淸麻公が草創の緣起より、近く德川の初政晋海僧正、并に護山支屋烏寺中興龍嚴上人の神護寺再興に至る迄の間の變遷、沿革を廣く道俗に知らしむとの意を以て、假名文にて略記したるものなり。編者の材料が、物語、傳說にも依りたれば、文中不可解の記事なきにしもあらざるも、之れ古來社寺緣起の常なれば、本書のみを咎むべからざるなり。尙本書の記事について一言すべきことあり、其れは神護寺國費建造物大師堂(納涼房)の建築年代について或は鎌倉時代、或は室町時代と云ひ異說決せざるが如きも、本書の中に再興の志淺からざりしを源家康公きこしめされ、國家安寧、靈場再興の爲とて、更に梅畑、中川の二鄕(二百十餘石)を寄附し、又板倉少將伊賀守勝重朝臣、八幡大神の社并に鐘樓等を造營せり、細川宰相敎越中權守忠興朝臣も力を加へ大師の骨堂を建立す。

とあるは一種の暗示を與へ、室町時代建築說に一證を增すものにはあらざるか。 (土宜覺了)

高雄山神護寺官符 ❶(日)Taka-o-san-jin-go-ji-kwan-pu. ❸存、改定史籍集覽第一二、大日本佛教全書寺誌叢書第三 ❻本書は、(一)寬喜二年閏正月十日附の高雄山神護寺へ官使を遣し、舊跡を糺し、且つ四至の堺に勝示を打ち、樵採漁獵を禁止すとの文書と、(二)天長元年九月二十七日附の高雄寺を定額寺となし得度經費等を定むべしの文書と、(三)天長九年九月二十七日附の神願寺の傳二世切田を高雄寺に寄附替をなし更に二世を延ばし得との三文書をまとめて一卷となし、何時の代よりか御室仁和寺に傳寫せしものの書名なり。三文書の內容は其題名にて知るべければ、今一一解說の蛇足を加ふまでもなし。 (土宜覺了)

高雄山中興記 ❶(日)Taka-o-san-chū-kō-ki. ❸存、大日本佛教全書第一一九寺誌叢書第三、國文東方佛教叢書第二六、史籍集覽第一二 ❻本書は文覺上人が『治承二年三月に高雄山に貴賤の助成を得て一院を建立せし勸進願文』と『木幡淨妙寺律僧と榮海僧正との神護寺十珠勝の詩歌』と『治承三年三月高雄興隆についての後白河院えの上奏文』と『治承四年〇月六日付の淸盛入道并一類を早く追討の院宣』と『正治二年正月十日付の文覺上人が源頼家えの諫言的消息』と斗藪勸進記とで『高雄山神護寺が特殊の靈場にて、我國代々の聖帝も之れに歸仰したれば、天下の道俗の巡禮登山を勸進したる』文とを錄したるものなり。 (土宜覺了)

高倉學寮記錄 ❶(日) Taka-kura-gaku-ryō-ki-roku. ❷一卷 ❸存 ❺明治一五寫 ❹(谷大、宗大・二四八一)

高倉學寮講者人名並年々講簿 ❶(日) Taka-kura-gaku-ryō-kō-jō-jin-mei-narabini-nen-nen-kō-bo. ❷一卷 ❸存 ❺自寶曆五至明治一四寫 ❹(谷大、宗大・四一四)

高倉學寮三講師實名錄 ❶(日) Taka-kura-gaku-ryō-san-kō-shi-hin-mei-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・一一六二)

高倉學寮諸規則 ❶(日)Taka-kura-gaku-ryō-sho-ki-soku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・二四七九)

高倉學寮諸規等類纂 ❶(日)Taka-kura-gaku-ryō-sho-ki-tō-rui-san. ❷一卷 ❸存 ❹香山院手控寫本(谷大、宗大・一一六二)

高倉學寮諸條規並雜錄 ❶(日) Taka-kura-gaku-ryō-sho-jō-ki-narabini-zatsu-roku. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・二四七二)

高倉學寮諸制條 ❶(日)Taka-kura-gaku-ryō-sho-sei-jō. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大、宗大・二四八〇)

高倉學寮歷年記事 ❶(日) Taka-kura-gaku-ryō-reki-nen-ki-ji. ❷一卷 ❸存 ❺自天明七至寬政四寫 ❹(谷大、宗大・二四七八)

高倉大學寮沿革誌 ❶(日) Taka-kura-dai-gaku-ryō-en-kaku-shi. ❷一卷 ❸存 ❹本山報告掛編 ❹寫本(谷大、宗大・二四八二)

高田繪傳撮要鈔 ❶(日) Taka-da-e-den-satsu-yō-shō. ❹(晉、ら・四・中・二二一)

高田開山親鸞聖人正統傳 ❶(日)Taka-da-kai-san-shin-ran-shō-nin-shō-tō-den. 正統傳、高田正統傳、親鸞聖人正統傳、高田親鸞聖人正統傳 ❷六卷 ❸存、親鸞傳叢書之內 ❹良空(寬文九—享保一八 A. D. 1669—1733) ❺正德五(A. D. 1715) ❻本書は良空が所有史料を蒐集し、編年體に記述した親鸞傳であるが、その中心史料として凡例に擧げる顯智傳を初め下野傳・正申記・至德記・五代記等は今日發見されない、餘りに明細なる記事に加へて高田正統をも記しあるを以て、却て信を失するの嫌あるも、親鸞傳中整備せるものとして依然信用されてゐる。內容は(卷一)綱領・聖人俗姓系圖・外戚・藤原氏・入胎・降誕—二十四歲 (卷二) 二十五歲—二十九歲 (卷三) 三十歲—四十四歲 (卷四) 三十五歲—四十四歲 (卷五) 四十五歲—五十四歲 (卷六) 五十五歲—九十歲・滅後・餘論等である。享保二年洪音の序文及慧照の跋文を附して開版された。 ❼(注釋) 高田開山正統傳辨要十卷、正統傳私評辨要一卷(寂玄)、正統傳或問一卷、正統傳辨說一卷、正統傳鈔七卷(良空) (參考) 非正統傳一卷(玄智) ❺享保二刊 ❹(正大、一六一・七) (生桑完明)

高田口傳鈔 ❶(日) Taka-da-kuden-shō. 口傳鈔 ❷二卷 ❸存 ❹專空編 ❺康永二(A. D. 1343) ❺寬保三刊 ❹(谷大、宗大・一一二二)(龍大、一一四二・一)

高田家祕傳 ❶(日)Taka-da-ke-hiden. ❷一卷 ❸存 ❹寫本(谷大)

高田五帖勸章 ❶(日) Taka-da-go-jō-kwan-shō. ❷一帖 ❸存 ❻浮土眞宗教典志第二に曰く「初四卷題目御書。第五卷題曰報恩講御書。撰錄眞師及高田眞慧以下諸主消息。專修寺藏板轉卷尾、有奉押、爲記今檢眞師消息取諸末燈鈔御消息集。其餘消息多僞。蓮師勸章。眞忌諸章屢用式歎德文等語。安心率同門。勸勵帰佛。眞師二十七章。眞慧。廻眞。廻慧。廻眞。各四章。廻秀十七章。都計六十章。廻秀段于寬文六年。則編集未遑可見。云云。」

高田五帖勸章 ❶(日) Taka-da-go-jō-kwan-shō. ❷一帖 ❹圓邀(延享三—文政二 A. D. 1746—1819)作 ❻浮土眞宗教典志第二に曰く「叙述持戒無戒並乘。佛願往生無有差別。故眞佛顯智持戒精嚴。專空示同在家。如圓邀斷末肉。唯恐末徒陷放逸。示慚愧一端。之備專修寺藏板。」云云。

高田御書 ❶(日) Taka-da-go-sho. ❷一卷 ❸存 ❹(龍大、研眞)

高田御書 ❶(日) Taka-da-go-sho. ❷六卷 ❸存 ❹眞慧(永享六—永正九 A. D. 1434—1512) ❹(龍大、一一四二・五)

高田御書 ❶(日) Taka-da-go-sho. ❷一卷 ❸存 ❹圓邀 ❹(龍大、研眞)

高田廣銘文 ❶(日)Taka-da-kō-mei-mon. 尊號眞像銘文、銘文 ❷二卷 ❸存、大正八三・六七九 No. 2653、眞宗和語寶典、眞宗聖教大全卷上、眞宗法要第一、眞宗聖典全書和文部、假名聖教八十八部、假名聖教(端坊本)、眞宗假名聖教第一、眞宗聖典之內、異義集第七—弘長二 A. D. 1173—1262) ❺尊號眞像銘文の下を見よ。

高田三祖傳 ❶(日) Taka-da-san-so-den. 天覽御傳、叡覽御傳、三祖傳 ❷一卷 ❸存、眞宗全書第六八 ❹圓邀(延享三—文政二 A. D 1746—1819)撰 ❺明和二(A. D. 1765) ❻本書は高田山專修寺第十八世圓邀のそのところ、內容を第一祖高田聖人傳、第二祖眞慧上人傳、第三祖井東上人傳の三章に分つ。開山親鸞第二世眞佛第三世顯智の史傳を漢文を以て綴り各章終に贊文を加へてある。專ら當時流布の史傳を採擇したものであるから、近時發見の根本史料とは龜齡する點も散見される。例へば眞佛顯智に第四祖大內上人專空を加へて面授三傳とする如きである。高田律興當時代の撰述で勢ひ親鸞の在家示同に對し眞佛顯智の持戒精嚴を說いて、隱類應同の化風が力說されてある。

圓邀は明和二年七月之を撰し、九月下旬天台座主二品尊眞親王の序を附して開版された。享和元年五月光格天皇本書を天覽仰出され、同六月叡覽あり、之を稱美あつて橘香合を賜つたので「天覽御傳」とも「叡覽御傳」とも稱されてゐる。 ❼(注釋) 三祖傳序調點篇一卷、高田三祖傳序科解一卷、高田三祖傳集覽記十二卷、同講述記二卷(眞淳)。同序分科註一卷(俊識)。同年講吟一卷(泰壽) ❺明和二刊 ❹(谷大、宗大・二九四四)(龍大、一一九六二・一三)

高田三祖傳集成記 ❶(日) Taka-da-san-so-den-shū-jō-ki. 高田集成記 ❷八卷 ❸存 ❹香嚴眞淳(元文元—文化四 A. D. 1736—1807)述 ❹寫本(龍大) (生桑完明)

高田三祖傳序科解 ❶(日) Taka-da-san-so-den-jo-kwa-ge. ❷一卷 ❸存

高田第十八世印旅法器利
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-dai-jū-hachi-se-in-se-hō-gi-ri ❶ 江戸中期の印旅法器利。

高田親鸞聖人遺蹟巡拝
（宗教）
Taka-da-shin-ran-shō-nin-den. ❶ 親鸞聖人の遺蹟巡拝。

高田本宗寺文書
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-sen-ju-ji-mon-jo. ❶ 三河の本宗寺の文書。

高田第十八世印旅法器利
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-dai-jū-hachi-se-in-se-hō-gi-ri ❶ 江戸中期の印旅法器利。

高田親鸞聖人遺蹟巡拝事
（宗教）
Taka-da-shin-ran-shō-nin-den-go-shō. ❶ 親鸞聖人の遺蹟巡拝。

高田本宗寺文書
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-sen-ju-ji-mon-jo. ❶ 三河の本宗寺の文書。

高田親鸞聖人遺蹟巡拝事
（宗教）
Taka-da-shin-ran-shō-nin-den-go-shō. ❶ 親鸞聖人の遺蹟巡拝。

高田親鸞聖人正統伝
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-shin-ran-shō-nin-e-den-satsu-go-kwa-chū. ❶ 江戸中期の親鸞聖人の伝。

高田本願寺文書
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-hon-gan-ji-mon-jo. ❶ 三河の本願寺の文書。

高田親鸞聖人正統伝
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-shin-ran-shō-nin-e-den-satsu-go-kwa-chū. ❶ 江戸中期の親鸞聖人の伝。

高田本願寺文書目録
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-hon-gan-ji-mon-jo-moku-roku. ❶ 三河の本願寺の文書目録。

高田本願寺文書目録
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-hon-gan-ji-mon-jo-moku-roku. ❶ 三河の本願寺の文書目録。

高田本願寺文書三蔵目録
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-hon-gan-ji-mon-jo-san-zō-moku-roku. ❶ 三河の本願寺の文書三蔵目録。

高田本願寺文書三蔵目録
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-hon-gan-ji-mon-jo-san-zō-moku-roku. ❶ 三河の本願寺の文書三蔵目録。

高田本願寺文書
（四〇二二・六四八六）
Taka-da-hon-gan-ji-mon-jo. ❶ 三河の本願寺の文書

滝尾権現霊託記 ❶(日) Taki-no-o-gon-gen-rei-taku-ki. ❷1巻 ❸存 ❹家賀(一元禄頃 A. D. 1688—1710—)撰 ❺日光滝尾権現霊託記参考記也。❻〔参考〕山家清兵衛著寛政日光叢書下 ❼天保11写 ❽〔比叡山横川楞厳院記〕

滝尾山年中行事 ❶(日) Taki-o-yama-nen-chū-gyō-ji. ❷1巻 ❸存 ❹〔日光文庫〕

滝山大善寺志 ❶(日) Taki-yama-dai-zen-ji-shi. 滝林大善寺志、大善寺志、滝山志 ❷1巻 ❸存、浄土宗全書第11〇 ❹慶門(天明11—天保10 A. D. 1782—1839)

❶浄土宗十八道林の一なる武蔵国大善寺の寺誌である。日光に創開正因、道場勝願寺、泉蔵院、弁財寺、金蔵王権、安楽寺、東光寺、東光山王、妙中院、若宮八幡、十夜観音、慈光山、門天白龍、駒形明神、の十三寺があつて、寺内正因の傍下に岡山の十三寺があつて、寺内正因の傍下に岡山の十三寺があつて、寺内正因の傍下に岡山

澤水郷　❶（日）Taku-sui-ka-wa-go.（タクスイカワゴウ）

❷舞踊一三三頁。❸京太夫・日本名称。（○京太夫）

❹古方流と上方流の二流に分れた。❺江戸末期に江戸と上方の舞踊を取り入れて成立した。❻清水和枝は江戸の名取。❼明治初期に江戸の芸者が芸妓の踊を補助する目的で作り出した。❽明治時代に入ると芸妓屋の数が増えて芸者の数が減少し、芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。❾明治末期に芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。❿芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓫芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓬芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓭芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓮芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓯芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓰芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓱芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓲芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓳芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。⓴芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉑芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉒芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉓芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉔芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉕芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉖芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉗芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉘芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉙芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉚芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉛芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉜芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉝芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉞芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㉟芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊱芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊲芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊳芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊴芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊵芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊶芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊷芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊸芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊹芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊺芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊻芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊼芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊽芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊾芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。㊿芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(51)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(52)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(53)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(54)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(55)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(56)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(57)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(58)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(59)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(60)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(61)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(62)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(63)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(64)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(65)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(66)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(67)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(68)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(69)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(70)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(71)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(72)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(73)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(74)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(75)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(76)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(77)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(78)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(79)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(80)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(81)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(82)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(83)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(84)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(85)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(86)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(87)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(88)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(89)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(90)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(91)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(92)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(93)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(94)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(95)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(96)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(97)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(98)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(99)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(100)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(101)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(102)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(103)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(104)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(105)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(106)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(107)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(108)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(109)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(110)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(111)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(112)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(113)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(114)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(115)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(116)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(117)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(118)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(119)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(120)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(121)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(122)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(123)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(124)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(125)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(126)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(127)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(128)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(129)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(130)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(131)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(132)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(133)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(134)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(135)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(136)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(137)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(138)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(139)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(140)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(141)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(142)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(143)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(144)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(145)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(146)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(147)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(148)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(149)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(150)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(151)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(152)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(153)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(154)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(155)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(156)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(157)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(158)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(159)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(160)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(161)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(162)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(163)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(164)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(165)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(166)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(167)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(168)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(169)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(170)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(171)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(172)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(173)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(174)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(175)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(176)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(177)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(178)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(179)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(180)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(181)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(182)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(183)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(184)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(185)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(186)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(187)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(188)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(189)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(190)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(191)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(192)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(193)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(194)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(195)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(196)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(197)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(198)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(199)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(200)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(201)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(202)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(203)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(204)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(205)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(206)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(207)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(208)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(209)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(210)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(211)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(212)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(213)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(214)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(215)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(216)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(217)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(218)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(219)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(220)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(221)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(222)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(223)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(224)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(225)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(226)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(227)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(228)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(229)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(230)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(231)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(232)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(233)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(234)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(235)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(236)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(237)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(238)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(239)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(240)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(241)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(242)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(243)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(244)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(245)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(246)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(247)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(248)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(249)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(250)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(251)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(252)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(253)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(254)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(255)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(256)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(257)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(258)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(259)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(260)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(261)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(262)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(263)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(264)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(265)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(266)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(267)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(268)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(269)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(270)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(271)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(272)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(273)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(274)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(275)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(276)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(277)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(278)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(279)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(280)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(281)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(282)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(283)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(284)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(285)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(286)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(287)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(288)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(289)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(290)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(291)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(292)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(293)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(294)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(295)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(296)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(297)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(298)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(299)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(300)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(301)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(302)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(303)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(304)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(305)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(306)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(307)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(308)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(309)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(310)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(311)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(312)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(313)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(314)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(315)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(316)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(317)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(318)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(319)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(320)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(321)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(322)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(323)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(324)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(325)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(326)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(327)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(328)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(329)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(330)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(331)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(332)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(333)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(334)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(335)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(336)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(337)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(338)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(339)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(340)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(341)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(342)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(343)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(344)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(345)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(346)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(347)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(348)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(349)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(350)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(351)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(352)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(353)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(354)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(355)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(356)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(357)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(358)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(359)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(360)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(361)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(362)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(363)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は芸妓屋を通じて座敷へ出る。(364)芸者の踊が芸妓屋の専属になり、芸者は

竹内道敬（B）Tadasu-mono-gatari. ❻ 名 ❼ 人物 ❽ 1 国 人

立川流（B）Tachi-kawa-ryū. ❻ 名 ❼ 仏教 ❽ 1 人

立川流目録（B）Tachi-kawa-ryū-mokuroku. ❻ 名 ❼ 仏教 ❽ 1 人

立川流密教（B）Tachi-kawa-ryū-gyō-mokuroku

に讃仰される。「般若心経」は、「摩訶般若波羅蜜多心経」の略称であり、「摩訶」は大、「般若」は智慧、「波羅蜜多」は彼岸に渡ること、「心」は中心、「経」は教説の意である。この経は、観自在菩薩が、深い智慧の修行によって、人間の五つの要素（五蘊）がすべて空であることを悟り、一切の苦厄を超えたことを、釈尊の弟子である舎利子に語り、舎利子を通じて、すべての人々に、この教えを伝えるという形式をとっている。

本経は漢訳のみで、サンスクリット原典は存在しない。全部で二百六十字の短い経であるが、内容は大乗仏教の思想を凝縮しており、中国・朝鮮・日本を通じて、最も広く読まれ、唱えられてきた。

仏教では、「色」（物質）と「空」（実体のないこと）を、相対的な二元的概念として扱うのが通常であるが、この経では、「色」は「空」であり、「空」は「色」であるとして、両者の不二（ふに）を説く。「色」は、五蘊のうちの第一であり、残りの四蘊（受・想・行・識）は、「空」の具体的な内容として、「色」と「空」の関係を補足する。

「色」は、「空」であるから、生じることもなく、滅することもなく、汚れることもなく、清まることもなく、増えることもなく、減ることもない。

「空」は、「色」であるから、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根、色・声・香・味・触・法の六境、眼界・耳界・鼻界・舌界・身界・意界・法界・意識界の六識、無明・無明の尽きること・老死・老死の尽きること、苦・集・滅・道の四諦、智慧・得・無得、菩提薩埵・般若波羅蜜多・心・無罣礙・無罣礙故・無有恐怖・遠離一切顛倒夢想・涅槃・三世の諸仏・般若波羅蜜多・大神呪・大明呪・無上呪・無等等呪、すべて、存在しない。

「菩提薩埵」は、菩提（悟り）を求める者、「般若波羅蜜多」は、彼岸に渡ること、「大神呪」は、大いなる神秘の力、「大明呪」は、大いなる光明、「無上呪」は、これ以上のものはない呪、「無等等呪」は、比べるものがない呪、の意である。

「般若波羅蜜多」は、「彼岸に渡ること」であり、「彼岸」は、「悟りの世界」であり、「渡る」は、「生死の海を渡ること」である。

「菩提薩埵」は、「菩提」（悟り）を求める者であり、「菩提」は、「目覚め」であり、「薩埵」は、「勇者」であり、「菩提薩埵」は、「悟りを求める勇者」である。

「般若」は、「智慧」であり、「波羅蜜多」は、「彼岸に渡ること」であり、「般若波羅蜜多」は、「智慧によって彼岸に渡ること」である。

「心」は、「中心」であり、「経」は、「教説」であり、「心経」は、「中心の教説」である。

「摩訶」は、「大」であり、「摩訶般若波羅蜜多」は、「大いなる智慧によって彼岸に渡ること」である。

「大神呪」は、「大いなる神秘の力」であり、「大明呪」は、「大いなる光明」であり、「無上呪」は、「これ以上のものはない呪」であり、「無等等呪」は、「比べるものがない呪」

立石寺縁起　❶(日)Tate-ishi-dera-en-gi.　❷1巻　❸存　❹文化五刊　❺(天台書写奥)

館林善勝寺志　❶(日)Tate-bayashi-zen-dō-ji-shi.　館林善勝寺志・善勝寺志・館林寺　❷1巻　❸存・写十宗全書第11〇　❹寛政二(天明二—天保一〇 A. D. 1782—1839)記

❺上野国館林の城下にある十八世林の創一善勝寺の寺号で、日天に"善国定慧"、所開慶林・臨安寺・慶安寺・現在寺・所開産寺・内来11坊・古山来寺・興福行寺・全寺医寺・法主行寺・所開上尼・興福来寺・能安十師・宗安所外加法寺村に開所したことゝ、北条氏国の結礼、山内氏の下知状を出し、所開慶林の下に開原誠寺・宗安寺・石田上人を以つて開山として現地に建立されしことを記し、慶安立寺の様には本寺其他の建物を導げ、現在寺物の下には慶善・龍善寺を列し、所開産寺には来印、内来11坊には大慶寺・慶安寺を、古山来寺には開山第開見性上人、11年来寺開上人、二十四年慶開宗上人、11十六年来寺信上人等を導げ全寺医年上人、11十六年来寺信上人等を導げ全寺医年十四年までの名僧には開山第開上人の寺号・11年以下三三の名僧には開山第開上人の寺号・11年以下三三の名僧の名を列し、建主行寺の下には善勝寺・慶安寺・大慶寺・和歌を出し、所開善勝寺・慶安

son-ja-gyō-jō.(支)Ta-mo-tsun-che-hsing-chuang. ❷一卷 ❼(參考) 智證大師請來目錄

達磨大師安心法門私注 ❶(日) Dara-ma-dai-shi-an-jin-hō-mon-shi-chū. ❷一卷 ❸存 ❹專注註 ⑨正敎藏)

達磨大師安心法門注解 ❶(日) Dara-ma-dai-shi-an-jin-hō-mon-chū-ge. ❷一卷 ❸存 ❹性圓(元和三—元祿七 A. D. 1617—1694)、道澄共撰 ❺享保九刊 ⑨(駒大)

達磨大師血脈論 ❶(日)Daru-ma-dai-shi-kechi-myaku-ron. (支)Ta-mo-ta-shih-hsieh-mo-lun. 血脈論、達磨血脈論 ❷一卷 ❸存、卍續二・一五・五、禪門規要卷上 ❹梁菩提達磨(—永安元A. D. 528)述 ⑥達磨所說の以心傳心、不立文字、見性成佛の本義を說く。全文悉く問答體をなし、第一問に曰く若し文字を立てざれば何を以て心と爲すや、第二問に曰く若し見性せずして念佛誦經布施持戒精進し廣く福利を興せば成佛を得るや否や、第三問に曰く色身無常の時に云何にしてか本心を見ざるや、第四問に曰く何に因つて佛菩薩等を禮するを得ざるや、第五問に曰く白衣にして妻子あり絃慾除かず何に憑つてか成佛を得るや、第六問に曰く栴陀羅が殺生して業を作り如何にしてか成佛を得るやと、以上の六問に對して鄭寧なる答を與へてゐる。最後に頌文と偈とが附してある、偈に曰く「われ本此の土に來り法を傳へて迷情を救ひ、一華五葉を開き結果自然に成る」とある。更に卷頭に紹興癸酉(A. D. 1153)に認めたる見獨老人任哲の序が揭げられてある。 ⑤朝鮮隆熙二刊 ⑨(駒大) ⑩朝鮮慶尙南道梵魚寺 (安藤文英)

達磨大師悟性論 ❶(日)Daru-ma-dai-shi-go-shō-ron. (支)Ta-mo-ta-shih-wu-hsing-lun. 悟性論、達磨和尙悟性論 ❷一卷 ❸存、卍續二・一五・五 ❹梁菩提達磨(—永安元A. D. 528)述 ⑥達磨所說の見性悟道の眞義を說く。初めに寂滅を以て體となし離相を以て宗と爲すの旨を明かし、次に生死を出離するを出家と名づけ妄想を生ぜざるを涅槃と名づくと斷じ、更に水と氷の關係を論じて煩惱と菩提、衆生と佛との相關々係を說明してゐる。最後に夜坐偈を揭げ、一更より五更に至る心地の過程を叙べ、卷末に眞性頌を附してゐる。 ⑨寫本(京大、藏・一七タ・六) (安藤文英)

達磨大師講式 ❶(日)Dara-ma-dai-shi-kō-shiki. 達磨講式 ❷一卷 ❸存 ⑨明治一〇刊(正大、一七六・五×龍大・二〇七二・一二)明治一七刊(駒大)

達磨大師講式文 ❶(日)Dara-ma-dai-shi-kō-shiki-mon. ❸存、少室六門集卷末 ⑥本書は、華嚴宗の高僧である山城國栂尾の高山寺明慧上人高辨大德が北峯の岩窟に禪坐して達磨大師を禮祭された講式文五章である。即ち正法眼藏涅槃妙心は佛下生前に於ても一點をも缺けず、祖師西來に依つても一毫をも添ゆるものでは無いが、我等は般若の光の中に居て愚暗を嘆じ、水中に居て渴を愁ふるが如き有樣であるのを、達磨大師東土に來渡して、階梯に依らず不立文字直指人心見性成佛せしめんとされた、其の法恩を禮賛報謝すべしとして、五章を講演して自ら行ひ衆人に是を示されたものである。

其の五章とは、一には在世し德行を讚し、二には滅後の利益を明し、三には世人の疑難を通釋し、四には宗門の大意を明し、五には回向の眞趣を述べ、佛祖の洪恩に報ずべきを說示されたものである。 (久保堅瑞)

達磨大師四行觀 ❶(日) Daru-ma-dai-shi-shi-gyō-kwan. (支) Ta-mo-ta-shih-ssu-hsing-kuan. 菩提達磨大師略辨大乘入道四行觀 ❷一卷 ❸存、卍續二・一五・五、禪學寶典之內 ❹梁菩提達磨(—永安元 A. D. 528)述 ⑥菩提達磨大師略辨大乘入道四行觀の下を見よ。 ⑨寫本(京大、藏・一七タ・六)

達磨大師四行觀聞解 ❶(日)Daru-ma-dai-shi-shi-gyō-kwan-mon-ge. ❷一卷 ❸存 ❹瑞方面山(天和三—明和六 A. D. 1683—1769)述 ⑤明和五刊 ⑨(谷大、餘大・二八四八×駒大)

達磨大師四行觀和譯 ❶(日)Daru-ma-dai-shi-shi-gyō-kwan-wa-yaku. ❸存、禪宗聖典之內

達磨大師入道四行聞揚鈔 ❶(日)Daru-ma-dai-shi-nyū-dō-shi-gyō-senn-yō-shō. ❷一卷 ❸存 ❹性圓獨照(元和三—元祿七 A. D. 1617—1694)、道澄月潭共撰 ⑤享保九刊 ⑨(駒大)

達磨大師破相論 ❶(日)Daru-ma-dai-shi-ha-sō-ron. (支) Ta-mo-ta-shih-po-hsiang-lun. 破相論、觀心論 ❷一卷 ❸存、大正八五・一二七 No. 2833、燉煌出土スタイン氏蒐集本、同ペリオ氏蒐集本、異本は禪門提要卷上觀心論、少室六門集破相論(卍續二・一五・五) ❹梁菩提達磨(—永安元 A. D. 528) ⑥觀心論、少室六門の破相論の下を見よ。 ⑨寫本(京大、藏・一七タ・六)

達磨大師破六師科註 ❶(日)Daru-ma-dai-shi-ha-roku-shi-kwa-chū. ❷一卷 ❸存、慈雲尊者全集第七禪那編第二 ❹慈雲(享保三—文化元 A. D. 1718—1804) ⑥本文は景德傳燈錄第三卷達磨大師傳に在り、尊者はこれに科及註を記したのである。 ⑨古寫本(長福寺藏) (高見寬恵)

達磨大師碑頌 ❶(日) Daru-ma-dai-shi-hi-ju. (支) Ta-mo-ta-shih-pei-sung. ❷一卷 ❸存、達磨大師四行觀之內(卍續二・一五・五) ❹梁武帝撰 ⑨寫本(京大、藏・一七タ・六)

達磨附禪と政治家 ❶(日) Daru-ma-tsuketa-zen-to-seji-ka. ❷一卷 ❸存 ❹蓮池恒夫著 ⑤明治三二刊 ⑩東京裳華書房

達磨と陽明 ❶(日)Dara-ma-to-yō-mei. ❸存、禪學文庫第三 ❹忽滑谷快天著 ⑤明治四一刊、大正三再刊 ⑩東京丙午出版社

達磨の足跡 ❶(日)Dara-ma-no-so-ku-seki. 禪僧の支那行脚達磨の足跡 ❷一卷 ❸存 ❹關清損著 ⑤大正八刊 ⑩東京三松堂書店

達磨百圖 ❶(日) Dara-ma-hyaku-zu. ❷一卷 ❸存 ❹池上文德畫 ⑤大正四刊 ⑨(駒大)

達磨扶桑記 ❶(日) Daru-ma-fu-sō-ki. ❷一卷 ❸存 ❼(參考) 禪籍目錄

誰にもわかる信仰問答錄 ❶(日) Tare-ni-mo-wa-ka-ru-shin-kō-mon-dō-roku. ❷一卷 ❸存 ❹野依秀一著 ⑤昭和七刊 ⑩東京大日本眞宗宣傳協會

誰にも分る佛敎の眞理 ❶(日) Tare-ni-mo-waka-ru-buk-kyō-no-shin-ri. ❷一卷 ❸存 ❹石黑長榮著 ⑤昭和七刊 ⑩同山陰文堂

丹霞子淳禪師語錄 ❶(日)Tan-ka-shi-jun-zen-ji-go-roku. (支) Tan-hsia-tzū-chun-ch'an-shih-yü-lu. 妙續大師語錄 ❷二卷 ❸存、卍續二・二九・三 ❹慶預校 ⑤敬和五以後(A. D. 1117—) ⑥本書は別に『妙續大師語錄』とも名づけ、古尊宿語錄にも收められる。上卷は、序、大洪山上堂法語、眞贊、偈頌より成り、下卷は垂鞭であつて、上堂法語、舉古、頌古が揭げられる。上堂語は大洪山と天寧萬壽寺の入院上堂語や小參等であり、偈頌中には正偏五位頌二種十首等がある。上卷の序によれば師の遺裔なる良機が、語錄の湮沒を恐れ、舊本に依りて參考訂正して上梓せる旨が述べられてあるから、舊本は寶永以前に存せしものと思はれる。又、卷末に、丹霞より十三葉の法孫、太寧清公が謄寫する所の『師住大洪語錄一卷』を得て、寶永七年春に良機が一偈を裁て出版した消息が揭げられ。

次で下卷は、上堂語若干、舉古二、頌古凡そ一百が載せられ、青原、藥山、道吾、雲巖、洞山、曹山、玄沙、投子、道楷等前代知名の宗匠の商量を捕へ來つて頌して居る。 ⑤寶永七年春

丹霞澹歸禪師語錄附塔銘行狀 ❶(日) Tan-ka-dan-ki-shaku-zen-ji-go-roku-tsuketari-tō-mei-gyō-jō. (支) Tan-hsia-tan-kuei-shih-ch'an-shih-yü-lu 塔-ming-hsing-chuang. ❷一卷 ❸存 ❹清代今釋澹歸語、今辯編 ⑤康熙二九刊 ⑨(駒大) (岡田宣法)

丹崖晌禪師拈頌 ❶(日) Tan-gai-shun-zen-ji-nen-ju. (支) Tan-ai-hsun-ch'an-shih-nien-sung. ❷一卷 ❸存 ❹清代丹崖晌頌、行健編 ⑨寫本(京大、藏・一七タ・七)

丹丘庵蚌蛤禪 ❶(日) Tan-kyū-an-bō-kō-zen. 播州退藏峰龍水和尙假名法語、蚌蛤禪 ❷二卷 ❸存 ❹龍水語 ⑤安永八刊 ⑨(高大、寄・一・二五×駒大)

丹波國御下寺開基帖 ❶(日)Tam-ba-no-kuni-go-ge-ji-kai-ki-chō. ❷一卷 ❸存 ⑤元祿五寫 ⑨(龍大、別置)

丹波州水上郡佐治庄瑞岩山高源寺開山遠溪祖雄禪師之行實 ❶(日)Tam-ba-shū-mizu-kami-gori-sa-ji-no-shō-zui-gan-zan-kō-gen-ji-kai-san-on-kei-so-yū-zen-ji-no-gyō-jitsu. 遠溪祖雄禪師之行實 ❷一卷 ❸存、續群書類從第九、浮木集第一三 ❹錦江道演記 ⑥遠溪祖雄禪師之行實の下を見よ。

丹鳳樓賦 ❶(日) Tan-pō-rō-fu. (支) Tan-feng-lou-fu. ❷一卷 ❼(參考) 入唐新求聖敎目錄

丹嶺禪師紀年錄 ❶(日) Tan-rei-zen-ji-ki-nen-roku. 大陽開山丹嶺禪師紀年錄 ❷一卷 ❸存 ❹素明、梵龍共編 ❼(參考) 禪籍目錄

但州城崎溫泉雜藁 ❶(日) Tan-shū-kino-saki-on-sen-zak-kō. ❷一卷 ❸存 ❹華藥雲重 ❼(參考) 禪籍目錄

但信鈔 ❶(日)Tan-shin-shō. ❷一卷 ❸存、異義集(了詳自筆本)第一〇、同(眞宗大系本)第五 ❹了海(延應元—元應二 A. D. 1239—1320)述 ⑤正安二(A. D. 1300) 五月 ⑥此書の內容の解說は異題同本たる證相廻向聞書を見るべし。抑も但信鈔を證相廻向聞書の一異名書なりとすること當初は知らず、中古は惠空の假名聖敎目錄に見へ。慧琳は眞宗書目に之を承け頌重を避けてその一異名を省き。先啓の淨土眞宗聖敎目錄にもその別稱なる旨を記す。了詳の異義集(自筆本)第一〇卷、同(眞宗大系本)第五卷には但信鈔一卷を揭げ、同(自筆本)第一三卷には證相廻向聞書一卷を出せども內容異ならず。而して泰富の菽麥私記、並に僧撲の管窺錄、更に了道の澁谷寶鑑の證相廻向聞書の評は全く但信鈔に合すれば、古往今來彼此異題同本なること諸學者の所見一致するところである。

證相廻向聞書は正安二年五月二十九日眞宗佛光寺第四世了海六十二歲の書(京都佛光寺派大行寺所藏著者自筆と云へる本、佛光寺小部集所集)なりと(淨土眞宗聖敎目錄、異義集、澁谷寶鑑等に擧ぐる說之に同じ)傳へられる。然し從來寫刊の本には撰號がないので亡名と(智洞の龍谷學變現存目錄等)記し。淚は壁如上人の作と(一雄の眞宗正依典籍集、知空の錄外聖敎目錄、月釜の聖敎目錄、菽麥私記に出せる說等)も云ひ、蓮如上人の作と(元祿初年頃の版本、同五年の廣益書籍目錄、同九年のいろは分增益書籍目錄等)も云ふなどは、從來研究が行き屆かなかつた爲に止むを得ぬことながら、著者を誤り、寫者と錯誤したので取るに足らぬ說であるが、異義集、菽麥私記、管窺錄、澁谷寶鑑等の評家、何れも知識歸命の異計に屬する書と看做すのは同敎にて的中の言と云はねばならぬ。

兩して但信鈔は異義集に他力信心聞書と同趣で唯信鈔議、心血脈鈔に合すれば、何れも如信上人に僞作する書とし、知識歸命の異計に親屬せしめてゐる。この批評は如信上人に僞作したるや否やは未だ斷言を躊躇すべき餘地ありとするも、その思想の系統を窺ふにはよき指導であると思ふ。され

談家流（たんけりゅう）　❶ Tann-e-wa-ryū. 西山宗の流派。

談家和尚（たんけおしょう）　❶ Tann-e-wa-jō. 西山宗の僧侶。

談義（だんぎ）　❶ 問答。

談義僧（だんぎそう）　❶ 問答僧。

談義所（だんぎしょ）　❶ 問答所。

談義本（だんぎぼん）　❶ 問答の形式で書かれた書物。

談義僧（だんぎそう）　❶ 問答僧。

談義所（だんぎしょ）　❶ 問答所。

談義本（だんぎぼん）　❶ 問答の形式で書かれた書物。

談合（だんごう）　❶ 相談。❷ 相談して物事を決めること。❸ 相談して物事を決めること

法然遺物分 ❶(日)Tan-nen-yō-ryō-shō. (支)Chan-jan-yao-ling-ch'ao. ❷1巻 ❸写 ❹存 ❺〔参考〕 藤井日録

法然志 ❶(日)Tann-en-shi. ❷1巻 ❸存 ❹仏祖分 ❺〔参考〕 藤井日録

禅苑清規略解事錄 ❶(日)Tan-gei-zen-ji-kai-dō-roku. 圓爾禪苑清規略解事錄 ❷1巻 ❸存 ❹禪苑清規略解事錄 ❺〔参考〕 藤井日録

禅山正和尚紀年錄 ❶(日)Tan-zan-shō-o-shō-ki-nen-roku. 力禪師山正和尚紀年錄 ❷1巻 ❸存 ❹〔参考〕 藤井日録

禅師手語錄 ❶(日)Tan-ji-shi-go-roku. ❷1巻 ❸存 ❹〔参考〕 藤井日録

禅心正行 ❶(日)Tan-shin-shō-gyō. ❷1巻 ❸存 ❹明治十四(一八八一) A. D. 1910) ❺明治四〇、四三刊 ❻(支)天、日1三、1二七、(谷大、宗研・五三1) ❼京都法華宗

禅徳 ❶(日)Tan-doku. ❷1冊 ❸存 ❹勝川尊化寄 ❺〔貴重記〕

禅徳 ❶(日)Tan-doku. ❷1冊 ❸存 ❹定勝四寄 ❺〔貴重記〕

禅徳口傳集 ❶(日)Tan-doku-ku-den-shū. ❷1帖 ❸存 ❹勝川尊化寄 ❺〔参考説記〕

禅徳聞經著白毫寺案 ❶(日)Tan-doku-ju-kyō-hyō-byaku-tō-an. ❷1帖 ❸存 ❹勝川尊化寄 ❺〔参考説記〕

禅徳寺 ❶(日)Tan-doku-sō. ❷1帖 ❸存 ❹勝川尊化寄 ❺〔参考説記〕

禅徳著白毫寺写落 ❶(日)Tan-doku-hyō-byaku-ju-sha-hen-tō. ❷1帖 ❸存 ❹安永三寄 ❺(支)天、谷・1・六八)

歎異抄 ❶(日)Tann-i-shō. ❷1巻 ❸存、大正八三・七二八 No. 2661、真宗聖教全書 ❹真宗聖教全書和文之部、真宗聖教全書名著歎異抄二、聖名著歎異抄、真宗聖教全書、国文東文学歎異抄、歎異抄、真宗法華宗本八、蓮如上人小部聖教、歎異抄、蓮如上人小部聖教 ❺慶、如信(延慶元—正安元) A. D. 1239—1300)又慶、如信(貞和元—正慶二) A. D. 1222—1289)撰

❻歎異抄は真宗に於ける他力信仰の信条とも簡明切実に掌られた聖文の聖典である。それは宗祖親鸞聖人と名づけられたのは、題下の序言に歎異抄=未来世の人々=口伝之真信、とあり、本文に「聖人のおほせにこそ候へ」とあるように、親鸞聖人の説教をその教説に忠実な他力真宗の正意に作ける不正の異説に対し、正統宗の立場から大に之を駁撃し教意を明にして、その信仰の正意を闡明し、異説に於ける邪説なる安心を警戒し、後の異説の発生を防ぐ為の著述である。而して本書の内容は、初の十章は親鸞聖人の物語られた信仰の体験を面白くする説話から成り、後の十章は親鸞聖人の物語られた言葉に、聞書に、伝抄説聖人御物語之面所、註=耳底、聞註、之とあれば、是等の法語は親鸞の弟子の一人が親しく其の在世中に聞ける所を、滅後数年の後に之れを註せるものの如くに考へられる。聞くにこの法語の第十章に「念仏者には無碍をもて宗とす不可得不可説不可思議のゆゑにおほせそうらひき」とある文に「そも〳〵かの御在生のむかしおもひ出だしまいらせてしたひ……いはれたまひしおもむきは、耳の底にとどまりて……」の作編のことを云ふ」とあるように、題下の序言に「歎異抄=未来世の人々=口伝之真信」とあるこの言葉は本文に出づる第十一章以下の序言として掌られたものと見るべきである。而して本書は、その中の「聖人のおほせにこそ候へ」とある親鸞聖人の説教を、

タンロン ❶ (日) Tan-doku-shō-moku-roku. ❷ 唐 ❸ 江戸 ❹ 江戸 ❺ 明 ❻ 清 ❼ 江戸 ❽ 江戸 ❾ 江戸 ❿ 江戸 ⓫ 江戸 ⓬ 江戸 ⓭ 江戸 ⓮ 江戸 ⓯ 江戸 ⓰ 江戸 ⓱ 江戸 ⓲ 江戸 ⓳ 江戸 ⓴ 江戸 ㉑ 江戸 ㉒ 江戸 ㉓ 江戸 ㉔ 江戸 ㉕ 江戸 ㉖ 江戸 ㉗ 江戸 ㉘ 江戸 ㉙ 江戸 ㉚ 江戸 ㉛ 江戸 ㉜ 江戸 ㉝ 江戸 ㉞ 江戸 ㉟ 江戸 ㊱ 江戸 ㊲ 江戸 ㊳ 江戸 ㊴ 江戸 ㊵ 江戸 ㊶ 江戸 ㊷ 江戸 ㊸ 江戸 ㊹ 江戸 ㊺ 江戸 ㊻ 江戸 ㊼ 江戸 ㊽ 江戸 ㊾ 江戸 ㊿ 江戸 (1)江戸 (2)江戸 (3)江戸 (4)江戸 (5)江戸 (6)江戸 (7)江戸 (8)江戸 (9)江戸 (10)江戸 (11)江戸 (12)江戸 (13)江戸 (14)江戸 (15)江戸 (16)江戸 (17)江戸 (18)江戸 (19)江戸 (20)江戸 (21)江戸 (22)江戸 (23)江戸 (24)江戸 (25)江戸 (26)江戸 (27)江戸 (28)江戸 (29)江戸 (30)江戸 (31)江戸 (32)江戸 (33)江戸 (34)江戸 (35)江戸 (36)江戸 (37)江戸 (38)江戸 (39)江戸 (40)江戸

D. 1613—1693）　❹貞享元年（A. D. 1661）各❶〔参考〕　浄土真宗教義要綱二

談説文詳説鈔　❶（日）Tan-doku-mon-shō-yō-shō.　説説文式教説文詳説鈔　❷1卷寫三卷　❸存　❹宝暦（貞享元年一延享三年A. D. 1661—1746）後　❺〔参考〕　浄土真宗教義要綱二　❻寛永（寛永元年・延享四年A. D. 1756—1833）記

談説文図聞記　❶（日）Tan-doku-mon-zui-mon-ki.　❷1卷　❸存　❹国朝（明和四一天保一一　A. D. 1767—1840）後　❺寛永（寛永元年・天保一一）

談説文大意　❶（日）Tan-doku-mon-tai-i.　❷1卷　❸存　❹元亨三一一嘉安元年A. D. 1299—1373）作　❺〔参考〕　浄土真宗教義要綱二　❻日録

談説文図書　❶（日）Tan-doku-mon-nobe-gaki.　❷存　❸存　❹元亨（元亨三一一嘉安元年A. D. 1299—1373）　❺明治一四刊　❻（寛永・延宝・一四四）

談説会法式　❶（日）Tam-butsu-e-hō-shiki.　❷1卷　❸存　❹明治一六刊　❺〔説文〕〔説図〕一四三・一一六）　❻東文堂発行　❼註

談説要釋　❶（日）Tam-butsu-ge-shaku.　❷1卷　❸存　❹説説参考全説鈔一　大乗説説人之上　❺説説（享保三一一文化元年A. D. 1718—1804）説　❻浩日尼（寛延元一天保四A. D. 1756—1833）記

❼この説は説説説の中にあり説説天人の説説を説説したもの。説の内容は先づ説説天人人説の因縁を述べ、次に如来説の色身を説説説

著作二巻刊 ⑨(谷大"卷大・三二〇六)

顯密諸宗綱要論 ①(日),Dan-shō-go-shin-teki-ron. ②1巻 ③存 ④所非理解 ⑤寶大(續大)

顯密上人御問答 ①(日) Dan-sei-shō-nin-e-shi-den. ②二巻 ③存" 鎌倉時代 ④宗教 ⑤明和四(A. D. 1767)

⑥天台宗は" 古叡谷の顯密宗圓山派密上人の教義の問答にして明和四年" 後住宅宗の編せらるものなり。眞文に之り圓山上人の著記を編集し" その師僧尊者に問せんとせるを整理し" 圓山の著記をまとめ" 古人の口傳を集め師匠を尊して大成し年に弘通せしめしものなり。

天台宗は上下二巻より成り" 上巻に於ては先師の古傳より始めて田家" 田家家宗宗" 宗教" 記所巻の義理として事義を得" 次で裏得山に於て顯密記巻より十方西方王法國宗明言正宗教事顯密記巻の傳を教授せられ" 初めて顯密記巻の奥子" 三密教授巻の奥義を傳へたるを聞せられたるとと共に顯密記を感得し" 故に化儀のために宗門の教授に渡りて日蓮宗の祖師を" 日蓮宗の人々を重し" 信所宗日蓮宗天台宗に流通せしめ" 更に四國宗教" 中所人代より宗門を立て" 更に天台宗の法義綱要を上人の高風を行ふ" 宗教に慶喜し七日七夜法義を行ふ" 時に慶喜人の年夏の時なりと云ふ事に又云ふ。下巻は所所所時時所の義質に今巻中宗主大久保氏の質疑を得て" 顯密記巻の化儀を記し" 宗義法北江" 山井" 所所巻の化儀を記し" 宗義法北の顯密記巻の義" 宗教の論巻" 宗教の論巻" 宗教の論巻

❼〔参考〕 浄土依憑經論章疏目錄

檀那相承一心三觀血脈 ❶(日) Dan-na-sō-jō-ichi-shin-san-gwan-kechi-myaku. ❷一通 ❸存 ❹舜能示 ❺寛永一六寫 ❻〔眞如藏〕

檀若經 ❶(日) Dan-nya-kyō. (支) Tan-jo-ching. ❷一卷 ❸缺 ❹西晉竺法護(一泰始二—建興元 A. D. 265—313—)譯 ❼〔参考〕 仁壽錄第五、靜泰錄第五、武周錄第一二、開元錄第一五

檀波羅蜜菩薩法 ❶(日) Dan-ha-ra-mitsu-bo-satsu-hō. ❷一帖 ❸存 ❻南北朝時代寫(寶香提院)德川時代寫(寶龜院)

檀林飯沼弘經寺 ❶(日) Dan-rin-in-numa-gu-kyō-ji. 飯沼弘經寺 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一〇輯寺誌宗史第一九 ❹橋門(天明二—天保一〇 A. D. 1782—1839)記 ❺文政四(A. D. 1821) ❻飯沼弘經寺の下を見よ。

檀林瓜連常福寺志 ❶(日) Dan-rin-uri-zure-jō-foku-ji-shi. 瓜連常福寺志、瓜連志、常福寺志 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一〇寺誌宗史第一九 ❹橋門(天明二—天保一〇 A. D. 1782—1839)記 ❺瓜連常福寺志の下を見よ。

檀林鎌倉光明寺誌 ❶(日) Dan-rin-kama-kura-kō-myō-ji-shi. 鎌倉光明寺志 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一九 ❹橋門(天明二—天保一〇 A. D. 1782—1839) ❺鎌倉光明寺誌の下を見よ。

檀林小石川傳通院志 ❶(日) Dan-rin-ko-ishi-kawa-den-tsū-in-shi. 小石川傳通院志、傳通院志、小石川志 ❷一卷 ❸存、淨土宗全書第一九 ❹橋門(天明二—天保一〇 A. D. 1782—1839)記 ❺東京市小石川區にある十八檀林の隨一なる傳通院の寺志である。他の檀林志と同一の體裁の編述ではあるが、比較的詳細である。目次に古山開祖、將命再營、法殿堂舍、院寮列名、馬朱冨章、開山高德、法弟上足、歷世山主、傳燈師哲、尊尼系傳、所葬高貴、門末由緣の十二を擧げ、古山開祖には聖岡上人武州に小庵を結びて般若の道社と稱し、後ち無量山壽經寺の號を定めた舊地補樂水のことを記し、將命再營の項には家康の生母お大の方の逝去入棺を機として、當山を現地に移し再建ありたる顚末、中興開山鄙山上人の時、檀林十八に列したること、傳通院殿の十三回忌法會に當りて、宗門の法服制度を定めたこと等を述べ、法殿堂舍の下に本堂、御位牌殿、開山堂、大方丈、長廊下、庫裡、經藏、鐘樓、門、諸堂、標石、鎭守諸社につきて銘文、記錄、澤藏主稻荷社の緣起文、無緣塚の銘、福藥院の地藏尊の揮話、乘絲樓の下に江戸三十五所の樓の名木を擧げ、德利小僧、おまんが畑の傳說を記し、院寮列名の下には文政五年の學寮主の名、別院、塔頭の世代等を記し。馬朱冨章の下には朱印の文を擧げ、開山高德の項には了譽上人の傳を諸書に據りて述べ、終りに淨土列祖傳の文を引き、諸傳に載する所の十德に更に編者橋門の私撰十德を加へ。法弟上足の項には了譽上人の法系を出し、歷世山主の下に中興鄙山上人より五十五世梵譽上人に至る列名を擧げ、傳燈師哲の下には當山に掛錫受法せし高僧、無染、雪且、性心、泰譽、存達、存的、大龍、呑益、梵宅、心譽、萬達、單岌、故稱、轉譽、智秀、門哲、正雪、觀靈、碑道、夢傳、禮作、順故、岌頓、無關、鄙法、貞極、の略傳を出し、最後に德本上人の傳を記し、傳通院及び增上寺より寺駐奉行へ差出せる文書と、德本の法系を出し、尊尼系譜の條下には傳通院殿の系譜、事蹟、久松家譜等が引いてある。所葬高貴の項には清揚院殿、相應院殿、清雲院殿、榮優院殿、本理院殿、天樹院殿、智幻院殿、理岸院殿、清壽院殿、除崇院殿、除崇院殿の事蹟と葬儀法要等の記錄及び其他尾州家、藝州家、上杉家等の諸侯の士女を擧げ、門末緣由の下に宗慶寺に就ては其の古跡なること并に古記傳說を記し、八景の詩歌、朝覺院御由緒傳を寶鎭夫人墓碑銘等を擧げ、光益寺については開山の事蹟、本堂、法堂、鐘銘を出し、智香寺、深廣寺、龍閑寺、生西寺、嚴淨院、本所華嚴寺、牛島慈固院、小日向大圓寺、白山淨土寺、淨雲寺、代々木清岸寺、牛込專念寺、川崎淨林寺、羽生淨林寺、佐倉敎安寺、三河是入寺、小諸乘敎寺等を出し、それ〴〵寺圖係の事蹟、記錄を擧げてゐる。本書の末尾に光雲寺及常覺寺が寺號公稱の許可をうけ傳通院末となつたので、追加してある。

(中谷在輝)

檀林志 ❶(日) Dan-rin-shi. ❷十二卷 ❸存 ❹橋門(天明二—天保一〇 A. D. 1782—1839)撰 ❺寫本(正大、一五一三・一一)(帝室)

檀林巡路記 ❶(日) Dan-rin-jun-ro-ki. ❷一卷 ❸存 ❺刊本(正大、一五一四・五〇)(龍大)

檀林清規 ❶(日) Dan-rin-shin-gi. ❷一卷 ❸存 ❹大通融觀(—享保元 A. D. 1716)撰 ❼〔参考〕 大日本佛敎全書續刊豫定書目

斷惡生善 ❶(日) Dan-aku-shō-zen. ❷三卷 ❸存、萬代龜鏡錄第三 ❺寫本(正大、一八四・七一)(谷大、餘大・五八四)

斷惡生善論 ❶(日) Dan-aku-shō-zen-ron. ❷三卷 ❸存 ❹慧雄日講撰 ❺興正集を破したるもの。 ❼〔参考〕 大日本佛敎全書續刊豫定書目

斷恩衆惡論 ❶(日) Dan-on-shu-aku-ron. (支) Tuan-en-chung-e-lun. ❷四卷 ❼〔参考〕 東域傳燈目錄卷下

斷溫經 ❶(日) Dan-on-kyō. (支) Tuan-wen-ching. ❷一卷 ❸存、卍續二乙・二三・四 ❻本經は正藏に存せず、譯者名等も附せず、支那で出來た僞經であらう。本經は極めて短く、王舍城中に於ける佛と阿難との問答體である。その所說によれば、この世界は溫氣熾烈で病死者が多いのは、鬼神があつて常に惡毒を吐くが爲である。これを除去するには除病の呪「南無佛陀耶、南無達磨耶、南無僧伽耶、南無觀世音菩薩摩訶薩、疫病消除娑婆訶」を唱へ、且つ七鬼神たる多多難鬼・阿佉尼鬼・尼佉戶鬼・阿伽那鬼・波羅尼鬼・阿毘羅鬼・婆提梨鬼を崇敬すべきであるとしてゐる。

❾寫本(京大、藏・九ェ・九) (水野弘元)

斷戒體章 ❶(日) Dan-kai-tai-shō. ❷五卷 ❸存 ❹護信撰 ❺刊本(谷大、餘大・二二四〇)(正大、一一八六・四)(龍大、二六一二・二一)(智、む・八・右・二四)(京大、一・二六タ・一〇)

斷疑生信錄 ❶(日) Dan-gi-shō-shin-roku. ❷一卷 ❸存 ❺明治二六刊 ❾(谷大、餘大・二六七六)

斷橋和尙語錄 ❶(日) Dan-kyō-o-shō-go-roku. (支) Tuan-ch'iao-ho-shang-yü-lu. 斷橋妙倫禪師語錄 ❷三卷 ❸存、卍續二・二七・三 ❹宋妙倫撰、文寶書靖編 ❺斷橋妙倫禪師語錄の下を見よ。 ❻元錄一六刊 ❼〔帝國、八二一・五八〕

斷橋妙倫禪師語錄 ❶(日) Dan-kyō-myō-rin-zen-ji-go-roku. (支) Tuan-ch'iao-miao-lun-ch'an-shih-yü-lu. ❷二卷 ❸存、卍續二・二七・三 ❹文寶書靖編 ❺淳祐元—景定年間(A. D. 1241—1260) ❻本書は一名『斷橋和尙語錄』とも稱せらる。師は南岳下第二十世で、無準師範の嗣、天台の人、上卷は林希逸の序文と、台州瑞峯祇園禪寺錄、台州瑞巖淨土寺語錄、天台國淸敎忠禪寺語錄に分れ、いづれも入院語に始まり、三門、佛殿、瑞室、拈衣、指法座、陞座拈香の順になつて居り、下卷は、淨報慈恩光禪寺語錄に始まり、法語七、佛祖讚七、自贊二〇、偈頌十二、小佛事十五を揭げ、卷末に附錄として行狀と、附筆と、斷橋和尙語錄重梓序とがある。これによれば、師は淳祐元年祇園寺に入山以來、景定二年六十一歲にして寂し、日本僧正見が金拾兩を送り來り、師の語錄を刊行した旨が記しあれば、師の寂後間もなく語錄は刊行されたと見へるが、師の嗣法十六世の法孫、眞本瓶山項譜の序によれば、宋の淳祐より康熙壬申まで大約五百六十餘年間、師の語錄淪沒して傳らざるを康熙壬申に重梓せし消息が知られる。

❺康熙三一刊 ❾(駒大) (岡田宜法)

斷禁日蓮義 ❶(日) Dan-kin-nichi-ren-gi. ❷十一卷 ❸存 ❹眞陽(—承應頃 A. D. 1652—1654—) ❻破邪顯正記及諫迷論を破斥せるもの。 ❾刊本(谷大、餘大・二〇七三)

斷愚智禪師語錄 ❶(日) Dan-gu-chi-zen-ji-go-roku. (支) Tuan-yü-chih-ch'an-shih-yü-lu. ❷一卷 ❸存 ❹淸代 斷愚智譜、機輪等編 ❺康熙年間刊 ❾(駒大)

斷江摘藁 ❶(日) Dan-kō-teki-kō. (支) Tuan-chiang-chai-kao. ❷二卷 ❸存 ❹宋代覺恩撰 ❾寫本(京大、藏・二四タ・一三)

斷挫日蓮 ❶(日) Dan-za-nichi-ren. ❷一卷 ❸存 ❹加藤重昌 ❻挫日蓮を破せるもの。 ❼〔参考〕 大日本佛敎全書續刊豫定書目

斷際禪師宛陵錄 ❶(日) Dai-sai-zen-ji-en-ryō-roku. (支) Tuan-chi-ch'an-shih-yüan-ling-lu. 黃檗希運禪師宛陵錄、黃檗斷際禪師宛陵錄、宛陵錄 ❷一卷 ❸存、大正四八・三八四 No. 2012B、鎌鑒四、卍續二・二四・五、四家語錄卷五之內、明北1548素、禪門撮要卷上 ❹唐希運(—大中四 A. D. 850 或云大中三或)語、裴休(—唐咸通元 A. D. 860)集 ❻宛陵錄の下を見よ。

斷際禪師語錄 ❶(日) Dan-sai-zen-ji-go-roku. (支) Tuan-chi-ch'an-shih-yü-lu. 黃檗希運禪師語錄 ❸存、卍續二・二三・二、古尊宿語錄第二 ❹唐希運(—大中四 A. D. 850 一說大中三或大中九寂)語 ❻黃檗希運禪師語錄の下を見よ。

斷際禪師傳心法要 ❶(日) Dan-sai-zen-ji-den-shin-hō-yō. (支) Tuan-chi-ch'an-shih-ch'uan-hsin-fa-yao. 黃檗山斷際禪師傳心法要、黃檗傳心法要、傳心法要、斷際法要 ❷一卷 ❸存、大正四八・三七九 No. 2012A、鎌鑒四、卍續二・二四・五、四家語錄卷四之內、明北1548素、淸1567沙、Nj. 1654、禪學大系叢書第一、禪門撮要卷上 ❹唐裴休(—咸通元 A. D. 860)說咸通一一寂)集 ❻黃檗山斷際禪師傳心法要の下を見よ。

斷獅子絃金剛王 ❶(日) Dan-shi-shi-gen-kon-gō-ō. ❷二卷 ❸存 ❹修淸 ❾刊本(谷大、餘大・三九三二)

斷邪顯正論 ❶(日) Dan-ja-ken-shō-ron. ❷五卷 ❸存 ❹日題(—元祿頃? A. D. 1688—1703—)述 ❻摧破再難抄を破斥せるもの。 ❺正德二刊 ❾(正大、一五七・七一)(谷大、餘大・八九三)(立大、A〇五・八七—九〇)(龍大、二八一二・二四)(京大、日大未・五六〇)

斷一因緣經 ❶(日) Dan-ichi-in-en-gyō. (支) Tuan-shih-er-yin-yüan-ching. ❷一卷 ❼〔参考〕 法經錄第五、仁壽錄第三、靜泰錄第三

斷十二因緣經 ❶(日) Dan-jū-ni-in-en-gyō. (支) Tuan-shih-er-yin-yüan-ching. 阿含口解十二因緣經、阿含口解、安侯口解 ❷一卷 ❸存、大正二五・五三 No. 1503、鎌藏四、卍二六・六、北1033歌、南1049歌、元1045歌、明北1332既、淸1332既、麗1029歌、指988歌、法1015歌、至1478晉、明南1127緯、Nj. 1339 ❹安玄共般佛調譯 ❻後漢光和四(A. D. 181) ❻阿含口解十二因緣經の下を見よ。

斷諸法狐疑法經 ❶(日) Dan-shō-hō-ko-gi-hō-kyō. (支) Tuan-chu-fa-hu-i-fa-ching. 須眞天子經、問四事經、文殊師利所報法音經、諸佛法普入方便慧分別炤明持經 ❷四卷 ❸存、大正一五・九六 No. 588、鎌宙二、卍二一・四、北374改、南385改、元382改、明北389短、淸389短、麗373必、天383改、指344必、法366必、至382莫、明南377四、Nj. 393 ❹竺法護譯 ❻西晉泰始二—建興元(A. D. 266—313) 須眞天子經の下を見よ。

斷障義 ❶(日) Dan-shō-gi. ❸存、倶舍雜錄之內 ❹光敬述 ❾寫本(龍大、二六二三・二二)

斷證決定集 ❶(日) Dan-shō-ketsu-jō-shū. 斷疑決定集、斷證決疑集 ❷一卷 ❸存、傳敎大師全集第四、再版傳敎大

師全集第五 ❹沙門最澄說圓仁記と傳ふるも傳敎大師の眞撰に非ず ❺本書の奥書に忠球の私記あるも、著作年代不明なり。❻煩惱と證智との關係及其の不同の種々相を一應支那天台の敎判たる化法の四敎及五時敎判の一々に就いて說明し、其尙日本天台持有の昔迹本覆の四重興廢の敎判に依り一念三千一心三觀の觀智と斷證の煩惱の相を重々に詳說したるものなり。今其の科段の大要を誌さば斷證の不同の相を釋するに先に四敎に約し、次に五時に約す、四敎に約する中文自ら三を分つ、一に藏通別圓の四敎の斷證の關係を說き之について更に六重の問答往復を爲す、二には昔迹本覆の四重判に依り圓敎の惑相を說明し、三には法華、止觀、眞言の勝劣に付て論及し法華の止觀眞言の勝るゝことを主張す。次に五時に約する中文自ら五に分つ、一に華嚴、阿含、方等、般若、法華の五時の斷證の相を決定し、次に十番の問答を設けて其の說相を明らかにす、二に總相分別の斷證を說き七重の問答を設けて斷證と六卽の關係に及び、三には七種止觀を四重興廢の他に設くに付ても三重の問答に依り之を明らかにす、四に八種の斷證門を說明し、五に本迹修行の不同に付行滿道邃相傳の不同を論じて十六門の分別を爲せり。（鹽入亮忠）

斷肉經 ❶(日) Dan-niku-kyō. (支) Tuan-jou-ching. 師子素駄娑王斷肉經、師子王斷肉經 ❷一卷 ❸存、大正三・三九二No. 164、館藏八、卍一二・五、北498貴、南512貴、元556貴、明北456貴、清456貴、麗495羊、天507貴、指456羊、法488羊、至453絲、明南505貴、Nj. 460 ❹唐智嚴譯 ❺景龍元—開元九 (A. D. 707—720) ❻師子素駄娑王斷肉經の下を見よ。

斷壁 ❶(日)Dan-byaku. (支) Tuan-pi. 宏智禪師偈頌斷壁 ❷二卷 ❸存 ❹宋正覺(宏智)(元祐六—紹興二十 A. D. 1091—1157)語、茶山玄鼎編 ❺偈頌箋銘 ❻校抄せるもの。 ❽天明五刊 ❾(駒大)

斷末魔苦大事 ❶(日) Dan-matsu-ma-ku-dai-ji. ❷一裏 ❸存 ❽足利—德川時代寫 ❾(寶龜院)

斷末魔苦法 ❶(日) Dan-matsu-ma-ku-ho. ❷一紙 ❸存 ❽德川時代寫 ❾(寶龜院)

斷末魔大事 ❶(日) Dan-matsu-ma-dai-ji. ❷一紙 ❸存 ❽德川時代寫 ❾(寶龜院)

斷末魔法 ❶(日) Dan-matsu-ma-ho. ❷一卷 ❸存

昭和九年四月廿五日印刷
昭和九年五月一日發行

佛書解說大辭典（第七卷）
定價金七圓也

編纂者 小野玄妙

發行者 東京市芝區芝公園七號地十番 岩野眞雄

印刷者 東京市芝區西應寺町六十一番地 森島金治郎

印刷所 東京市芝區西應寺町六十一番地 兩友堂印刷所

發行所 東京市芝區芝公園七號地十番 大東出版社
電話芝(43)二一一六番
振替東京一九四七一番

不許複製

Bussho Kaisetsu Daijiten
Great Dictionary of Buddhist Books
With explanations
Edited by
Prof. G. Ono
Published by
The Daitō Shuppan Sha
No. 10 Shiba Kōen Shichigōchi, Tōkyō.

【兩角製本所 本製】

R180.3
067
7
サイキ5-10

威以香水於如來前
而作是言我今以此寸
國奉上如來及比丘
僧作類衰隨為我納
受作此言已即便捨
水尒時世尊哽默受
之就偈呪願
若人能布施　斷除於悭貪
若人能忍辱　永離於瞋恚
若人能慈善　則遠於惡趣
能具此三行　速至般涅槃
若有貧窮人　无財可布施
見他脩施時　而生隨喜心
隨喜之福報　與施等无異
尒時盧羅門大臣及
余錄人民見王奉施如
來僧伽藍皆悉踊躍
生隨喜心尒時頻比
婆羅王施僧伽藍已
大歡喜頭面礼足

終